

新約 僕は友達が少ない I F

トッシー00

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※この小説は前にじファンに載せていた小説です。

様々な視点から描かれる隣人部の日常。そして原作とは全く異なる展開と結末。

残念で、残虐で、残忍な……。平和な日常に隠された偽りの青春が隣人部を待ち受ける。

残念系青春コメディから逸脱した、隣人部が描く本気の人間ドラマ。

そこには、一人の少年と少女たちの成長の物語が存在する。

三日月夜空と羽瀬川小鷹が会う時、青春滑稽劇への反逆が始まる……。

目次

プロローグく序章く

革命の転校生

1

その少年は強さを求める

11

僕は友達が少ない

23

第一章 隣人部創部編

羽瀬川小鷹く運命の少女との出会いく

38

その名は隣人部

52

大雨の中で少年と少女は……

69

三人目の部員

86

その鳩は人を知ろうとしない

103

ストーリーカーは男の娘

120

集結する隣人部

143

CONNECTく三日月夜空の気持ちく

164

第一章 ライバル出現編

友情破壊ゲーム

182

星の下で少女は笑みを浮かべる

204

三日月夜空の周辺

223

狩られたら狩り返す、倍返しだ！

242

中二病ごっこ

262

夢くも永久のカナシ

279

第一章 三日月夜空崩壊編

夜空と理科のぶらり遠夜市

294

幸村の忠義

311

溺れゆく黒騎士

325

三日月夜空の崩壊	350
希望の少年	367
第一章 羽瀬川小鷹覚醒編	
100%の残酷な真実	379
夜空のいない隣人部	397
逃げ出した先の報い	414
父親との電話	429
羽瀬川小鷹の覚醒	446
第一章 十年前の決着編	
決着の代償	459
托された浴衣	476
漆黒	489
オワリノハジマリ	499
第一章 EXTRA	
猛禽が黒く染まった日	512

プロローグ〈序章〉 革命の転校生

——広大な空が見下ろしている外の景色を、いつも私は見つめて
いる。

そうやってその”空”は、人の気持ちなんて考えずに、ただ能天気
に私達を見下ろしている。

それはただ平等で、それはただ無情で、己の役割をきちんとこな
してそこに存在している。

そんな空を、その空が見下ろしている景色を……私はいつも見つ
めている。

学校の授業中、休み時間。他の生徒が友達とおしゃべりをしたりし
ている中で……私はずっと上の空。

机に伏せて寝ていたり、暇なら本を読んでいたたり。

私の目に映るその世界は、そんなつまらない……腐った世界。
初めに言っておくが、私はそこまで落ちぶれていない。

勉強もそれなりに出来て、クラスの順位もいい。

運動もそれなりにできるし、自分で言うのもなんだが容姿も完璧だ
と思っっている。

ここまで書けば、誰もがそれを”リア充”と思うだろうが現実はその
うつくはなかった。

そう……私、”三日月夜空”は、”友達が少ない”。

五月の半ばに差し掛かったある日の朝。

新しい学年、新しいクラスでの生活が始まって一ヶ月ほど過ぎたこ
の季節。

私はこの、聖クロニカ学園の高校二年生。この学校にはもう一年ほ
どいることになる。

クラスの前から二列目あたりに座っている。別にただ、そこに座る
ように書かれていたから座っているだけ。

誰かの隣になりたかったとか、誰かと一緒にクラスになりたかったとか、そんなことを考えたことなどない。

無論、こんな自分なんかと一緒にのクラスになりたいとか、もっと近づいて仲良くして見たいなどと思う生徒も、考えた所でないだろう。

私は無駄なことは嫌いだ。だって無駄なのだから。与えられている限りある時間を捨てているだけだ。

もつとも、そんな限りある時間という空間が、つまらなく……居ずらくてしかたがないんだけど。

私は毎日学校に登校してきては、鞆から教科書やら本やらを取り出しそれを読む。

誰かと話をするとかはしない。せいぜい会話をして先生や行事的な内容での受け答えだけ。

他の人みたいに、学校が終わったら……とか。休みどうする……とか。テストはどう……とか。

そんな会話は無に等しい。だって……それは私にとって無駄なのだから。

どうして私がこのような考えに至っているか。というか、そこから脱却しようとしなのかというところ。

私には友達がいないから。その友達を……作ろうとしないからだ。ただそこに与えられている腐った世界に浸り……満足しきっているからだ。

完璧な人間などこの世にはいない、人間必ずしも欠点があるというものだ。

勉強が出来る反面容姿が悪かったり、容姿が良い反面社会性が欠けていたり。

そして私という人間に該当する要素は後者。

こんな私の容姿は他の人に言わせるならば腰まで伸びた長い黒髪が良く似合う清楚な雰囲気美人だ。

だがそんなものは他人が見て勝手に思い描いた印象であり、私の本性は……男勝りで根暗で口が悪い。

そして……自他共に認めるほど”最低”だと言うことだ。

どうも昔から女っぽく振る舞えなく、男の子がするような格好ばかりし、並大抵の男になら喧嘩でも勝っていた。

そういう頼りがいのある女は大抵同姓にモテるといふ話を聞いたことがあるが、私の社交性の無さから同姓すら寄りつかない始末。

長所と短所が喧嘩してしまっているような感じで、そして私自身それを気にしたことなどない。

そんな欠点など、直そうと努力したことなんてない。

直すどころか、あらゆることから逃げ続けてきた。

逃げて、やらかして——そして、諦めてしまったのだ。

「今日転校生が来るって話だけど……」

「遅いよね。初日から遅刻とか大物なんじゃない？」

「楽しみ、女子かな？　男子かな？」

と、周りの生徒は今日来るといふ転校生の話題で持ちきりだった。

転校生も罪深いな。姿も素性も知らない人たちに変な期待だけ抱かせて、初日だと言うのに気がつけば三時間目だ。

それでひよっこり現れて、なんとか場を和ませて、昼休みにでも人氣者を演じるつもりなのか。

お前のリア充生活が今日から始まるとも言うのか、まったく……お気楽な話だ。

だが、私には関係ない。私はそんなやつと触れ合うつもりなんかない。

だって興味がないから。そいつがどれだけできるやつでも、モテるやつでも。私には関係ない。

突然目の前に現れた奴が、突然私のこの腐った世界を壊してくれるなんて……希望なんて抱かない。

だって、かつて私に希望を与えた奴は……私の全てを壊して去っていったのだから。

この腐った世界を作った愚か者は、何も言わずに私の目の前から消えていったのだから。

そうやって私の気持ちを……弄んだのだから。

『だったら俺は、※※のことを百人分大切にするよ。百人……いや、百万人でも百億万人でも、世界中が敵になっても、俺だけはお前の友達でいる』

そんな言葉を着飾って……そんな嘘だけを残して。

ガラガラガラ!!

と、私が過去の思い出に浸っているその時、教室のドアが勢いよく開いた。

教室の生徒と教師がざわつく、この一連の流れの衝撃には、上の空であった私でさえも思わず反応してしまった。

そしてそんな生徒と教師、そして私を含めた全ての者の注目を一つに集めたのは……。

皆が噂をしていた——”転校生”だった。

今から十年前。

ある日の夕暮れの公園。当時まだ幼い子供だった自分。

その当ても、私には友達と呼べる同世代の子がいなかった。

その時はどちらかというが目立たない方の人間だった。口数も少なく、子供たちの輪にも入っていこうとしなかった。

そう、まさしくその姿は孤高だった。他人が嫌いで、他人が怖くて。

一人でいる空間が好き。そう、私は一人が好きだった。

それだけ自分に自信があった。他人と群れなくても一人で何でもできる自信があった。

私は喧嘩も強かった。性別は女だが、子供同士なのだからその当時なら大きな違いはでない。

そんな私を女の子だと気づく子供も少なかった。私はどっちつかずの……孤高な一匹狼。

こんな私でも、その時には味方がいた。私のお母さんだ。

お母さんはこんな私を心配してくれた。他の子が敵でも、お母さんは私の味方だった。

優しく綺麗なお母さん。当時の私でも、お母さんなら信じること

ができた。

まあ、今となつては……。いや、その話はやめておこう。

そんな一人ぼつちの幼少時代。変わる兆しもないその日常。

そのある日の夕暮れの公園で、一人の少年がいじめられていた。

今でも覚えている。その少年の髪の色は……。その時の夕日にも似た……”濁つた金髪”だ。

まるでそれは染めたような。金色に染めるのを失敗したような色合いだった。

まだ年端もいかない幼い少年が、このように髪の毛を染めていたら、他の人には不快に見られることは明確。

大人たちが少年に抱く視線を鵜呑みにした、悪意を知らない少年たちによるいじめ。

その金髪の少年はそれに抗っていた。必死に抵抗していた。

けてやり返さず、我慢していた。その眼だけは、強く相手を威嚇していた。

その眼は例えるなら……。 ”鷹” のような。ただそこに用意された答えだけを射止めるような……。そんな眼をしていた。

「なんだあいつ、やり返さないのか？」

そんな眼をするその少年を、私は気にいらないとただ見ていた。

単に喧嘩で勝てないからやり返さないのか、もしそうなら……。ただの弱虫だ。

こんなものは……。弱い者いじめだと。

「まったく、しょうがないな」

私は座っていたジャングルジムを降りた。

めずらしく私は、誰かを助けてやろうと思った。

助けてかつこつきたいなど、そう思った。

そしてそれが優しさだと思った。だから私は……。そのいじめをしているガキどもに向かつていった。

「おいお前ら」

「んだ？ 邪魔すんなてめえ!!」

そう反論したガキのうち一人を、まずは思いつき一発ぶん殴つ

た。

「ぐあー！」

「おいリョウくん！ なにすんだてめえ!？」

そう聞かれたので、私はかっこつけてこうはつきりと答えた。

「弱い者いじめはやめろ」

その一言に、いじめていた少年たちは愚か、私の後ろにいる金髪の少年も眼を見開いていた。

我ながら恥ずかしいことだが、この時ばかりは……自分に見惚れていた。

素直にかっこいいと思った。いじめられている子供を助けて、まるでそれはヒーローみたいで。

「なんだよてめえ！ かっこつけんな!!」

「ボキャブラリーが貧困だな。幼稚園からやり直せ」

そう決め台詞を吐くと、いじめっ子の少年が私に向かってくる。

「何言ってるんだてめえ！ ふざけんな!!」

「頭が悪いって言ったんだ!!」

そう私も、反撃に向かおうとすると。

むくりと、私の後ろで無様に倒れていた金髪が立ちあがった。

ようやくやる気になったのかと、私が後ろを振り返ったその時。

ボカツ!!

この結果に関しては、私も予想ができなかった。

なんとそのいじめられていた少年は、いじめてきた相手を殴るのではなく、助けようとした私を殴ってきたのだ。

これには私も目が点になる。啞然とする。言葉が出ない。

何が起こったのだらうと頭で自己処理する。

「……俺は」

そう少年は何かを言いたそうにして、今にも泣きそうな顔をして……。

「俺は……弱い者じゃない!!」

そう少年は私に向かって叫んだ。

その瞬間私は気づいた。私がかっこ良いと思って行ったその行為

が。

いじめを助けることが善意だと思った私の判断が……この少年を傷つけたのだろうか。

きつと多数の子供にいじめられることよりも、誰も味方がおらず一方的にやられることよりも。

この私に言われた一言が……他のどのことよりも少年の心に響いたことだろう。

「……ははは」

だがそんなこと、私からしたらどうでもいい。

当時の私からしたら、ただ単にその少年を助けようとしたんだ。だからこそ許せなかった。だから私も、その少年に牙をむけた。

「上等だこの野郎!!」

無論、いじめっ子に加担したわけではない。

これは私個人の喧嘩だ。他のやつらなど知らない。

これは私とその少年の喧嘩なのだ。これは私が決着をつけねばならないことだった。

だが当然いじめっ子どもはそれに気に食わず、私達に向かってくる。

「邪魔をするな!」

私とその少年は、無我夢中でそのいじめっ子を撃退した。

邪魔をする者は全て殺すと言いたげな、そんな気迫を発しながら。この二人っきりの空間を大切にしながら、思いつきり喧嘩した。

言葉には出ない。拳が全てを語るその数分間。

次第に互いに立てなくなり、公園の砂場に転がる。

そして互いに目が合う。この時にはもう私達は、敵対する者同士ではなかった。

「はは……やるな」

「お、お前こそ……」

その瞬間、私とその少年は親友となった。

まるでどこかの青春ドラマを演じているみたいだった。

拳で語り互いを理解する。この当時の私にだって……その程度の事が出来たのに……。

いつ頃からだろうか、そんなこともできない。理解しようとしてもほしいとも思わなくなったのは。

その少年が私の目の前からいなくなったときだろうか。両親の仲が冷め始めた時だっただろうか。

全てがやけになってやらかしていた時期からだっただろうか。

そして……全てに諦めてしまった時だろうか。

ガラガラガラ!!

その教室の扉が勢いよく開いた音で、私の意識が現実へと引きもどされる。

そしてそこから現れる転校生を見やる。

その転校生、少し黒く濁った金髪の少年。

目つきが悪く、まるでそれは……全てを威嚇する”鷹”のような鋭い目。

遅刻したせいなのか焦り、声を荒げて低くなっている。

それら全ての要素が合わさったせいなのか、クラスの生徒達は一瞬で凍りついた。

まるで自分の学校にとんでもない不良が現れたと言わんばかりの、関わったら大変なことになると思わんばかりの視線を少年に送る。

授業をしている先生も怖がっている。先ほどまでの転校生への皆の期待が、意外な形で裏切られることとなった。

そして少年は名乗る。自らの名を……。

「て……転校生の……羽瀬川小鷹です」

その一連の流れには、この私でさえ圧倒された。

本人が狙ってやったのなら見事すぎるくらい威圧感。だがもし偶然ならそれは自分の容姿とこの状況を呪うしかないだろう。

言わずともわかるが、その転校生……初日から誰も話しかけてはくれず、変に関わろうとして失敗しまくっていた。

転校初日からデビュー失敗。私から言わせれば最悪の出だしだ。

いつもならば終わったなど、おめでとう非リア充とでもエールを送るだろう。

——だが、私はその少年に対して、他の生徒とは違う感情を抱いていた。

「羽瀬川……小鷹……」

その少年の姿、そして名前。

この瞬間、私の内から光が見え始めた。

これは希望と言うのだろうか。全てを諦め、絶望しきっていた私に芽生えた……かすかなる希望。

「羽瀬川小鷹……羽瀬川小鷹……」

私は何度もその名を口にした。

その名前を呼ぶとワクワクする。高揚する。閉ざされた扉が、開きそうな気がする。

何度も何度もその名を口にする。そして……少年を見つめる。

他の生徒が絶対に見ようとしらないその少年を、私はずっと見つめる。

「……羽瀬川小鷹、お前は」

思わずそう、口にする。

その少年に対して、こんなおかしな期待を寄せてしまう。

いつもならバカみたいな話だと笑ってしまいそうだが、その希望といった言葉や、青春といったものにこの時は不変を抱かなかった。

——羽瀬川小鷹。

お前なら……私のこの世界を壊してくれるのか……？

お前なら……この腐った世界から私を救いだしてくれるのか……？

私のこの目に映る……真っ暗な空間を、お前なら光で灯してくれるのか……？

いや違う、それは疑問形ではない。——確信だ。

この少年なら壊してくれる。この腐った世界を。

お前が私の目の前に”もう一度”現れたということ、それは奇跡以外の何事でもない。

この時私は、先ほどまで浮かべていた仏頂面をやめ、自然と笑みがこぼれていた。

これから始まる”再生”に、”再会”に……わくわくを感じれずにはいられない。

本当につまらなかった。

毎日が生きている心地がしなかった。

私は自分を騙していた。生きていると、そう嘘をついていた。

でも私は生きてなどいなかった。死んだ方がマシなつまらない人生を送っていた。

腐った世界に満足していた。満足せざるを得なかった。

全てに妥協していた。全てに甘えてのうのうと生きていた。

自分の殻にこもり、もつと楽しいはずの先にある景色を……怖いと見ようとしなかった。

そんな自分が……愚かで仕方がなかった。

「だが、そんな日常は今日でおしまいだ。そうだろ……？」

そう自分に言い聞かした。

自分と、自分が作り出した存在に言い聞かした。

そして……過去の大切な思い出にも……そう言い聞かした。

今日から始まる。今日から私の青春は始まる。

三日月夜空はもうすぐリア充になる。あいつが転校してきたことで、それは絶対的なものになる。

そうだろ？ —— タカ。

その少年は強さを求める

授業が終わり、時刻は四時を過ぎたところ。

学校は放課後。学生たちは下校するなり部活に専念するなり、それぞれの時間を過ごしている。

時は五月の中ごろ。

私、三日月夜空はこの放課後、図書室にて読書をしている。

テスト勉強などがない日は、大抵この図書室にいる。

図書室は良い。静かだ。そして本がいっぱいある。

教室では騒がしいやつらもここにはいない。だから落ち着く。

あまり他の人と関わりたくない私にとってはうってつけの場所だ。だから私はここにいます。

「おい、あの人って……」

私が図書室にて六月に入ったばかりの新刊を読み漁っていた時。

なにやら入口の方でひそひそと声が聞こえてきた。

私はその方向を見ると、そこには噂の転校生がいた。

——羽瀬川小鷹。

この学校について一ヶ月前に転校してきた、濁った金髪の鋭い目つきの少年。

その出で立ちの影響か、転校してきてはすぐにやばい奴が来たと言いが広まり、結果この学校でぼっちとなってしまう少年。

この二ヶ月、少年は必死にこの学校で打ち解ける努力を繰り返したが、一向に友人ができることはない。

それどころか「カツアゲされそうになった」だの、「襲われそうになった」だの。噂はさらにマイナスを辿る一方。

そんなことで大丈夫か転校生？ と……本来の私ならば心配しないだろう。

だが、羽瀬川小鷹という人間に対しては……少しばかり事情が異なる。

「……はあ」

羽瀬川は図書室に入るなりため息をついた。

またいつものかと、諦めが混じったため息だ。

まあ何もしていないのに、ただ姿を見られただけで根も葉もない噂を立てられたのではやってられないよな。

気持ちはわかるよ。私も貴様の同類なのだから。

「……………」

私は数分、本を読むふりをしながら、羽瀬川小鷹を観察していた。読んでいたのは漫画小説。世間一般ではライトノベルといったところか。

その間にも、他の生徒は羽瀬川小鷹を指さしては、関わらない方がいいと離れる始末だ。

人間最初の印象が大事だというが、こうもわかりやすい失敗例を見たのは生まれて初めてだ。まるで漫画みたいだな。

最も、”わざと”その道を選んだ私には、彼を同情する資格はないのかもしれないが……。

——だが、羽瀬川がああ調子では……何も変わりはない。

なにも変わらない。あいつも……私もだ。

腐った世界は壊れない。壊してもくれない。

早く……何か手を打たない……とな。

「……………」

遠目で、出口の方でちらりと人影が見えた。

なんだ？ 誰を見ている？

私は何度かその影をちらりと見る。するとその影は顔を出しては隠れ、隠れては顔を出している。

そして何分かその様子を見ると、その人物が目を向ける対象がなんとなくわかってきた。

見られているのは……羽瀬川小鷹だ。

どうしてそう隠れるようにして見るのか、まあ……気持ちはわかるが。

だが気にいらんな。他のやつもそうだが、人を見かけで判断しては、変に祭り上げるのは。

これだからリア充共は。そういった環境を知ろうともせず、「かわ

いそう」などと思ってもいけない言葉を着飾ることしかできんやつらめ。

「……ちっ」

私はそう舌打ちをし、本をボタンと閉じてその本を本棚に戻す。さりげなく出口の方へ、そしてさりげなく図書室から出る。

そしてその人影を通り過ぎた所で、後ろを見遣る。

顔はよく見えなかったが、男子生徒の制服を着ている。

茶色の混じった少し伸ばした短髪の男子生徒。

私に見られている事など知らず、少年は何度も羽瀬川を見ては、隠れを繰り返している。

他の生徒はそんなやつのことなどお構いなし、気づいてもいないように見えていない。

「……そこでなにをしているっ」

「ひゃっ！」

完全に油断しきっている所で、私が少年に声をかける。

すると少年はなんとも可愛らしい声で驚いた。

こう、あまり他の生徒に注意するほど私は人間できてはいないのだが。というかあまり知らない奴と接したくもないのだが。

「そうやって、不幸な人間を観察して楽しいか？」

勝手な決め付けもいいところだが、そう私は少年に対し苦言する。

すると少年は私の言葉に反応するように、ゆっくりとこちらを向いた。

「……っ？」

その少年の顔を見て、私の脳内でクエスチョンマークが光る。

なぜクエスチョンマークか、エクスクラメーションマークではない所がミソだ。

どうしてか、それはその少年の顔がなんとも……女みtainな顔だったからだ。

「……あの」

少年は口を開く。

なんというか、これも一種の美少年……と例えてもいいのだろうか

か。

いや、美少年というか美少女？ でも男子生徒の制服を着てるから美少年？ いいやもうどっちでもいいや。

その少年が口を開くと、今度たじろいたのは私の方だった。

だめだ。そうやって言い返そうとするな。やっぱり知らない奴に話しかけるなんてしなければよかった。

相手は顔も整っている美少年だ。きっと友達の多いリア充に違いない。

「これはいわゆる、売り文句というやつでしようか？」

「ちがうわ」

何を言い出すかと思えば突拍子もないことを言ってきた少年。

咄嗟にツッコミをしてしまった。てかあんな売り文句があるか。

ネガティブすぎるわ文句が。

その後また少年は黙ってしまった。表情は怒るでもなく怯えるでもなく、のほほんと無表情で平和的オーラを醸し出している。

だがそんなのほほんに見つめられても私の怯えは止まらない。なにせ相手は話したことのないやつだからだ。赤の他人だ。怖いよ人間怖いよ。

「ええと、そちらさまは？」

「人に名前を聞く時はまず自分から名乗れ。常識だぞ」

と、私は強がって見せた。

強がって見せたものの、少し偉そうに振舞いすぎたか。

これで相手が先輩だったら失礼だ。あまり名を売りたいくはない、羽瀬川みたいに。

むしろ私と同じ立場にいて噂されてため息で済ませられる羽瀬川はすごいな。私が思っている以上にすごいやつなのでは？

「もうしわけありませんでした。わたくしは“楠幸村”と申します。一年です」

その少年はそう名乗った。

一年か、助かった。後輩ということとは先ほど私が偉そうにふるまったことに不自然はなかったということだ。

にしても、幸村とは……。最近の親は子供の名前に対してとてつもないこだわりを見せることがあるというからな。

まだDQNネームとまではいかないだけマシか。だがその乙女チックな容姿に幸村はちよつと合わない気が。

「そうか。私は三日月夜空。二年だ」

「三日月夜空……先輩ですか。よいなまえですね」

褒められちゃった。自己紹介しただけなのに褒められちゃった。

別に嬉しいわけじゃない。褒められたからといってどういうわけでもない。

「そうか……」

……さて、ここからどうしようか。

褒められたことに対して「ありがとう」でも言えればいいだろうか。

だがその後の話題づくりが思いつかない。どっちも黙りこんで終わってしまう。

あくあ、だからいやなのだ。こういうのめっちゃくちや辛い、この間がなよりの地獄だ。

相手はまだひ弱そうなオカマ野郎だからまだいいが、これがリア充版羽瀬川小鷹みたいのだったら私完全に終わっていたぞ。

このまま変に連れ込まれてアウトだったぞ。だから男は嫌なのだ。というか男以前に人全体的に嫌なのだ。

どうする……。 ”トモちゃん” を使うか。あれをやれば大抵の人は気味悪がって退却する。

この少年も人並み以上の感性を持っているのなら、私の奇行に気味悪がって逃げるはずだ。よし……。

「わたくし、りっぱななっぱんだんじをめざしております……」

はいー人並み以下の感性でした！ 終わったねトモちゃん!!

その容姿でりっぱななっぱんだんじっておい、ギャグか？ それギャグなのか？

日本男児というより大和撫子が充分にお似合いだ。男子だが、男の娘だが。

でも待てよ、普通に考えると男は女扱いされるのは嫌なはずだ。だ

とするとやっぱり普通なのか？

「なのでこの聖クロニカさいきょうをうわさされる羽瀬川先輩に、おとこのなんたるかをおしえてもらおうとようすをうかがっているのですが」

と、幸村は先ほどの行動の意味を私に全て話した。私は何も聞いていないのに。

「それならお門違いだと思うが……」

「そんなことはありません。なんでもてんこうしてにかげつでこのかくえんのちようてんをとったというではありませんか。くらすめーとのなんにかからそうおききましたよ？」

「そんな根も葉もない噂を信じてここまでできたのか……？」

私がそう尋ねると、幸村は語らずともと言った感じで無表情のまま。

「どうやらこの楠幸村、普通……ではなさそうだ。」

羽瀬川小鷹をストーキングしていれば立派な男になれる……か。やはり見た目だけでは話が変な方へと進むのだな。

しかたない、ここは私が上手く説明して誤解をといてやろう。

「あの男は外見だけだ。ああやって弱い奴ほど見た目を固めるものだ。実際にあいつが生徒をカツアゲしたり、グラウンドで乱闘騒ぎを起こしたという実態を目にしたのか？」

「うわさでは……」

「いや噂じゃなくてな。あいつは外見だけで中身はお前が思っているような立派な日本男児ではないぞ。そんな噂を信じるくらいなら自分で立派な日本男児になれるよう考えた方が時間効率がいい」

「またまたごじようだんを」

「冗談なんて言っていないんだけど……」

私がああ言えば、幸村がこう言う。

「だめだこいつ、何言っても存在が平和すぎて跳ね返されるや。頭の中がお花畑だ。」

「したらどうするか、どう言えばこいつを納得させられるのやら。」

「……そもそも、お前は どうして そう立派な日本男児にこだわる？」

お前みたいなやつが好みのやつだっているだろうし。結構モテるの
だろう?」

「いえ、このままではなっとくがいきませぬゆえ」

「どうして?」

「わたくし、いじめにあっているのです」

そう幸村の言葉を耳にした時、私の心がぴくりと動いた。

「いじめ?」

「はい……」

「……そうか」

思わず、私はそう言葉を返し納得してしまった。

いじめ……か。気にいらぬ、気にいらぬ。

そうやって弱い奴を釣りあげて見せ物にして、安全な所で嘲笑って
いる畜生は……。

本当に気に入らない。リア充以上に爆発してほしい。

「つまりお前は、そいつらを見返してやりたいと思っているのか?」

「……はい」

そう、のほほんとしていた幸村の声が、少しばかり強さの入ったも
のに感じた。

現状に甘んじることなく、脱却しようとしている。

今までこの私が思うことのなかったこと、今になって努力しようと
している事。

それをこの男は、ずっと昔から……耐え続け抱き続けていたとい
うのか。

自分の身に置かれた腐った現状からの脱却を……。柵への反逆を
……。

「……」

思わず、私は悔しいと思ってしまった。

こんなひ弱な少年でさえ強くなろうと努力しているのに。

私ときたら、そういった事柄を全て諦めてきた。

悔しい。そして憧れるよ。楠幸村、お前のその奥底に潜む熱い心
な。

人はみかけによらない。こういう結論に至るのなら、困ることはないのにな。

「……そうか、応援しよう」

「ありがとうございます。先輩」

今私のこの口から出た言葉に嘘偽りはない。だが……。

お前が先を進むのに羽瀬川小鷹が必要というならば、私にとっては不都合だ。

お前にはやらない。楠幸村、お前に羽瀬川小鷹は”やらない”。

あの男が変えるべきは私なのだ。奴には、そうするだけの理由がある。

あの男は私と共に堕ち、私を変えるためだけにこの学校に居続けるのだ。

そうとも、私をここまで”堕とした”罪滅ぼしはきちんとしてもらう。責任はとってもらおう。だから……。

「あんな見かけだけの男に頼らずとも良い。私が……協力してやろう」

「え？」

そう私は卑しく笑って見せた。

悪いな幸村。腐った現状から解き放たれるのは貴様じゃない、この私だ。

羽瀬川小鷹に近づく虫は私自ら葬ってやる。悪く思うなよ。

下校時間となり、生徒全員が家に帰らなくてはならない時間になった。

今日は面白い奴にあった。まあ仲良くする気はない、適当にあしらって遠ざけるがな。

「おおいそこの迷える子羊ちゃんや」

「……」

「おおい、無視するなよーぞらくくん」

なにやらベンチでだらけながら私に話しかけてくる不審なシスターがいる。

私は頑なに無視しようとするが、どうにもしつこいようで何度もそう私の名を呼ぶ。

私はため息をつき、仕方なくそのベンチの方へと足を向けた。

「なにか用ですか？」 高山ケイト” 先生殿？」

「にやはは。 やつと反応したよこの根暗女め」

「悪口を言い呼び止めたならさつきと帰りますが？」

「まあ待てよ。 ちよつと横に座れつて」

そう言つて、この学校のシスター——高山ケイトはこちらへこちらへと手を招く。

シスター服から見える銀の髪は光り輝き、そして若いながら大人びた表情は美少女よりも美人といった雰囲気醸し出している。

この教師、まだ十五という若さでこの学校の教職員をしている。

聖クロニカ学園はカトリック系のミッシェンスクール。ここでのシスターの役割は神学や倫理の授業、ミサなどの宗教行事などを専門としている。

そして、迷える生徒らの相談だ。 そんなやつに呼び止められる私は、さぞ問題児なのだろう。

「どうよん？ 友達の一人や二人はできたのかい？」

「作る気などない」

「つたく、去年の秋から孤立し気味の君を見てきたが、どうしてこうぶれまくつて歪みまくつて、変わることがないのかね」

「あなたには関係ない」

そう心配してくれるケイトを横目に、私は冷たい態度を取る。

「そう言うなよ。 私らは君のような弱い者の味方だよん。 これも神のお導きつてね」

「なにが神だ。 そんなものいるわけがない」

「おいおいこの学校で神様否定しちゃだめぜよ。 つて……それだけ君を歪ませた何かがあるのかね」

「……」

そうおちやらけて私に接してくるケイト。

普通の生徒ならばこんな私を放っておくものだろう。 それでもこ

うへばりつくように接してくるのは、仕事としてなのだろうか。

そしてケイトの言う言葉の数々の中には、私の触れられたくない部分が多量に含まれている。

だから嫌なのだ。人の不幸に笑顔で首を突っ込んでくる奴は……。

「……話は変わるが、なんか最近調子よさそうじゃね?」

「なにがだ?」

「例の転校生だよん。なくんか彼を見る目がいつもの君じゃない気がするんだが……」

「……気のせいだ」

「なに? ああいうのがタイプなの? 金髪染めそこなった悪ぶった感じの、同族意識でも感じちやってるわけ?」

「……別に、ああいうのはタイプじゃない」

そう、づかづかと私に踏み込んでくるケイトを、私は言葉少なくあしらう。

だがあまりにもしつこすぎるし、羽瀬川小鷹の話題を出すのは反則すぎる。

それに、貴様に何がわかるというのだ。

同族意識だと? 本当に……虫唾が走る言葉だ。

「それにあの金髪は”地毛”だ。何も知らない連中がヤンキーだのなんだの、ウザすぎるんだよ」

「へへえ。そりゃ悪かったね。てか……なんで知ってるの?」

「……あ」

この時、私は思わずそう声を漏らした。

思わず口を滑らせたと思った。怒りが混じっていたのか、言葉の選択を間違えた。

「……ハーフ、って聞いたが」

「らしいね。でも……ふふ」

「なんだ?」

「君が誰かを庇うのは本当に珍しい。何か……隠して」

そうケイトが言い終わる間際、私はケイトに迫るよう顔を近づける。

そして気迫の表情でその言葉をせき止め、私は禍々しい表情で、重い声を張り上げた。

「な……なんだい？」

「シスターだかなんだか知らないが、これ以上……私を探ろうとするな。貴様には……私は変えられない。私も貴様によつて……変えられるつもりなどない」

「……どうしたのさ、焦ってんの？」

「ぐっ……」

そうケイトに尋ねられ、私は苦い表情を浮かべ歯と歯を強く噛みしめた。

もう口を聞くだけ無駄だ。なので私は鞆を持って立ち去る。

そうだ。高山ケイトではだめなのだ。この教師も本心から私とわかり合おうなどしていない。

こんなやつに、私を理解できるわけがない。理解などされて……たまるものか。

——リア充がつ!!

「……なにかあったら、いつでも相談にはのるからねえくん」

「……」

「つて聞いてねえよ。どうにも……ワケアリみたいだねえ」

そうだ。もうこんな寂しい思いをするのは嫌だ。

失うだけは嫌だ。失うくらいなら……なにもいらないんだ。

——だが、それでも。

もし失ったものを取り戻せるのだと……したら。

もし堕ちた私に、這い上がるチャンスがあるのだと……したら。

——選ぶしかないじゃないか。

失ったものを、得ることのなかったものを、全部根こそぎ手に入れられる道を。

だがその道を与えるのは神などではない。そんな偶像などに助けを求めたりはしない。

羽瀬川……小鷹。

お前しかいない……お前しかいないよな。

ここまで堕ちた私を、救える存在は。

だから小鷹、お前が私を変えろ。

私もお前を……孤独から救ってやる。

「——お前には、私がいればそれでいい……そうだろう？　タカ……」

僕は友達が少ない

『なにかあったら、いつでも相談にはのるからねえくん』

……………

何が相談には乗る……だ。あんなへらへらした顔で言われても、信用などできるものか。

去年の秋から今に至るまで、私は何度あのおちやらせ教師に絡まれてきただろうか。

会うたび会うたび友達はできたかだとか、もう少しポジティブに生きようやだとか、余計な御世話だ。

しかも、私の悩みを解決させようと息まいているにしては、あの教師……。

「なはは。夜空の宿題は簡単だなあ。こんなもんお猿さんでもできるぞく!!」

と、生意気な発言をしている今私のそばにいる小娘。

小柄な少女が来ている服装はこれまたシスター服。そしてそこからちらりと見える輝かしい銀髪。

そう、この小娘はあのめんどくさい高山ケイトの妹——”高山マリア”だ。

容姿はあの姉を一つスケールダウンしたような感じ。そして印象は違う物の姉が姉なのか……ものすごく……うざったい。

「感謝するのだ夜空。お前がめんどくさいと嘆いていたから私がちやちやと解いてやったのだ! 今日ポテチだけじゃなくチョコレートもつけるんんんんく!!」

「調子に乗るなこのクソガキ……」

隣で偉そうにしているマリアのほっぺを、私は思いつきりつねり引っ張って伸ばす。

まるで柔らかいお餅のように伸びたそのほっぺを、私は伸びきったところでぱんつと離す。するとマリアは痛そうに床に転がりまわっている。

「んぎやー!! 恩人に向かってなんたる無礼なのだ!! お前には

神への感謝の心もないのか!？」

「誰が神だ。それに感謝を物で求めるやつに対して素直に感謝などできるものか……」

子供らしくわめき抗議するマリアを、私は冷たくあしらう。

どうしてこんなガキの面倒を見てやっているのか、理由はあのお茶だけ教師の……。

『悪いねえよーぞらくん。この”談話室4”自由に使っていていいからさ、そこにいる私のクソ可愛い妹とたまに遊んであげてよ。まあ日ごろ相談に乗ってやっている私への恩返しとでも思って、レッツボランティアよろしく!!』

……なにが日ごろの恩返しだ。貴様に恩なんてないわ!!

だが……こう静かで広い一室を、うざったいガキ一人いるのがネツクだが自由に使っていていいというのは子守り一つにしてはメリツトが大きい。

マリアはお菓子をあげれば面倒な宿題もやってくれるしな。あの教師への日ごろの感謝など知ったことではないが、仕方なく貴様の妹と戯れてやろうじゃないか。

「まあいい、約束のお菓子だ」

「おおく!! 夜空優しいのだ大好きなのだ!」

私からポテチを貰い上機嫌になるマリア。

まったくお菓子一つで優しい上に大好きか、お子様は気楽でいいな。

最も、私は貴様の事など大嫌いだがな。子供は嫌いではないが生意気なクソガキは好きじゃないんだ。

「……にしても、この一室がこうなにも使われていないというのはもったいないものだな」

「使われていないとは失礼な。ここは私に与えられている立派な居室なのだ。だからけて無意味じゃないぞ」

「正確にはお前のクソ姉貴にだがな。お前はアレにいいように言いくるめられているだけだよ」

この学校のシスターの仕事には、学校施設の管理が与えられてい

る。

この談話室4の管理人は高山ケイト。だがケイトは掃除することを条件に自分の妹にこの居室の管理を丸投げしている。

それってやっていいことなのか？ まああの教師は私のような生徒にも自分の仕事を振るようなことまでやるからな。

このマリアも言いくるめられているというならば、この私もあの教師の手のひらで踊っている者の一人なのかもな、非常に癪な話だが。

「さて、昼休みも終わったし。授業に行くか」

学校の時計盤が昼休みの終わりの鐘を鳴らしている。

ぼっちだがこれでも真面目な生徒で通っているのにな、せめて見栄えくらいは良くしておかねば無駄に敵を作る。

私には味方がいない。だがその分敵もいないのだ。

孤独な狼が野生の土地で生き残るには、無駄な争いは避け、日々慎重に餌を見つけ食らい続ける。

自らが食われぬように、それはけして奥病などではない。術なのだ。

だから私は弱くない。なぜなら一人でも行きぬく術を知っているからだ。その術を……身に付けたからだ。

しかし、それでも心の奥にぽっかり空いた穴は……ふさがることはないのだから。

「そうかそうか、またお菓子よこすのだけ」

「ふん。卑しいガキだ……」

そう言葉を吐き捨て、マリアに別れを告げた。

放課後……。

「さてと、どこで時間を潰そうかな……」

そう、私がこの先どうするかを考えていた時。

「おお探したぞよーぞらくん」

「……」

「おおい無視か？ もう相談のつてやんないぞお。少しは日ごろ頑張っている社会人を敬えよこの」

後ろの方でやたら耳にざわつくおちやらけたしやべりで語りかけてくる人物。

先日の今日でこれか。まったくどうしてこうこの人はしつこいんだか……。

「はあ。何の用でしょうか？ マザー・ケイト？」

「おいおい出会い頭わざとらしく礼儀正しくされても困るよん。お姉さんの事は友達と思ってタメ口でいいのよん？」

「一応私の方が年上なのだが……。今日は何の用だ？ これ以上私を探るなど忠告したはずだ」

そう私は強気に視線をケイトに向ける。

もう何度聞わらないでほしいと言ったことだろうか。だが相手は面白そうに私に近づいては話しかけてくる。

こんな私と話をして何が楽しいのか。やっぱりこんな私を心の奥では笑っているのではないのか？

「そのさ。ちよつと言いつらいことなんだけどねえ」

「じゃあ言うな」

そう冷たくあしらい、私はその場を去ろうとする。

「ああ待って待って!! わかった率直に言おう。全くよーぞらくんはノリが悪いねえ。そんなんだと、男にモテないぞ☆」

「あゝあゝ？（※心からの怒りを込めて）」

「……なんちやって冗談冗談。ちよつと頼みたい事があつてね」
そう言って、ケイトは一枚の封筒を私に握らせる。

「……これは？」

「特別教室棟の三階の突き当りに”理科室”がある。そこにいる奴にその資料を渡してほしい」

と、ケイトは普通に言っているが。

これは明らかに、仕事の押しつけだ。

いつもこうだ。頼みたい事があるだのなんだの軽く言っでは小さな仕事を無理やり振ってくるのだ。

「自分で渡してくればいいだろう。こんなもの」
当然私は反論する。

ただでさえ見知らぬ人物に出会いたくないというのに、こんな伝達仕事なんて御免だ。

だがケイトは、手のひらを合わせては、いつものように大げさにお願いをして見せる。

「たのむよ。一生のお願いだ！」

「その一生をもう幾度使用したと思っっているんだ？」

「細かいこと気にするなよお。気持ちが堅いと肌荒れに響くんだよん？」

「……殴るぞ（怒）」

「ごめんごめん」

結局いつものように、流れに身を任せるかのように私がその伝達を引き受ける形に。

ああどうしていつもこうなるんだよお。本当に嫌だというのに……間の流れという物は容赦がないんだから。

「いやその理科室の住人と先日喧嘩しちゃってさあ。正直数日は顔を合わせたく無いっていうか、私事なんだけどねえ」

「ほう、貴様でも他人を嫌悪することがあるのだな。てつきり学園全ての生徒と友達になるような平和バカだと思っっていたが……」

「あはは。お恥ずかしいことだ」

そうてへつとわざとらしく恥ずかしかつてみせるケイト。可愛くないから、そんなことやってもうぎつただけだから。

しかし、そんな奴相手にどうして私を送り込もうとするのだから。

……というか理科室の住人ってなんだ？ みんなが共用して使う教育の場に住人なんて存在するのか？

科学研究会の会長とか、そういった人物なのか？

「……仕方ない。その頼み受けてやるからしばらく私に話しかけるなよ」

「頼んだよん」

そう頼みを快諾する私を、陽気に送り出すケイト。

後半私の言った約束を守る気はあるのだろうか。いや、きっと近いうちに何もなかったかのように話しかけてくるだろう。もう諦めよ

う。

私は受け取った書類を持って、今いる棟から特別教室棟へと行く。棟に入ると、多目的室やコンピューター室のような、授業で使う教室がびっしりと並んでいる。

その突き当たり、奥の方に理科室は……あった。

「……思ったが。」 科学室 ……じゃないのか？」

理科室を目の前にして、私はそう疑問に思った。

私達が理科の授業で使用する教室は科学室のはずだ。だが今日の前には理科室がある。

科学室と理科室。名称は違うが似たような教室がそこに存在している。

というか二つ作る必要があったのだろうか。んー、考えてもわからない。

「まあいい、入ってみるか」

入ってみれば何かわかるだろう。私はいざ理科室に入る。

この封筒を、最低限の会話だけしてその住人とやらに渡して帰ればいい。

これは仕事だ。赤の他人との接触は最低限でよい。多少勇気が必要だが……。

「おじゃま……します」

理科室に入りそう言葉をかける。

その教室に入ると、広い教室内には理科で使うような実験道具が並んでいた。

ビーカーにフラスコ。人体模型など一通りの物が揃っている。

見たところ科学室となんら変わらない。名称が違うだけで中身は同じ。

……というわけでもなく、科学室と決定的に違う個所を私は発見してしまった。

奥の方にある立派な鉄扉。それもセキュリティを採用している頑丈な扉。

反対方向を見渡せば、理科の実験で使うような道具とは明らかに

け離れた……巨大な装置が数多く立ち並んでいる。

「なんだ？　こ、これはまるで……」

そう、これはまるで……何かの研究所のような教室だった。

プシュー！

「!？」

突如奥の方で扉の開く音がした。

先ほどのセキュリティで守られている鉄扉だ。その扉が開き、中から人が出てくる。

理科室の住人。いったいどんなやつが出てくるのか。よくフィクションで見る白衣に眼鏡をかけた……。

「……どちらさまですか？」

そう私に言葉を投げかけてきたのは、白衣に眼鏡をかけた……”少女”だった。

長い髪の毛を後ろに一本でまとめている。それが馬の尻尾のように左右に揺れている。

外見こそ科学者のそれだが、それにしてもまだ幼い。外見だけ見れば清楚というか、おしとやかな雰囲気を感じ取ってしまう。

歳は私と同じくらいだろうか。白衣の下には私と同じ聖クロニカの制服を着ている。

ということはこの少女もこの学校の学生か。学生で科学者……わけがわからない。

「あ、その……」

おつといかんいかん、早くこの封筒を渡さないと……。

「こ、この封筒をあなたに渡すように頼まれたん……ですけど」

「……」

そう言っ封筒を差し出すと、白衣の少女はゆったりとこちらに近づいてきた。

目の下にはクマができている。ろくに寝ていないのか……？

「……」

そう近づいて来て、少女は言葉の一つも発することなく、パクンと私から封筒を奪い取った。

どうにも感謝のない受け取り方だ。少し腹が立つ。

「……学校のイベント類のお知らせ？」

どうやら封筒の中に入っていたのは、この学校の生徒らが作ったチラシの数々だった。

少女はそれらに目を通すと、まるでくだらないものを見たかのよう……、丸めてそれらをゴミ箱に捨てた。

「なっ……！」

この行動には私自身も少し動揺の色を見せる。

確かに私もこういったリア充のイベントには興味ない。

しかし、こうすがすがしいほどにそのチラシを捨てられると、どうも変な気持ちを抱いてしまう。

そう、まるで……生徒らの小さな努力にはなんの興味もありません。と言った具合に……。

「……用件はそれだけですか？」

「あ、ああ……」

「そうですか。帰っていいですよ。”僕”は忙しいんです」

そう言つて、まるで邪魔虫を追っ払うかのようにその少女は私を邪険にあしらう。

これは私にとっても好都合。だが……気にいらぬ。

「……そう、物を届けてもらって何もなしか。貴様も人が悪いな」

「……貴様”も”？」

思わず悪態つく私。

しまった。会話は最低限のはずだ。変に油を注いってしまったようだ。

私の言葉に少女は反応する。そしてずんずんとまたこちらの方に向かつてくる。

「むっ……」

「……なるほど」

そう少女は納得したように、私の表情を見て嫌らしい笑みを浮かべた。

「なにが……なるほどなのだ？」

「なにがって、お前もろくな生き方してないんだな……って」

今度は少女が私に嫌味を言う番だった。

しかも嫌味ついたらしいその笑みはその言葉に威力を上乗せする。

この程度の挑発、乗っては負けだとわかつてはいるが。

私は……この女が気に食わない。

「……なんだと？」

「凶星ですか？ 目が笑ってないですよ。怒りがむき出し……やっぱりろくでなしじゃないですか」

鋭く睨みつける私に怯むことなく、そう挑発してくる少女。

ろくでなしだと、初対面でこの私に……面白い。

「気にいらんな。その物言い……」

「なにがです？ お互いさまじゃないですか。意地になる所も、こうやって見知らぬ他人が嫌で仕方ない所も……」

「……貴様と一緒にするな」

そうだ。こんな白衣を着て目の下にクマ作って、研究三昧で引きこもってますみたいなやつとはけて同じじゃない。

本当になんなんだこの女は。まるで同類を見つけたとでも言いたげに笑いやがって。

「ふふふ。僕にはあなたが何を考えているかはわかりかねますが。まあろくなことを考えていないのはその表情を見ればわかりますよ」

「なに？ 言わせておけば好き勝手……」

「だって……ねえ……」

まるで、全てを見透かすかのような視線を少女は私に向ける。

そして、少女は……私の触れられたくない領域に一步足を踏み込む。

「何かを必死で……求めているような顔をしてるんだよ。お前は……」

「……なに？」

「本当は自分を見てもらいたいのに、自分を救ってもらいたいのに。自分の中の”何か”がその切望を邪魔している。信じたくても信じきれない、ずっと怖がって……怯えている」

「くっ……」

そうやって見えない何かを言い当てるかのように少女は次々と言葉を口にします。

それはあざ笑うかのように、哀れむかのように。ズカズカと……人の思いだしたくない所に。

「論理なんていりませんよ。結論だけで十分……でしょ？　言わずとも良いことだからそうやって苦い顔してるんですよね？　わかりますよ……先輩」

「……なにが……わかるというのだ？」

「あなたも変われなかったのでしょうか？　僕と同じだ」

……やめろ。

「どうやってても変革を遂げることができない、今そこにある鳥かごで満足している」

……やめろ。

もう……これ以上。

「そうやって何かから逃げ続けて、やらかしてやらかして……」

「……やめろ」

「そしてやらかし続けた結果、全てを……」

「いい加減に、その口を閉じろ……」

「そうやって全てを……」諦めた”nd」

ガシャン!!

そう言い寄られ続けた私の中の感情が、咄嗟に爆発した。

私はそう嘲笑う少女を思いつきり押し倒し、これでもない程の表情で睨みつける。

そして少女の顔前で、私は奥底から叫び散らした。

「貴様に……貴様に私の何がわかるというのだ!？」

「……」

「変われなかったからなんだというのだ!？」　逃げ出して、抗い続けて

……でも、それでも……!!」

「……」

「——忘れられないんだ。」あの時”の……ことを……」

そう、感情に全てを任せ、つい少女の前で弱さを見せてしまった。思わず耐えられなかった。少女の言葉の数々に。

だからこそぶちまけた。私の過去の断片を。

しかし、少女はまるで興味がないといったように、乱れた自分の髪を払いのける。

「……くだらねえ」

「なに……?」

「僕からすればくだらない。本当にくだらない。そんなくだらないことにこだわっているから……」 変われない”んだよ”

そう、少女はどうにも現わせない目の色で私の怒りを見つめる。

その目つきは何を現すのか。その眼の奥にあるのはなんなのか……。

全てに興味を示さないお前の心の奥底には、私に似た何かが潜んでいるというのか……。

「……変われない……だと」

「はい、変われないんですよ。あなたも……僕も……」

「一緒にするな。お前……ごときと」

「……なんだと?」

その私の一言に、傍観していた少女の表情に、微々たる怒りが滲み出る。

そんなお前に言ってやる。私の野望と、宣言を……。

「変われなかったのは今この時までだ。今の私には……この現状から脱却できる術がある」

「……ほう?」

「失ったのなら取り戻せばいい。壊れたのなら直せばいい。私は取り戻すんだよ……そして……」

「……」

「このくだらない青春滑稽劇に……反逆する!!」

私は高らかに、少女に向かって宣言して見せた。

その宣言を聞いた少女は、理科室の天井を見据え対抗するように高く笑う。

「あはっ……あはははははははははは!!」

少女は笑い、勢いよく体を横にずらし、マウンツの状態を解く。

そして私に馬鹿にするような笑みを浮かべ、こう言い返してきた。

「かっ……いいですね先輩！でもね、そんな小学生同然の考えでかっこつけられたって……笑い話なんだよ馬鹿が!!」

そう吐き捨てる。少女は近くに置いてあったロボットのプラモデルを手取る。

そしてそれを地面に投げ捨て、何度も何度も踏みつぶす。

その残骸を私に見せつけ、なおも私を否定するように。

「あはは。こんな風に、形ある物が壊れれば元あった形には戻せない。お前が何を失ったかは知らないけど……ふふ。無理なんだよ!! お前みたいな腐って堕ちた奴が！表舞台上で主役張るなんてな!!」

ただ、少女も意地になって私を罵倒し続ける。

こいつ、人の事を言えた義理ではないが……相当歪んでいる。

ねじ曲がっている。もう変われないみたい、変わることを奪われたかのように……。

「……三日月夜空……二年だ」

「はあ?」

「私の名だ。先に名乗られるのが癪だったからな、先に名乗ってやったぞ」

「ククク。またずいぶん韻の踏んだ綺麗な名前ですね。ただ夜空というだけ人物自体は相当暗いですけど……」

褒めているのかけなしているのかよくわからない評価を下すと、少女の方もごほん咳をして、私を正面に見据える。

「……」 志熊理科”、一年です」

「……そうか」

志熊理科……か。

こいつもまた、私と同じ存在なのかもしれない……な。

だが……。私はけして哀れんだりしない、心を許したりはしない。

「そうか、覚えておこう。最も……お前とは今後一切わかり合うことはないだろうがな」

「お互い様ですよ。僕もあなたみたいな口だけの根暗女とはわかり合いたくありません。おまけに容姿もスタイルも……くっそ!!」

お互いに最後まで、互いを罵り合う言葉を吐き合わせ、二つに裂けるようその場で別れた。

理科室の……志熊理科。ずいぶんとまあ、この学校にもひねくれた奴がいたものだな。

最も、私も人の事は言えたものではない……が。

「……好き放題言いやがって、思いだしたくなかったのに。思いだしちやつたじゃないか……あの……過去を」

そう私は去り際、目に一粒の涙を浮かべていた。

「くそ、腹が煮えくりかえるようだ」

放課後の教室、外は夕暮れ。

私は素直に下校せず、自分のいる教室に一人外を見ていた。

こうして色んな事があったが、私の中で変革は起きていない。

何も変わっていない。何も……。

このままでいいのか、ただ様子を見続けて……。現状に甘えるだけで。

未だに羽瀬川小鷹ともまともに話を出来ていない。そもそも……話しかける手段が思いつかない。

だからこそ私はずっと待ち続けていた。あいつから私に話しかけてくることを。

あいつが私に”気づき”、優しく声をかけてくれたのなら、こんなにも私は……瞑想しなくていいのに。

「——なあ、”トモちゃん”はどう思う?」

どう気が狂ったのか、私は突如何もないところに話しかける。

これが私の趣味の一つである。通称”エア友達”。

世間一般ではイマジナリーフレンドとも言うのだろうが、私からすればそんな言葉ですませてほしくはない。

なぜならトモちゃんは本当に傍にいるから。私の横に、裏切ることなくほほ笑い続けているから。

とてもすごくて、とても頭が良くて。

そして……絶対に裏切らない……から。

私にだって、こんな独り言はばかばかしいと自覚している。だけ……抑えられないんだ。

こんな空想の存在に身を委ねても何も変わらないことは知っている。仮に本当にトモちゃんが存在するとしても、トモちゃんはリア充で、私なんかと友達になんてなってくれないだろう。

——けど、それでも。

そこにはないものがあるように演じると、本当にそこにあるような感覚に陥る。

全てに諦めた私にはこんなものにしか打ち込めない、けど……それを一生懸命やることに意味があるのだとしたら。

恐らく私は、とても満足しているのだろう。

ただ自分を諫めるだけに、慰めるだけ、癒すだけのたった一人のトモちゃんを、私は必死に作り出すことに快感を感じているんだ。

これの何が悪い。だれが否定できる。否定して見ろ。この私が行きついた先の歪みの象徴を……。

「……馬鹿げてる」

そう呟いた後、全てを振り払うかのようにエア友達を再会する私。

「それで、あの時トモちゃんが言ってる——」
ガラガラガラッ!!

その瞬間……。

教室の扉が、勢いよく開いたそこにいたのは……。

濁った金髪の、目の鋭い少年。

転校してきて一ヶ月、誰とも友達のできない孤独な少年。

その目つきは鷹のように、全てを射止める金色の少年。

「……あ」

そう、私と少年の目が合う。

そう、私と少年が同時に呟く。

——ようやく来たな、羽瀬川小鷹。

ようやく目が合ったな、ようやく……この時が来たんだな。

待っていた。本当に待っていた。
ずっとこの時を……待っていたよ。

「——そうだろう？」

お前と私の”出会い”で……止まった時間は動き出すのだ。

NEXT——『IFルート』。

第一章 隣人部創部編

羽瀬川小鷹く運命の少女との出会い

「ねえ、あの人……」

「ああ知ってる。転校してきたばかりの……」

「すごい髪の色だな。俺も金髪だけは染めないようにしよ」

「眼つきも超怖いし。絡まれたりしたらどうしよう……」

……時より、こういった話をヒソヒソと耳にする。

この学園に転校した初日から今に至るまで、俺はそういった存在のように扱われている。

——染めそこなった濁った金髪に、得物を狙うような鷹のような鋭い目つき。

けて俺自身が、そういった外見に見合った性格の、歪んだ男ではない。

俺自体は争い事などを好まず、ただ誰かと仲良く遊んだり、話したり、そういう平和な毎日を過ごせればいいと思っている。

だけど他人から見れば、人の印象なんて外見から入るもの。

それに加え俺自身、しようとする事全てにタイミシングが合わず、失敗してばかりなのが更に俺を浮いた存在にしている。

当然俺は、不良と勘違いされるばかりの毎日は嫌だ。だから日々努力している。

だけど、どうしても……いつまでたっても……それが成果に実ることはない。

——俺、羽瀬川小鷹は……友達が少ない。

「体操服忘れた……」

五月が終わりに差し掛かったある時期。

俺は今日体育で使った体操服を忘れたことに気づき、下校中の道からめんどくささを心の淵で思いつつ、学校へと戻る。

運がよく、学校はまだ閉鎖されていない。俺は急いで学校内に入

り、駆け足で自分の教室へと赴く。
学校内はすでに下校時間のためか、廊下にはほとんど生徒がいない。

俺は夕日が照らすオレンジ色の廊下をただ歩く。

「早く帰らないと、妹がお腹をすいたとうるさいからな……」

先に家に帰っているであろう中学生の妹のそんな顔を思い浮かべ、俺は自分のクラス——2年5組へとたどり着く。

あとは体操服を回収して家に帰るだけ……だ。

「——あはは、そんなことないってー!!」

と、俺が教室に入ろうとした時、中から声が聞こえた。

耳にすんなりとお入ってくる。透き通った女子の声。

明るく話しかけるその声色は、綺麗に空気中を伝わっている。

なんだ。誰かがまだ教室に残っていたのか。まずいな……入りにくいな。

しかも誰かと話をしている中俺が入れば、せつかくの楽しい雰囲気壊してしまうこと間違いないだろう。

どうする、少し様子を見てからこっそり回収するか……。

「だつてさー……」

そう、楽しそうに話している女の子の声が突如途切れた。

いったいどうしたんだと、俺はこっそり教室の戸を少し開け、中の様子を見る。

「……一人しかない」

教室内を見ると、そこには少女が一人しかない。

ならば先ほどの会話は電話のものか……と思ったが、少女は電話を手にしていない。

いったいどういうことだ。誰と話をしていただけだろうか。

俺はしばらく様子を見る。すると、その少女は楽しそうな表情を少しずつ崩し、突然不機嫌になる。

「……馬鹿げてる」

よく聞こえなかったが、そう言った少女の表情は……とても悲しい表情をしていた。

先ほどまで綺麗でいい声で話していた人物が、一瞬にして消えたとさえ思った。

少女はしばらく外を眺める。するとまた、”見えない何か”に向かって会話を始めた。

「あははごめんごめん！あの先生本当にめんどくさいよな」

まるで、別人になったかのようなようだった。

先ほど呟いた一言に感じられる重さが嘘のように、またもその声は良い音色で……こちよく耳に入ってくる。

そしてその少女が浮かべる笑みは、正直言つてとても可愛かった。きつとあの笑顔をずっと振りまいていたら、誰もがあいつに話しかけてくるんだろうな。

いい表情。俺のような強張った、凶悪な笑みとは打って違って……。

「……悔しい……な」

俺は思わず呟いてしまった。

そして先ほど抱いた疑問に戻る。なぜあの少女は、誰もいない所で一人で会話をしているのだろうか。

遠目ではつきりとは見えないが、やはり電話をしているわけでもない。

なら考えられることは一つ。あの少女は……”見えない誰かと話している”。

「……なにやってん……だ？」

俺はもう少しだけ教室の扉を開いた。

これ以上はあちらにバレる。バレたら怖がられて大声で逃げられるかもしれない。

それで先生を呼ばれて「また君か」なんて言われるのは恥ずかしくてごめんだ。

俺はその少女の姿をはつきりと目に捉えた。

夕風になびく紫がかった黒髪。

背は高くもなく低くもなく、かなりの細身。

やたら整った顔立ち。きつと外見だけ見れば誰もが見惚れ惹かれ

るんだろうな。つてくらいの美少女。名前は……思いだせないが。なぜ思いだせないか、あまりあの少女が、学校で何かをやっているところを見たことがないから。

容姿は抜群にいいのに、どうしてかこう印象が薄い。目立つのに目立たない。そんなイメージだった。

確かいつも、教室の前の席で不貞寝していたり、不機嫌な表情で外を見ていたり、黙って本を読んでいたりにしていたような。

要は文学少女で、お祭りが嫌いな感じか。あれだけ笑ったら可愛いのに、とてつもなくもつたいいいな。

——見えない誰かと会話する、目立たない文学美少女……か。

「……変な奴」

悪いとは思ったが、俺はそう苦言を漏らした。

こんな転校数ヶ月で学校で孤立してる変な髪の子に言われれば、いくら彼女でも怒るだろうか。

これはますます近づかない方がいい。下手したら怖がって気絶してしまうかもしれない。

もう少し遠目から様子を見て、あいつが教室から離れて少し経ったら、体操服を回収するでしょう。

俺はそう考え、その場から離れようと扉を閉めようとした……その時。

ガタンっ!!

……やっべ!!

「!？」

その場を離れようとした瞬間、足が扉に引っ掛かり少し大きめの物音を立ててしまった。

これじゃあのぞき見してたことがバレバレだ。あっちも変な秘密見られて動揺してる。

少女は音の鳴った扉の方を見る。眼が合う前に扉を閉め、扉越しで背を向け焦る。

「……それで」

だがその少女、少し経ってまたもや変な独り言を始めた。

俺を油断させるつもりなのか？ なにか変なことを考えてはいないだろうか。

この場合は勢いよく逃げた方がいいのか、でも……そういうのもあまり好きじゃない。

逃げる際に下手して俺の姿を少しでも見られたら（特徴的な髪の色ですぐわかる）、また変な噂が広まる。

あの不良転校生、女の子ストーキングして何かしようとしたよとか、もうこれ以上そういうのはやめてほしい。割とマジで……。

誤魔化すにしても俺は口が上手ではない。口が上手ならもうとっくの昔に学校になじんでるはず。

なら、逃げるに徹しず真っ向から挑むしか……ない？

ガラガラガラッ!!

「!?」

俺は勢いよく扉を開けた。え？ なんで？ 普通に入ればいいのになんでそんな強気に扉開けてんの？

これじゃまずまず相手を怖がらせるだけじゃねえか！ でも緊張してるのか、思考と行動が一致していない。

俺はどういう顔をしていいのか分からず、変に愛想笑いを浮かべてる。

ああ知ってる。今の俺の笑顔、めっちゃ怖いはずだ。それも焦っている分いつも以上に……。

当然少女は少し怯えながらこちらを見ている。怯えているというか引き気味というか……。

「あ……あ〜」

俺は頭をポリポリ書きながら、あははと笑顔を浮かべて自分の席へと向かう。

これ、第三者から見れば明らかに美少女を襲おうとしてる暴漢だからね。やばいって絶対明日こいつ変な噂流すって。

明日登校第一、「ねえ聞いた？ あの転校生2年5組の〇〇さんを

※※※しようとしたんだって〜。こっわ〜」って会話が……。

「あ〜。体操服忘れちゃってさ〜」

俺はわざとらしくこの教室に入った理由を口にする。

本当にわざとらしい。本当の事だけど偽りだらけだ。変だ。ますます今の俺……変だ!!

「あはは、なんか邪魔したみたいで……ごめんね☆」

ごめんね☆ の部分。間違いなく今期最大級の凶悪面が俺から滲み出ていただろう。

ほら、少女の顔が一瞬で青ざめた。恐怖の色がはつきり見える。ぞくつてした。間違いなくこいつ今ぞくつてした!!

絶対今こいつ頭の中で「私襲われる。どうしよう怖いよ」って思っている事だろう。だが安心しろ。そんなことないから。その不安一瞬で終わるからもう少し我慢して!!

変に考えても仕方ない。思いこんでも仕方ない。この場は……。

「あはは、さよなら〜」

そう喉から一生懸命絞り出すように言い、その場を駆け足で離れた。

「なんか……申し訳ないことしたなあ」

体操服を回収した帰り道、学校の外にて。

俺はもう少し上手くできなかつたものかと、先ほどのやり取りを思い返してみた。

ただ何も余計なことを言わず、無表情で体操服を持って教室を立ち去ればよかつたのではないだろうか。

色々やり方はあつたはずだ。それがどうしてこう……他人を怖がらせる気もないのにそういうことになってしまふのだろうか。

「……ああ、俺この学校で友達できるかな」

台詞だけ聞けば小学生のそれだ。それがこんな凶悪面の高校二年生が発して良い台詞じゃない。そこから物語が生まれるわけがない。そんなくだらないことを思っていると、ベンチのある道へ差し掛かる。

三々四つ立ち並ぶベンチの真ん中らへんに、誰かが座っていた。どうか空を見上げだらけていた。シスターが……。

手に炭酸ジュースを握っている。シスターが……。

「……」

疲れて寝ているのだろうか。

俺はそう思いながら、邪魔をしないようにその場を通り過ぎると。

「ふくん。寝ているであろう美少女の太ももと胸に欲情して襲おうとする奴……ではなさそうだねえ」

なにやらとてつもなく心外な一言が、ベンチの方から聞こえてくる。

俺は少し驚きながらベンチの方を振り返る。

すると、先ほどだとらんとベンチに座っていたシスターが、こちらに笑顔に向けていた。

シスター服から見える銀髪が輝いて見える。そして幼さを残しながらも……整った美人顔。

さつき教室にいたあいつに匹敵するほどの美人だ。こう一日に二回も……運がいいのか悪いのか。

「あく。きみい」

「……俺？」

「そうそう、君だよ。き・み」

どうやらそのシスターは俺をこちらに呼んでいるようだ。

なんで？ どうして？ 良く聞こえなかったけどさつきの一言と関係あるの？

「……なん……ですか？」

「そんな身構えんなよ。君が噂の転校生の……えー」

「羽瀬川小鷹です」

「そうそう。ごめんね」

名前を思い出せないようなので、俺はそのシスターに自己紹介をする。

するとシスターは悪びれたわけでもなく、軽くおちやらけた笑みを浮かべて軽く謝る。

なんだこのシスター。すげえ変人オーラがする。こうドラオンボールに出てくるZ戦士よろしく、戦闘力が半端ない。

戦闘力たったの5の俺ではあつさり殺されそうだと、そういう話題は置いておきだな。

「それで、俺に何の用ですか？」

「君さ。なんかこう噂じゃあカツアゲしてるとか女子を舐めまわすように見ているとか聞くけども……」

「そんなことやった覚えがありません！」

そうシスターに追及され、俺はきっぱりと強気に答える。

そうやって俺を見る先生はもう何度目か。お願いだからやめてほしい。

転校してから四回ほど呼び出しをくらい、何度かシスターから相談に來いと勧められたが。

俺はそんなつもりはないし、見た目だけで中身を見ずにそう同情されるのなら……これ以上の屈辱はない。

「……そっかい。君がそう言うなら……やってないんだろう」

「信じてくれるんですか？」

「モロチン……じゃなかったもちろん。先ほどの言葉に込められた感情は焦りなんかじゃない、誠意がこもっている。だから私は君を信じることにした」

そういって、シスターはコーラを飲みほした。

そしてこちらに笑みを向けてくる。ただその瞳は……真剣さが見て取れる。

顔は笑っているが、こちらの深層を深々と覗き込む様な……そんな目が俺に突き刺さる。

「あれだね、確かその髪の毛は地毛だったね」

「え？　なんで知ってるんです？」

「ハーフなんだろう？」

「いやそうですけど、大体の人はこんな染めそこなった髪の毛、地毛だなんて思わないですよ」

「……やっぱりそうだよな。」普通「は……そのはずだよなえ」

俺がそう言うと、シスターは深く何かを考えるように、もうすぐ暗くなる夕陽に顔を向ける。

よくわからないが、この髪の毛を地毛だと言ってくれた人がいて嬉しい。俺にはこの変なシスターがだんだん天使に見えてきた。

「……なに笑ってるの?」

「いや、うれしくて……っつい」

思わず俺は素でにやついていたようだ。

だがそんな俺の顔を見ても、このシスターは怖がったりしない。

やっぱり教育者という立場なのか、俺に対しての接し方が生徒とは違う。

まだ若い女の先生とかは俺を怖がったり、年配の男の先生とかは俺を嫌な目で見たりするけど。

このシスターは、それらの先生とも違う。

「……その、ありがとうございます。俺、シスターさんに会って初めてよかったと思っています!」

「そりゃあ何よりだ。君とは仲良くできそうだ」

そう言っつて、シスターは俺に握手を求めてくる。

俺は迷いなくその手を取り、初めてこの学校で親しく話せる相手を見つけられ、心から喜んだ。

「シスターの名前、教えてもらってもいいですか?」

「ああすまんね。私は”高山ケイト”。この格好通り学園に勤務しているシスターだよん」

「高山……先生」

「先生はむず痒いからやめてくれ、ケイトちゃんと軽く呼んでもくれてもいい。それにこれでも私まだ十五でね、君より年下なんだよ」

と、高山ケイトはあははと尻を掻きながらそう言った。

十五歳で教師って、すごいな……世界は広いんだな。

ひよつとしたら俺と歳が近いのもあって、俺の心境を理解してくれたのかな。

「その、また今度ゆっくり話聞いてもらってもいいですか?」

俺はまた、この先生とお話をしてみたいと思った。

今はもう暗くなって学校が閉まる時間帯だ。あまり迷惑をかけてはいけない。

「ああいいよん。ただ……」

そう承諾する先生は、最後に何かを言いたげにしている……。

「最後に一つ……いいかな？」

「え？ なんですか？」

「……もし、今の現状を全て変えられる機会があつたら……君はどうする？」

……え？

「この孤独な毎日から脱却できるとしたら君はその道を選ぶ？ もし、今の自分が困っている誰かを助けることができるとしたら……その誰かを助けるために努力できる？」

「あの……なにを？」

突如この先生は、よくわからないことを口にした。

だがその言葉に隠れているのは、今の俺に当てはまる要素。

そして俺への転機だ。だけど……。

「……ああごめんごめん。こつちの話さ」

「は、はい……」

「色々かっこつけてしまったが、そうさな。要は今の孤独な青春を、楽しい青春滑稽劇コメディに出来るなら君は頑張れるかという質問だ」

そう先生は、俺を試すような眼差しで問う。

こんな不良扱いされる孤独な毎日を、楽しい日常にできるとしたら……。

なんだその質問。というかどうしてそんな質問を俺に……。

孤独な毎日からの脱却、そして……困っている誰かを……俺が助ける。

俺は先日図書室で読んだファンタジー物の小説を思い出した。

一人の少年が少女と出会い、悪い奴を倒そうとする典型的な小説。

謎の少女の秘密を知ってしまい、流れるままにその少女を助けることになった話。

未だにそんな要素が頭の中に残っているものだから、俺は考えてしまふ。

言い方はどうであれ、この世界がそんなものとは程遠い現実である

ことはどうであれ。

俺がもし、この日常から脱却し……そんな困っている誰かを救えるような。

俺にしか救えないような、誰かを救えるのだとしたら……。

——そんな、主人公みたいな存在に……なれるのなら。

「そんなの、決まっていますよ」

「ほう？」

「俺はその青春滑稽劇コメディに挑戦します。こんな孤独な毎日より……そつちのほうがおもしろそうですから」

「ククク……。こりゃあ面白そうだ……」

そう俺が言い張ると、先生は全てが上手く転がったような、そんな嬉々とした表情を俺に浮かべた。

「なら……明日の授業内容が丁度いいな……」

「え？ なんだって？」

「気にするな。明日私が君”たち”に機会をやろう。頑張れば君は……この日常から脱却できるかもしれないさ」

そう言い残して、先生は学校へと戻って言った。

なんかすごい親しみやすいけど、その分やっぱり変人オーラ全開だったな。

よくわからないけど……もし、この日常から脱却できるのなら……か。

「俺自身は頑張ってるつもりなんだけどな」

そうだ。努力しているのだが……機会がなかったんだ。

転機が、チャンスが。今の自分を変えるキーカードが。

だから俺の努力は空回りし続けた。

だから……俺は友達が少ない。

——そうだろ？

翌日。

「みなさんおはよう〜と〜」

次の日の四時間目。この時間は高山ケイト先生の授業が入ってい

た。

確か昨日「明日の授業」がどつたらこつたら言っていたが、この時間の事だったのだろうか。

始まるや否や古臭いネタを使い生徒から笑いを取る。この先生、他の生徒からも人望が厚いようだ。

そういえば、昨日のあいっ……。

「……」

間違いない、前の方にいるあの長い黒髪。

昨日見えない誰かと話していた時の笑顔のひとかけらもない、ぶすつと無愛想で、今にも寝ようとしている。

これでこのクラスで一番頭がいいという話なのだから、優等生なのかそうじゃないのか……。

「この先社会人になるにあたり、人の繋がりというのを大事にしていかなきゃいかんのだな」

そう高山先生は授業をスムーズに進めていく。

「信教、宗教。それらも神を奉り信じる者達が寄り添って出来る一つのグループ。このように信じるものは神じゃなくてもよい、そういうのは夢でも良い、目標でも良い」

「なるほど。宗教等をコミュニケーションに見立てて授業してるのか」

「何か一つの目標に向かってみんなで何かを頑張る。すばらしいことだと思うよね、えくと」三日月夜空「さん、君はどう思いますか？」

先生は教室の前の方に座っている生徒の名を指し、そう質問をする。

その生徒とは、昨日誰かと話していたあいっだ。

三日月夜空っていうのか。なんというか……すごいいい名前だ。

その珍しい名字に似合う単純かつ神秘的な、俺はその名前を……思わず三回は呟いてしまった。

「……えっ？ なんだって？」

そう三日月は、不貞腐れながら重くのしかかる声で答えた。

お前な、寝ていたのかどうか知らないがそれはないだろ。てかこい

つあんなにいい先生の前でもこの調子なのかよ。

あの時の笑顔はどこいったんだよ。それがお前の本質だともいうのか？

「ごめんごめん。寝ている最中お邪魔しちゃって。授業中に寝ちゃだめだぞ三日月さくん」

「イラッ……」

そう先生が茶化すように言うと、その三日月以外は「ははは」と笑い教室内が暖かい空気になる。

ただそんな中でも、三日月だけは異様に機嫌を損ねたようだ。

「それで。今から君たちには“グループディスカッション”をしてもらうわけだな」

そんな暖かい空気の中、その言葉が聞こえた瞬間……俺の心が凍りついた。

それはなぜか？ 理由は今になってわかる。

「はいじゃあみんな。組を作ってくださいさくい」

そう、先生は手をパンパン叩いてそう支持した。

それを、俺は嫌な汗を滴り落としながらただぼかんと見つめていた。

それはなぜか、そう……組む相手が見当たらないから。

俺は恐怖の不良少年。近づこうにも近づかれようにも……俺と一緒にになる要素が見当たらない。

無理やり先生の指示で仲間に入れてもらっても、発言しようとするば場が凍る。みんなの表情が濁る。

そんなやりきれない場を生き抜くことになるのだ。これ以上の地獄があるものかよ!!

「えーと、全員組作れたかにや？ ってあれ」

そう、先生は俺と三日月を見る。

どうやら組に入れないのは俺だけでない、三日月もだ。

外見でアウトオブ眼中の俺に比べて三日月お前は何だ。こんなに容姿が整っているのになんで動こうとしないんだ。

お前はあの笑顔で仲間に入れてと動けばみんなが受け入れてくれ

る。なのになんで……なんでだ。

「あらら羽瀬川くんと三日月くんだけまだ組に入れてないか……ならばね〜」

そう先生は軽く悩んで、俺と三日月を指さし。

「——君たち二人で、組を作りなさい」

そう……俺たちに宣告した。

これが、俺と三日月夜空の全ての始まりだった。

ここから、俺の孤独な青春は、激動の青春滑稽劇コメディへと姿を変える。

——数々の仲間たちと共に歩み希望を目指した。

——その仲間たちと共に、数多くの絶望と対峙した。

三日月夜空。お前はいつたい何者なんだ？

お前が、先生の言った救うべき誰か……なのか？

何も接点のないはずの、今初めて会話しようとするお前は……この

先俺をどこへ連れていくつもりなんだ。

そして俺は……どこへ辿りつくというのか……。

そして、その道の先にあったのは——俺の……。

その名は隣人部

授業の課題で他人の組に入れなかった俺は、ケイト先生に支持されて同じく他の組に入れなかった三日月夜空と組むことになった。

簡単に言ってしまうえば、あまり者同士くっつけて無理やり組にしたといったところだ。

当然他の人たちみたいになががいい者同士で組んだわけじゃないから、俺とこいつでは話を弾ませるのは難しいだろう。しかも……。

「その、よ……よろしく……な」
「……」

そう、俺は堅苦しく挨拶をする。

この時もまた、俺の顔は意識なく強張って凶悪面になっていたことだろう。三日月の反応を見ればそれがわかる。

「……貴様は、私の事が気にいらないのか？」

ほら、さっそくさっさくやって誤解されてしまったじゃないか。

気にいらないなんてとんでもない。こう成り行きだがお前と組んだ以上俺は最後までお前とこの授業を乗り切りたいと思っているさ。

さきほどのよろしくは戸惑いでも嫌悪でもない、俺は俺なりにほほ笑んだだけだ。なのになあ。

「すまん。昔から笑うのが苦手なんだ」

「……そうか」

そう俺が謝ると、三日月はそれなりに納得してくれた。

「にしても、三日月はどうして組を作る際に一切動こうとしなかったんだ？」

「……なぜそんなことを聞く？」

俺の質問に対して、三日月は質問で返してきた。

あゝ。最初にしては変な質問だったか。そもそもこいつとは話したことも関わったこともない。

だけど、こいつはこのクラスでも一番頭がよく、容姿も他の女子と比べるのはいけないことだがダントツで美人だ。異性に対して疎い俺でもそう思うんだ。相当の美人だと思う。

だからこそ俺は疑問に思う。どうしてこいつが……このクラスで浮いた存在なのかを……。

「三日月って……結構モテるだろ？」

「……貴様は私をバカにしているのか？」

なんでそうなる？ 俺はただ素朴な質問をしただけだ。なのにどうして喧嘩を売ったみたいになってんだ？

……なんか、ちよつとだけわかってきた気がする。こいつがこのクラスで他人と馴染めていない理由が。

「ごめん……」

「ふん。そうだな、さっきの質問に答えるならば。この教室のやつらはおろか、この学校で信じられる者、仲良くしたいと思う者は一人もないからだ。無論……貴様も例外ではない」

そう、三日月は言っていてやったかのように、冷徹に断言した。

なんだこいつ？ 昨日は楽しそうに独り言、そして今日は何もしてないのになんと無愛想に捻くれた発言。

性格が悪い以前に波状してんじゃないのか？ どうしてこんなに、迷いなくそんなことが言えてしまうんだこいつは。

「そうかよ。なれ合いはごめんってか。こっちは一生懸命お前と馴染もうと思っただけだ」

「……」

「気が変わったわ。これ以上無駄話していても意味がない。さっさとこのレポート書いてちやちやつと終わらせようぜ」

俺は意地を張ってか、そう三日月に吐き捨てた。

ちよつと大人げなかったかな。思えばこいつとは今話したばかりだ。

まだ相手の素性もはっきりとわかってないのに、名に強がってんだよ俺は……。

俺だって表上は、こいつと同類なんだ。

「……ごめん」

「今度はどうした？ 謝るのが好きな男だな」

気がつくともまた俺は謝ってしまった。

ひよつとしたら少しは傷ついたかと思った。だが帰ってきた言葉を聞く限りは、なんとも思っていないかったようだ。

……だからどうした。俺は今の謝罪を無駄なんかとは思っていない。

冷静になれ。今こいつは俺のパートナーだ。授業とはいえ、こいつと俺はチームなんだ。

そんな場で互いに意地を張っていても仕方がない。それでは……なにも変わりはない。

そういったことを考えていると、なにやら三日月がこちらを見た。そして、顔を反らしてさらに不機嫌に。

「……こんな授業中でこいつと一緒にになっても意味がない、だがケイト……感謝はする」

「え？ なんだった？」
「なんでもない。こちらの話だ」

何かぶつぶつ言っていたようだが、俺にはよく聞き取れなかった。だがなんだろうか。最後の最後で、一瞬だが笑みを浮かべたような気がした。

よくわからないが、俺をパートナーと認めてくれた……ということだろうか。

しかしそれから数分、俺たちはまったく話題が弾まず時間は刻々と過ぎていった。

俺は色々と質問をしたが、三日月は考えているのかいないのか、返ってくる答えではレポートはまったく出来上がらない。そしていつのまにか授業は終了。

「はい授業終了。レポートは明日の授業までいいので、出来上がっていないのならば放課後や家に帰ってからメールやらスカイプでもいいから話しあつて完成させておいてねん。じゃあチャオ」

そう先生は軽いテンションで授業を占め、古いネタで教室を去って行った。

放課後か家に帰ってから、俺はこいつの連絡先を知らないから話しかけようなら放課後か。

てか、メールはわかるとしてスカイプってなんだ？ 人類はメールの先に何を生み出したんだ？

「くだらん……」

「つておい、お前まさかこのレポートぶん投げるつもりか？」

授業が終わり、三日月は席をから立ちあがりすぐさま教室を離れようとする。

この態度からまさかと思い、俺はそう質問する。

「人との付き合い方をなぜにわざわざ他人と話しあわないとならない？ 考えても見ろ、そんなもの小学生にでもやらせておけばいいのだ」

「そうは言うがな。そんな簡単なことにてこずっているのが俺らだろうが」

「貴様と一緒にするな。貴様は誰かとなれ合いたいと努力しているのだろうが、私は一人で充分なのだ。そうやって誰かと一緒にやないと満足できない貴様とは違う」

と、三日月は髪をかきあげて俺を見下すように言う。

この女あ、さつきから聞いていればどうしてこんなにも最低な発言を連発出来るんだよ……。

「ただ人間が嫌いなんだよ。ただ他人を見下せば気が済むんだよ。」

くそ……冷静になれ。こいつが気に入らないなんて思ったらレポートなんて書けやしないんだから。

「そう言うなよ。お前も優等生なら、この程度のレポート提出できないでどうするんだ？」

「むっ……」

「それに俺と一緒にするなどは言うが、俺にだって譲れないものはある。お前にだって、譲れないものくらい……あるだろ？」

俺はこいつの言葉に負けまいと、強気な眼差しでそう質問する。

互いに信念という物があるのなら、俺とお前に違いなんてない。違うなんてことを、認めてはいけない。

そうだ。負けちゃいけない。こいつにだけは……今は負けられない

い。

「ふん……言ってくれるじゃないか」

そう、気にいらぬように言い捨てて、夜空は教室から立ち去った。手ごたえは全く無きそう……か。いや、最後こいつは……微弱ながら笑みを浮かべていた。

少しだけ笑っていた。そんな気が……する。

放課後。

「……羽瀬川」

全ての授業が終わり、下校時刻となったころ。

意外なことに、俺が声をかけるより前に、三日月の方から俺に声をかけてきた。

「その、授業の時はすまなかつたな。あの時は眠くて仕方がなくてな」

「あ、ああ……」

そう、軽くではあるが三日月は俺に謝ってきた。

こいつ……急にどうした？ まるで人が変わったみたい。言いすぎか……。

本当に眠くて機嫌が悪かつただけなのか。それならいいんだけど。

「それでレポートの件だったな、この時間では教室も人が残るし、ラウンジも人が多い。それでは話し合いに集中できない」

「そ、そうだな……」

「だから私がよく利用している居室がある。そこなら誰もいないし、ゆっくり話せるだろう」

そう三日月は、なにからなまでにまぶつぶつと、自分で決め始めた。

……やたらしゃべるな。授業中とはまるで違う。

まるで何かを誤魔化すように口数が多い。気にしすぎか？ まあやる気になつてくれたのなら俺的には越したことはないんだが。

その後、三日月がよく利用しているという居室へと案内させられる。

それは聖堂の中にあつて、とても不思議な空気に満ちていた。

ここで昔儀式とか色々あつたのだろうか、今でもそれらをやっている。

るような、そんな感じがした。

そして色々な部屋が並ぶ中で、そこにあった『談話室4』。

談話室……というくらいだから、こう個人的な相談をしたりする場所のはずだ。

相談を受け持つのはシスター。ってことはここはシスターが管理する居室なのだろうか。

がちやりと扉を開け、中に入ると誰もいなかった。

広さ八畳ほどの小綺麗な部屋で、テーブルやソファ等一通りの物が揃っている。

俺とこの女二人で使うには、正直もったいないくらいだ。

こんな場所、どうしてこいつが好き勝手使用してるんだ？ あきらかにおかしいだろ。

「ここなら私とお前しかない。授業のレポートをやるにはうってつけだろう」

「……なあ、この学校って成績に乗じて特権とか与えられるのか？」

俺がそう質問すると、三日月はどうしてそんなことをきくのか、といった顔で俺を見た。

「いや、三日月って優等生じゃねえか」

「……」

俺がそう言うと、三日月は不機嫌そうに表情をゆがめた。

しまった。少し皮肉に聞こえたかな。

「ああいや馬鹿にしてるとかそんなんじゃないやなくて、褒め言葉な。だからこう静かに勉強できるようにこう居室を使っっていい権利を与えられてるのかなって……」

「ふん、そんなわけないだろう。むしろそんな特権のようなものが与えられるのなら、誰もいない一人ぼっちの教室に一人の教師をマンツーマンでつけてもらいたいくらいだ」

そう三日月はしかめっ面で、割と本気にそんな要望を口に述べた。

お前それって俗にいう特別教室ってやつだよな？ 学校になじめない子のために仕方なく用意したような。

あまりそういう待遇をバカにするわけじゃないけど、そういう立

場つてのは……とてつもなく苦しくて、寂しいもんだと思うな。

お前だつて、少しはその仏頂面をやめて、思いつきりみんなの前で笑つて見せれば、世界は変わつて見えるだろうに……。

……それでもお前は、そんな明るい世界を否定するのかな。

「まあいいや。それよりもレポートだ。ちやつちやつと片つけようぜ、

”優等生”」

「む……。せいぜいヘンテコな意見を述べて足を引っ張らぬことだ。

”転校生”」

俺に張り合うように、三日月は嫌味つたらしく転校生呼ばわり。

ま、こいつとはこういつた付き合い方が合つてるのかもしれないな。ならとことん相手に合わせるまでだ。

無駄に痴話喧嘩をしてもらちが明かない。なのでさっそくレポートの話し合いをすることに。

「人とうまく付き合うには、積極的に話しかけたり、同じ趣味を見つけたりそういう努力をする必要がある。単純だが俺はやっぱり思ううな」

「違うな、間違つてゐるぞ転校生。そんなものは虚言、虚構にすぎん。そういう意見は真剣に考えられないタイプの人間が一番最初に発することだ。所詮シミュレーションと本番は相容れないものだ」

「む……。手厳しい。というか言いすぎだろ」

俺はただ思ったことを口にしただけなのに、序盤でいきなりこの物言いだ。正直俺は腹が立ったよ。

ならば俺だつて問わせてもらおう。そんな考えをするお前の答えをな。

「じゃあお前はどう思うんだよ？」

「演技力が必要、つまりあれだ。どんなことがあつても最高の人間を演じ続けることだろうな」

そう言つて、三日月は決まつたごとく胸を張る。

なんというか、うん。なんといわずとも……お前は最低なやつだな。

何が最低つて、そんな考えを心の底に抱くことではない。

その考えをなんの躊躇なしに、嫌とも思わず口に出せることだ。
俺自身は善良な人間というわけではないが、こいつの最低ぶりは匂いで分かる。

こいつはくせえ、ゲロ以下の匂いがなんとやら……だ。

「優等生よお。俺は正直幻滅だよ」

「なんとも思うがいい。だが人は自分が評価する最高の人間に労働と対価を求めめるものだ。無能と思う人間に己の欲求を押しつけるやつなどいるまい」

「……………」

「……まあそれは人付き合いの方法の一つということで、他にも色々考えたが教えるのがめんどくさい」

俺が軽蔑の目を向けると、最後は流石に自重したのか、三日月は一歩引き気味にそう付け加えた。

このレポート、本当にまともな物になるのかなあ。

「だが、友達という関係が築けたのなら、それは失いたくない。せつかく出来た繋がりなのだから……」

その後三日月が少しさびしげな表情を浮かべて言った言葉。

それに関してだけは、俺もこいつの気持ちに同意見だった。

友情は失いたくない……か。作ろうと努力しただけで、築き上げた関係性を合理的に捨て去るやつではないらしい。

だったら、少しは話しあう価値はある……かな。

「……………そうか」

俺はそんなことを想いながら、その全ての感情をその一言に込めた。

この言葉に込められた感情はけして演技でも何でもない。これはお前の気持ちへの肯定だよ。

それに、先ほどまでの心ない発言を、何かがお前に言わせているのだとしたら。それは、全てを否定してはいけないから。

そうだ。お前に何かがあったかは知らない。聞くつもりもない。

だが何かを背負っているのはお前だけじゃない。俺にだって譲れないもの……。

——後悔に支配された”過去”がある。

「……なんでお前が落ち込んでるんだ？」

「あ、いやなんでもない」

そんなことを思い出していたのが顔に出ていたのか、夜空が神妙な顔でこう聞いてきた。

俺はそれを振り払うように、言葉を続ける。

「そんなことより結構時間が立つが……レポートにはまだ一文字も書いてねえな」

気がつけばこの部屋に来て軽く三十分は経っていた。

このままだと本当に『人とのつながりには、一流俳優並みの演技力が必要であります！』になってしまう。

そんなことを周りの人たちの前で発表してしまえば、本気で最低のヤンキー野郎と認識されてしまうだろうな。

「大丈夫だろう。とりあえずケイト先生を上手く丸めこめるような素敵な文章を完成させねばな」

そう三日月は余裕を見せ、レポートを書こうとしたその時。

「誰を丸めこむって？」

「誰ってあのアホケイトだ……ってケイトおおお!？」

いったいいつのまに部屋に入ってきたのか、ケイト先生は忍びよる忍者のごとく居室内にいた。

どうやら先ほどの会話からアホケイトにいたるまで、ある程度の会話は聞かれていたようだ。

最後の最後でアホ呼ばわりされたのか、ケイト先生はヒクヒクと怒るマークを頭に浮かべていた。

「一生懸命働いている大人をアホ呼ばわりとはいい御身分じゃないか三日月くんよお？」

「ふん、なにが一生懸命働いているだ。めんどくさいことは生徒に仕事ぶん投げるくせによく言う」

ケイト先生の姿を認識すると、ケイト先生と三日月がなにやら言い争いを始めてしまった。

というかやっぱりというべきか、この二人認識あったんだな。

「まだ一字も書いてないじゃないか。全然進んでいないけど大丈夫なのかいい？」

ケイト先生はレポート用紙を揺らしながら俺達にそれを突きつける。返す言葉もないぜ……。

「そうは言うが。私とこの転校生の意見が噛み合わないのだ」

三日月はそう文句をケイトに漏らす。

噛み合わないのは本当の事だ。これは俺も同意見だよ。

「なら互いにじぶんの経験談とか色々なことを話し合えばいいだろう？ どうせ今まで二人で黙り込んでいたんでしようが？」

「いやいやそれが逆でしてね、結構話はしていたんですよ。むしろ話に夢中で書いていなかったと言った方が正しい」

「ほう、そこまで仲良くなったか二人とも……ってレポート書きや意味ないだろうが!!」

俺の答えにケイト先生が突っ込む、しかもなかなかのキレのいいツツコミ……。

この時気がついたのだが、なんやかんやで俺は三日月と話を弾ませていたようだ。

といっても最低なことが多めだったが、三日月自身は他人と話すらしたくないほど人を拒絶してるほどでもなさそうだ。

その後ケイト先生はそこに居座った。どうやら自分の仕事は終わったみたいだ。

ここからは俺と夜空、ケイト先生の三人で話し合うことに。

「はいじゃあ腐ったプリン、お前から意見いいなさい」

「腐ったプリンはやめてくださいよ、せめてミカンでしょ？」

ケイト先生が俺に失礼な言い方をしてきた。

俺がそう訂正すると、ケイトはちつちと指を振って馬鹿にするように俺を見る。

「おいおい小鷹くんよお。日本一有名な我ら教師の代名詞、金八ちゃんをバカにしてはいけないよお。君たちは腐ったプリンだ！ なんだよ」

「あんたが一番馬鹿にしてるだろ。金八さんに尊敬すら抱いていない

だろ」

そう有名な教師を尊敬してるんだか馬鹿にしてるのだからよくわからないことを言った後、なにやら三日月が馬鹿にしたように俺を見てこう言った。

「あはは、腐ったプリンか。お似合いだな転校生。いやもう腐れプリン野郎でいいだろうなあ〜」

「お前他人のコンプレックスの溝に手を出してるといずれ痛い目に合うぞ……」

夜空は笑いながら俺のあだ名絶賛していた。失礼なやつだ……。というかこいつ、やっぱり笑うとかわいいやつだな。

その笑顔、せめて他人をバカにする使い方をしないでほしかったな。

まあいいやと俺はとりあえず意見を出していく。

「あだ名か……。あだ名をつけるというのは？」

俺は先ほど腐ったプリンという不名誉なあだ名をつけられ傷ついたらばかりだが、そう意見を出してみた。

もちろんあだ名をつけることで他人が嫌な気分になるかもしれないというのはあるかもしれない。現に俺がね。つい今の話ね。

だが中の良い友達同士であだ名で呼びあっているのをよく見かける。

「あだ名……か……」

俺のその意見に、三日月がなにやら反応を示した。

それも、先ほどまで興味もなさげにただ流していたような反応じゃない。

明らかに先ほどと比べて手ごたえがあった。ような気がした。

「三日月はなんかあだ名なかったのか？」

「あだ名……」

俺がそう質問をすると、三日月が俺のほうを見る。

その表情は先ほどまでのそれとはわけが違う。なにか、触れてはいけない部分に触れてしまったかのような。

三日月夜空の核心に触れてしまったかのように、その表情は……悲

しみに満ちていた。

俺には理解できないが。まるでそれは……何かを思い出すように、それを……求めているかのような。

「あだ……名……。ある。”あつたよ”、昔に」

「へえ、どんなあだ名だったんだ？」

俺がそうあだ名を聞くと、またも三日月は……沈んだような表情を浮かべ。

「……いやだ。羽瀬川小鷹には”……教えない」

羽瀬川小鷹には教えない。

どういうことだ。やっぱり触れちゃいけない部分に触れちゃったのかな。

ま、嫌なことを無理やり聞くのはいけないことだよな。

「そっか、なんかごめん」

「あ、謝ることはないぞー！ その……私もすまない」

そう謝る俺に、三日月まで謝り返してきた。

初めてこう、素直なこいつを見たような気がした。

「……あだ名で思ったが、互いに皮肉り合ったような名前で呼ぶのもやはりいけないことだろうな」

今度は三日月がこれまた真剣な意見を口にしてきた。

ケイト先生が来たからなのか、それともここに来て初めて本気になっってくれたからなのか。

「そうだな。したら優等生はやめるよ、じゃあ、その……俺はお前の事をなんって呼べばいいんだ？」

俺はそう三日月に尋ねる。

すると、三日月はなにやら悩んだように黙りこんでしまった。

「私の事を……」

「ああ、名字でいいなら名字で呼ぶけど」

そう言う俺に対して、夜空はずっと奥を見るような眼差しを俺に向ける。

そして、まるで意を決したかのようになり、三日月はこう言った。

「……」 夜空だ。呼び捨てで……夜空だ」

「呼び捨てか。ま、いいんじゃないやねえの？　じゃあ俺も”小鷹”って呼んでくれよ」

いきなり呼び捨てというのもむず痒いものだが、俺は……自然と嫌な気分はしなかった。

むしろなんか、夜空に名前前で呼ばれるのが、すがすがしいと思ってしまう。そんな気分だった。

なんでだろう。やっぱりこう、こいつに思う何かがあるのかな。よくわからねえけど。

「美しい友情というのを、私は嫌いじゃないよん」

「ケイト先生……」

「どうせならこう、まず手始めに二人で友達になってしまえば？」

軽々しくケイト先生はそう意見してくる。

俺としては別にかまわないが、夜空はというと……。

「友達……私と小鷹が……」

「べ、別に俺は大歓迎だぜ？　友達、まだこの学校で作ってないからな」

俺は照れながら、そう手を差し伸べる。

だが夜空は、よくはわからないが……ものすごく戸惑っていた。

なんだ？　なにを悩んでいるんだ？　少し強引過ぎたか。

それともやっぱり、俺と友達になんてなりたくない……のかな。

「……そんな簡単な口約束では意味がない。きちんとした過程が必要だ」

「か、過程？」

「じゃないと……また”あの時”を繰り返すから」

「え？　なんだって？」

「……なんでもない。私個人の問題だ。”羽瀬川小鷹”には関係ない」

そう突っぱねるように夜空は、最初の無愛想な表情に戻ってしまった。

さつきからどうも引つかかるな。”羽瀬川小鷹には”って。どうしてそこだけフルネームなんだ？

何かと俺を重ねてる？ あんまり好きじゃないんだよな、そういうの。

「そうかよ、んで過程っていうのは？」

「真の友情を築くための日常とかだ」

「お前結構ロマンチストだな」

「馬鹿にしてるのか？」

流星に今の俺の言葉は心にもないことだっただろうか。

でもそう思うのは、夜空も女の子ってことなんだろうな。

それに、そう考えてくれるというのはありがたいことだ。それは、俺と友達になってもいいってこと……なんだよな？

「真の友情を育むための青春計画。いいじゃんおもしろいじゃないかあゝ」

「ケイト、見世物じゃないからな」

「いいじゃないか、教師としてはそういうのが大好きなんだからさ。そうだな、だったら二人で”部活”でも入ったら、それで最終的に大会の決勝で会おうぜ、とか最高の喜劇が描けると思うよん」

ケイト先生が提案したのは、部活に入ることだった。

確かに野球ならピッチャーとキャッチャーのバッテリーだとか、個人競技なら高体連とかで上手くトーナメントで当たれば互いの日ごろの成果を発揮出来たりするし。

それで互いの努力を讃えあってとか、よくあるパターンだよな。夢だよ。そこまでいけば夢。そんな青春一度くらいしてみたいなあ。

と、俺がそんな妄想を描いている所、夜空はというと。

「部活は却下だ」

「なぜに？」

その夜空の即答に、俺とケイト先生が声をそろえて尋ねた。

「恥ずかしいからだ」

「おい、恥ずかしいって……」

俺の質問に夜空はきっぱりとそう答えた。

しかしよくよく考えれば、この時期に俺達のようなやつらが急に入ってきたら部活の人達も困るだろうな……。

友達作りの青春するために来ましたという理由で入って、優勝とか目指してる人たちが逆に嫌な思いをするかもしれないだろうし……。この意見はだめだな……。そう思った時だった。ケイト先生が俺達にこう言った。

「したら君たちで部活作っちゃえばいいじゃん？ 私これでもオセロには自身あるんだよお。オセロ研究会なんて作った際には君たちにも伝授してあげるよ、オセロの必勝法」

そう軽い感じにケイトは言う。

しかも初っ端出たのがオセロって、スポーツどこ行っただよ!! オセロって四つ角取れば有利なんだろう？ って、そんなことは小学生でも知ってるよ。

うーん、オセロの必勝法か。ちよつと知りたいかもって思っっちゃったじゃないかどうしてくれる。

「部活を……作る……」

俺の頭の中がオセロでいっぱいになっていたころ、夜空は部活の事について割と本気で考えこんでいた。

なんだ？ なにか思いついたのか？

まさか本当にオセロ研究会立ちあげるつもりか。

「——もし、部活を作ったとして……誰も入りたがらなそうな部活を作り。そこに小鷹を引きずりこんだとして……私とこいつの”二人だけ”の世界を作ることができたとしたら……」

「あの、夜空さん？」

なにやら小声でぶつぶつと模索している夜空。

俺には入っていきそうにない。そして数分後、急に思いついたように夜空はぼんと手を叩いた。

そして、全てを解決させたかのように。

「……レポートは完成だ」

「え？ なんと？」

「今話した内容で数ページの文章をまとめてくる。それに加え、明日までに部活の内容を考え創部届を完成させてくる」

「は!?! お前本気で部活作んの!?!」

なんとこの女、レポートを完成させたと言っただけに飽き足らず、部活を作ることを勝手に決めてしまった。

どうしてこうも流れるままに、それも軽い気持ちで進んで行った内容を実現できるんだ？

俺にはわけがわからないよ。でも、こいつは本気だ。

「ケイト先生、その際はぜひとも顧問になってくれ。部室はここを使用する」

「ふふん？ 断ると言いたいところだが……。なにやら面白いことが始まりそうだから、内容次第では乗っかってあげよう。君の内なる”計画”に……ね」

気がつけば俺はおいてけぼりだった。

今時の女子二人は勝手に話をしだしては勝手に終わらせ、今日の話し合いはこれでお開き。

なんだろう？ 最後の方俺いる意味あったのか？ 誰か教えてくれ。

ちなみにその日の夜、俺はオセロの必勝法が何か気になって眠れなかったんだぜ。

そして次の日。

「小鷹、部活の内容が決まったぞ」

「ふえ？ なにオセロ研究会？ それともリバーシ研究会？」

「とりあえずオセロから離れる。白黒なら私のはつきりつけてやる」

そう眠気にやられている俺のボケに、夜空が上手く言葉を合わせて対応してきた。

オセロだけに白黒か、上手いこと言いやがるなあマジで。

「創部手続きもすでに終わっている」

「またずいぶん早いな。お前そういうの決まったらすぐ実行するタイプだろ？」

夜空の行動力の高さに驚かされながらも、俺は淡々とその話を聞くことに。

『部活を作る』と心の中で決まったなら、その時すでに行動は終わっ

ているのだ」

「ああ、しばらくお前を兄貴と呼ばせてくれや」

「人間関係が形成されている既存の部活ではなく、一から人間関係を構築する部活。そしてその条件を最も短期かつ効率的に、友情を育むことに特化した部活。ケイトのアホもその出来栄えに思わず笑いかけていたぞ」

そう長々と説明をし、いよいよその部活の全容が明らかとなる。

「んで？ お前はどんな部活を作ったんだ？」

俺がそう恐る恐る質問すると、夜空は自信たっぷり、その部活の名称を口にした。

「名付けて——『隣人部』だ」

それが、俺たち『隣人部』の全ての始まりだった。

そして、ここから俺たちの物語が始まる。

先の見えない長きに渡る青春という名の滑稽劇への……。

少女の反逆と、少年の挑戦が——。

大雨の中で少年と少女は……

隣人部創部から十日経った。

外は雨が降っている。それも大雨だ。

そんな中で、俺は与えられた部室で一人たたずんでいる。

一方でもう一人は、言葉にならない感情をぶちまけて、このひどい雨が降りしきる外へと走っていった。

どうしてだ。俺は何をやっているんだ。

今、俺は……何をやっているんだ。

人と人との因果なんて、俺には遠すぎてよくわからない。

ただ俺がそのことで悩むことといえば、どうして”俺なんだ”……ということだ。

——どうしてこの場にいるのが、俺なのか……。

隣人部創部一日目の放課後。

俺はこの度隣人部の部長に就任した三日月夜空に連れられ、昨日話し合いをした談話室4へと移動した。

どうやらこの部屋が俺たちの部室になるようだ。

言っちゃなんだが、まだ詳細も聞かされていない謎の部活に対し、このような立派な部屋が与えられるというのは少しばかり重荷だ。

テレビもあってトイレやシャワールーム。ぶっちゃけ人が住めてしまうほどだ。

談話室4の扉を開けると、そこにはケイト先生が座っていた。

「やつほっほー。なるべくお急ぎでたのむよ。こっちは仕事で忙しいし、コーヒーが冷めてしまったじゃないか」

相変わらず軽いノリで俺たちを出迎えるケイト先生。

言った通りなのか、テーブルには冷めたコーヒーが2カップ置いてある。

「んで？ 私たちに言いたい事ってなんだ？」

そう夜空がケイト先生に質問。

部活を作るにあたって、とりあえずケイト先生が顧問をやることに

なつたわけだが。

確かに部活である以上、顧問から何かを言い渡されるのは当たり前だろうか。

「な〜に。まずは隣人部創部おめでとう。と、浮かれてばかりはいられない。さつそく顧問から課題を出してやろうと思つたわけだよ」

「課題だど？」

ケイト先生がそう言うと、夜空の表情が少しばかり濁つた。

まさかとは思うがこの女、課題なしで好き勝手できるとでも思つていたのか。

いくら部活とはいえ部長の判断だけで活動を執行できるわけがないだろ。

もしそれができるなら、野球部は毎日部室に籠つて麻雀やつてるよ。

「むむ……。それで、いったい課題とはなんだ？」

「その前に、まず記念すべき最初の部員に部活の信念とやらを伝える必要があるだろう。隣人部という名称だけで何をするかわかる人間なんていないよ」

そう、俺が今にも疑問に思つていた所を的確についてくるケイト先生。

さすがはやり手だ。夜空みたいな捻くれた生徒相手にも臆することなく教師を全うするその姿、信頼できるなあ〜。

「……それもそうだな。せっかくだ、隅から隅まで説明してやろう。目ん玉見開いて良く見ろよ小鷹」

「ああ……」

そう夜空が言うと、俺はごくりと唾を飲み込んだ。

一体なにをやらさ……もとい、なにをするんだこの部活だ。

すると、夜空は口で語るより先に、一枚の絵の描かれた紙を取り出した。

そしてそれを、俺の目の前に提示する。

「……なんじゃこれ？」

それを見た俺の最初の一言がこれ。

その絵、なにやら山の頂上で人らしき生き物……これふなっしー？、そいつが生きているおにぎり？　みたいなやつを食べようとしている光景。

今にもおにぎり（仮）が助けを求めているような、シニールだが残酷さが滲み出るような絵だった。

そして、その絵の上にずらずらと長ったらしい言葉が書いている。

「わかったか？　小鷹ならこの絵と文章の意図が伝わるはずだ」

「なるほどね、一日一回俺がお前の指示で生徒一人をカツアゲしろと」「おい」

俺が半分冗談半分本気でそう答えると、夜空が鋭いチョップを俺にお見舞いした。

だつてこの光景、怖い奴が怯えてるやつ襲ってるにしか見えねえじゃねえか。俺の印象丸つきり再現してんじゃねえか。

俺も認めたくありませんよ。けど人様から見た俺ってこういうイメージなんだろう？

「じゃあなんだよ……」

「いいから、絵はどうでもいいから。その上の文章読んでみろ」文章？

夜空に言われた通り、俺は文章の方に目をやる。

文章は以下の通り、こう書かれている。

とにかく臨機応変に隣人

とも善き関係を築くべく

からだと心を健全に鍛え

たびだちのその日まで、

共に想い募らせ励まし合い

皆の信望を集める人間になろう

「とにかく……心を……鍛え……その日まで……皆の。んだよ時間制限付きか？　ノルマとか破ったら罰金か？」

「貴様いい加減にしないと本気で怒るぞ……」

そう体をびくびく震わせている夜空。怒るぞってもう怒ってん

じゃねえかよ。

てか俺もそうやって自虐するあたり、やっぱり心のどこかでもう諦めてるのかな。

「飛ばして読むな。それに、その文章の真の意図がお前にはわからないのか?」

「意図? ただそれらしいことを長ったらしく書いているだけじゃねえか。結局なにをやるんだよ?」

「まったく。それを斜めに読んでみる」

斜め?

俺は夜空の言う通りに、その文章を斜めに読んでみる。

「ともだち……募集? んっんー、それで?」

俺は率直に斜めに読んでみて、それでもよくわからなかったためそう聞き返すと。

「そうだ。それ以上でも以下でもない」

「……つまり、この部活は友愛会か何かか?」

「なんでそっちの方面にネタを持っていこうとするのだ!!」

そう夜空はぶんすか怒っている。

どうやらこれはそのままの意味で、隣人部とは文字通り。

友達を作る部活……なのである。

……なるほど、友達を作る部活だ。

そっかー。友達作りか。それを部活でやっちゃうわけですなー。

「夜空。お前やる時はやるんだな」

「絶対今お前私を馬鹿にしただろ」

そう素直に言う俺だが、夜空は気に食わない顔で返す。

ということ部活についての詳細は分かった。これだけわかれば問題ないだろう。

「理解してくれたかな小鷹くん?」

「ああ、友達作り。全国目指してがんばるぜ」

「意気込みや良し。そこで私からの最初の課題だ。耳かっぽじって良く聞きたまえよ」

そうケイトは、まるでクイズ番組で正解を発表するような時のよう

に、妙に間を溜め始めた。

その瞬間ばかりは、夜空も何を言われるのだろうとひやひやしている。

ひやひやというか、夜空の表情からは苦みを感じる。

まるで、ケイト先生に余計なことをするなど言わんばかりに。

「えー隣人部諸君、今日から二週間以内に三人目の部員を探し部活に勧誘すること。もし二週間後までに入部希望者がいなかった場合、この部活は廃部ということぞ」

「!?」

そう、ケイトはきつぱりと口にした。

俺たちへの課題。それは隣人部の部員数を三人にするというものだった。

友達の少ない俺たちへの配慮なのか、五人とかではなく三人と、最初にしては軽めの課題だった。

「実の所この学校の部活の最低人数は三人なんだ。だからどうにしろこうにしろ、後一人は必要なのよ。それに友達百人作ろう見たいなノルマ掲げているなら、いずれは全生徒を部員にするくらいやってもらわないとね」

「なるほどね。たった一人、とは言えど……。今の俺たちには難しい課題かもしれないな。な、夜空……」

と、俺は夜空の方に目をやる。

その時の夜空の顔が、なんとというか予想以上に、ダメージを受けているかのような表情だった。

そんなにこの課題が難しかったのか。いやいやいくら俺らがぼっち同盟だったとしても、たった一人部活に勧誘するくらい簡単だろ。

なのに、どうして……。そんなにお前は、そんなにも苦々しい表情なんだ。

なんだ？ 何か気に食わないこともあるのか？

「小鷹くんはやる気だとして。よーぞらくん、どしたね？」

「後一人をこの部活に……。か。べ、別に二週間なんて短くなくても、一ヶ月くらいでいいんじゃないか？」

そう、誤魔化しと焦りが混じり合うような声で夜空は言う。
どうした？ まさか本当に自信がないのか？

「おいおい夜空。たかが一人だろ？ そんな一ヶ月もいらな……」
俺がそう声をかけると、夜空はキツと俺の顔を睨みつけた。
思わず怯んじまった。いったいなんだってんだよ……。

「小鷹は黙っている。これは私の……くっ」
そう言い終わると、夜空は半分諦めたかのように、扉の方へと足を運ぶ。

そして去り際、俺たちに向かってこう言い残した。

「……後一人くらい、すぐ見つけてやる」

そう言って、夜空は部室から去って言った。

残された俺とケイト先生。

そうやって単独行動か、まったく……どうにもついていけないな。

「なんか気にいらなさそうだったな、どうしたんだ？」

「さあ、わたしにはわからんよ。その真意を知るのは彼女だけってね。
ただ……」

ケイト先生はそうぼやくように言った後、俺の方を見やる。

そして俺の肩を叩き、俺の心に付きつけるように、こう言った。

「ただどこか、彼女の真意には……君がいるような気がするんだよねえ」

「え？ 俺？ そんなわけないでしょ。俺は巻き込まれただけですよ。あいつは俺の事をただの同類としか思っていないんだよ」

「あはは、その方が……君にとつて”都合がいい”のかな？」

そう、意味深な一言を告げた後、ケイト先生も部室から去って言った。

翌日の放課後。

「隣人部の部員を募集してます。あと一人です。よろしく願いしまさす」

俺たちはさつそく次の日から、学校の校門前で搜索したチラシを配り部活の宣伝を始めた。

ちなみにチラシというのは、先日のあの残酷な絵が描かれたあの紙だ。

一方で他の生徒達はそのチラシを何の文句も言わずに素直に受け取ってくれている。

……受け取ってくれているというよりは、俺の顔色を伺って受け取らざるを得ない感じになつていているというか。

これ受け取って笑顔振りまかないと羽瀬川小鷹に殺されちゃうよみたいな、なんかそんな感じにも思えてきた。

「隣人部入りませんか？俺と友達になつてくださ〜い」

「と……友達ですか？あの、週にいくらくらい払えば許してもらえますか？」

「い、いやそんなんじゃないよ……」

案の定、後半にはそのようなことが言葉として俺に突き刺さる。

誤解という弓矢。これほど痛いものだとは、痛すぎる。

って、俺が痛い思いをしている最中あれだが……。

「部長〜？なんで椅子にふんぞり返ってるんだよ？」

「んあ〜」

等の部活の代表さんは、最初からこの調子だ。

部活を作っておいて課題を全くこなさそうとしない、全部俺に丸投げ。

てめえなんのためにこの部活思いついたんだよ、して作ったんだよ。友達欲しいんじゃないのか？

「部長が宣伝しなきゃ入るやつも入らないだろうが。てかお前容姿だけは完璧なんだから少しは自分の強みを生かして宣伝しろよ」

「くだらん。というか貴様たまに傷つくことを言うな。容姿だけだよ？私は容姿も頭も完璧だ」

「へえへえ〜。わかりましたよわるうございしましたよ。でもよ、こういう見せる所で見せてこそ、リーダーの器が満たされるってもんだろうが」

「とは言ってもだな……私には、お前さえ居てくれれば……」

「くだらねえこと言つてないですよ。所詮俺とお前は”友達ができるま

での利害関係”でしかないんだからよ、お互いに真の友達を作ろうや」

「!?」

俺が冷めた口調でそう言うと、夜空がほんの少しだけ、激情を露わにしたような気がした。

……しまった。少し怒っていたのかむきになりすぎたか。ひよつとしたら多少は、この女も傷ついたのかもしれない。

利害関係か……。例えば悪すぎたか、でも……。この女からしたらそうではないんだろうよ。

俺も思いたくないけどよ、お前のその態度見てたら……。嫌でも思わざるを得ないだろ。

こんな……。誰も信じたくないみたいな面見せられたらよ……。

「……。帰る」

「お、おい！ 本当に部活どうなってもいいのか？」

「……。知るか」

そう言い残して、夜空は夕日が暮れる中を帰っていく。

なんだよそれ。洒落にならねえよ。どうしてお前はそうなんだよ。

くっそ。俺はなんのためにここまで頑張ってるんだよ。なんで、俺が……。

片づけでもするか、まあ後一週間以上はある。その中であいつも、少しは考えを変えてくれるはずだ。

「あつ……」

と、チラシが一枚風に飛ばされてしまった。

一枚くらいならどうつてことない気がするが、資源は大切にとも言うし。

風に煽られる中、俺はそのチラシを追う。

すると、奥にいた誰かがチラシを拾ってくれた。

「あ、ごめん。拾ってくれてありがとう」

俺はその奥にいる人物に対して礼を言う。

その人物は、なんともまた、綺麗という言葉が似合う格好をしていた。

俺とは違う本物の、美しい金髪だ。

目は青色。外人を思わせるような人形のような美少女。

左側の髪に付けている蝶のアクセサリーが、その用紙をさらに見栄え良くしている。そんな気がした。

見た限り全員の注目を浴びるような、そんな気がした。

「あ、あの……それ……」

「……」

俺がチラシを指さすと、少女は何も言わずにそれを俺によこした。そして表情を一つ変えずに、その場から去っていった。

やっぱり怖がられたのかな、表情には出していなかったけど、俺みたいなのと関わりたくなさそうな顔してたし。

「……帰るか」

俺はそう呟いて、その日の勧誘はこれ以上行わなかった。

その後も毎日、休みの日を除いて俺たち隣人部は部員の勧誘に精を出した。

生徒会の許可を貰って掲示板にチラシを張ったり、休み時間や放課後に必死に声かけしたり。

ああ頑張った。やれるだけやったよ。”俺だけ”がね。

気がつけば、十日ほど経っていた。

その日の放課後は部室に来ていた。外は大雨が降っている。

この雨では校門での宣伝はできない。なら学校内に残っている生徒を中心に宣伝するしかない。

だが、やっぱりこのままでは、宣伝は俺だけで行うことになる。

今日ばかりは、俺も等々限界が来ていた。

「なあ部長さんよ」

「なんだ小鷹」

「なんだじゃねえよ。そろそろいい加減にしろよお前」

いつもはこの女が主導権を握っていたが、今日ばかりは好きにはやらせない。

勝手気ままに俺を巻き込んで、こんなことまでやらせやがって。

そりや俺だつてこの部活のままに、友達を作りたいと思つたよ。友達作れるかなつて願つたよ。だけど、結局全部……。

「お前、なんのためにこの部活作つたんだよ？」

「なんのつて、友達を作るためだ」

「じゃあなんでもうすぐ部活が潰れるつてのにそんな余裕ぶつてんだよ……」

俺がそう尋ねると、夜空は言葉を返さない。

それが俺には、おちよくられているようにも感じた。

だからこそ俺は、らしくない言葉を夜空に浴びせる。

「……あくあ。なんだよ一体。可愛い女の子と楽しく部活をエンジョイできるかと思つたらよ、やっぱりお前は最低だよ。少しでも信じた俺が馬鹿だつたよ」

「……………」

「言つておくけどよ、俺はお前の駒でも部下でもない。最も、お前だつて俺の事をその程度としか思つてないんだろぅがな」

「……………」

……そろそろやめろと、俺は自分自身を止めようとする。

けどどうしてだろぅな、ここで引きたくないつて、引いたら嫌だつて、そう思う俺がそれを勝る。

そしてなんでだろぅ。目の前にいる冷めた女が、少しだけ悲しそうに体を震わせてるつて思うのは。

「転校してきたぼっちの不良に目を付けてよ、同類扱いしてんじやねえよ。俺はお前とは違う、俺は……本当に信じれる友達を作るつもりだ」

「……………」

「一人でなんでもできる気になつてんじやねえ。そうやってお前は、お前を信じてきた誰も彼もを足蹴にしてきたのか？ つたく見てもれねえよ」

そう悪口を浴びせた俺を、この瞬間夜空は、とてつもない表情で睨みつけてきた。

正直怖かつた。何が怖かつた？ 夜空の表情が……じゃない。

そいつの、顔から滲み出る奥に眠る……なんかよくわからない。けどすごい重たいような、その重い何かが……怖いと感じた。

「ひよっとしてお前、俺を誰かと重ねて見てたりすんのか？俺はお前にとって、誰かの変わりでしかないのか？どうなんだよ言ってみろよ」

「……やめろ」

「やめられるわけねえだろ。ここまでお前に振りまわされて感謝の一つもないんだからな。この際言わせてもらうがよ、俺は……」お前が嫌いだよ」

「!?」

「何たくらんでるか知らないけどよ、なんで俺なんだよ。お前からしたら、”俺じやなくても”よかったんじやないのk」

パシンツ!!

その……一瞬だった。

恐らく俺は、言っではいけないことを言ってしまったのかもしれない。

夜空は俺の言葉を遮るかのように、夜空は俺の頬を渾身の力でひっぱたいた。

ものすごく痛かった。俺は言葉で返すことができなかった。

ただ敵意のある目で夜空をにらみ返した。だが夜空は引くことはない。

恐らく今の俺の顔は普通の生徒なら怯んで逃げ出すくらい怖かったはずだ。

だが夜空の湧き出る感情が、そんな恐怖をも押し返したのだろう。

「誰の……誰のために……私は……」

「え？」

「小鷹の馬鹿……お前が……そんなことを言ってしまったら……私……うう……」

この時の夜空は、泣いていた。

まさかと思った。言いすぎたと後悔した。

まさか泣くとは思わなかった。だけど……なぜ。

そして、夜空は逃げ出すように、部室から外へと走っていった。

外は大雨だ。

そして、俺は部室で一人たたずんでいる。

夜空に勝った愉悦感が、いや……どちらかというと彼女への申し訳なきだった。

大人げなかった。なきけねえ、あいつだって一人の女の子だったのに。

ひよつとしたら、心のどこかで友達を求めていたのかもしれない。そうだ、よくよく思い返せば俺……あいつのことを何も知らない。何も知らないで、あんなことやこんなこと。俺……馬鹿みたいだ。

「あーあー泣ーかした。先生く、羽瀬川君が女の子泣かせましたく」
「……先生はあなたでしようが」

後ろから聞こえてきたのは、ケイト先生の声だった。

「どうやら、先ほど泣きながら廊下を走る夜空を目撃したらしい。

「んで？ なにがあつたのさ？」

「ああ、ちよつと喧嘩しちゃって」

「それで女の子泣かせるまで罵倒り倒しちゃったわけだ。君って見た目だけじゃなくて中身も悪だったんだねえ」

「勘弁してくださいよ……」

ケイト先生の何気ない言葉攻めに、俺は無気力に答える。

と、俺の反応を見てなのか、ケイト先生はなんとなく俺の心情を理解してくれたのか、はあくどため息をついて椅子に座る。

「ま、ここ数日の君達を見せてもらったけど。そりやああそこまで使い倒されちゃ、優男の君でもぶつつんきちやったわけだね」

「もうしわけねえ。本当はここまでやるつもりはなかったんだが……」

「そこはドンマイとしか言いようがない。それとも……小鷹君は知らず知らずのうちに夜空の触れちゃいけないところに触れてしまったのかもしれないね」

「……」

そうケイト先生は冷静に分析する。

やっぱりそんなところなのか、今までどっただけ嫌味を言っても気にもしなかったあいつが、あそこまで感情を露わにした所を見る限りは。

思い返せばあいつ、ケイト先生にしてもなににしても、俺がどこかに関わった時に表情を歪めていたような。

前は俺が夜空と利害関係と皮肉った時、そして今回……あいつが一番感情を見せた瞬間。

俺が……あいつを嫌いだと言ってしまった時……か？

「あいつ……なんで俺なんだろう……」

「さあ。ひよつとして知り合いかなにか？」

「いや、俺にあんな女の知り合いはいないよ。この学校で初めて会った」

「そっかい」

そうだよな。俺と三日月夜空はこの学校で初めて会った。

なのに、あいつは俺に目をつけ、俺に執着している。

俺の事が好きなのか、そううぬぼれる俺じゃない。

やっぱり同類扱いされているだけなのか、いや……それにしても……なにか……。

「ま、だが人と人との因果なんてものは、計り知れないものと言うからね」

「因果……ね……」

「別に昔がどうか過去がどうか関係なしに、この時この瞬間で出会いがあったのなら、それは偶然……あるいは必然という物なのだろう」

そう……なのかな。

ケイト先生の言う通り、そんなもんなのかな……。

「前にも聞いたよね。今の自分が困っている誰かを助けることができるとしたら……その誰かを助けるために努力できる？　って」

「確かに……言ってみましたね」

「それは、彼女を救える人間が君しかいないかもしれないってことだ

よ。君にしか救えない人間がいる。その事実を目の前にした時、君はそうやって好き勝手御託並べて、自分じゃなくてもいいだなんて言うてしまつていいのかな？」

「俺じゃなければ……救えない……か」

「人と人が関係を持つことで生きている世界だ。その関係が時には善と悪に別れるけども、わたしたちは生きている。一人だけではない、誰かと共に……ね」

「……………」

「君みたいな不良もどきのぼっち転校生でも、因果というものがある限りは……誰かを救えると思うよ」

そうケイト先生が語り終わると、俺に安いビニール傘を手渡す。

「彼女の事だ。大雨なんて関係なく外に飛び出したかもしれない。風邪をひくと大変だから、さっさと迎えに行つてやるといい」

「……わかった」

俺はそのビニール傘をもらい、すぐさま外へと向かう。

もし、ケイト先生の言う通り、俺と夜空に因果というものがあるというなら。

もし本当に、三日月夜空を救える人間が、俺しかいないというならば……。

向き合つてみるのも、悪くないかなつて……。

学校付近を探してみたが、結局見つからなかった。

家に帰つたのだろうか、だったらいいんだけど。

あいつの電話番号とか分からないし、連絡のしようがない。

……俺にしか救えない人間か。それはひよつとしたら、あれが最後のチャンスだったのかな。

きつと明日から、あいつは俺に話しかけてなんて来ないだろう。

当たり前だろうな。あそこまで言つてしまつたんだから。

もう、関わることもないだろう。きつとあいつは、他の誰かが救つてくれるはずだ。

もしくは、いつのまにか勝手に救われるはずだ。

もう……俺には関係ない……はずだ。
関係ない、はずなのに……。

「……………」

……なんでだろうな。

もう関係ないって、思ったばかりなのに。

たまたま通った地元付近の公園で、それを発見してしまった。
降りしきる大雨の中、たそがれる三日月夜空の姿を。

雨の中だというのに、微動だにしない夜空の姿を。

「……お前、なにやってんだよ」

「……………」

俺はすぐさま彼女の近くへとかけよる。

制服はびしょ濡れ、今にも風邪をひくかもしれないくらい、身体が
冷たい。

どうしてこうなるまで、こんなところで黙っていられるかな。

やつぱり、見てられねえよ。

「……なんの用だ？」

「用？　んなの決まってるだろ」

俺は決め台詞のようにそう言っ、夜空に傘をかける。

”大事な部員仲間”を、心配してここまで来たんだよ」

ちよつとかつこつけちまっただかな、中学生くらいまでなら言っても
いい台詞だったかもしれない。

だがやつちまっただもんはしかたない、最も、こいつが許してくれる
保証はないが。

今さら仲間とは、俺も都合が良すぎだ。

さきほどのビンタ一発に加え、腹でも殴られるんじゃないかな。

「……………仲間？」

「その、悪かったよ。言いすぎたごめん。後四日でなんとかもう一人
部員増やすから、約束すつからさ。その……許してくれよ」

「……………」

俺がそう言うと、夜空はうつすらと笑って返した。

その言葉には力が無い。

どこか諦めた。だけど、どこか諦めきれていない。

何かに安心したような、そんな気持ちが籠ったような、空を切るような笑いだった。

「はは、ははは。本当にこのバカは……そうじゃ……ないのに」
「え？」

「……仕方ない……許してやる」

そう言うと、夜空は立ちあがる。

なんやかんやで、許してもらえた。

これはひよつとしたら、まだ始まりでしかないのかもしれない。

俺とこいつの——三日月夜空の青春滑稽劇の、始まりでしか。

「その、家まで送っていくよ。なんなら俺への罰だって言うなら、傘だけお前にやってもいいし」

「……ああ、ならそうしよう。お前傘なしで帰れ」

「ひでえ……」

そう夜空は非常に俺にそう告げた。

この野郎、さつきちよつとしよぼくれたとことか可愛いなと思ったのに。

「わかったよ。また明日な」

「……」

そう、俺が夜空の元から去ろうとした時。

気のせいか、夜空が俺の制服の裾を引っ張って、俺が帰るのを止めたような気がした。

気がした。じゃない……。まるで怯えた子猫のように、裾を引っ張って、怯えたように縮こまっている。

更に気のせいか、夜空が睨り泣いているような気がした。やっぱり……よくわからないやつだ。

俺にとって三日月夜空は、よくわからないやつだ。

容姿も頭も完璧。なのに、大きなものが欠けている。

俺にとって……よくわからないやつ。

そして……俺にしか救えないやつ。

この時この瞬間、俺はたくさんのことが頭をよぎった。

俺の因果。俺の過去。俺のこの先、何が起こるかの不安や様々。
大雨が降る中で、佇む俺と怯える夜空。
そんな俺と夜空の隣人部。先にあるのは……。

三人目の部員

翌週。

ケイトの出した課題の最終日。

この日までに部員を一人入れないと、隣人部の創部が撤回されてしまう。

つまり、始まったばかりの私の青春が、早くも終わってしまうということだ。

今日中にもう一人、必死になって見つけなければならない。……というのに。

「え〜。羽瀬川くんは風邪をひいてお休みです」

朝、担任の先生がそう説明して朝礼を進めた。

小鷹が風邪をひいて休んだ。風邪をひいた理由は、そんなの決まっている。

あの大雨の中傘無しで帰ったからだだろう。私の嫌味な冗談を鵜呑みにして。

対して私はなんだ。意地張って雨の中逃げ出してピンピンしている。馬鹿じゃないのか……。

何もできなかつたくせに。思い通りに行かないからって自暴自棄になつていたくせに。

それで全部あいつにあたつて。そのざまがこれか。

罰を受けるべきは私のはずだ。いや……今の現状が私にとっての罰なのか。

だとしたら、それを受け入れるべきか。受け入れて……全てを諦めるべきか……。

「あのヤンキー、風邪ひいて倒れてんのか……」

「関係ないでしょ。むしろ平和だし、もうちよつと風邪ひいててくれないかな〜」

「お前それ本人の前で言ってみろよ。お前が言ってたつてことチクつてやるからな」

「や、やめろよ今のなし!」

「冗談だよ。俺だってあんな怖い奴に近づきたくないしな」

……とか、なんとか色々聞こえてくる。

何も知らないくせに。あいつのことを何も知らないくせに。

見た目だけで、風貌だけ見て。ただあいつを悪い奴だと認識して。

そうやって気のいい奴だけで集まり群がり、虫唾が走る。

お前らのそれは友達同士って言わないんだ。そのお前らこそが

……利害関係って奴だ。

気が合わなくなったら縁を切り、都合のいい時に仲直りして。

優しくて人当たりのいい人ほど……誰かから何かを奪っていくん

だ。

情けない奴ほど、都合のいい方へと逃げていくんだ。

あの女が……私の家庭をめちゃくちゃにしたように……。

あの男が……私と母を捨てて逃げだしたように。

私は……そんなやつにはなりたくないんだ。

私は……本物の友達を作って見せるんだ……。

昼休み。

私はケイトのいる教会へと足を運んだ。

そこでまるで、私を待っていたかのようにケイトが椅子に座って

待っていた。

「来ると思ったよ……」

「ぐっ……」

正直行くかどうかは迷った。

行けばまたこの女は、そうやって私を観察して楽しむからだ。

このシスターは食えない。常に笑顔を光らせて、優しさを前面に押

し出して。

だけどやっぱり信じられない。それは私の被害妄想が激しいから

じゃない。

高山ケイトは……どこかで人間を「嫌っている」から。そんな気

がするからだ……。

「三人目の部員。今日までに集めないと廃部ってこと……理解してる

ね？」

「……ああ」

「言っておくけど相方がいないからと延長はしないよ。その相方に全部まかせっきりで疲労させて、こうなったのは全部あなたのせいだ。だから私は同情しない」

そう、いつも以上にどこか、厳しく私を責めるように言うケイト。そのどこかには静かな怒りすら感じられる。

きつとここ二週間の動きは全部見られていたのだろう。その光景にどれほど失望したことだろう。

この女は去年の秋から私を観察し、執拗以上に迫ってきた。

それは、落ちぶれた私がどれだけこの学園で這いあがれるかを見たかったからだろう。そしてこいつの思惑通りに私は行動し始めた。

だが結果はこれだ。だから今、ケイトは私に失望しているのだ。

「話はそれだけか？」

「ん？ それだけだけど？」

「ならば失礼する。一秒でも無駄にはできないんでな……」

「おや？ 諦めないんだね」

そうわざとらしく、嫌味つたらしく言ってくるケイト。

その彼女の対応に、私は感情を露わにしなかった。

当然だ。そこで私に言い返す資格がどこにある。

こんな無様な私が、感情に身を任せてはますます滑稽になるだけだ。

だからこそ私に今できるのは、こんな私のために頑張ってくれたあいつのために。

最後の最後まで、抗うことだけだ。

「諦めたら……あいつに顔向けできない」

「それは良いことだ。ご武運を……祈っているよ」

そう、静かに笑いながら願うケイト。

その願いの中に、嘘はどれだけ混じっているのだろうか。

やっぱり……この女は食えない。

昼休みはまだ少しある。

放課後では間に合わないだろう。少しでもこの時間で手ごたえを与えておくんだ。

あいつの場合は評判と人相でダメダメだったが、私ならなんとかできるはずだ。

……いや、どうだろうか。容姿は整っていても一年と数ヶ月空気同然だったぼっち女が、急に出しゃばったところで誰が食いついてくれる。

都合が良すぎるんじゃないか。そんな態度を一変させて近づいて、誰が私の味方をしてくれる。

ならばなりふり構わず人に声をかけるのは駄目だ。多分私の精神がもたない。

だから知っている奴に的を絞ろう。私が一年と数ヶ月、少しでも長く関わった人間と言えは……。

……。

——いねえじゃん!!

誰だよ私と仲良くしてくれた奴! 私がいつ一緒に勉強したり弁当食べたりカラオケ行ったり永谷に買い物行ったりしたよ!

記憶にございまっせんったらございませんっ! 結論的に顔見知り一人さえいないよ! ケイトと小鷹除いたらね!!

一時的に手を貸してくれと頼むこともできない。いったいどうすれば、どうすれば効率よく三人目見つけられるんだ。

誰か、口車に乗せられそうな弱そうな奴いないか。そうだ私は口が達者なんだ。だから上手く騙して丸めこんでしまえば……。

「……楠……幸村」

突如私の口から出た名前がそれだった。

印象が大きくて弱そうな奴。あのオカマならうまく丸めこめるかもしれない。

いや、きつと頼まれたら断れなさそうな奴だ。元々友達いなさそうな奴だし、あいつなら短期決戦で丸めこめる。

そうとなったら早速幸村のいる教室へ乗り込もう。いや〜人つて

追い詰められた時こそ考えが浮かぶ物だね。

「二年一組の五時間目は科学か。だったら科学室にいるはず……」

私はそこらにいた適当な先生から一年の情報を聞きだし、科学室へと向かった。

科学室か、そういえば隣にはあの理科室がいたな。

理科室。あの哀れな科学者気取った女が住んでる教室だったな。確か名前は志熊理科……。

あの女がいる場所を通り過ぎるだけでも寒気がするくらいだが、今は我慢しないとな。

隣人部の首さえ繋がれば、もうあんなクソメガネと関わることもなくなる。一生な。

そんなことを思いながら、特別教室棟の廊下を進んで行き、科学室の近くへと差し掛かったその時。

どがしやーん！

「なんだ!?!」

突如、小さな爆発音が聞こえた。

何かが爆発したような音。そして漂ってくる危ない匂い。

なんだ、なにが起きた。私はあたりを見渡す。

そしてその原因となる教室を見つけた。それが……理科室。

あの女がいる理科室。爆発はそこからした。

「なにが起こったのだ？ いったい常日頃なにしてるんだあのクソメガネは……」

つい気になってしまったが、私には関係ないことだ。

そうだ、関係ないことだ。私は幸村に用があつて科学室へと向かっているのだ。

理科室には用はない。だから私には……関係ない。

関係……。

「ははは。自分が起こした不始末くらい自分でかたつけられるだろう。なにせあいつは社会人らしいしな……」

そうやって自分に言い聞かす私。

ただどなぜだろう。言っている事と考えている事が一致しない。

言葉ではそう言っているのに、考えている事は……『このまま誰も来なかったらどうなるのか』、『発見が遅れたらどうなるのか』ってことだ。

なんでそう考える？ どうして？ 関係ないのに、私にはあいつを助ける義理はないのに。

なのになぜ私はいつの心配をしているんだ。あいつは私にあれだけのことを言った奴だ。助けるどころか話すことすらないのに。

……いや違う。間違っているぞ私。

助ける義理が無い？ 話すことすらない相手？

そんなの関係ないだろう。今この現状で私が事件の第一発見者で、助けられるのが私しかない、そうじゃないのか。

そこで見て見ぬふりをしたら、私がクズのように思っていたそこらのやつと一緒にいる。そうじゃないのか。

だったら、答えは一つだ。そうだ、一つしかない……。

「くそっ!!」

私は走った。科学室ではなく理科室にだ。

理科室の扉を思いつきり空けると、そこからはやばい匂いが漂ってきた。

私はすぐさま口と鼻を押さえ、理科室の中に入る。

(志熊……理科……)

そして理科室に入っすぐ、私は倒れている志熊理科を見つけた。

このクソメガネが！ あれだけ啖呵切っておいてどうして人様に迷惑かけてるんだよ!!

私はそういった理不尽な怒りを抑えながら、すぐに理科室の窓を全開にした。

これで危ない匂いが外へ逃げていく。後は、この女を外へ運ばないと……。

だがあいにく私は力自慢の男子生徒ではない。これでもかよわい女の子なんだ。ははは冗談はよせ。

「……もう少し我慢しろ！」

私は理科室から飛び出し、特別教室棟に誰かいないか探しまわっ

た。

「なんか匂わね？」

「てかさつき大きな音してたじゃん」

「なんかあったんじやないの？」

と、階段の方からなんとも呑気な会話が聞こえてきた。

この腐れ連中が、なんかあったんじやないの？じやなくてなんかあったんだよ!!

他人事のように思っている暇があったら少しは私の駒として動け!!

「おいそこの一年!!」

私は声のする方へ向かい、そこにいた一年の男子生徒数名に声をかけた。

焦りで誤魔化しているが、内心赤の他人に声をかけるなんて恥ずかしいことこの上ない。

ましてや今私は人助けをしているのだ。どこぞのヒーロー気取りだ。かっこつけすぎて恥ずかしさ百倍増しだぞ!

こんな時にあの金髪は休みだし。あいつがいるならあいつに頼めば解決するのに。

「は、はい!？」

「俺らですか!？」

「そうだ貴様らだ! あそこで人が倒れている。保健室まで運びたい!!」

そう怒鳴り散らすように一年に向かって言うと、男子どもは乗り気で十人ほど私についてきた。

そんなにいるらないんだが、まあこの際文句は言っていられない。

そして理科室へとそいつらを誘導し、最低限の注意をしてそいつらに理科を運ばせた。

「こんな子、学校にいたっけ？」

「この際どうだっていいでしょ、困っているならお互い様ってね」

男子どもはそんなことを言いながら一致団結していた。

その会話の中に、どれだけの偽善が紛れ込んでいるのだろうか。

人を助けることをかっこいいと思って、感謝されることを望んでいる。

そう考えて蔑みたいが、助けてもらったのだ。今日だけは……私もポジティブにならせてもらう。

「……あつ」

保健室へ向かう途中、偶然幸村とすれ違った。

部活に誘わなくては、だが今、理科を保健室に運ぶ方が重要だ。

くそ、お前のせいだぞ……クソメガネ。

「どうやら気絶しているだけみたい、でも発見が遅れていたら危なかったわね」

「そうですか……」

保健室につくなり、保険の教師が理科を容体を見る。

大事にはいたっておらず、休めば治るとのこと。

「発見したのは三日月さん？」

「あ、ああ……」

そう保険の教師は、私に向かってほほ笑んだ。

やめてくれ、近くには無関係な一年もいるのに。

「ありがとう。意外と優しいのね」

「むっ……」

そう私を評価する教師。

隣にいた一年どもも、知らぬ間に私の事を尊敬の目で見ている。

こんな視線、私は欲しくない。

「……授業が始まるので、失礼します」

「そう、ありがとう」

去り際、教師がそこに寝てる理科の変わりに感謝を述べた。

感謝か、まったく……あなたのような純粋な人の感謝ほど……心に障る。

それを温かく感じればいいのか、当たり前のように強がればいいのか。

わからないから……困る。

「……一年、迷惑をかけた。授業に遅れるから……もう行った方がいい

い……ぞ」

「は、はいー」

最後の最後に緊張がほぐれたか。

またいつもの私に戻ってしまった。人に話しかける際について気持ち悪くなってしまう。

だがどうにか自我は保てたな、うん……今日の私は百点満点だ。

しかし……部員の募集は……放課後におあずけとなってしまうた。

そして放課後。

ほとんどの生徒が下校する中、私は三人目を見つけなければならぬ。

私は隣人部の部室にポスターや入部届けを取りに行った。

「……小鷹。私にできるだろうか、もう一人の部員を見つけることが」
つい、そこにいないあいつに対して弱音を吐いてしまった。

この二週間、あいつ頼りだったからな。あいつ、私と違って人と関わるのは得意そうだから。

私は口が達者だが口下手なんだ。虚構ばかりが口から出て、本心が出てこないんだ。

本当は三人目なんて欲しくない。あいつと二人だけがいい。

そう思っているから、その口から出てくる言葉がどれも軽くて、空を切るんだ。

そんな私の思いの無い言葉で、本当に友達を必要としてくれる人なんて……。

「……考えていても……仕方ないから」

そう覚悟を決め、部室から出ようとしたその時。

コンッコンッ！

突如、部室のドアが鳴った。

誰だ？ まさかケイト……私を笑いに来たのか。

だが時間は無駄にできない。さっさとあしらって部員を探しに行かないと。

がちやり……。

そう、私は扉を開けた。

そこにいたのは……ケイトではなかった。

そこには、予想できなさそうで、どこか来るような気がしていたような奴がいた。

昼休み、私が助けた憎いやつ——志熊理科だった。

「ちやーっす」

そう棒読み風に私に軽く挨拶してきた理科。

いったい何の用だ。ケイトの方がまだ良かったかもしれない。

そう悪いものを見るような私ではあるが……何を安堵している。

こいつが無事だったことにどこか安心をおぼえる自分がいる。今日の私は何かがおかしい。

「……なんだ？」

「おいおいお客様にたいしてなんだはないだろうが。礼儀がなくなってないんじゃないのかクソ先輩さまよ〜」

いきなり強気に、そして偉そうにズカズカと部室の中に入ってくる理科。

そしてどしんとソファアに座って、ごほんごほんとか咳をし……少しの間の後。

「ごほんっ！ えーあーマイクのテスト中、マイクのテスト中〜」

「……」

「え〜。ああいきなり無礼を失礼しました。三日月夜空先輩☆」

こういう風に反回転するように、急に礼儀正しい後輩キャラになる理科。

なんだ？ なつっこい可愛げ満載な後輩でも気取っているつもりか？ 逆にムカつくからやめてくれないかな……。

「……いったいなんのようだ？」

「何の用と言われますと。そうですねえ、あなたはなんの用なら納得行くんですかねえ〜」

「……」

「この場合は率直に申しませう。お昼の件は本当に、ほんつとうにありがとうございました！」

そう理科は深々と、というか土下座で私に感謝をしてきた。

やりすぎてどこか嫌味に感じる。考えすぎか、いやこいつはわざとやってるだろうな。

「……そうか、なら帰れ。私は忙しいんだ」

「あらそうでしたかそれは失礼。ですがどうしても一言お礼を言いたくてすねえ〜」

「貴様からのお礼なんていらん。私は感謝されたくて貴様を助けたんじゃない」

「まったく。そういう所が気に入らねえんだよこの根暗女が……」

私の反応に対して、またも理科は「素の状態」に戻る。

私としては、変に礼儀正しいキャラ作りよりこつちの方が聞いててせいせいするのだが。

そんな理科はまたもやキャラを作り替え、私に質問してきた。

「ちなみに一応お聞きしますが。忙しいとは何用で？」

「私が立ちあげた部活の部員募集だ。今日中に三人目を加えないと廃部になるのだ。貴様のように一人で日夜研究している奴には、そんなものいらねえんだらうけどな」

そう私は理科に対して強がる。

貴様のように一人で……よく言うよ。つい最近まで私もこいつの同類だったのに。

大切な人がこの街に帰ってきたことで前進したのだろうか、ああそうだ。それは大事な一歩前進なんだよ。

私とお前は今ここで異なる運命なんだよ。志熊理科。

「そうですかあ〜。それはお邪魔してしまい申し訳ありませんでした。そんな中悪いんですが、もう一つ用件があったんですよ。ああ別にあなたに意地悪したくてすぐさま用件作っただけじゃありませんからね〜」

理科は説明口調で長々と言った。

ああだろうとこうだろうと関係ない。頼むから私の前から消えてくれ。

「……なんだ？」

「その、助けてもらったお礼といっちはなんですが……あなたの願いを一つだけ、”なんでも”かなえてあげましょう」

……は？

こいつ、何言ってるんだ？

急に頭おかしくなったのか？

「何を馬鹿な。さつきも言っただろう、私は感謝してもらいたくて……」

「そうですねえ。けどあなた悩んでますよね。たった今非常に悩んでますよね」

そう、私を試すように囁いてくる理科。

貴様は、私をバカにしているのか。

これじゃまるで……。

「……なんでもかなえてやるか。だったらそうだな、一千万円ほしいな」

そう私は馬鹿にしたように理科に向けていった。

貴様の思い通りになんて行くか。適当にあしらってさつさと部員集めを。

「一千万円ですかあ。あつたかなあ」

「……は？」

そう理科は、己のカバンの中に手をつ突っ込んで、何かを探し始めた。「あつたあつた。はいこれ、私の預金の一部ですけど、ざっと一千万は入ってんじゃないですかねえ」

そう言っただけ理科は通帳とキャッシュカードをテーブルの上にぽいと投げた。

まさか、いやそんなにくらなんでも冗談は……。

私はすぐさま通帳を開いて確認する。いや、本当は他人の通帳を勝手に見ることはいけないことなんだが……。

開いてみると、そこにはまさかの桁数が。こいつ……マジか？

「ええと確か暗証番号は……」

「ちよ、ちよと待て!!」

理科はマジだ。こいつ私の願いをマジで叶えるつもりだ。

別にそんな、本気で言ったわけじゃない。一千万円なんて欲しくない。

「というかこいつ、どうしてそんな金持ってるんだ？ 家が金持ちなのか。」

「この女もまた。生まれた時からリア充なのか。くそつ……。」

「か、返す。さっきのは本気で言ったわけじゃない……。」

「そうなんですかあ。ってことは私を甘く見たってことですよね？」

「……すまない」

何を謝ってるんだよ私は、私は何も悪くないだろ！

「それじゃあ何がほしいんですか？ あなたの授業を全部免除扱いにでもしてあげますか？ 家で寝てても卒業できますよ？」

「……貴様、いったい何者だ？」

「ただそこにいるだけの天才……ですが？」

天才だと？ 本気か……でもさっきの金の話といい、こいつの言葉はきつとほとんどが本物だ。

聖クロニカ学園の理科室に住まう天才少女。そんな話聞いたことないが。

「そうですねえ。だったら……学園の生徒全員をあなたの思い通りに動くように洗脳してあげてもいいですよ？」

「……やめろ。そろそろ」

理科は本気目で、本気の笑みで恐ろしいことを言い出した。

「いい加減にしろ。そんなことして手に入れた人間関係に……何の意味がある。」

「全員とはいかなくても、あなたの”お気に入り”をあなたの思い通りに動くようにでも……。」

「やめろ!!」

これ以上は言わせてはならないと、私は声を張って理科の言葉をせき止めた。

その言葉の裏には、あいつがいる。遠回しにこいつ、小鷹の事を触れた。

いくらあいつが鈍感で”気付いていない”からって、無理やりあいつの心を操る……そんなことしたら。

あいつと私の”十年前”が……汚れるだけだ。

「……じゃあいつたいたいなにしてほしいんですか？」

「決まってる。二度と私の前に現れるなこのクソメガネ!!」

「別にそれならそれでもいいんですけど、それマジで言ってます？」

「ああ本気だ！ お前の顔なんて見たくない！」

「……へえ」

そう理科は、あざ笑うかのような笑みを浮かべて私を見下した。

「わかりました。余計なお世話でしたねえ先輩」

「……二度と現れるな」

「ま、外も暗くなってきた所で、”隣人部の存続”がんばってくださいねえ」

「!？」

そう最後に吐き捨てるように、私の頭の中を埋め尽くす問題に干渉してきた理科。

その一瞬だけ、私は弱みを見せてしまった。

瞬間的に理科の方を見た。気付いてくれと、助けてくれと。

そのほんのわずかな私の隙を、理科は見逃さなかった。

そして無言で、迫るように私に近づいて来て……。

「……うだうだ悩んでんじゃねえよ。どうすんだよてめえの大事な部活はよお〜？」

「ぐっ……！」

「素直に僕に言えばいいだろお〜？ 「助けたお礼に隣人部に入れ」ってよ」

「……誰が、そんな無様なこと」

そうだ。私は考えたさ。

そして見つけたさ。隣人部を存続するたった一つの方法。

理科を助けた見返りに、理科を部活に入れてしまえばいいんだ。

だがそんなの、意味ないじゃないか。これではただの利害の一致でしかない。

そんな方法で部員を増やして意味あるのか？　って……よく考えろ。

幸村の時はこんなこと思ったか？　どうなんだよ三日月夜空。

お前だって幸村騙して隣人部を存続させようとしていたじゃないか、その時点でもう矜持はズタズタなんじゃないのか？

だったら今、こいつに見返り求めたところで……同じじゃないか。

「まあ別にあなたが自分の意地で僕を突っぱねても僕には関係ないけどここで意地を捨てないで部員集まりませんでした隣人部は終わりですよ、やっぱ」何も変わらない”じゃないかよ”

「何も……変わらない」

「あんた言ったよな？　「失ったのなら取り戻せばいい。壊れたのなら直せばいい。私は取り戻す」って。「このくだらない青春に反逆する」って。あれは嘘か？　強がりか？」

「貴様……志熊理科!!」

「選べよ三日月夜空。これはあんなだけの問題じゃない、”あんなの男”もだろ？」

そこでこの女は、小鷹を切りだしてきた。

もうこれでは、私に下がる手立てがない。

「学校に出てきてせっかく頑張った苦勞が水の泡でしたじゃ、くだらないバッドエンド以上の駄作だ。それともあんなは、大した努力もしていないのに駄目だったよおっって泣きつくのか？」

「……………」

「……だんまりですか」

そう理科は大きいため息をついた。

そして鞆から、一枚の紙切れを提示した。

それは、隣人部の入部届けだった。

「……同情か？」

「違いますよ。これは僕の意味です。僕が僕のままに決めたことです。これなら見返りとかあなたのくだらないプライドとか関係ないでしょ？」

そう、どこか冷めたように言いながら、理科は入部届けにハンコを

押した。

そしてそれを、私に無理やり握らせる。

「おめでとうございます先輩。あなたの青春はこれからだ！ なくんでね、あひゃひゃひゃひゃ！ まっじで腹痛いんですけど〜!!」

「……………」

理科は馬鹿にするように私に言う。

それに対し私はどうすればいい？ 喜ばばいいのか、悲しめばいいのか。

これは私の努力の結果なのか？ 私の成果と言えるのか？

だがどうこの結果に文句を言おうと、結果的に私は…………小鷹の意思をかなえたことになる。

『後四日でなんとかもう一人部員増やすから、約束すつからさ』

急に私は、雨の中で言われたその言葉を思い出した。

…………そうだな、小鷹。

私の気持ちだけじゃない、お前も私の…………隣人部の仲間だもんな。

そして…………目の前にこの女も、今…………この瞬間から。

「…………礼は言わんぞ」

「言われる筋合いもありません、気持ち悪い」

とことん容赦の無い理科。一言一言が苦く引つかかる。

だけど、どうしてなんだろう。

大嫌いなのに、本気で苦手なのに…………。なぜかこいつから強いシンパシーを感じるんだ。

それはあの時、助けなきやいけないと思ったことと何か関係があるんじゃないのか。

どうしてなんだ。どうして私はこの女を…………。

嫌いに…………なりきれないんだ。

「…………さっそく明日から活動を始める。入部したからには…………サボるなよ」

「わかっていますよ。一応言っておきますけど、情けとか同情とか哀れみとか気まぐれとか、そんなので入部したわけじゃないですから」

「…………」

「……初めてだったから。僕が……僕のままてぶつかれた人間は」
最後に小さく呟き、理科は部室から出ていった。

志熊理科か、どうにも……この部活には普通の生徒は寄ってこないらしいな。

小鷹、お前は言ったよな。私がお前を同類扱いして、近づいたって。それだけは違う。それだけに嘘偽りはない。

私は……私の失ったものを、取り戻したいだけだ。

だから、お前も理科も……けして私の同類なんかじゃない。

立場や形は同じかもしれないが、それぞれが……それぞれの思いを持っているのだから。

こんな私でも、本当の友情っていうのを手に入れたいから。だから

……私は……。

——こうして……隣人部は正式に部活として認められた。

その鳩は人を知ろうとしない

放課後。

下校時刻になる前に、私は別校舎の職員室へと向かった。

この学校の職員室は、学校の職員とシスターとで分けられている。

私はそのシスターのいる第二職員室へと向かった。手には入部届けを握りしめて。

ガラガラガラ!

「ぐおん!」

つい勢いよく扉を開けすぎたか。

扉を開けると大きな音が鳴って、職員室内にいるシスターが全員私の方を見る。恥ずかしいからやめてください。

その内、奥側二列目の机に、高山ケイトがいる。

ケイトは私の姿を見るや否や、食べていたカップ麺（というかシスターがそんなもの食べていいのか?）を噴き出し驚いた表情をした。

「……えーと。高山ケイト先生、今大丈夫でしょうか?」

私は丁寧にそう質問をして、ケイトの方へ足を運んだ。

「おうおうどうしたの三日月さん?」

ケイトはわざとらしく丁寧に対応する。

別に人目に付くから教師ぶらなくてもいいだろう。てかいつもそうやって猫かぶってないだろう、いつもだらしないの丸出しだろう。

私は猫は好きだが猫かぶるやつは嫌いだ。なのでそういうのはなるべく控えてもらいたいのだが。

「隣人部の部員集めの件だが……」

「……そうか、残念だったね。君達はよくがんばったよ」

ケイトはとても残念そうな顔をして、私をねぎらう。

いやまだ何も言っていないんだが。そんな最初から駄目と決めつけるな。

まあ、そんな貴様に度肝を抜かせてやるがな。

「一人入部希望者がいた。これで廃部は撤回だ」

「そうかいそうかい……ええ!」

私がそう報告すると、ケイトは呆氣にとられたように本気で驚いていた。

そんな真面目に驚かれるとめっちゃくちや心外だな。てかこいつ最初から期待一つしてなかったな……。

「そっか……。なんとというか、見直したよ」

そう、聞きなおすことすらせず、ケイトは素直に私にそう声をかけた。

見直した……。か。そんなことを言われても、どう喜べばいいのやら。

それはつまり、貴様から見れば私はとてつもなく落ちこぼれだったということだ。

だから見直したんだ。やればできると……。そう褒めたのだ。

だが、そんな言葉はけして人をやる気にさせるものなんかじゃないんだよ。

そんな言葉は、出来た勝ち組の人間しかかけられない言葉なんだからな。

「見直されても困る。私にはやらなければならないことがあるからな」

「なるほど。それでえ」と

私はケイトに入部届けを見せる。

それは、先ほど部室に来た志熊理科が持ってきたものだ。

建前ではない。あいつが自分自身で署名し、ハンコを押して提出した物だ。偽装でもなんでもない。

ケイトがそこに書いてあった志熊理科の名を目にして、急に表情を歪ませた。

「……あの女が、隣人部にね。何をどうしたらこんなことになるのか……。はは、ははははははは」

理科の出した入部届けを見て、ケイトは静かに笑った。

その時見せたこいつの笑い顔は、いつもの楽観的なものではない。それはどこか狂氣的で怖かった。

自分の思っていたことと事実が外れたことに、笑うしかないという

かのように。

「……ケイト?」

「クク……。いやいやすまない。しかしあの”天才”を引きこむとは、君の人徳というのは計り知れないものがあるかもしれないね」

ケイトはそう評価をした。

大体言いたい事はわかるが、それでも私が志熊理科を引きこんだことは、かなりの成果に値するようだ。

確かに学校の一施設を占拠していて、学園を操るなんていう奴だ。

……一応、聞いておくか。

「なあ、志熊理科って何者なのだ?」

「何者とは?」

「学校の施設を使い放題やつてる天才、そんなやつが普通の生徒なわけがない。学校関係者の娘かなんかなのか?」

「うくん、そうではないね。あの子はこの学園の理事長が自ら頭を下げて招いた来客……と言ったところかな」

そう説明した後、ケイトは一枚の資料を机に出した。

その資料には、志熊理科の写真やあいつに関する文章が記載されている。

私はそれを手に取り、端から端まで目を配る。

『『有名な王手企業や世界的研究者が今最も注目する天才女子学生、志熊理科。将来的には博士号も確実。この先の未来の技術発展は彼女の手に乗ねられてると言っても過言ではない』……って』

「彼女はその手の世界ではかなりの有名人らしくてね。中学を卒業した段階で世界中の企業や学校から数え切れないほどのオファーが来ているほどだったらしいんだが、それらを全て蹴って、彼女はここへ来たらしいよ」

「世界中って……。ここはミッシェンスクールだ。あいつに見合った学校なんていくらでもあったはずなのに……」

「そこはうちの学校の理事長である柏崎氏の手腕と言ったところだ。確かに他の学校のほとんども学費免除に支援金ありなど、そのための条件は腐るほど提示されたそうさ。けど……」

「けど……?」

「うちの学校の理事長は、理科一人のために学校を改築して専用の教室を作るまでやってのけたんだ。理科はその思いきったやり方が気に入り、この学校を選んだそうだよ」

それが、ケイトの語った志熊理科の現状だった。

生徒一人のために学校を改築し、最高の環境を整えるだど……。

馬鹿じゃないのか? この学校のパンフレットには、全生徒がそれぞれの良さを伸ばせるために均等な教育を施すと書いてあったはずだ。

完全に規定違反だ。出来の良い生徒を優遇して、どうでもいい生徒は放置。それじゃ世間の汚い大人たちのやり方といっしょだ。

特別扱いか。あいつはやっぱりリア充だった。何が「僕の意志」だ。完全にあいつは私たちを見下している。

「ははは。確かにそんな天才の卒業校ともなれば、この学校の知名度はウナギ昇りだろうな」

つい私は、そう悪態をついた。

ここは職員室だというのに、無自覚は怖いものだ。

「まああの子本人は今の現状をどう思っているかはわからないけどね。相互の利益のために学校に通っているだけっていうのは……よくよく考えてみると結構キツイものがあるかもしれないよ」

「何を。特別扱いされて一人専用の学習環境を整えてもらえるなんて、私にとっては夢のような話だ」

「まったく。君はブレないね」

私のその思いきった発言に、ケイトは呆れた顔をした。

その後、ケイトは他の人が抱く志熊理科に対する評価とは、違う意見をした。

「でも、私は彼女を学園が誇る天才だなんて、祭り上げるつもりはないよ」

「え?」

「私からしたら彼女は天才というより……」不良「かな?」

そう、ケイトは断言して見せた。

学園が特別扱いしている宝を、不良と言って見せたのだ。

「不良？」

「ああ、世間的に評価されているだけの人間なんてごまんといるものさ。その中で彼女という人間を見た時、私には彼女が不良に見えたのさ。大人になったつもりでいるただのクソガキ……それが志熊理科だと思うよ」

珍しく、ケイトが他人に厳しい評価を下したと思った。

この落ちぶれた私に対しても、あの小鷹に対しても友好的に接してきたやつだ。

神の意のままにと言うばかりのシスター。全ての人間に救いがある本気で思っているのだろう。

だが、やっぱりこの女は……どこかで諦めている。

下手すればこいつも……私と同じなのか？

「ふっ……。それは良いことを聞いた。これで私も……奴に見下されずにすみそうだ」

だがどこか、私はケイトの言うことに肯定していた。

天才と凡人は紙一重だ。そこに境界線を作ってしまうから、差別なんてことが生まれてしまうんだ。

人は生まれながらにして平等だ。だから……私は救われて当然なんだよ。

「それじゃ、また明日ね」

私の帰り際、ケイトはそう言って職務に戻る。と言っても夕食を食べるだけなのだが。

目的を果たした以上、いつまでも学校に留まっているわけにもいかないだろう。

さて、今日はどこへ寄り道しようか。できるだけ家には帰りたくない。

家は嫌だ。あの滑稽で汚らしい女が住んでいる。

あいつを見ていると、こっちまで哀れになる。私がとても可哀そうな人間だと、そう思ってしまう。

私はけして可哀そうなんかじゃない、私は負け組なんかじゃないん

だ。

だから帰りたくない。あいつのいる所には帰りたくない。

「あ、三日月」

私が第二職員室を出た所で、私のクラスの担任に声をかけられた。いったいなんだ？ 私はぼっちだが学園に迷惑をかけたつもりはないぞ。

「はい、どうしました先生？」

私は無愛想ながら、礼儀を尽くして対応する。

「羽瀬川のやつ、今日風邪で欠席しただろ？ 今日の授業で配られたプリントをあいつの所へ届けてやってくれないか？」

担任はそう言つて、プリント数枚と小鷹の自宅の地図を私に手渡した。

「……私がですか？」

「ああ、お前達仲が良さそうだからな。それとも、お前も他の生徒みたいにあいつのことが怖いのか？」

そう、担任は私に質問をしてきた。

どうやら、私とあいつの関係以外に、私に声をかけた理由が大体わかった。

多分他の生徒にも声をかけたんだろう。だが奴らは小鷹の事を怖がって距離を置いている。

だから容赦なく断つたんだろう。それで余り物の私に周ってきたわけだ。

「そういうわけではありません。私でよければ羽瀬川君の所へ行きませよ」

「それはよかった。……余計なことだが、そういった君の真面目で優しい部分をもうちよつと表に出せれば、君もさびしい学校生活を送らずに済むのだろうか」

突然、担任は私の立場を見てか、そう心配する声をかけた。

正直言つと余計な御世話だ。それに……私が優しいだと。ふざけるな。

私は優しくなんかない。人にやさしくできる人間じゃない。そんな資格なんてないんだ。

落ちぶれた奴の優しさなんて同情にしかならない。その優しさが同類扱いを誘発し、結局は人間関係のもつれに発展する。

落ちぶれた奴らが集まった時、皆が考えるのは「自分が最初にこの状況から脱却する」ことだ。

そこから上のランクへと上がった時初めて……その優しさが、卑劣で残酷な感情に変わる。

「優しい……ですか？」

「ああ。みんな転校してきた羽瀬川の事を悪く思う中、君はあいつを悪く思わなかった。あの髪の毛は地毛らしいな、私はそれを知っているからあいつは見た目よりも悪い奴じゃないとなんとなくわかる」

「……」

「だがどうにも他の生徒達は、羽瀬川の事情をよく知らずに悪い奴だと決めつけて距離を置いている。人を知るといっことは、難しいことだと私は思うよ」

担任はそう、深刻そうな顔つきで私にそう語った。

この教師、あまり会話をしたことはなかったが、幾分全うなことを言うじゃないか。

私自身も嬉しくなってくる。あいつのことを誰よりも知っているはずの私からすれば、その評価は自分の事のように嬉しい。

その表情に教師としての身分が出ていないことを、私は願いたくなくなるくらいだった。

「……確かに、難しいかもしれませんが。特に私のような、除け者には尚更」

「そんなことはない。なんでも最近頑張っているそうじゃないか、いいことだ」

「ありがとうございます」

「それに聞いたぞ。昼休み特別教室棟で倒れている生徒を介抱したそうじゃないか。携わった一年生が君のことを尊敬していたぞ」

昼休み、志熊理科の事か。

確かにあいつを私は助けた。だが、それは本心で助けたわけじゃない。

人を知るのは難しい。知りすぎたところに善悪が見つかるから。私のその行動が、完全な善であったと心底言えるだろうか。

私にはその自信が無い。だから私は尊敬されるに値しないだろう。

「そうですか。それは光栄なことです」

そう、私は思ってもいないことを口に出す。

「ま、これからも頑張りなさい。今回は……よくやったな」

そう、担任は私を褒めて、職員室へと戻る。

なぜだろう、このむず痒さは。

私は嬉しいのか。褒められたことに対して、快樂を感じているのか。

「よくやった……か。私はまだ、スタート地点にすら立っていない」

そう自分を戒め、校舎から出た。

そしてバスに乗り、自分の住む自宅の近所まで移動する。

幸い私の家と小鷹の住む自宅は近い。自宅の場所までは知らなかったが、近所なのは知っていた。

「小鷹の自宅か。まさかこんな形で行くことになろうとは……」

いずれは赴くつもりだった。

失ったあいつとの関係を取り戻してからな。

そう、親友としてあいつの家には行くつもりだったんだ。

今回のこれは、私にとっては色々都合のいい厄介事となった。

これで寄り道もできるし、最高の時間つぶしになりそうだ。

「……初めて来たが、あいつ良い家に住んでるな」

バス停から数分歩いて、小鷹の自宅にたどり着いた。

そこにあつたのは立派な一軒家。私のようなアパート住まいには一軒家は夢のような物だ。

私の家は金持ちではない。どちらかというところ貧困だ。正直お小遣いにも余裕がない。

良い家に住んでいるやつはリア充。そう決めつけていたのだが、小

鷹はリア充じゃない。

だから良い家に住んでいる奴でも、リア充じゃないやつがいるってことだ。また一つ大きな発見をした。

ピンポーン♪

私はチャイムを押した。

不思議と緊張という物はなかった。きっと、あいつと私はまだ友達ではないからだ。

今の私は担任の厄介事を押し付けられた一生徒にすぎない。だから、余計な感情に捕らわれなかったのだろう。

数分後、チャイムからなんとも可愛らしい声が聞こえてきた。

「も……もしゅもしゅ？」

もしゅもしゅ？ なんかもものすごく籠った声が聞こえてきた。

胸の内心地よく響く可愛らしい声、完全に小鷹の声ではない。とうか小鷹がこんな声出したら私は引きまくる。

この声は女の声だ。だが母親の声にしては幼すぎる。

そういえば……あいつ妹がいるって言ってたな。ってことはこの声はその妹の声か。

妹に会うのは初めてだな。ああ、そうかここで初めての人に会うという事象が発生するのか。

まあ幸い年下だろうから、いつもの対人恐怖症は表に出ることはないだろう。

声を聞く限りリア充中学生でもなさそうだ。それだったら少しは対応が変わっていたのだろうけどな。

「あの、羽瀬川君のクラスメートですけど。プリントを届けに……」

私はいつものような重くのしかかったような声ではなく、透き通るような綺麗な声を出した。

いつもは意識して相手を威圧しているが、小鷹の家族は威圧しなくていい。

そして少し間をおいて、家のドアが開いた。

結構開くまで時間かかったな。何をモタモタしていたのやら……。

「あ、おじやましま……」

そう、私が家へと入ろうとした瞬間だった。

私の少し下の視線に映った、妹らしき女の子に目が止まった。

羽瀬川小鷹の妹。どんな眼つきの悪い妹が出てくるのかと思っただけ……。

あいつとは似て非なる、それが出てきた。

「……………」

それを見て、私はつい押し黙った。

小鷹とは異なり、綺麗でつややかな金髪。

目つきは悪いどころか引きこまれそうな青色。後なぜか片方が赤色。

虹彩異色症という言葉聞いたことがあるが、そんな青色が赤色に、逆に赤色が青色に変わるだろうか。

その格好、黒のゴスロリ服が相まって。まるでなんかのキャラクターのようにも感じ取れる。

総合すると、絶対こいつ羽瀬川小鷹の妹なんかじゃない。

もしあいつとこの女の子が一緒にいた際には、警察が飛んでくるってくらいに……。

まさかとは思いたくないが、幼女を誘拐して面倒見させてるとかじゃないよな……？

「あの、ここ羽瀬川君の家で合ってますよね？」

ついそう質問してしまった。

こんな可愛い子のいる家にあんな凶悪面がいるわけがないと、瞬間的に思ってしまったのだろう。

「……………」

「う……………合ってます……………けど？」

ようやくしゃべった可愛い女の子。

合ってるということは、間違いなく小鷹の家なのだろう。

いや待てよ、名字が同じだけというのも考えられる。羽瀬川さんじゃなくて長谷川さんだよきつと。

「え〜と、小鷹くんいますか？」

「……………風邪で寝込んでる」

どうやらこの長谷川さんのところにも小鷹というやつがいるらしいな。

いったいどんなイケメンが出てくるのやら……。

「いいよ小嶋、俺が対応するからごほっごほ!!」

と、奥からこの女の事はまるで異なった濁った金髪の眼つきの悪い男が出てきた。

イケメンなんていなかった。そこにいたのはとてつもない凶悪犯だった。

「……おい、やたら失礼なこと考えてねえかてめえ?」

「あ、バレた?」

「口にしてなくともわかる。ここは長谷川さん家じゃなくて正真正銘の羽瀬川さん家だ」

そう、風邪の影響でただでさえ面構えが悪くなっているのに、迷惑そうな顔をする物だからもうそれは見るに堪えないものだった。

さて、小鷹いじりはこのくらいにしておいて、用を済ませないといけないな。

小鷹はとりあえず上がれと言って、すぐさま寝ている部屋に戻る。

「ごほっごほ! しかし悪いな、わざわざプリント持ってきてくれてよ」

「礼はいらん。同じ部員が風邪で寝込んでいるのだ。心配するのは当たり前だ」

本当は担任に言われてきただけなんだけどね。

「とりあえず、食べられそうなもの買ってきたぞ」

「お、悪いな……」

私は買い物袋を小鷹の枕の横に置く。

その中には、プリンが三つほど入っている。

それを見ると、小鷹は馬鹿にしているなといった具合に、表情を歪ませた。

「……ま、喉通しはいいし、買ってきてくれたものに文句は言えない。

「このヘアースタイルが腐ったプリンみてエーだとオ?」と言いたいところだが我慢する」

「ああ、我慢するがいい」

「……お前に風邪をうつせば、俺はこの苦しみから解放されるのか？」
「くはは。あいにく私は生まれてこの方風邪をひいたことがないのだ」

それを聞くと、小鷹は苦い表情をする。

そしてドサツとベッドに寝込んで、なにやら申し訳なさそうな表情に変わった。

「その……隣人部。俺が休んだおかげで大変だっただろ？ 悪かったな、約束したのに……」

小鷹はケイトと同じように、隣人部がだめだったと思いこんでそう口にした。

どうにも、隣人部には希望の1%もなかったようだな。

「……何を言っているのだ？ 部員なら一人集まったが？」

「……はあ？」

「ああ、私が本気を出せば入部希望者一人くらいなんて余裕だ」

「……風邪までひいた俺の二週間の頑張りは何だったんだ」

「安心しろ、君の頑張りは無駄じゃなかった。私が行動するための糧になったのだ」

「くっそ、お前が男だったらぶん殴ってるのに……」

そう小鷹は悔しそうに苦言を漏らす。

さっきの安心しろは、けしてお前をからかったわけじゃない。

その言葉は本当だった。お前が頑張ったから、私はその頑張りに報いたくなっただんだ。

だから私はあのような屈辱すら耐えられた。全部……お前のおかげなんだ。

羽瀬川小鷹……お前がいたから、私はここまで頑張れたんだよ。

「……そっか、でも……よかった」

小鷹は、抱えていたものを吐き出すように言った。

その時、風邪も相まって苦しそうだった小鷹の表情が、穏やかになった。

自然とこぼれたその笑みに、今までの人相の悪さはなかった。

それは、人の優しさが籠った本当の笑みだった。

「……ふふ」

「あ、今お前笑ったな？」

「わ、笑ってない……」

「そうかよ。ったく、笑ったら可愛い奴なのに」

「ふっ……ふざける馬鹿！」

思わず、小鷹のカミングアウトに私は恥じらいを見せてしまった。そんな毎日笑っていられるほど、私は能天気じゃないんだ。

「明日までにはなんとか治すから、改めてよろしくな。部長」

「ああ、こちらこそと合わせてもらおう」

お互いにそう言葉をかけ合った。

この時、失ったはずの友情の断片が、垣間見えたようだった。

小鷹。これからだぞ。私たちの青春はここから変わるんだ。

このくだらない孤独な青春に逆戻し、私たちは本当の青春を手に入れるんだ。

——私とお前の、二人だけの再興の青春をだ。

そして帰り際、階段を下るとそこには先の妹がいた。

確か玄関で小鷹はこいつを”小鳩”と呼んでいた。

ってことは、こいつの名前は羽瀬川小鳩と言うのだろう。

「あ、こんな夜遅くに尋ねてすまなかった」

「うっ……」

鉢合わせをすると、小鳩はどうにも不機嫌な表情を浮かべた。

ちらりとテレビに目を移すと、そこにはアニメが映っていた。

なるほど、どうにも物の影響に流されやすいようだな。

まあ、このくらいの年ごろはアニメを純粋に楽しめる年ごろだろうしな。

「……何を見てるの？」

私は小鳩に対して優しく接する。

ちなみにこの何を見てるのは、なにガン飛ばしてるんだこのガキという意味じゃない。なんのテレビ見てるのという意味だ。

序盤でも説明したように、私は子供は嫌いじゃない。

最も、礼儀のなっていないクソガキは嫌いだけだな。

「……くろねく」

「くろねく、ああ鉄のネクロマンサー。お姉ちゃんもたまに見るけど面白いよね」

年上相手に馴染めない子供の心を掴むには、相手の得意な科目に触れてあげるのが近道だ。

大人だって同じだ。知らない環境に置いても自分の得意なジャンルにおいてはすぐに話を合わせる事ができる。

「う」

私がそう声をかけると、小鳩とやらはまた唸ってしまった。

どうにも恥ずかしがり屋か。にしてはやたら警戒しすぎのような……。

まあ自分も人の事言えないし、最近の子供はそういうのが多いのか。

少なくともこいつと”近い歳”であろうあのシスターのクソガキと比べれば、こつちのほうがまだ可愛げがある。

「ええと……小鳩ちゃんは何んのキャラが好きなの？」

「私がそう、質問をすると。」

突如、小鳩は目を光らせ、そしてポーズを取った。

「小鳩……？ 誰の事だそれは。私は偉大なる夜の王——レイシス・

ヴィ・フェリシティ・煌であるぞ!!」

「……へ、へえ」

そうかつこよく、自分の源氏名を私に名乗った。

さつきとは打って変わって強気で勢いよかった。

その格好といい口上といい、アニメの影響を強く受けているな。

ん。なんだろう、すっげえめんどくせえ。このガキ超めんどくせえ。

「そ、そっか。ごめんねスメラギさん」

そう私はあえてその源氏名の方で呼んであげた。

出来た大人は子供のペースに合わせてあげるものだ。けして自分の矜持を子供に押し付けたりはしない。

「うっ……。そ、そうだ我を讚えるがいい！」

私が素直にスメラギさんと呼んであげると、またもこいつは戸惑った。

なんとというかこいつ、私と同じ匂いがするぞ。

子供特有の恥ずかしがりというよりは、人間そのものが怖いって気がする。

お前の場合まだ始まってもないんだから、私みたいになったら駄目だぞ。

「しかしスメラギさんは偉いね。」お母さん”とお父さんが帰ってくるまで必死にお兄さんを看病してあげるなんて……」

私はアニメから話題を移して、小鳩のことをそう褒めた。

子供は褒められれば大抵なつく。言っではいけないがお約束だ。

……だが、この時その汚い発言を、勢いよく裏切ったのは小鳩だった。

小鳩は突如、眼つきをキツと鋭くした。その一瞬だけ、兄の小鷹にも似た鋭さを感じ取る。

平和を運ぶ鳩でさえ、時として獲物目掛けて狩りをするかのように。

小鳩のそれは、私に敵意を示していた。

「……えっ」と

そこで戸惑ったのは、私だった。

こんな小さい女の子相手に、何を後ずさりしている。

「……おとーちゃんはお仕事で海外に行っちよる」

「そ、そうなんだ。お父さんは忙しいんだね。あんまり”お母さん”を困らせるのはだめだよ」

「……っ!!」

そう私は何気なく言ったこの一言に、小鳩の目が更に鋭さを増した。

そこに、最初に感じた愛くるしさはもうなかった。

そして、小鳩は自分の感情を押し殺すようにこう言った。

「……おかーちゃんなら帰って来うへんよ」

「……え？」

「おかーちゃんは……”死んだ”」

それを聞いた瞬間、私は背筋が凍りついた。

鳥肌が立った。こんな小さな子が、母親の死を躊躇なく口にしたからだ。

そうか、小鷹の家には……母親がいないのか。どうやら、いらぬことを言ってしまったようだな。

「……ごめんなさい、その」

つい、本気で謝ってしまった私。

この場合はあやまって当然だ。こんな小さい子にそんなことを言わせたのだから。

己の家庭事情他人に言うなんて、大人でさえ辛いことなのに。

それをこんな……とてつもなく罪深い。私は馬鹿だ、大馬鹿だ。

自分だけ不幸ぶって、自分だけ可愛そうだと思われたくない被害者面しやがって。

だから……嫌いなんだ。自分が。

「さびしくなんてない、余計な御世話じゃアホ」

そう、厳しい口調で私に言ってくる小鳩。

そっか、お前のその他人へ向ける怯えは、そういつた裏事情があるのだろうな。

それを素直に認め、この場から退散すべきか。

いや、私にはどこか認めきれないプライドがあった。どこかこの子に言っておきたい言葉があった。

それはけして、こんな小さな子に言っていないものじゃない。

だけど私自身が不完全だから、私はつい……それを口にしてしまった。

「……お前は、それをどう思ってたほしいんだ？」

そう口にした瞬間、小鳩が呆気にとられたような顔をした。

「……どういう意味じゃ？」

「お母さんがいないことに対し、私にどう思ってたほしい？ 私になんて言ってもらいたい？」

「……あなたには関係ないことじゃ」

「ああ、関係ないだろうな。だけど、私も似たような境遇を持っているからわかる。「可哀そうだ」なんて、絶対に思われたくないんだろう？」

「……………」

凶星だった。

言葉にしなくても表情で伝わる。私が言ったそれは、小鳩が思うこととのそれだった。

「だから私は、こんな時どう言っていいいかわからないんだ。かといって謝られても、どう変わるわけでもない」

「……………」

「……すまなかつたな、お兄さんによろしく頼む」

そう最後に言い残し、私はそのまま外へと出た。

完全に嫌われたかな。はは、だから私は駄目なんだ。

担任は私に優しいといった。けど、結果はこれなんだ。

優しさに偏見を持っているから、優しさを信じきれないから、こうなるんだ。

結局最後にボロを出して、人に憎まれることになるんだ。

それが、三日月夜空の人間性なんだ。

人に好かれなくても、人を知りたくても。

——結局最後は……。

ストーカーは男の娘

六月中旬。

風邪をひいていた俺は、二日ほど熱を出して寝込んでいた。風邪をひいた理由は、そりゃあれほどの大雨で寒い外を歩き回ったからだろう。

そんなので風邪をひいたのでは俺自体が軟弱というのもあるだろうが、正直……緊張がほどけたのもあるのだろう。

転校してからずっと、俺はピリピリした雰囲気です学校に通っていた。

みんなが俺を見た目だけで判断して遠ざかる。俺はそんな学校に馴染めない毎日を過ごしていた。

早く居場所を手に入れなければと焦っていた。時期が過ぎれば手遅れになるからな。

そんな時に、俺はあの女に出会った。俺と同じく学校でさびしい思いをしている女——三日月夜空とだ。

傷の舐め合いなんて言ったら、あいつは怒るだろうか。俺としても、そんな解釈はしたくない。

だが同じ孤独者同士、わかり合えることもある。俺はそう思っている。

そしてあいつが作った部活が存続したらしい。これでようやく、俺たちはスタート地点に立つことができる。

登校してから、何度か生徒達と目があつた。誰も彼もが、俺が戻ってきたことに恐怖をしているようだ。

俺は何もしていないのに、大雑把に言ってしまうばこれじやいじめみたいなものだ。

良い子ちゃん学校の連中が、ちよつと見た目がやばそうだからって遠ざけて……。人の身にもなってほしい。

って、良い子ちゃん学校だなんて、この考え方だと俺が本当にヤンキーみたいだよな。俺はそこまで人を下に見れる人間じゃないし、強がって威嚇する人間でもない。

——最も、善人が悪人かと言えば……俺は間違いなく”悪人”だが。

「……………」

俺は今、普通に教室に向かって歩いている。

他の生徒の怯えた眼差しがあるのは変わらない、それは別に気にしなくてもいい話だ。

だがなぜだろう。それらとは違う別の目線を感じるのは気のせいだろうか。

なんというか、悪者の俺をぶっ潰そうとか、そういうのでもないんだよなあ。

バカらしい話だが、執着？ わかりやすい言い方が見つからないのだが。

「お……………」

教室に入ると、いつもの位置にあの女がいた。

相変わらず机に突っ伏している。他の連中なんて、興味すらないってオーラ出してる。

お礼くらい言った方がいいだろうか、だけど……周りがいる中で嫌われ者の俺に声をかけられれば、あいつも迷惑するだろう。

普段は俺と夜空は無関係。あいつの面子のためにも……それでいてやろう。

そう思い、夜空の前を通り過ぎると、あいつは俺に気づき……そしてまた寝た。

それでいいさ、お前は自分勝手に……我がままなんだからな。

その後、四時間目が終わり昼休みになった。

まだ病み上がりで弁当が作れず、今日は何も持ってきていない。食欲はないが、何か食べないと力にはならない。

「下の購買にも行くか……………」

俺はそう呟いて、下の階へと行った。

前に一度購買に行った時は、俺が着た瞬間他のやつらが怯えて、全員道を開けたな。

確かに商品選び放題はいいんだが、後味が悪すぎる。

ので、今日はある程度人がいなくなるのを見計らってから行くことにした。その結果……。

「ごめんねえく。もう売り切れちゃって……」
見謝ってしまった。

そうだ、この学校のパンはすぐ売り切れる。だから人がいなくなるころに行っても意味がないんだよ。

これじゃあお腹がすいて力が出ない……どこぞのヒーローみたいな言い草だが。

あと二時間か。と言っても俺にご飯を分けてくれないザ・友達はいないし。

あの女は意地でも分けてくれそうにないなあ。ワンチャン、ケイト先生の所に行ってみるか……。

そんなこんなを考えていた時、一人の生徒が俺に話しかけてきた。
「……あの」

「え？」
突如話しかけられたので、俺はつい驚くように反応する。

その反応がいつも表情が歪んでいるから、みんな逃げていくんだって。

そう咄嗟に表情を戻したが、その人物は逃げなかった。
「パンを……かいわすれたのですか？」

「あ、ああ……。正確には買いそこなっただけだな」
そうゆったりとした甘い口調で話してくる人物。

制服は男子、体つきは草食系男子のような華奢で細い。
そしてその顔は……これまた引きこまれそうな甘さだった。

一見すると女の子にしか見えないような、とても整った美少年だった。

栗色のショートカットも、上手い具合に耳が隠れていて、ますます少女のそれを思わせる。

どうしてこんな中性的なイケメンが俺なんかと話しかけてくるのか、一瞬間の中で困惑した。

「あの……俺に何か用？」

「その……よろしければわたくしのパンを、食べてください」

そう言つて、その少年は俺に全部のパンをくれた。

いやいや、こんなに貰つたら、そっちのパンが無くなっちゃう。これじゃカツアゲと変わらない。

まさかこいつも、俺の事が怖くて全部パンを差し出したのか。それだつたら嬉しくもなんともない。

変な噂が立つから厄介とかそういうのではないが、気持ち次第では迷惑だ。

「い、いらないよ。それにそんなに貰つたらお前の分がなくなるだろう？ それに、俺は別にパンをよこせとか貢げとか言わないから、怒つてるように見えたのなら……謝る」

長々しく、言い訳がましく、断り方を知らない典型的な物言いで、その少年の優しさを否定した。

どうにもネガティブに捕えてしまう。この状況が状況だから仕方がないことだが、あの女の考えが少し移った気もする。

もし本当にこの少年が、優しさでパンを恵んでくれたのなら……俺はなんて悪いことをしているのだろうか。

「……そうですか」

「悪いな。……そんな心配するなって、俺は君をおちよくっているわけでもないし脅したりもしない。でも……ありがとう」

最後にはその優しさに対してお礼をして、個人的に上手く収めた気がする。

仕方がない、昼ご飯は諦めよう。俺はそう思った。

「……羽瀬川先輩」

去り際、後ろから声が聞こえた。

やっぱり俺を知っていたのか、わかりきっていたことだが。

俺は振り向く。ここで無視をしても意味がない。

「どうした？」

「……いえ、すみません」

そう恥ずかしがって、少年はその場を去ってしまった。

なんとというか、気が緩んだら本当に女の子にしか見えない、そんな

甘い少年だった。

こんな怖い俺なんかと違って、きっとクラスでも人気が高いのだろう。ああいうあざとさも、優しさも、生まれつき持つスキルなのだろう。

だからこそ、俺なんかに関わらないほうがいい。俺に気を許さない方がいい。なぜなら俺は……。

「俺はまた……」くりかえす。かもしれないから……」

放課後。

俺は部室へと向かった。

隣人部か、思えばいったい……どんな活動をするつもりなのだろうか。

友達を作る。そんな当たり前の事をどういう風に部活で体现するつもりなのだろうか。

そんな誰もがやりそうにないことを自信を持ってやろうとしたんだ。あの女にはちゃんとした考えがあるのだろう。多分……。

あと、あいつ三人目を見つけたと言っていたな。存続している分本当の事なんだろうけど。

だとしたら挨拶しないとな。変に笑顔にしないほうがいいな、見繕うと怖くなるし。

「よ〜」

俺は扉を開けた。

そこには俺より先に、夜空が椅子に座って本を読んでいた。

あとは、見渡しても誰もいない。

「ふん、遅いぞ」

「そうか？ 時間を気にしすぎなんだよ。あとこれでも病み上がりだ。多少のことは許せよ」

「そうだったな、すまない」

相変わらず無愛想にそう答える夜空。

こんなやつだが、心の底では大切な友を見つけたと思って思っているんだ。否定ばかりでは始まらない。

「さて……そういえば三人目は？」

「それいつも遅刻だろう。なにせそいつは……」不良「だからな」
「不良？」

「クラスに馴染めなくて特別教室で授業をしているらしい。安心しろ、」間違ったことは「言っていない」

どうにも嫌味じみた言い方をする夜空。

不良で特別教室って、いったいどんな奴を引きこんだんだこの女は。

確かに俺は見た目だけは不良だが、本物の不良がやってきたら止めることは敵わねえぞ。

でもまあ、こんな部活に入るやつだ。ろくでなししかいないだろうなあ。

「そっか、まあ仲良くできるように頑張るよ」

「ふん、出来ればいいけどな」

やっぱりどこか刺々しい言い方。てかお前の知り合いじゃなかったのか？

そんな詮索をしていると、コンコンとノック音の後、扉が開いた。そして扉の向こうから現れたのは……メガネをかけたポニーテールの少女だった。

小柄で白衣を着ている。不良？ どこが？ イメージとは真逆の、インテリ系がやってきたぞ。

「失礼します。今日から部活やるんですよねえ？ 夜空先輩」

「ああ、そうだ」

「よかった。ああすいませんちよつとやる仕事为重なっていて、遅刻してしまいました」

そう、遅刻をしてきたことを素直に謝るこの少女。

素行も態度もいいじゃないか。いったい何を思ってこんな良い子を不良だなんて言ったんだこの女は。お前の方がよっぽど不良だよ。

「あ、噂をすれば貴方は」

「ああ……その、羽瀬川だ。よろしく。ええと……」

「存じております。羽瀬川小鷹さん。私は志熊理科と申します。夜空

先輩とは懇意にしておりました。これからよろしくお願いしますね」

そう、深々とお辞儀をする志熊理科。

俺を見ても怯えるどころか、一部員として見て、そして後輩としての理想像を醸し出す。

こんな子が友達作り？　ぎげんな、こんな良い子と友達にならない奴は誰だ。俺が許さん、絶対に許さん。

「……ちっ」

なにやら遠くで舌打ちをする夜空。

何が気に食わないんだ。こいつがリア充だからか？　ひねくれすぎなんだよお前は。

「よろしく。にしてもまたずいぶんと真面目で良い子が入ってきたな。こんな部活でいいのか？　あんな無愛想なひねくれ根暗女に騙されたんじゃないのか？」

「んだと……？」

俺が夜空に聞こえるようにそう理科に言うと、理科は特に否定の無い笑顔で俺に返した。

「そんな騙されただなんて。理科は夜空先輩に危ない所を助けられたのです。理科には危険を助けてくれる友達なんていませんし、だからこそそういうことがあった時に頼れる友達を作ろうと思って、この部活に入ったんですよ」

「そ、そうなのか。全然そんな風には見えないけどな。こんな可愛くて性格もよくて真面目で頭良さそうなのに、それに特別教室って……なにかあったのか？」

つついっい評価すると同時に長々としゃべってしまった。

その上で答えにくい質問までしてしまう。あまり触れられたくないよな、そういう事情って。

すまないよ、俺が言いだそうとした時、志熊理科は話しだした。

「特別教室棟に、理科室ってあるのはご存知です？」

「ああ、科学室の隣にある教室だろ。……あれ？　よくよく考えたら科学室の隣になんで理科室が？」

「その理科室は、一般的な理科室ではなく、私の教室という意味なんです」

「どうしてまた？」

「色々、事情はあるものです。保健室登校みたいなもので、その理科室バージョンと言ったところです。あまり気になさらずに」

そう、特に嫌そうな表情も見せず、理科は答える。

深い事情は話さなかったが、それに触れることも本来、いやでしかたがないはずなのに。

それでも健気に答えてくれるなんて、やっぱりこいつ……どうしてこんな。

「そっか、まあその……色々あるよな」

「……ん？」

「わかるよ、俺も学校に馴染めてないからさ。色々あったんだろ、まあその……お互い頑張ろうぜ」

安い同情と取られただろうか、俺としては優しく励ましたつもりだったが。

そして俺にそんなことを言われた理科はというと、一瞬だけ体をピクリと震わせた。

だが表情は笑顔のまま。なんだろうか、言葉にならない恐怖つてのが、一瞬だけ空気に伝わった。

「ぶっ！ くっく……ククク……」

そして奥の方で夜空が嘖き出す。

おいおい俺はなにも面白いことは言っていないのに。

と、夜空が笑った瞬間、理科はもう一度体を震わせた。

「も……もう羽瀬川先輩。私に優しくしないでください、惚れてしまいますやだ」

「そ、そんなつもりで言ったわけじゃねえよ。やましい気持ちとかないからな」

「またまた、強気な男の人にか弱い乙女は弱いって言いますからねえ」
（夜空をつめえ……いつか粉々にしてぶち殺すからな!!）」

そう軽いノリで理科は言う。

だけどなんだろう、一瞬こいつが怖いなって思うのは気のせいなのだろうか。

「まあその、こうして三人揃ったんだ。今日はなにやるんだ？」

俺がそう、夜空に質問をすると。

「……特に考えていない。それに今日は顔見せみたいなものだからな」

そう、軽い気持ちでそう答えた。

あのよ、そうやって後から後からって思ってるといつまでも先に進まないんだぞ。

てかやつぱり何も考えてなかったのか。せつかく後輩も入ってきたんだ、最初が肝心だっていうのに。

「わかったよ。ならそうだな、仲間として、俺の相談事を受けてくれよ」

「相談事？」

特にやることもないので、俺は思いきってそう切り出した。

すると夜空は、興味本位でその話題に食いつく。

「実はその、朝から誰かに見られている気がするんだ」

「そりゃあ、風邪ひいていなかった学園の雑菌が帰って来たんだ。これでまた世紀末が始まるという怯えた眼差しだ。気にするな」

「ぐっ……。この女、マジで泣かすぞ……」

「やってみろこの腐り金髪が……」

言われ方がひどすぎたため、反射的に夜空に突っかかる。

いくらおちよくる目的だったとしての誰が学園の雑菌だ。それ本気で思っただけじゃねえだろうな。

対して夜空も食い下がることがはない。やつぱり度胸だけは据わってんだなこいつ。

やつぱりこの女は好きになれねえ。間違ってもこいつとだけは、仲良くなれそうにない。

……この女を救えるのは俺しかないだろ？ そんなわけがない。

「……悪い、女相手に本気になりかけた」

「ちっ……。その、私も悪かった。おちよくるにしては言いすぎた」

俺の方から謝ると、夜空もしおらしく謝り返した。

まあ、こんなんでも喧嘩ばかりしてたらキリがないか。それに新しい後輩もいることだし。

「そういう眼差しなら大体分かる。だけどそれとは違う感じがしたんだ。それにそういうのなら目があつてすぐに逃げ出すし、今回は目すら合わなかった」

「わかりにくいな、もうちよつと具体的に言え」

そう夜空に言われて、俺は具体的な妄想をする。

「具体的にねえ。なんつうか……俺のことを監察してるつうか、妙に冷え切った感じつつうか、こつちが目を向けると消えるんだけど、目をそらすとまた感じるようになる」

「なるほど。それだと怯えているというより……嫌がらせに近いですね」

嫌がらせと、理科は言った。

嫌がらせか、まさか等々俺を陥れようとする連中が現れたのか。

素行の良いミッシヨンスクールと聞いていたけど、過激な連中がいなわけではないのか。

「嫌がらせか……。俺、そろそろなんかひどい目に合うのかな」

「なにかやらかしたんですか?」

「なにもやらかしてない。あいつらが勝手に想像膨らませて俺を不良扱いするんだ。そりゃ確かに、俺の髪の色はこうだし……眼つきも悪いよ」

「まあ確かに見た目は悪人面ですね。ならひどい目に会う前に、自己アピールをするのはどうでしょうか?」

そういうと理科は、鞆の中から何かを取り出した。

「それは?」

「私のお世話になつていている会社が開発した整髪料です。一般的のよりも綺麗に髪の色が落ちますよ。サンプルは上げますので、お取り寄せしたくなったら気軽に声をかけてください。お安くしますよ」

そう言つて、理科は俺にその整髪料を手渡した。

お世話になつていている会社? 開発? なんかずいぶん広い繋がり

を持つてるんだな。

確かに理科の言う通り、見た目から入るというのは良い手だ。だが……。

「その男の髪の毛は地毛だ。金髪に染めそこなったわけではないぞ」「ふえ?」

俺が説明すべきところを、夜空がフォローを入れてきた。

「地毛……ですか?」

「あ、ああ。そいつの言っている事は本当だ。これでもイギリスと日本のはーフなんだよ」

俺がそう説明をすると、理科は不可思議な表情で、俺の顔をじーつと見つめる。

思春期の男の子真っ盛りの俺としては、女の子に見つめられるのは恥ずかしいな。

と、そんなゆるいことを思っていると、理科は突如鞆から何かを取りだしそして……。

チヨキン!!

取り出したのはハサミだった。

そのハサミで、俺の前髪を突然パツツンと切りやがった。

「ぎゃあああああああ! 俺の前髪ー!」

俺は咄嗟に叫んだ。

このインテリいきなりなにしがやるんだよ!? しかもハサミあぶねえし!!

「予想以上に切れちゃいましたねえ。ま、いいか」

「ま、いいか」じゃない!? いきなり何しやる!?」

「ちっ……。サンプルの分際でくそうぜえな……」

「ん!? なんか今小声でとんでもねえこと言った!?」

人の前髪を了承なく切つて、理科はなにやら満足気味。

俺の髪の毛、いったい何に使うつもりなのだろうか。

「いえね、人間の遺伝子上こんな髪の色が出来上がるのは珍しいので。ちよつとだけ採取させていただきました」

「つたく。それならせめて髪の毛くださいくらい言えよ……」

「科学者としては、言動より先に行動を起こす物です。でも確かにこれでは等価交換が成り立っていない、ので髪の毛の毛いただいた代わりに何かをしてさしあげましょう。何でもやりますよ?」

そう言つて、理科はニコニコ笑う。

なんでもやると言われても、髪の毛ごときに大げさな。

俺は得に悩むことなく……。

「別にいいよ。髪の毛少しおかしくなった所で俺の評価が変わるわけじゃないし」

「そうですね。なんでも、なんでもやるのに対価を求めないんですか?」

「いやいや対価つて。こんな不良の原因にしている髪の毛一つに対価を求める価値もねえよ」

「……あく。クソつまんねえなこいつ」

「……」

どうにもご機嫌斜めの理科。

なんか所々あくどい本性出てる気がするんだがなんか悪いことしたかな?

俺がそんなことを思っていると、理科は例え話を俺に提示した。

「でもそれじゃ悪いのですね。そうですね……生命の神秘を求めたのですから生命の誕生でお返しするのはどうでしょうか?」

「言っている意味がよくわからないんだが……」

「んもうそんなストレートについてきた所でこの世のJKは逃げませんよ羽瀬川先輩。それともわからないんですか?」 「S」で始まり

「X」で終わるやつですよ」

「ぶっー!」

理科がそう俺にクイズを出すと、遠くで夜空が噴き出した。

このクイズが何を意味するのは俺も実の所わかつてはいたが、いくらこの世のJKがどうあれ、初対面でそれは人として駄目な気がする。

なので、ここは誤魔化すことにしよう。

「わからん。というかそんなお返しはいらない」

「そんなお返しとは誤魔化しきれいていないですよ羽瀬川先輩。中々に紳士なところは褒めてあげます。まあ正解は「ソックス」です。何と勘違いしたんだか」

「むっ……。あつ、ソックスの単語は「S」O O K「S」だ。墓穴を掘つたな志熊」

「あら、上げ足を取るんですか？ 私にだって一般教養くらいあります。靴下じゃなくて硫酸化物（SOX）ですよ」

「……」

そう理科は勝ち誇ったかのように言う。

ま、そういうことにしておいてやるか。

ちなみに……。どうして夜空は本で顔を隠してるんだ？

「まあ別に『SEX』でもいいんですけどねえ」

「うぐっ……」

「おや反応しましたねえ？ わかりました明日持ってきますよ、動物の交尾傑作選のDVDを」

「いっらね!!」

どうにも俺を試すように理科はマシンガンのようにその類の発言をする。

なんだ……。最初に理科に対して感じた俺の印象が異なってきたような……。最初に理科に対して感じた俺の印象が異なってきた

なんつうかな。こんな部活に入るんだもんなあ、やっぱり普通じゃないのかな。

そうだよな。もしこの子が人当たりのいい頭の良いメガネっ子なら、普通に友達いるもんな。

志熊理科。一筋縄ではいかない……。か。

「ごほん！ この部活内でそのような卑猥な話はやめろ……」

「おくやおや夜空先輩？ 聞いてらしたんですかあ？」

「……」

「あれ？ ひよっとして焦りとか感じちゃいました？ 愛しの男がこんな根暗に取られてしまうだなんてあつらら。そんなこと思っちゃったんですかあ？」

「……ふん、バカを言うな。そんなことをなど思っただけではない。愛しの男だと、悪いがそのようなヘタレはタイプじゃない」

そう毅然とした態度で夜空は言った。

あのすいません。二人で痴話げんかするのは構いませんがね、さりげなく俺が傷つくこと言うのやめてもらえますか？

というか、さつき理科が夜空と懇意にしていたとか言っていたが……。

やっぱりというか、仲悪そうだなこいつら。

「それに……そんな破廉恥なこと……高校生同士がやっていいことじゃない」

「ふふふずいぶんと優等生ですね夜空先輩。まあ間違いを起こすと確かに厄介なことになりますし……でも、人としてそういう行為を求めるのは自然な欲求です」

そう夜空に対してはつきりと言い放つ理科。

それを聞いて夜空がむっとすると、理科は夜空の傍に行きなにとやら耳打ちをする。

「心配すんなよ。初っ端からあの男の底を暴くつもりはねえからよ……。だから安心しろや」夜空ちゃん”。ヒヒヒ……」

「ちっ……」

俺の存在そっちのけで、二人だけでなにやら会話をした後。

話題は俺が今朝感じた違和感について戻る。

「それで、誰かに見られていると言いましたね羽瀬川先輩」

「ああ、気のせいだといんだけどな」

「……」

理科に聞かれ、俺はそう素直に答えた。

気のせいならこれ以上こだわる必要はないし、危険なことも無かつたで済む。

そうならめんどくさくなくていいんだけど……。そう俺が思いながら、ふと夜空の方を見やると。

この話に対しててつきり笑って済ませると思っていたが、なにやら考えこんでいた。

「……部長？」

俺が夜空のことを呼ぶと、夜空はハツとなる。

「あ……ああ、気のせいだろう。それとも何か？　小鷹にストーカーがいるとでも言うのか？」

「ストーカーか……。ひよつとしてひよつとするかもな」

「羽瀬川小鷹ファンか……。ありえん」

「ぐっ……。そうかよ」

夜空の何気ないその言葉に俺は傷つきながらも、それを表に出さな
いように答えた。

こうして、今日の所は部活が終わる。

明日には解決してるといいんだけどな……。ストーカー。

翌日。

今朝、俺が登校してくると。

やっぱり感じる謎の視線。後ろを向いても捕捉できない。

今日あたり俺は学校のグラウンドで襲われるのか？　やめてくれ
こんな絵に書いたような全うな人間他にはいねえぞ？

と、そんなことを願っていると、突如後ろから違う感覚が俺を襲っ
た。

「なんだ？　視線が無くなった？」

まるで何かを感じるような中二病のようなことを口にする俺。
だが違和感を感じたのは確かだ。俺はすぐさま後ろを見ると。

そこには夜空がいた。その真向いに、何者かの姿が。

よく目を凝らすと、昨日の昼にパンを俺にくれたあの少年の姿だっ
た。

どうして夜空とあの子が一緒にいるんだ。俺が二人の方へ向かう。

「おい、夜空どうした？」

「あ、小鷹……」

俺が声をかけると、夜空が罰の悪そうな顔をする。

その向かいにいる少年が、俺を見ると少し距離を置いた。

まあ怖がるのはわかるが、その行動が俺の遠慮しているようにも思

えた。

「その子……知り合いか？」

「いや……。はあ、この男がお前をずっと監視していたぞ」

「え、こいつが？」

「……」

そう夜空は、少年を方に目をやって俺に言った。

ということは、こいつが俺をつけていた人物か。

昨日俺にパンをくれた優しいこいつが、ストーカーの正体。

「……あの、もうしわけありませんでした。ですがどうにもちかよりにくく」

そう、少年が俺に謝る。

そんな彼に対して、俺は心から安堵する。

「よかった……」

「え？」

「俺を襲うとか考えてるやつじゃなくて。本当に良かった……」

そう俺が安心したように言うと、夜空が何とも言えない表情で俺を見た。

それと同時に、少年も安心したような笑みを浮かべた。

だが、どうして俺を追っていたのか。その理由だけはわからない。

その日の放課後。訳を聞いたためとりあえず幸村を部室に呼ぶことにした。幸村は特に断ることなく了承した。

普通なら見知らぬ場所に呼ばれたら抵抗するもんなんだけどなあ。

「あらまあ。ずいぶん可愛らしいイケメンがやってきましたねえ」

部活にて。

理科が彼の顔を見て、そう呟いた。

やっぱり女はみんなイケメンに弱いんだな。ごめんな俺はイケメンじゃなくて。

「羽瀬川先輩をつけていた犯人ですか。部室に連れ込んでこれから襲うつもりですか先輩？」

「びくっ……」

「おい、誤解を招くこと言うんじゃないよ。俺のような大の紳士がそ

んなことするか」

理科の毒突きに対して、俺は多少機嫌を損ねたように答えた。さて、少年に逃げられる前に、理由だけちやっちゃんと聞いてしまおう。

別に俺は怒っているわけじゃない。そこだけのご理解の方いただきたい。

「わたくしは楠幸村といいます。がくねんはいちねんです」

そう幸村はゆったりはきはきと口にした。

緊張しているのか、それとも元からなのかはわからない。

にしても幸村っていうのか。外見は女の子みたいだが立派な男の名だ。

「俺の名前は知っているだろうが、改めて自己紹介するよ。羽瀬川小鷹だ」

「羽瀬川先輩……」

そう俺は自己紹介をする。

名乗られたら名乗り返すこれ常識だから。

「それとき、理由を聞く前に一つだけいいか？」

「はい……」

「昨日はありがとうな。ちゃんとパン食べたか？」

「……食べられませんでした」

「ちゃんと食べるよ。男はがつつり食べなきゃな」

俺は昨日の幸村への感謝を先に述べた。

理由を聞いてどこか関係がそぐわなくなるかもしれない。そうなる前に、こいつのことを良く思っているうちにそういう話はしておくたい。

そんな話の後、幸村から改めて俺をつけていた理由を聞いた。

「どうして、俺のことをつけていたんだ？」

「……もうしわけありません」

「別に怒ってないから。そんなさつきそこちよつと意地の悪そうなメガネの子が言ったみたいなのはしないから安心しろよ」

「意地の悪そうな……」

先ほど変なことを言った理科の事を訂正した後。

幸村は何度か戸惑いながら、言うのをためらっている。

そんな彼に対して、以外にも夜空が動いた。

「……楠、しゃべりづらいなら私から話してやるが」

そう夜空は幸村に言った。

何か知ってそうだな。それにしても、お前から動くのは珍しい。

他人なんか興味なさそうな顔している癖に。

「……いえ、わたくしからいいでしょう。わたくし、いじめにあっているのです」

そう、幸村は暴露した。

それを聞いて、部室の全員が黙りこんだ。

いじめか、そりや……辛かっただろうな。

「……いじめですか」

最初に口を開いたのは理科だった。

「他者と慣れ合って、弱い奴を見つけてはたたき落として愉悦感に浸る。最低なクズの所業……ちっ」

それは、本心から来る一言。

理科も何か思うことがあるようだ。そしてそれを、許せないと思っているようだ。

そして夜空も、とても苦い顔をしている。

俺も……正直許せないと思っている。

「いじめか……この学校でもあるんだな」

「ああ、どこにでもあるだろう」

俺がそう呟くと、夜空がそれを拾った。

そして、どこか遠い目でそう口を開く。

「……どうしてあるんだろうな、いじめ」

「楽しいからだろうな。そうやって自分が強者であることを、噛みしめることが快感で……」

そう夜空は言う。

それに反応したのは理科だった。

「それはひょっとして……自分の事を言っていたり？」

「……なに？」

「おやおや口が滑りました。でも……それを言うってことは、経験者では？」

「私はそんな連中と一緒にするな!!」

夜空のその叫びは、一瞬だけ場の時間を止めたような気がした。

それだけ、彼女の叫びが心のこもったものだったからだ。

理科の言葉があまりにも心外だったのだろう、元から怒っているような夜空が本気で起こったようにも思えた。

済まない夜空、俺も正直お前はいじめっ子側だと思っていた。だが……やっぱりお前は、心では……。

だからこそどうして、こんなにも人を避けるんだよ。

「……あの」

「ああ、すまん。話を続けてくれ」

戸惑っている幸村に、俺は話の続きを振る。

「それで、このがっこうにすいせいのごとくあらわれては、あつというまにしはいしやとしてくんりんなされた偉大なる羽瀬川先輩に、ぜひともおとこのなんたるかをまなびたいと……」

「おーい待ってくれ。その言葉は色々とおかしいぞー。支配者とかそんなんじゃないし、俺はそんな男のなんたるかを教えられるほど偉大でもなんでもないぞ」

「まあ、不良なのは見た目だけで中身はもやしだからな」

「おい部長さんよお？ 俺にだって傷つく心があるんだけどお？」

夜空に水を刺され、自分で言っておきながら落ち込む俺。

てか幸村。俺をそんな目で見ていたのか、ああもうどんだけ俺の印象って悪いんだよ、人を見かけで判断するなよ本気で!!

そんな俺の悲しみをよそに、幸村は俺を上げてくる。

「またまたごけんそんを」

「ご謙遜じゃない!!」

「そんな、わたくしにはあなたさまをほめることばしかおもいつきませぬ」

とかなんとか俺にべつたりの幸村。

隣で二人の女は笑ってるし。俺は笑い物じゃないぞ!!

なんとか話を反らそう。そうだ、いじめの内容を聞いていない。

「ごほん! そのよ……楠が受けてるいじめに付いて色々教えてもらえないかな?」

さすがにストレートすぎたか。

いじめの内容なんて簡単に言えるもんじゃないし、俺もデリカシーが無いな。

とか思っていると、幸村は躊躇なく話し出した。

「たとえばたいいくのじかんのまえにわたくしが着替えをすると、みんなめをそらして逃げ出します」

最初のいじめの内容はそんな感じ。

それに対して、俺は冷静に分析し幸村を励ますように答えた。

「……それは多分、お前が女の子っぽくて意識しちゃうんじゃないか?」

「女の子っぽい……?」

あ、やばい地雷踏んだ。

そうだよな、男が女っぽいなんて言われるのは褒め言葉でも何でもないよな。

ましてやこいつは男らしくなりたいて言っているのに、そんなこと言われれば侮辱されるも同然だ。

「はあ……。仕方ない、隣人部部長のこの私が相談に乗ってやろう」

と、俺では役に立たないと判断したのか、俺を押しつけて夜空が幸村の対面に座る。

「それで、どんどんその内容を言ってい。一問一答? といこうじゃないか」

夜空は幸村に次のいじめの内容を言っていくように促す。

幸村は容赦なく、その内容を並べるように言っていた。

「いっしょにあそんでいて、熱くなったのでふくをぬごうとしたらみんながにげていきました」

「なんてクズな連中だ。とても飽きっぽい連中と見える。きっとお前がスポーツかなんかで使えないと勝手に決め付けて切り捨てたのだ

ろう。どうだこの部活に入って変わって見ないか?」

「スポーツといえば、どっじぼーるのじゅぎょうでわたくしだけねらわれなかったり」

「一緒に授業を受ける価値すらないと決めつける。最低だな隣人部に入ってみないか?」

「中学生の時、じゅうどうのじゅぎょうで誰もわたくしとあいてをしてくれなかったり」

「隣人部に入れ」

なんか途中から部活の勧誘になつてないかなあ夜空さん!?

いじめの解決にかこつけて無理やり部活に入れようとしてないか!?! 最低だこの女!!

というか内容を聞く限り、全部幸村が女の子っぽくってみんなが遠慮しているだけな気がするんだが。

てかみんな優しい奴だな。本当に愛されてるんだな、楠幸村。

「りんじんぶ……ですか?」

そう、幸村が夜空に尋ねる。

だめだそこでこの女の言葉に釣られたら……。

だが時すでに遅し、夜空は幸村を掌握する寸前まで来ていた。

「ああ、その自ら変わろうとするその姿勢は尊敬に値する。君のような野望を持つ者を私は待っていたのだ!」

「なんかこの女、宗教とか作ったらめっちゃくちや信者作りそうだな痛って!!」

俺が隣で余計なことを言うと、夜空は蠅叩きで俺の頭をバシンと叩いた。

「私たちはお前を男にするためにサポートしてやろう。さあこの入部届けにサインを」

「かしこまりました」

なんとということだ。幸村は操れるがままに入部届けにサインを書く。

俺はすぐさま夜空に問う。

「なんのつもりだ」

「別に。部員が多い方があのアホにいい顔ができる」

「ケイト先生の事か？ にしても……こんなめちゃくちやな」

「それに、部室の掃除係が必要だと思っていた」

「……最低」

俺は夜空のその発言に、純粋な感想が言えた。

だが、夜空はその言葉の後に……付け加えるように本心で。

「……でも、変わろうとする気持ちがあるのなら……それは放っておけない」

「……夜空？」

「だから……あいつが困っている時は……力を貸してやれ」

そう、俺の肩をぽんと叩く夜空。

どうにも、お前らしくない一言だ。正直寒気がするよ。

だが……悪くはない。俺は自然と笑みをこぼした。

「……わかった。よろしくな楠」

「はい、羽瀬川先輩」

こうして、また一人……隣人部の部員が増えた。

これにてストーカー事件は解決……に思えたが。

「はいはい。羽瀬川先輩と楠くんに質問です」

先ほどまで隅っこにいた理科が、突如口を開いた。

「どうした志熊？」

「いやいや、こうして不良と美少年がセットになったんですよ。そこから何も発展しないのはおかしいでしょ？ 理論上ありえないでしょう？」

「……どういうこと？」

「いやだから……さっさと先輩が楠くんを襲いかかって……あんなことや……こんなことを……シャオラー……!!」

と、突如理科が叫び始めた。

いったい、何が始まるのかな？

「いやいや志熊。幸村と俺は男同士」

「だーからいいんじゃないやねえかよこのクソプリン頭がよ!! 理解できねえのかその小さなおつむじゃあよお!？」

「く……クソプリン!？」

「男同士で始めるようなロマンスが始まってこそ萌えるってもんじゃないですか!! もう理科の中じゃ妄想でいっぱいなんだよ……。ヒヒヒヒ……ヒヤッハーハー!!」

「……」

どうにもキャラを崩壊させて喚く理科。

俺と夜空はぼかんとなり、幸村は相変わらずのほほんとしている。

「つたくよお。夜空先輩も見たいんでしょ？ 男同士のイツツアボーイズ&ユニバースをよお？」

「すいません、日本語でお願いします」

「だから。BL……だよ」

「ごほっ！ そんなものが好きなやつらと一緒にするな!!」

「好きなんやろ？ あんなことやこんなことがいいんやろ？ 本性露

わせやこの腐れ女子がああ!!」

「腐っているのは貴様だああああ!!」

こうして、隣人部は賑やかになりました。

俺、夜空、理科、幸村。個性的な面子が揃い。

これから果たして、友達を作る部活はどうなっていくのか……。

「……羽瀬川先輩、わたくしはいつでもみがまえております」

「うん、俺にそっちの趣味はないから」

この少年もまた……一筋縄ではいかなそうだ。

集結する隣人部

隣人部を作ってから、約三週間経過した。

始まった当初は部員探しでずいぶんと手を焼いたが、気がつけばもう四人だ。

友達作りの部活、自分で言っておいてバカらしいものだが、そんな部活にだって存在理由がある。

今日は土曜日だ。

土曜日は普通に部活をやる。といつてもとくに何をするというわけでもないが。

というか部活を作ってから活動という活動をしていないな。そろそろ何を言われるかわかったもんじゃやない、早く次の手を撃たないとな。

部活には私と小鷹、そして頭のいかれた天才一人とナヨナヨした弱い男が一人。

よくまあここまで集まったなど正直驚いているが、個性あふれる面子を束ねるのは難しそうだな。

小鷹はもとより、他の二人に私の青春の再生を邪魔されてはかなわない。

これは私と小鷹の問題であり、他の二人はまったく関係のないことだ。だから……邪魔だけはさせない。

小鷹との青春は……私だけのものだ。

「おはようございま〜す」

そんな本日、私の次にやってきたのは理科だった。

この学園が誇る天才。そんな良い扱いでよいしょされているこの女もまた、隣人部の部員だ。

この部活に入ったのは、私への恩返し……というのは表上にすぎない。

私はこの女に見返りを求めたわけではないし、この女が勝手に恩を返しに来ただけ。

最も、内心何を考えているかはわからないがな。

「おや？ 夜空先輩だけですかあ？」

「ああ、小鷹は別用で今はいない」

「そうですかあ。だったら……余計な作り笑顔する必要はないよう
ですなええ」

そう理科が悪い笑みを浮かべると、勢いよく部室の椅子に座る。

そして私の方を見て、挑発するような態度で言葉を向けた。

「しっかし夜空ちゃんよお。どんな感じよ、失ったものとやらは取り
戻せそうなのか？」

そう口調をガラリと変える理科。

これがこの女の本性だろうか。小鷹と話している時はこのような
荒れ具合は身を潜めている。

外見は至って真面目な眼鏡をかけた秀才、もとい天才だ。とてもい
い子といった、そんな褒め言葉が似合う。

だが本心はこれだ。私に対しては作り笑顔を浮かべていても牙を
向けている。それは空気で伝わってくる。

しかしまあ、後輩にため口を聞かれた所で元々この女には興味がな
い。なので全く気にはならないことだが。

「ああ、順調とだけ言っておこう。最も貴様には全く関係のないこと
だが」

「んだよ吊れないですなえ。僕はこれでもああなたの作ったくつそくだ
らない部活の貴重な部員なんですよお？ 友達作りとか公言してる
なら少しはスキンシップくらい取ったらいかげす？ 孤独で可哀
そうな三日月夜空ちゃん」

「……」

そう、私の反応をチラチラ伺う理科。

悪いが私は安い挑発に乗るつもりはない。

「にしても……羽瀬川小鷹ですか。」あんなの”に価値があるんです
かね。この学校にとってははいるだけで害になる存在でしょうに、確か
南の方に悪ばかりが集まる高校があるって耳にしましたが、そちらに
転校なさった方がよろしい気がします」

「……本人の前で言えもしないことを次々と」

「あはは。言うだけ無駄でしょうに。無駄は無価値です。この部活ように存在自体が無駄無駄。だから……あんたも羽瀬川小鷹も変わることはできない。変わろうとするだけ……無駄な行為だ」

笑いながら、理科はつまらなそうにそう口にした。

それを聞いて、私という人間はどう思ったのだろうか。

理科の言葉を借りるなら、無駄な言葉だと思う。

この天才は論理が大嫌いだ。合理的に当たり前のことしか愛することができない。

だから頑張れば変われる。努力すれば事が成せる。奇跡は起こる。といった綺麗事に虫唾が走るのだろう。

故に私たちを笑う。嘲笑う。下に見て、自分の今の立場に満足している。

私からすれば、非常につまらない人間だ。つまらない女だ。

まるで、この学校の頂点にいる”あの女”の同類ではないか。

「ふん。人を見下すのが好きな奴だな。まるであの……」柏崎星奈
みたいなやつだ」

「……ああ？」

私はその人物の名前を出すと、理科が少しだけ怒りを露わにした気がした。

「僕があんな優秀なだけの金髪の雌豚と同類だあ？ あんな小さい箱の中で満足してるだけの雑魚とこの僕を一緒にしてんじゃねえぞ!!」

「……ふふ、その怒りに意味はあるのか？ 志熊理科」

「なっ……！ 夜空てんめえ……」

挑発してばかりの割に、相手の挑発には簡単に乗ってしまうようだなこの女は。

悪口の言い合いなら私には勝てないようだ。頭の中で記録しておく。

と、理科は少し怒りで顔を歪ませながら数秒、落ちつくようにやりわりと笑みを浮かべる。

「……はあ、理科としたことがずいぶんとくだらないことで怒ってしまいました」

そう自分で反省して、無理やり怒りを押しこむ。

だが、その周囲に放つオーラからは、トゲトゲしており空気に圧力をかけている。

そんな理科は、話を反らすように向かいのソファの方を見て一言。

「時に夜空先輩、あのソファで寝ている”おこちゃま”は誰ですか？」

理科が目線を向ける先に寝ている幼女。

私がこの部屋に来る前からいるのだが、起きたらめんどくさいから黙っておいたのだ。

こんな言い争いをしていても、一向に眠りから覚めそうにない、スヤスヤと眠っている。

「ああ、高山マリアだ。この部屋の表上の住人だ」

「高山……。ああ、”スケープゴート”の妹か」

理科はその名字を聞いて、あの女であろう人物の別名を言って納得する。

「スケープゴート？」

「はい。今もちよつと遊んでいる最中なんですけどねえ。これですよ」

そう言つて理科が持ち前のタブレットを私に見せる。

そのディスプレイに表示されていたのは、可愛い女の子のキャラクターと、ポップな雰囲気ネットオセロのゲームだった。

「”白黒大戦ぶら☆ほわ”。可愛い女の子のアバターと特殊なルールで人気のネットオセロですよ」

それは私もネットの広告で見たことがある。

中身は普通のオセロだが、勝つて得たポイントを使って萌え美少女のアバターを勝つたりコスチュームしたりして遊ぶこともできるらしい。

そのキャラクターも人気イラストレーターや人気の声優さんを使いしており、ただのオセロゲームではあるがそつちに目を配るユーザーが多い。

課金要素も僅かで、完全実力主義が売りのオンラインネットオセロだ。

私はタブレットを持っておらず、携帯もガラケーのため手をつけたことはない。

「ほう、それとケイトがどう関係ある？」

「それは話すと長くなるので無駄な所は割愛させてもらいますが。単純に私のところに直接勝負をしかけてきたあのシスターを、私は完膚なきまでにフルボッコにしてやりました。あはっ☆」

と、理科は勝ち誇ったような笑顔でそう言った。

確かケイトは大のオセロ好きで、その実力もかなりのものだ。

私も何度か無理やり勝負させられたが、適当に相手をするつもりがいつのまにか本気になり、何十回やった中で数えるくらいしか勝てたためしがない。

そのぶら☆ほわも、確かあのシスターは上位ランカーだったはずだ。そんなのを叩きのめすということは、やっぱり頭だけはいいようだな。

「なるほど。スケープゴートはケイトのハンドルネームということか」

「そういうことです。少ない頭で良くわかりましたね夜空先輩」

最後にまた余計に一言付け足した後、理科はタブレットを操作し始める。

よほど私の事が嫌いなのか気に食わないのかは知らないが、発言するたびに喧嘩腰だ。

正直武力で黙らせてもいいのだが、相手の権力が勝る。変に手を出すと学校側から何を言われるかわからない。

そしてオセロをやりながら、理科は静かな瞳でこう口にした。

「ふふ。夜空先輩、人間とオセロって似てると思いませんか？」

「……というと？」

「人間誰にも白と黒があって、安全な位置を取ろうと躍起になっている。笑えますねえ」

「……」

理科のその言葉は、単に他人を見下す発言だろうか。

だが、それがただの中傷には思えない。どこかでこの女は、時には自分すら罵倒しているように感じる。

頭が良すぎて評価され過ぎているからこそおかしくなっている。そう思っていたが、どうにも違うようだな。

だからこそなのか、この女に対してどこか熱くなれないのは。

そう、この女も……人生に対して絶望したくなるような……そんな背景がある気がする。

「ん……ううん」

そんなことを思っていると、ソファーに寝ているマリアが目覚ました。

むつくり起きて、目をこすり周りを見渡し始めたではないか。

ああ、まためんどくさいことになるな。生意気なお子様は扱いに困る。

「むにゃ？ つい気持ちよくて寝てしまったのだ」

「ふん、ずつと寝てくれていてよかったのにな」

呑気なお子さまに対して、私は不機嫌な態度でそう皮肉を言う。

ただでさえ近くにはめんどくさい後輩がいるのだ。そこにめんどくさいクソガキが絡むと私の気分がさらに悪くなる。

今日はサボればよかったな。なんで部活に来たんだろうか。

「むー。夜空、お菓子くれなのだ」

「今週の分はもうあげただろうが。明日バイトだからその時にまた貰ってきてやるから我慢しろ」

「えー、使えないなあ。お菓子くれなきや夜空がこの部屋にいる意味がないのだ」

「あー。これだからクソガキは腹立つんだよ……」

未だにこの部屋が自分のものだと思っている呑気なマリア。

そろそろ、教育してやった方がよかでしょうか。

「マリア。もうこの部屋は貴様だけのものじゃない。この部屋は隣人部の部屋になった」

「そんなの認めないと言っているのだ!!」

「認めるも認めないも力無き貴様には関係のないことだ。この部屋の所有者である貴様の姉には了承を貰っている」

「んにゃ！ 私はあるのババアからこの部屋を管理するよう申し使っているのだ。だから私が駄目と言ったら駄目なんだぞ!!」

ああいえばこういうマリア。

ただ学校にいるだけのクソガキがよくもそこまででかい顔ができるものだ。

かといって武力行使してもいいが、そうしたら隣にいる白衣を着たムカつく女に何言われるかたまったものじゃない。

ほら見ろ。そう思った矢先マリアに悪戦苦闘している私を見て、理科があくどい笑みを浮かべている。

「ふふふん。なんか子供に冷たくないですか？ 子供の言うことにむきになって……夜空ちゃん可愛いですねえ」

「おっ！ 夜空がこんな幼女に対してむきになってるのだ！ 大人げないなあ夜空は〜」

「貴様ら……皆殺しにするぞ」

だめだ。こいつらと一緒にいるとどうにかなってしまいそうだ。

抑えろ私。何か楽しいことを考えるんだ。

「……んで、眼鏡の人は誰なのだ？」

「ああ、そういえば自己紹介はまだでしたねえ。自分は志熊理科と言います。よろしくお願いしますねマリアちゃん」

「むく。なあなあお菓子くれなのだ」

理科はマリアに好意的に接すると、マリアにお菓子を求められる。

「お菓子ですかあ。まああるっちゃあるんですけどねえ」

そう少し困ったように理科が言う。

白衣のポケットの中から、飴を一つ取りだし。

ニコニコ笑って、それをマリアに手渡す理科。

「どうぞ。理科はその無愛想なお姉ちゃんと違って優しいんですよお」

「イラツ☆」

「ありがとなのだ。本当に理科はこの無愛想なうんこ夜空と違って

やさしいのdいでででで!!」

あまりにも調子のいいことを言うので、私は等々マリアの頬をつねった。

するとマリアは泣き顔で文句を言ってくる。

「なにするの दौरानこ夜空!!」

「ああ!？」

「ひい!!」

つい本気で幼女を威圧する私。

だから、そんなことしたら理科の思うツボなのに。

「も、もう知らないのだ! これからは理科にお菓子をねだるのだ!!」

そう拗ねて、マリアが貰った飴玉を口に含むと。

徐々に、その顔が真っ赤に染まっていく。

そして、身体を思いつきり跳ねて高い叫びをあげた。

「ぎゃああああああああああああああああ!!」

いったい何があったのか。

理科の方を見ると、理科があららと困ったような顔をした。

「まあそれしかなかったんですよねえ。試作品でもらったスーパー刺激十倍キャンディ。舐めれば眠気がさっぱり、ちなみに数時間は口の中に辛さが残りますので」

「う……うえええええええええええん!!」

なんとということか、理科は子供に与えるべきではないお菓子を与えて悪びれもしていない。

マリアはそのキャンディの刺激に耐えきれずその場に吐きだし、そして泣き叫び部室から出て行ってしまった。

私も私だが、理科……恐ろしい奴だ。

「さてと、騒がしい子供はいなくなりました☆ ああ夜空先輩、常に眠そうにしているあなたにもお一つあげましょう」

「いらんっ!!」

そう言っただけにその衝撃キャンディを投げつける理科。

当然私は食べるつもりはない、が……なんかの悪戯に使えそうなので一応貰っておこう。

そんな私の考えを踏まえると、この女と私が仲良かったら学校中で悪さばかりしてそうだな。

まあそんな日は来ないだろう。私はこの女と仲良くするつもりはない。

私は……女が大嫌いだからな。

数分後、部室の扉が開いた。

マリアが帰ってきたのだろうか、とも思ったが……どうやら違った。

入ってきたのはこの部活の四人目の部員、楠幸村だった。

「おはようございます。せんぱいがた……」

「ああ、おはよう」

相変わらずのつぺりとした雰囲気で、礼儀正しくやってくる幸村。

この男もなんというか、女みたいだから嫌いだな。

そうやって弱弱しく振舞って、助けてもらってばかりいるやつは特にな。

「おはようございます楠くん。夜空先輩と二人じゃ話が盛り上がりがない所でした」

「……」

我慢しろ私。

もうこの女の言うことは川のせせらぎとでも思え。

幸村もせめて、こんな私の心を晴らすくらいのことをやってくれ。

「そうですね。おくれてもうしわけございません。はらをきってわびるしよぞんです」

「いや、この部室で事件沙汰はやめてくれ」

「さようですか。ときに夜空せんぱい、お客様がおみえになられてますか」

お客様？

幸村はどうやら誰かを連れてきたようだ。

マリアのことか？ でも騒がしい声は聞こえてこない。

もしや新たな入部希望者か？ もうこれ以上はいらないぞ。

そんな色んな事を私が思っていると、その人物が部室に入ってきた。

た。

輝かしい金髪のツインテールをした。なぜか目の色が片方ずつ違う小さな少女。

そのゴスロリの格好も相まってか、何かのキャラのようなそいつは、隣人部に現れた。

私は、その少女を知っていた。

「……お前は」

「……」

そう、そいつの名前は羽瀬川小鳩。

まったくもって似ていないが、あのヤンキーの妹だ。

「あああらかの部活にはずいぶんと奇妙なのばかりがやってきますねえ。夜空先輩の変人オーラに引きよせられるように……」

「志熊理科。これ以上言ったら本気で殺す」

さすがにこれ以上は理科相手に容赦はできそうになく、とりあえずそう宣言だけしておく。

だが怒ってばかりはいられないな。小鷹の妹が、兄を探してこんなところまでやってくるとは。

ずいぶんとあの兄に懐き過ぎではないかと思う部分は多々あるが、奴の家族背景を思い浮かべればこの子がどれだけあの男を必要としているかがわかる。

まだこんなにも幼く、父親が海外に行って家におらず、母親はもうこの世にいないんだ。

同情はしないが、気持ちくらいはわかってあげたい。私にだってそういう情はあるんだ。

「ど、どうした……の？　こんなところまでお兄さんを探しにきたのかな？」

似合っていないのはわかっているが、小さな女の子にいつもの態度はしてられない。

私は苦々しくそう見繕いながら、小鳩に接していく。

「うっ……。ククク、ああそうだ。我が下僕がこのちんけな場で世話になつていてというのでな、迎えに来てやったところだ」

そう、小鳩はくろねくを真似たレイなんちやらのキャラになりきって答える。

ああもうこれが無ければ面倒見のいいやつなだけだなあ。これがめんどくさいんだ。やつぱり欠点は出てくるものだ。

だがそこでめんどくさがってはいけない。子供のやることだ。大人は認めてあげるもの。

「そうか。お兄さん思いの優しい妹さんだね。まあつまらないものしかないけど、お兄さんが来るまでゆっくりしてなさい」

私は優しく小鳩を部屋まで誘導してあげる。

小鷹め、まだ用事が終わらないのか。早くこの可愛い妹さんを迎えに来てやれ。

癪だが私も含めてこの部活の捻くれた連中に囲まれたら、ただでさえアホなこの妹がさらにアホに育つぞ。

「おやおや夜空先輩。先ほどのマリアちゃんに比べるとその子にはずいぶんと優しいんですねえ」

「うっ……。まあ、”小鷹の妹”だからな」

「なるほど……はあ?」

さりげなく私がそう説明すると、理科は疑ったような目で小鳩を見て驚愕する。

ああそうか。こいつが小鷹の妹だつてことを知らないのか。まあ初めて会ったのだからしょうがないか。

そして当たり前の反応だ。あの眼つきの悪い兄貴の妹がこれだもんな、信じたくないのは気持ちとしてはつきりとわかるぞ。

理科はどうにも苦い表情を浮かべて、一言こう呟く。

「羽瀬川先輩……悪い人じゃないとは思ってたんですけどね……」

「いや、ガチらしいから。攫ってきたとかじゃないから」

今にも信じられないと言わんばかりに理科が小鷹を悪者にする。

だがこいつは正真正銘羽瀬川小鷹の妹。

それをもう一度説明すると、理科が眼鏡を曇らせて頭から湯気を出した。

「……んんっ!? いやいや遺伝子上おかしいでしょうが、あの人類の

悪い顔を寄せ集めしたような男の妹がどうしてこんなお人形さんみたいな可愛い子になるんですか!? 攫ってきたか拾われたかしない
と不可能でしようが!!」

「言いたい事はわかる。羽瀬川小鷹の妹がこんなに可愛いわけがない
とか言いたいのだろうか、そこは言うときりがないからやめるぞ」

「ぐっ……。くっそあの人工的な髪の色といい羽瀬川家は研究材料の
集まりなのかあ? 気になって仕方ねえつつうんだよ!!」

最後に口調を崩して、理科は一人で色々と計算しだした。

しばらくそこで悩んでいろ。正直貴様がいると子守り一つできや
しない。

「さて、天才バカは黙りこんだし。すまないな小鳩、コーヒーくらいし
か出せないんだけど」

「う……。クツクツク。我は小鳩ではないぞ」

「あつ……。ああ済まなかった。ええと確か……。ナパ・キャットワン
チャイ?」

「適当やないかい!!」

私がそう聞くと、小鳩はやたらとキレのあるすごいツツコミを私
に浴びせた。

ずいぶんと洗礼されたツツコミだ。あの兄あつてこの妹ありと
言ったところか。

適当に言った名前を否定した後、小鳩は得意な口上で自身の真名を
口にする。

「我は深淵をも支配する偉大なる闇の王、レイシス・ヴィ・フェリシ
ティ・煌であるぞ!!」

「そうかそうか、あまりにも長くて覚えられないんだ。なんとか覚え
るようにする」

「クツクツク」

私が話を合わせると、小鳩はご満悦のようで調子を取り戻した。

「それで、煌さんは学校がお休みなのにもかかわらずに、お兄さんを探
しにこの学校にわざわざやってきたのか?」

「そうだ。最近我が眷属が部活だ部活だと帰りが遅いんじや。だから

最近の私の供物がいんすたんとばかりで……」

「……そうか」

その話を聞くと、私は少しばかり申し訳無くなった。

一方的に小鷹を部活に引き込んだのは私のエゴだったとして、そのおかげであいつが家に帰る時間が遅くなっている。

配慮が足りなかったか。だが小鷹も小鷹だ、一言あれば早めに帰すものを……。

家で一人早く帰ってテレビを見るのでは寂しいはずだ。そうだ、一人は寂しいんだ。

こんな小さな女の子なら……尚更な。

「……すまなかつたな。お兄さんを部活に誘ったのは私だ。今度から早めに帰すようにする」

「……」

私がそう謝ると、小鳩は満足した……ようにも思えなかった。

どっちかというところ、そこまで言わせるつもりはなかったみたい、遠慮をしているようにも思えた。

「……ねえ、一つ質問してもよいか？」

「あ、ああ。どうした煌さん」

少し間を開け、小鳩はレイシスの口調を閉じて私に質問してきた。だがあの兄と違って標準語でもない。その口ぶりだと九州の方の方言か。

レイシスのしゃべり方を聞く限りでは標準語もしゃべれなくは無さそうだが、前に小鷹は九州に長くいたとか言っていた。

その時のしゃべり方に慣れてしまったのか……。

「……うち、いくつに見えちよる？」

「ん？ どういう意味だ？」

「……やっぱいい」

私の反応を伺うと、小鳩はとても残念そうな表情を浮かべた。

いくつに見えるという質問。ませたガキにしては大人扱いをしてほしいという意味だろうか。

と、その質問を踏まえて私はあることに気付く。

小鳩はこの学校の通行許可書を首からぶら下げていない。確か部外者がこの学校に入るためには入口で許可書を貰わなければいけないはず。

それに、小鳩が仮に”小学生”だったとして、お兄さんに会いたいという理由で学校に一人通すだろうか。

以上の事を踏まえて考えると……答えは一つしかなかった。

「……まさか、お前この学校の生徒なのか？」

そう私が尋ねると、小鳩は首を縦に振った。

ということは、小学生だと思っていたのは間違いだったということか……。

「……高等部……じゃないとしたら中等部か。中学生……か」

「……なんか、とてもがっかりさせた？」

「……発育悪いな」

「うっ……」

私を心配するように顔色を伺ってくる小鳩に、私は悪口半分ですう答える。

そうか、中学生だったか。ということは余計な心配は不要だったな。

我ながらバカだ。中学生相手に子供をあやすような態度まで取って。

だったらもう、必要は無さそうだな。

「んで？ 中等部の貴様がなんのようだな？」

「うっ……」

私が態度をいつもの調子に戻すと、小鳩は軽く怯んだ。

「どうにも強く出過ぎか？ いやいやこれが私の通常営業だ。」

だから問題ないのだ。私はただ普通に接しているだけだ。

「……まあ、小鷹ならもうすぐ来る。だから待っている」

「く……ククク、ならば遠慮はせぬぞ」

「ああ、というかその口調はあれか？ 中二病ってやつか？」

「ぐふお！ ちゃちゃちゃうわ!!」

私が痛い所を突くと、小鳩は焦ったようにそう否定する。

いやいや中学生でそのしゃべり方なら百点満点で中二病だ。確定だよ、否定のしようがない？

まあ中二病にかかっている奴が中二病だと指摘されるのは恥ずかしいことこの上ないがな。それは私だって覚えがある。

「しかし一人勝手に中二病で盛り上がるのは構わないが、仮にも私たちは学校の先輩だぞ？ その態度は失礼じゃないか？」

「あ……。す、すすすみません……。でした」

私が至極全うなことを小鳩に言い放つと、小鳩は怯えながら、言葉を震わせながらそう謝った。

うくん、どうにも大人げなかったか。もう少し寛大に振舞った方が先輩としては好かれるのだろうか。

私としては理想の先輩像を描くつもりはないが、相手は小鷹の妹だ。

ということとは、丁重に扱ってやるのが私としての情だろう。

「しかしお前もこんなところまでやってくるやつだ。きつとクラスでも馴染めず浮いた存在なのだろう」

「うう……。なんでそんなことがわかるんじや……」

「いや、なんとなく。可愛いだけが正義じゃないからな、いくら人形のように可愛くてもその痛さはぶつちやけ引くぞ」

「いっうう〜」

まずい、いじめすぎたか。この中二病、今にも本気で泣きそうだ。

どうにか手を撃たないと、ここで年下泣かせたら周りの連中の視線が痛い。

「さすがはよぞらせんぱい。こうはいあいてにもようしやのないそのふるまい、きょうしやのきわみです」

「ヒヒヒ。大人げねえわ夜空ちやくん。ほんと上司にはしたくない夕イプの人間ですねえ〜」

「……」

手を撃つ前に、すでに視線は悪かった。

幸村と理科の後輩コンビから蔑まれ、私は頭を抱える。

せつかくここまで兄を求めてやってきたこの痛々しい妹に、私がし

てやれることはないだろうか。

ここまでボコボコにしておいてあれだが、いくら女嫌いの私でもこの小さな子にくらいは優しくしてあげたい。

中等部。聖クロニカの中等部か……だったら。

「おいスメラギ」

「ひっ……。す、スメラギ?」

「ああ、お前が自分で名乗ったんだろ? 自分の名前くらい誇りを持って」

「く、ククク! そ、その通りだ!! その通り……。ごめんなさい」
「もういいわめんどくさい。無理に敬語とか使わなくていい、なんだから後輩に無理強いしているみたいで心が痛くなってくる」

そう私は謝りながら、一枚の紙を小鳩に手渡す。

それは、隣人部の入部届けだった。

それを見て、小鳩は首をかしげる。

「な、なんじゃこれは?」

「お前、兄貴が家に帰ってくるのを待つのが嫌なのだろう? だったら兄と一緒に部活に入ればいい」

私は小鳩に、部活に入ることを提案した。

そうだ。家に一人でいるのがいやなら家にいなければいいんだ。

中等部の生徒が高等部の部活に入ってはいけないという規定はない。なので、こいつは隣人部に入ることができる。

それに、妹なら問題はない。むしろ小鷹としても、妹を近くに置いてられるし安心できるだろう。

「え……。ええの?」

「何を、決めるのはお前だスメラギ。嫌なら入らなくてもいいし、入りたいなら入ればいい。少しは周りに流されるだけでなく、こういう小さな選択くらいはきちんとしてらどうだ?」

「……」

私がそうキツめに言うと、小鳩は少し悩む。

ああ悩め。この部活に入るということは、自分の今の現状を認めざるを得ないことと同義だ。

そして変革を求める立場になるということだ。今の自分の孤独を認めたくないならばこの部活を否定すればいい。

少なくともこの部活の連中は、それぞれが変革を求めている。変わることを求めている。

今の自分に置かれている腐った青春に対し、反逆の狼煙を上げる覚悟を持った連中だ。

だからこそ、来いよ羽瀬川小鳩。お前もこちら側に来て、変わる努力をしてみればいいさ。

「……ありがとうございます。夜空……先輩」

「むず痒いな。ということとは入部するということだな……」

私が言うと、小鳩は首を縦に振った。

その返事だけで充分だ。お前は立派な選択をした。私からだが賞賛を送らせてもらう。

「手を出せ、スメラギ」

「え？」

「握手だ。これから青春を共にする仲間としてのな」

我ながらなんとも臭い台詞だ。

だが時には、この熱さも必要だろう。

建前上、私は隣人部の部長なのだからな。

「……よろしく、おねがします」

「ああ、百点満点だ」

そう手を差し出す小鳩。

そんな小鳩に対し、私も握手で返した。

そして私は、手に握っていた何かを小鳩に手渡す。

「……飴玉？」

「プレゼントだ。これでも舐めて落ちつけ」

「あつ、その飴玉」

理科は何かに気づいたようにそうぼそつと呟く。

小鳩はそれに気づかないまま、ちよつと笑みを浮かべてその飴玉を口に頬張った。

そして、空高く跳ねるように叫びを上げた。

「んぎやああああああああ!!」

そう、その飴玉はさつき理科にもらった悪戯用の飴玉だ。

この三日月夜空が、後輩を導く心優しき先輩だと誰が言った。

私に変な苦勞をさせていた分のお返しはさせてもらおう。

「はっはっは。後輩は先輩に弄られてなんぼなのだ」

「うぐぐぐぐぐぐぐ。やっぱり……気にいらへん……」

そう苦々しい表情で私を睨む小鳩。

そして数分後、小鷹とケイト、そして逃げたはずのマリアまでもが部室へとやってきた。

まず最初に小鷹が、小鳩の存在に気づく。

「小鳩、お前どうしてここに……」

「クツクツク。我もこの部活とやらに入ることにした。よろこべ眷属よ」

そう小鳩に言われ、何がどうわからず小鷹は目が点になった。

これまでのいきさつを説明すると、小鷹は疑うような眼差しで私に訪ねてきた。

「お前、俺の妹まで騙して部活に入れたわけじゃねえよな？」

「そんなことはしない。今回はちゃんとお前の妹が選んだことだ。後ろの二人も立派な証人だ」

そうとだけ私が説明をすると、小鷹は煮え切らない物を感じながらも、無理やり納得した。

その後、ケイトがなにやら理科を睨みつけた。

「おい博士ちゃん。なんかうちの妹に変なもんあげたそうじゃあないか？」

「ああ申し訳ありませんねえ。あなたの妹が卑しくお菓子を求めて来たので、ぽっけに入ってた適当な物を渡しただけなんですけどねえ」

ケイトに追及され、理科は笑みを緩ませずに嫌味つたらしくそう答える。

そういえばこの二人仲が悪かったな。あの高山ケイトが唯一手を焼いた人物、それが理科だ。

やはり、出来すぎくんは心に穴を開けている物なのだ。

「まったく、今日の所は許してあげるよ。この借りはネットオセロでつけてやる。」ウルトラアンハッピー」さん」

おそらくケイトが言ったそのネームは、理科のネットオセロのハンドルネームだろうか。

なんとという人生クソ食らえなハンドルネームを設定したのやら、日曜日の朝が泣いているぞ。

しかし……顧問も入れて七名。ずいぶんと個性あふれるメンバーがそろったものだ。

友達を作る部活——隣人部。わずかな間でここまで大きなものになるとは。

「ふっ……」

私は思わず笑みを浮かべる。

当初の目的とは大きく外れたが、仮面を被ったままここまで大きな集まりを作れたことに笑いが起きて仕方がない。

全ては私の腐った青春を破壊するための偽りの部活。それはまさに、オセロの白と黒のように。

私の新たな色が、今まで私を染めた悪しき色を染め上げなおす。そして全てがクリアになったら、私は……失った友情を取り戻すのだ。

「どうした？ 珍しく笑って……」

そう尋ねてくる小鷹に、私は優しい口調で、こう返した。

「ああ、嬉しいのさ。ただ……嬉しいんだよ」

そうだ、嬉しくて仕方がない。

小鷹が私の、手の内にあることが……。

三日月夜空。失った友情を取り戻そうとするその少女。

彼女は十年前に失った。大切な日常と、その日常を共にした親友を。

崩壊した家庭に絶望していた彼女にとっての、唯一の光だったその親友の存在。

失うべくして失ったわけではない、それは神の悪戯によって奪われたのだ。

だから夜空は憎む。己から全てを奪う物を、大切なものを奪おうとする全てのものを。

「なあトモちゃん。私はようやく取り戻す時が来たんだ……」

誰もいない静けさが増す教室。

そこで、彼女はいないはずのものに話しかける。

そうだ。彼女にはいないのだ。この歓喜に満ち溢れる感情を伝えられる存在が。

だからこそ彼女は想像する。己の全てをさらけ出せる存在を。

故に彼女は騙す。己を騙す。大切な存在を騙す。

そして押しつける。自分が奪われたその重みを、悲しみを……親友という立場を使い。

「十年前。」私と羽瀬川小鷹は親友だった。切っても切れない関係だ。私にとってのあいつは……希望の光だ」

その真実を、誰にも渡したくはない。そう少女は願うだろう。

大切な親友を、親友である存在は全てが自分のためにある。自分のためになくはならない。

それが間違いであろうが、友情という言葉に意を唱えるものであるうが。

それを全て正当化しなくては気が済まないのだ。じゃなければ、少女は不幸の星の元に生まれるはずがない。

「この私の気持ちを……あいつに伝えたら……あいつはわかってくれるだろうか」

夜空は静かな声（うた）でそう尋ねる。

その願いを、彼女にとってのたった一つの希望を。

そんな彼女の希望を、この時……一人の不規則が偶然にも……聞いていたことをただ知ることなく。

「……あの女と……羽瀬川小鷹が親友？」

そう、夜空の知られたくない真実に到達してしまったその少女は、その真実を反復させる。

何度も何度もそう口にした。そして、そのことに対して何度か自問自答を繰り返す。

結果的に、少女は何度も同じ答えにたどり着く。

「……友情なんて、くだらない」

そう呟いて、その少女はその場を去っていった。

だが興味が湧いた。その友情に、どれだけの価値があるのかを。

だから少女はこの時、自らの足で動くことを決めた。

柏崎星奈はこの時、三日月夜空にとって”最大の敵”になった。

CONNECT 三日月夜空の気持ち

隣人部を設立して早くも一か月ほど立とうとしている。

同級生の小鷹の他に後輩が三人十子供一人が入り、顧問とまでついており私は正直驚いている。

部活を創設し、成果という成果は十分に出している。軌道は波を描いているのだ。

だが、私にとってその成果とは正直小さいものだ。私の心は未だに満たされていなかった。

表向きは友達作りの部活、だがそんなものはあくまでスローガンなだけであって、部活に入った目的など個人個人違うものだろう。

ぶつちやけると、部長の私にすらこの部活には本当の狙いが存在する。

私はこの部活で失ったものを取り戻す。そのために私は動き出したのだ。全てから逃げ出したこの私が……。

「……今日は誰もいないか」

私は一人部室に入り、誰もいないことを確認し小説を開く。

少し前の私ならば、エア友達のトモちゃんとお話をして自分を満たしていたのだろうが、今は正直トモちゃんと話す気分ではない。

その時の私には『希望』すらなかった。だからエア友達というヘンテコな趣味を作り自分を保っていた。

だが今の私には『希望』がある。そう、隣人部という希望が……と、私は今嘘をついた。隣人部はあくまでその希望を逃がさないための枷なのだ。

私にとって本当の希望とは、”羽瀬川小鷹”なのだ。

実は私はいつこのことを”知っている”。だがやつは私のことを知らない。

いや、”気づいていない”……と言った方が正しいだろうか。

あの時授業でコンビを組まれたあの日、いや……あいつがこの学校に転校してきたあの日から。

絶望だらけの世の中にあきれ返っていた私に、変革の狼煙があがっ

たんだ。

かつて、こんな私に大切な言葉をくれた人がいた。

私が生きる上で大切にしようと思った言葉。

今では、その言葉には価値などないだろう。だが、どんなことがあっても私にとってのその言葉は、人生を変えてくれた言葉だった。そう、私の母がくれた言葉。その母が私にとって大切な存在だった時にくれた。とても美しかった時にくれた言葉。

——友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切にできるような本当に大切な友達を作りなさい。

……ある日、その言葉をくれた母は変化した。

自身にとつて大切な存在に逃げられ、捨てられ、心を闇に閉ざしてしまった。

母と父が離婚をした。私がまだ幼く物心ついたその時に。

離婚寸前、母親と父親の喧嘩が耳に残るくらい毎晩毎晩行われた。父親に縋りつく母親、あの大切な言葉をくれたとは思えないくらいに、惨めで見るに堪えない姿だった。

そんな母親でさえ、父親は大切にしようとした。だが、すれ違いを繰り返すうちに、その愛は冷めていった。

何度か父は私に言った。「あんな母さんでも好きか？」と。

一方的な愛に囲まれ満足しているだけの母親。愛を訴えるだけで愛を与えることを知らない母親。

自分だけが愛されて当然だと謳う母親。そんな惨めな女に等々、父親は愛想を尽かして別の女の所に逃げた。

その逃げた先の女というのも、また皮肉な話だった。

その女は、母にとつての……たった百人分大切にできたたった一人の親友だったからだ。

あの言葉を私に言った母親が、その友達に裏切られた。

友達に全てを奪われた。略奪された。とても大切な存在を根こそぎ持っていかれた。

母は絶句した。絶望に支配された。もう何もかもが信じられなく

なるくらいに、母親は変貌した。

毎日毎日、その友達と捨てた父親、そして父親に付いて行った”私の姉”について悪口を言う日々。

慰謝料を貰う度に、どうにもいえない顔をする度。私はそんな女でも大切な母親だから、私は見捨てられなかった。

何度も父親に、こっちに来いと言われた。姉からも声をかけられた。だが私は揺れなかった。

あの言葉をくれた母親が、このままで終わるはずがないんだ。そうだ、私はあの言葉を否定したくなかったんだ。

だから私は母親を信じることにした。私が元に戻してやる。絶対にあの言葉を、本物にしてやるんだって。

「お母さん。元気出して……。今日はお母さんのために、ご飯を作ったんだよ」

ある日私は、母を元気付けようと必死に料理をした。

これで少しは元気になってくれればと、思ったのもつかの間だった。

母はその私の気づかいに対して、当てつけのつもりかと詰られ、包丁で刺されかけた。

親愛なる母に殺されかけた。驚くことに、その時私は涙一つ流さなかった。

驚きが勝ったのだろう。泣くことを乗り越して何もかもが壊れた。あまりのショックなのか、その時から私は料理ができなくなった。

それから私は落ちぶれる母を見続けた。観測し続けた。その結果……見るたびに身震いを感じるようになった。

こんな生き物にはなりたくない。奪われて落ちぶれ、こんな存在にしたことを悪びれもしない”女という存在”を、私は嫌悪するようになった。

ある日から、私は女であることをやめようと思った。ずっと男のよくな格好をして、男になりたいと願うようになった。

誰かを救えるヒーローになりたい。そんなことを思いながら、友達を作ろうと頑張ったが、男っぽいという理由か私を避ける子供が多

かった。

友達もろくにできないまま、数日が過ぎていく。

私と小鷹は10年前、”親友”同士だった。

転校初日に見た時は「嘘だろ……」と思ったが、あのくすんだ金髪を忘れるはずがない。

十年前に多人数のガキに絡まれてたあいつを助けたのが羽瀬川小鷹との出会いだった。

それはまさしく運命の出会いだったよ、当時の私は非常にひねくれ者で、女なのに女っぽくしようともしない、男勝りの女の子だった。

無駄に正義感が強く、喧嘩も強かったから同姓の子からは遠い目で見られ、異性の子にすら恐れられた。

つまり毎日嫌気をさし、たまたまいじめられていた金髪の子供がいたから、正義の味方気取りで助けてやった。

「弱いものいじめはやめろ！」

私はそう言っただけで意気揚々と現れ格好つけた。ここでいじめられているやつを助けてやればカッコイイと思った。感謝されて当然だと思っただけ。

「ただ、その時そいつ、助けた私をどうしたと思う。」殴り返してきたんだよ。

助けてやったのにそいつは私を殴ってきた。

予想外の行動に、私の目が点になった。

恩を仇で返すとはそのままの意味だろう、そしてそいつは……小鷹は私にこう言った。

「俺は弱いものじゃない!!」

私に向ってそう言ったそいつの顔には覇気があった。私にそう言われたことは、多人数から殴られること以上に辛かったことを物語っていた。

その言葉を聞いた時、私は笑った。笑ってこう返してやった。「上等だ！」って。

弱くないというなら証明してみろ。口だけでなく行動でな。

私はそういう気持ちで小鷹と殴りあった。

自分が女だということを本当に忘れるほどに、男の子同士のガチの殴りあいを演じてやった。

それを見ていた多人数のガキどもが、無視をするなど私たちに向かってくる。

だが私と小鷹はそいつらをたった二人で返り討ちにしてやった。こいつと二人なら10人の相手にでも勝てる。その時はそう思えた。そいつらを返り討ちにした後も、私は小鷹と殴りあいを続けた。

死闘の末、結果はドロ―。お互いに倒れ青春ドラマのようなセリフを吐いた。ドラマの主役になったような気分だった。

「はあ……お前強いな」

「ふう……ふう……。ああ、お前こそな」

そんな会話を繰り返しながら、互いの実力を褒め合う。

それから数分後、二人しかいなくなった公園で、私はそいつと話をしていることに。

「……ごめんな、助けてくれたつもりだったんだろ？」

「ああ、だが”オレ”の一方的な押しつけだ。お前からしたら嫌だったようだし」

お互いに先ほどの事を謝り合う。

この時、私は自分の事をオレと言った。女の子ではなく、男の子としてそいつに接することを決めた。

格好も男の子っぽいし、なにより女としてそいつを見たくはなかった。

もし間違った感情を抱けば、あの母みたいになってしまうのではないかと思っただけからだ。

だから、間違いたくはなかった。そして、そいつにも……変な感情を抱いてほしくなかったから。

「俺、羽瀬川小鷹って言うんだ。君は？」

「……オレは」

そいつに名乗られ、私は口ごもった。

三日月夜空と、名乗ってもよかったが、どうやってもそれは女の名

前だ。

今の自分はその名を名乗れない。だから、私はなんとか誤魔化すように名乗った。

「ごめん、自分の名前……あまり好きじゃないんだ」

その言葉は、誤魔化すと同時に少しばかり本心が入っていた。

なにせこの名前は、あの惨めな母がくれた名だからだ。

あの母親に付けられた名前をこの時使いたくないと思ったのは真だ。

「そつか。じゃあ……君の事をなんって呼べばいいんだ？」

そう、小鷹が訪ねてくる。

何と呼べばいい、何と呼べればいい。

この私に対して心を開いてくる、この優しい少年に嘘をついていることを悩みながらも。

だが、それを自分の優しさだと正当化しながらも。

私は悩んだ末に、こう名乗る。

「……ソラ」

それが、十年前の私のあだ名。

それを聞いて、小鷹は目を輝かせて私の名を呼ぶ。

「ソラ……か。かつこいいじゃん」

「か、かつこいい？」

「うん。だったらそうだな、俺のこともあだ名で呼んでもらおうかな。だったら……」

そう悩み、少年はその名を名乗った。

私にとって、唯一無二の大切な名を。

私の心に刻まれた、私にとっての希望の名を。

私はその名を忘れない。その存在を忘れない。

ずっと、一緒にいたいと願ったその時の気持ちを忘れない。

今でも、頭の中で浮かぶその名は……。

「――タカー！」

その後私は小鷹に似たものを感じ取り、次の日からは仲良く遊ぶ友達同士に発展した。

昨日の敵は今日の友とはこのことだ。あの言葉は嘘ではなかったのだ。

そして私にとって初めての友達。この日から私の見る世界はガラリと色を変えた。

楽しかった。本当に楽しかった。あの日々が、あいつと共に過ごしたあの日々が。私にとっては宝で、それは夢のようで……。

夜空という名前の通り暗闇にとらわれていた私に朝が来て、その太陽がどの光よりも神々しかった。

そんなある日のことだ。

私がタカと親友になって数ヶ月経ったある日、遠夜市の高台で。

少しだけ、私は己の本質の少しをさらけ出そうと努力をした。私は母からよく言われていた大事な言葉を小鷹に送ったのだ。

「小鷹、オレの母さんが言っていた。友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切にできるような本当に大切な友達を作りなさいって。たった一人だけでもお互いのことを誰よりも大切に思える本当の友達がいれば、きつと人生は輝かしいものになるだろうって」

かつての母が言っていたその言葉こそ、私の生きる上で欠かせない原動力だった。

今では、あの女が言うにはもったいなさすぎる言葉だ。あの汚れた口からは言っただけほしくない言葉だ。

私にとっては大切な言葉と同時に、私を縛る呪いの言葉。

こんな私にもいつか、本当の親友ができるかと信じていた。だからこそ、この時ばかりはこの言葉に従うことにした。

この時の私は神様を信じていた。神様は奇跡を起こすって信じて、私は奇跡への軌跡を描き続けていた。

その言葉が、あの母親がくれたたった一つの贈り物が、何かの結果になつてくれればと願った。

あんな母親でも、私に何かを残したのだからって証明したかった。その想いでいっぱいだった。

そんな私の願いに、神様は答えたのか……神様は本当に奇跡を起こしてくれた。

羽瀬川小鷹という存在が、奇跡の代弁者の如く私にこう言ってくれた。

「だったら俺は、ソラのことを百人分大切にするよ。百人……いや、百万人でも百億万人でも、世界中が敵になっても、俺だけはお前の友達でいる」

……心が震えた。

泣きそうだった。けどそれ以上にそう言ってくれる小鷹への恥ずかしい思いが勝った。

当時子供だった私に、本当の悲しみを感じることはできなかったんだろう。だがそれは、心に深く届いた。

この少年が、羽瀬川小鷹が私の失ったもの全てを埋めてくれる。

だから、何があってもこの少年だけは信じようと決めた。だって、こんなにも私の事を大切に思ってくれるのだから。

願いはかなった。奇跡は起こった。私は最高の親友を……百人分の友達を作ることができた。

こいつがいれば私には怖いものはない。もう何も怖くない、怖くはない。

「タカ……大好き!!」

「ちよ……苦しいよソラ」

これからもずっと一緒だと、ずっと親友だと。

そう、思わずにはいられなかった。だが……。

後に思い知ることになる。その時は永遠ではなかったと。幸せだった時間は突如として途切れた。

それはなんの予兆もなしに、小鷹は私の前から姿を消した。

姿を消す前の前日、小鷹が私に何かを言いたそうにしていたのを思い出した。

「明日、学校が終わったらこの公園に来てくれ!! 大事な話があるんだ!!」

ある日、少年は私に言った。

当時の私にはその言葉の重みを理解できなかったのだろう。

私自身も、いい機会だと思えば自分が女であることを明かそうとし

た。

「だったら、オレも大切な話をタカにする!!」

この少年に対して、嘘をつき通すことに限界を感じた。

こいつにだけは嘘をつきたくないって、私の心の罪意識が限界に達したのだ。

全てを明かそう。私の悩みも、悲しみも、本質も全てを……。

だけど恥ずかしくて行けなかった。あいつとの約束を果たすことができなかった。

その時の躊躇が、一瞬の弱さが命取りとなった。

その私の弱さが、どのような結果を引き起こすかも知らず、小鷹は結果として私の前から姿を消した。

私はすぐさま察した。大事な話とはきつとこのことだったんだって。

「羽瀬川さん？ 確か昨日引越したわよ〜」

違和感を感じた日、私は少年を探し回った。

そして得た答えがこれだった。あの少年は、私に別れを告げずに引越してしまったんだ。

この時、私は全てを理解した。理解せざるを得なかった。

「どうして……だったらそんなもったいぶらないで……早く言ってくればよかったじゃ……」

私は悔やんだ。自分の弱さを。

「嫌だ。お前がこの街からいなくなったなら……オレは……私はどうすればいいんだ」

何度も何度も後悔を口にした。

寂しさを口にした。だがその寂しさを埋めてくれる存在は……もういない。

だが、弱くはありたくない。これであの母みたいになりたくはない。

小鷹は言おうとしてくれたんだ。それを拒否したのは私。

だが、それを認めたくない。あいつがいないと何もしたくない。

「タカ……羽瀬川……小鷹。あ……ああ……あああああああああ

ああああああああああああ!!」

公園で一人、親友の名を叫び、言葉にならない涙を流した。

私をこの絶望の街に一人置いていった親友。

百人分大切にしてくれると、約束してくれた。だが、あっさりと約束は碎かれる。

絆という鎖は引きちぎられる。そのことに関して、私は憎しみを抱く。

親友に対しての膨大な愛が、膨大な憎しみを生む。

歪みたくないと思うほど、自分が歪んで行くのがわかった。小さかった私にすら少し感じていた小鷹への”愛”が、その時初めて”憎しみ”へと変わった。

でもその弱さを認めるのが嫌で、全部を小鷹のせいにした。

親友に自分の弱さを全てなすりつけた。小鷹は知らずとも、私の中ではそうすることでしか自分を保つことができなかったから。

その経験が私の中でくっついて剥がれなくて、何かある度にその事を思い出して唇を噛み殺した。

忘れてたくても忘れられない、あいつへの友情が、愛があふれ続けているのに。それがすべて憎しみに変わっていく度に自分が壊れていくのがわかった。

「こんな思い、二度としたくない」

私は何度もそう言った。言うたびに思った。

まずは小鷹のことを忘れよう、そうすることで前に進めるのだと自分の中で念じ続けた。

中学に入って、コスプレやネットラジオのような痛いことに走ったのを今も覚えている。

あの時以上のトラウマを生み出せば忘れられるのだと思ってやったことだ。過去の亡霊を消そうと私は何度も一人で葛藤し続けた。

ろくに友達も作らず、私は容姿がよかったのか近づく男も多かったが全部それをにらみ返して遠ざけた。

同姓の子たちなどもってのほかだ。女は全てを奪う醜い生き物。誰もかもと話さず、私は一匹狼を貫き続けた。

全ては”あの日”があったから。親友を作ったことで自分の中に生まれた深い傷。それが私に青春という二文字を遠ざけ続けていた。ただどあの日を忘れることができれば、でも忘れることができなかった。

どうして小鷹が私の中から消えない！ どうしてタカは私の中で居座り続ける!! やめろよ!! お前は私を置き去りにしたくせに!!
なんで……なんで……。

「なんで お前は、私の中で笑い続けてるんだ
よーーーーーー!!」

その笑顔が怖かった。

そのほほ笑みは間違いなく親友への優しいほほ笑み。だけどその時の私にはなによりも怖いものだった。

「ふざけるな！ 笑うんじやねえよ!! 私をこの街に置き去りにしたくせに!! 私を裏切ったくせに……裏切ったくせにいいいい!!」

その叫びが、どれほど醜いものだったかを自覚している。

その言葉の一つが、私の嫌悪する母親と”同じ物”であることを、思い知らされて私はさらに泣きじやくった。

そうか、こんな気持ちなのか。裏切られるとは、見捨てられるとは。

あいつはその笑顔で私に傷をつけた。その笑顔があったから私はここまで墮落した。ここまで悩み、狂うのならあの日なんてなければよかった。タカと出会わなければよかった。

私は泣いた。それでも諦めたくなくて抗い続けて、その度に一人でむせび泣いた。

あいつを忘れようとやらかして、やらかして……。

最終的に私が下した結論は、”諦める”ことだった。

あの日を忘れることも、親友を作ること、青春することもリア充になることも……全部まとめて”諦めてやった”。

その度に私はあの母に近づいて行くのがわかる。だが、もう暴走した感情を止める術が見当たらない。

人は一人だって生きていける。ウサギは一匹だとさびしくて死ぬというがあれは嘘だ。

隣に親友がいることでなにも怖くないと言ったあの日の私に変わり、今度は一人でいればなにも怖くないと言う私が生まれた。

「もう怖くない、友達ができないのなら自分の中で作ればいいじゃないか、有能な人間が生き残るといふなら全ての欠点を補え、私一人が完璧になればいいんだろう？ タカ……そうなんだろ？ そういうことなんだろ？ あは……あはは……」

笑いが止まらなかった。

不安定で不完全な私が初めてまともに出せた結論、唯一諦めることなくたどりつくことができた結果だ。その結果が”諦める”こととこののがまた皮肉な話だ。

私は家に帰ればやりたいこともなかったもので、勉強だけしていた。結果として今のクラスでは成績トップだ。

どうだ？ 友達がいなければ賢くなれるんだよ、この野郎。

その他、元々喧嘩も強かったので運動神経もよかった。様々な部活にもスカウトが来たが全部断ってやった。

そいつらは私が目的ではなく、私の能力が目的だったからだ。魂胆がバレバレなんだよくそが!!

私は容姿もよかったので、近づく男が多いのも変わらない。

でも容姿だけで中身は見えてない、しかも体目的で狙ってるに違いない。

そう前提で考え続けた結果、性知識が疎くそういう単語を聞くと顔が赤くなる。けど関係ない!!

「二人だけど関係ない!! 友達が欲しければトモちゃんがいる!! 勉強もできるし運動だってできる!! 不自由なんてなにもないんだ!!」
聖クロニカに入っすぐの私は、毎日そう心の中で叫んでいたっけか……。

すぐそばにいるリア充を睨みながら、自分は一人でもあいつら以上の存在なんだって。

「……もう、全部がいやだ」

そうぼそりと呟く。それはもう、数え切れないほどに。

「う……うう」

私はゆっくりと目を覚ました。どうやら寝てしまっていたらしい。気がつくのと読んでいたラノベの今開かれているページがぐしよぐしよに濡れている。

私は夢を見ながら泣いていたらしい。

まるで走馬灯のような夢だった。私の愚かな人生を物語るような夢だったよ。

そして正面には、羽瀬川小鷹がソファに座りながら鼾をかいて寝ていた。

「変な夢を見たのはお前のせいだったのか……」

私は寝ている小鷹に文句を言うように呟いた。

隣人部を作って一か月、いろんな事があつたが未だに小鷹は私が”ソラ”であつたことに気づいていなかった。

確かにあの時私は男を偽っていたが、こうも気づかないと、こいつはあつさりと親友のことを忘れてしまったのかもしれない。

私は忘れたくても忘れられなかったというのに、人生の八割以上私を支配し続けたくせにこの男は……。

隣人部を作ってお前と一緒にいる時間を大幅に増やしたのに、とんだ気苦労に終わってしまったようだ。

神様の奇跡なんて嘘っぱちだ。一度起こしても二度は起こさない。

でも、これでようやくあの日を忘れることができるのかもしれない。い。

本人と再会し、その本人が親友を忘れていると知ってしまった。長年呪縛に苦しんでいた私でさえ呆れ返ってしまう。

「本当に……ありがとう。そしてさよなら……」

ふと、私はおもむろに立ちあがる。

そして、寝ている羽瀬川小鷹の上にまたがり。

何を思ったか、私の両手が小鷹の首へと向かっていく。

この夢のせい、この男への歪んだ感情のせい。

自覚と無自覚が合わさりながら、私は別れの言葉を一方的に言いな

がら……。

私は、小鷹の首を絞めようとする。

「……タカ。お前なら……わかってくれるだろう?」

と、私がかつての少年に同意を求めたその時。

奇跡は、二度起こった。

「……友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切にできるよ
うな本当に大切な友達を作りなさい……か」

「!?」

一瞬、私の中の時が止まった。私の動きが突如として止まった。

あまりの衝撃に私は握力を失った。小鷹が突然、あの日私が送った
あの言葉を口にした。

どうして……? なんでその言葉を……。

その瞬間、私の頭の中が真っ白になった。

「う……ううん……」

小鷹がゆっくりと目を覚ます。

だめだ。この衝撃が離れない。驚愕の表情を崩すことができない。
私は固まった状態のまま、起きる小鷹をただただ見つめていた。

「……なにしてんだお前!」

小鷹が自分の上にまたがっている私を見て、驚くように飛び起き
た。

今自分はどんな顔をしてるんだろうか、おそらく予想もできないだ
ろう。

小鷹と目が合って数秒、ようやく私の中の硬直が解けた。

「はっ! な……なんだ?」

「いや、お前がどうしたよ? その手はなんだ? 俺の首を掴んでい
るが……」

「え? わ……私は……何を……」

「なんか信じられないものを見たような顔して……もしかして俺って
寝顔も怖いのか? あまりの恐さに俺を”絞め殺そうと”したん
じゃ……。これじゃおちおち寝てもいられねえな……」

そう困ったように小鷹は言った。

絞め殺す……？ 私が……小鷹を？

その事実を感じると、私は顔を真っ青にしてすぐさま小鷹から離れた。

「ご、ごめん！ 部室に入った途端狂暴なライオンが寝ている物とばかり」

「なに!? 俺の寝顔は幻すら相手に写すつてのわ!?」

そう咄嗟に冗談を言うと、小鷹は心外とばかりにそう口にした。

信じられないものを見た……か。

小鷹の言うことは正しかった。実際に私は信じられないものを見ていたのだから。

小鷹は覚えていたのだ。あの日を……。

この男は、ただ私に気づいていないだけだった。たったそれだけだった。

覚えていてくれたんだ。私がずっと忘れられなかったように、小鷹も私のことを覚えていてくれた。

驚愕の後、私の中で嬉しさと悲しさが暴れだしていた。けどあの時と同じく、恥ずかしさがそれに勝る。

「ね……寝顔も怖かったらそりゃ、だよなあ……」

「ん？ 何言ってるのお前？」

私は動揺を隠し切れていないようだ。言葉もろくに選べない。

だがこれはチャンスだ。この十年間こいつがどう思っていたのか。

欠片一つでもいい、私と小鷹の過去が結びつくこのチャンスを生かす他なかった。

逃げるな三日月夜空！ 今こそ立ち向かう時なのだ!!

「友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切にできるような本当に大切な友達を作りなさい……って」

「ああ、もしかして寝言言ってたのか俺、恥ずかしいな」

「その言葉は……どうしたのだ？」

私は必死の思いで平常心を保つ。

ゆるむ口元を必死で固くする。いつもの無愛想を貫くため唇をこれでもかというくらい噛みしめた。

「ああ、俺の親友が言っていた言葉なんだ」

「親友!？」

「なんだよ？俺にだって親友くらいいたよ、失礼なやつ」

今の”親友!?”は、”お前親友いたのか?”という意味ではない。

かつての私を未だに親友と呼んでくれることが驚いたからだ。

「す……すすすまない。そうかそうか、そりやあまた……最高の親友だったんだな」

「そうだ。俺の最初にできた最高の親友だ。その言葉もそいつのことも片時も忘れたことはねえよ、忘れられるわけがねえ」

……やばい、泣きそう。

まるで十年間悩みに苦しんだことが、全てひっくり返されそうなくらいに。

あの街からいなくなってから私の事を忘れることなく覚えていてくれた、彼への優しきに対して。

「そ……そう……か、ははは、お前ってリア……うう」

「夜空、お前本当に大丈夫か?」

「だ……大丈夫だ、問題ない」

「そうかよ、ネタで返せるなら問題ないな」

問題ないわけないだろ！今にも即倒しそうだわ!!

今にも、全部を明かしたい。だが……それはできない。

それは……したくない。だって……。今の私は……。

「だけど心残りが一つあってなあ、俺はそいつとずっと友達でいることができなかった」

「ど……どうして……だ?」

結末は知っていたが知らないふりを決め込んだ。

今の私は三日月夜空、ソラじゃない!!

「ある日親父の都合で町を離れることになっちまったんだ。それでそいつに別れの挨拶をしようと思ってただけど、結局できなかったんだ」

「そりやお前、薄情なやつだな」

この皮肉は、私の本心から出た言葉だった。

少しは私を置いて言ったこの男に、反論をしたかった。

すると小鷹は、そのことに対して否定することなく正直に自身の思いを口にした。

「そうだ。俺は薄情なやつなんだよ。あの日のことがしばらく頭から離れなかった。ぶつちやけ今でも俺の中で残留思念として残り続けている」

「どうやらこいつ自身も、あの日のことで悩み続けていたらしい。

それを聞いた時、一方的に小鷹にあたった自分を恥じんだ。

「タカ自身も、辛かったはずなのに……」。

私自身にも非があったというのに、私はバカだ。大バカだ。

「ソラっていうやつなんだけど、今はたしてどこでなにやってるんだろうか、今もこの町にいるのだろうか……」

「……………」

「できれば、もし神様ってやつが奇跡を起こしてそいつと再び会うことができればなら、そいつに一言謝りたいんだ。そいつは多分俺のことを許してくれはしないだろうが、それも全部俺のせいだ」

「そんなことは……ないと思うが。きつと……そいつはお前を”許してくれている”はずだ」

小鷹のその言葉に、私は弱弱しく答えた。

それは明らかに、私の本心から出た一言だった。

小鷹は私のその言葉を聞いて、笑ってこう返した。

「慰めのつもりか？ なんつうかお前って、たまにいいやつなんだよな」

「そ……そんなことは！」

「ああ……まるで……」

小鷹は何かを言いたそうにして、でもそこで言葉を区切って止めた。

そして鞆を肩に背負って部室の出口の方へと向かう。

部室を出る間際、小鷹は私の方を振り返り笑った。

「ありがとよ、俺の自慢の親友を、”最高の親友”って言ってくれて」「あ……ああ」

とうとう私の中で限界が来たみたいだ。

また明日とも言えず、言葉が出ないまま固まった表情で小鷹を見送る。

そして姿が見えなくなった後、私の緊張の糸が切れた。

「……………うう、なんだよタカ、覚えていてくれたんだ。私のこの苦悩は……………無駄じゃ……………なか……………った。隣人部を作ったことも……………お前が転校してきた時に感じたあの想いも……………けして……………無駄じゃ……………なか……………った」

一人部室でさびしく、ひつくひつくと嗚咽を漏らす。我ながら恥ずかしい、こんな泣き方をしたのはいつ以来だろうか。

よかった。この一か月小鷹を信じ続けた結果がこれだ。

私はどうやら、神様の奇跡からも逃げ出そうとしていたらしい。けど逃げなかったからこそ、神様は奇跡を二度起こした。

ようやく始まるんだ。私が大切なものを取り戻す物語が。

このくだらない十年間にさよならしてやる。私を縛っていた腐った青春に……………私は反逆する。

私はあの女のように……………母のようにはならない。

大切な親友を、手放しはしない。

「待ってる小鷹……………お前と私、二人揃って無くしたものを取り戻す時はきた。私とお前の青春はこれからだ。これで私たちはリア充だ!!」

私は一人叫んだ。

誰も聞いていなくてもよかった。これは自分に対して言ったのだから。

私の絶望の時間はここで幕を閉じる。ここから始まるのは三日月夜空のリア充物語だ!!

そう、私は再起を誓った。私の物語はスムーズにハッピーエンドへと向かうはずだったのだ。

そう、あの女が……………羽瀬川小鷹に近づかなければ。

あの女……………私にとっての最大の敵。

柏崎星奈が……………現れなければ……………。

第一章 ライバル出現編 友情破壊ゲーム

夏も近づくこの季節、来週には七月に入る。次第に気温も熱くなり始め、生徒達は夏服で登校する日が増えてきた。

俺がこの学校にやって来てから約二ヶ月。そしてあの女と出会い部活を作ってから約一ヶ月。

中学から高校一年まで友達もろくにおらず時の流れなど意識してはいなかったが、この学校に来てからはとても速く感じる。

それだけ、自身に訪れた変化が大きかったということか。

俺の所属している部活は、隣人部という。

その部活が掲げる理念は、友達作りだ。

友達作り。そんなもん勝手に作ればええやんとか思う人は多々いるだろうが、俺からすればかなり難しい課題なんだ。

なんせ俺の顔は自他共に認める凶悪面。性格は聖人にも等しいくらいできた人間だと自負しているが、人というのは外見から入って全てを決めるものらしい。

ので、俺は外見でまず近寄りたくないと思われた。関わったら命に関わると思われた。よって友達作りたくても動くに動けなかった。

動けなかったが、そこで動かなければ変化など起きないから必死に動いた。だが結果は実らなかった。

そんな時、俺と同じく友達が少ない黒髪の美少女、三日月夜空と結託してこの部活を作ったわけだ。

最も、俺とその夜空は大した仲良くない。むしろ互いに嫌悪しあっている仲だ。

外見が悪くて中身が良い俺と、外見が良くて中身が悪いあいつ。己の理想や考えが全く合ったことがない。

相性でいえば最悪に近い。きつと俺と夜空は一生かけても友達にはなれないだろうな。

だがそれでも共通する想いを果たすために、互いに手を取り合っている。

この先、本当に信じられる友達を見つげるために……。

そんな本日、ようやく隣人部にとって部活らしい部活が行われそうな雰囲気だった。

今までは部員をそろえるため、部員の勧誘や部活の方針を決めてばかりいた。

小さな努力の積み重ねだったが、ようやく部員が揃ってきたのだ。

俺、羽瀬川小鷹と部長である三日月夜空。そして、最近知ったんだが、この学園が誇る超VIP待遇の天才少女、”志熊理科”。

最初は保健室登校などの話で可哀そうな子かと思ったが、そんなこととはなくむしろ恵まれた環境を置かれたなんか羨ましい少女だった。

そんな恵まれた彼女がどうしてこの部活に入ったかはわからない。夜空に騙されたという可能性を考慮することはできるが、頭のいい理科が夜空の言葉だけでこんな部活に入るとは思えない。

もう一人、貴重な男子部員である楠幸村。

中性的な美少年であり、俺みたいな凶悪面とは打って違って愛されるプリティフェイスだ。

だが本人自体が気弱で女の子扱いされるのを拒み、友達が少ないというのが現状とのこと。

こいつもこいつなりに、きちんとした理由があるようだ。

中部部からは、俺の妹である羽瀬川小鳩。

俺とは似ても似つかない程の超絶美少女だが、痛々しいキャラが祟って友達は少ない。

せっかくなんだし、お前もこの部活で学ぶことを学び友達を作ってもらいたいところだ。兄としては。

後はなんかケイト先生の妹がこの部室でお昼寝をしているのとこだが、今日は来ていない。

そんなこんなで五人とおまけ一人の合計六人。

その内の五人で、今日行う活動が部長から発表される。

「それでは諸君、せっかくなので部活を始めようと思う」

最初からせっかくなのではおかしいと思うが、何か言うと思われるので俺は黙っていた。

「それでな、友達を作るためにはどうすればいいか……。考えた結果、やっぱりゲームだと思っただ」

そう唐突に夜空が提案した。

いたって単純な思考だった。一緒にゲームをして仲良くなるろうということだ。

「夜空先輩。そんな小学生のレクの授業みたいなことをわざわざ大げさにやるんですかあ？　なんかむず痒いんですが」

理科はそう批判するような言い方をする。

それに乗っかるように、俺も一言。

「理科の言い方はあれだが、ゲームで釣れるのは子供くらいだ。わざわざ部活動でやることのものじゃないだろう」

部員の悪い反応を一身に受ける夜空。

そんな彼女は、多少気に食わなそうに顔をゆがめた後、きちんと自分の考えを口にする。

「あまいな貴様ら。ゲームをするのは子供という凡人な発想は今から十何年前にすでに終わっている事だ。スー○アミやメ○ドラのような大げさな名前が付いていた時代だけの話だ。プレ○テに移行した辺りからそれはもう子供だけのコミュニケーションツールでは無くなったのだ」

と、長つたらしく自分の考えを述べる夜空。

確かに言われてみればそうだな。今じゃどちらかというとな人の方がゲームやってるよな。

カードゲームしかり、ゲーセンしかり。特に最近主流のオンラインゲームやソーシャルゲームは完全に大人向けを意識して作っている。家庭用ハードが始めた当時の子供たちは今では大人になっている。それらをターゲットにゲームは進化し続けている。

そう考えると、ゲームは子供を釣るものというのは否定せざるを得ない。大人だって釣っている。

「なるほど。一理あるな」

「わかってくれれば幸いだ」

俺がそう肯定すると、夜空は満足そうな顔をしてそう答えた。

「それで、げーむとはなにをなさるのです?」

「そうだな。幸村は何をしたいのだ?」

ゲームについて質問をする幸村に、夜空はその意見を聞くことに。

「わたくしとしては、か〇こんのげーむをりすべくとしておりまして、できれば戦国RANSEやもんかりをしようしたくおもいます」

と、意外なことに幸村は丁寧に自分の意見を申し出た。

本当に意外だな。ゲームが好きなのか? やっぱりなんやかんやで男なんだな幸村。

その両方のゲームは俺も聞いたことがある。どちらも某会社の看板作品だ。

「なるほど。モンスター狩人か。みんなと一緒にモンスターを倒す……それもあたりだな」

夜空は幸村の意見を取り入れ、頭を悩ませる。

次に、理科が意見を述べた。

「理科としてはモンスター狩人も捨てがたいですが、まずは個人的に……この部活の身内で勝負事をやってみたいなと思うわけですよ」

「ほう、強気だな。よほど自分に自信があると見える。私という人間は、貴様のような自分に自信を持っている奴を叩きのめすのは大好きなんだ」

夜空はそう言ってあくどい笑みを浮かべた。

思っただけでも口にしなくていいだろうに、そうプライドが高いから友達できないんだって。

ちなみに個人的には、理科の意見もありだと思う。

最近のゲームはみんな協力して目的を果たすゲームが多いが、ゲームの醍醐味はなんといっても対戦だ。

協力プレイと対戦、悩むところだな。

「そこで理科がお勧めするのは、若干懐かしいのですがこの”トモポーン”です」

理科はそう言って、プレ○テ2版のトモポンを机に置いた。
わざわざ自分の所から持ってきたのか、それとも買ってきたのかは
分からないが。

確かボードゲームだよな。パーティとかじや盛り上がるが、なんせ
そのゲームは……。

「ほほう、貴様面白いゲーム持ってきたなあ」

それを見て夜空がまたも不吉な笑みを浮かべた。

ああ、なんか様子がおかしくなってきたぞ。

俺は取り返しのつかなくなる前に、二人の間に割って入った。

「待て待て、ちよつと俺の意見聞いて」

「どうした小鷹？ お前も遊びたいゲームがあるのか？」

「いやいやそういうわけじゃなくて、今の俺たちがトモポンやって楽
しかったで済みそうなのか？」

「何が言いたい？」

俺がそう質問をすると、夜空はなんだか意図がわかっていそうな口
ぶりで俺にそう返してきた。

その答えはな、夜空と理科が発しているなんだか怖いオーラが物
語ってんだよ。

俺は答えるだけ無駄だと思ったが、一応答えた。

「とどのつまり、そのゲームやったら喧嘩になるかもしれないだろ」

「喧嘩ってなあ小鷹。私たちは友達を作るためにゲームをやるのだ。
喧嘩なんてしてたら友達できないだろうが」

いや……だから言ってるんだよこのクソ女が!!

少しは自分のキャラ考えて発言しやがれ!!

「お前らわかって言ってるんだろうけど。こういうボードゲームは
パーティゲームとしての意味合いが強いが、別名『友情破壊ゲーム』と
呼ばれることがある。特にそのトモポンは他のやつに比べてプレイ
ヤーへの妨害要素が多い。俺たちにしてみればまだ手をつけるには
早すぎるゲームだろ」

意味がないとわかっていながら、俺は丁寧にそう説明した。

が、そう言われてやっぱりやめるかと、納得するこいつらではなく。

「だから……殺りがいがあるのだから？」

なんか文字の表記がおかしくありませんかね夜空さん。

理科もなんかやるつもりだし、小鳩は意味を良くわかっているなさそうだし。

幸村と小鳩をこちらの手駒にして、多数決であいつらを負かそう。

「幸村、小鳩。このゲームはやったら最後、わだかまりしか起きない。だからもう少し優しいゲームにするために多数決で俺の方へ上げてくれ」

「クツクツク。まかせろ下僕よ」

「かしこまりました、せんぱい」

小鳩と幸村は了承した。

よかった。話のわかるやつだっているんだよ、この世は残酷なんかじゃない。

と、思ったのもつかの間。

「幸村、小鳩。ちよつと私の話を聞いてほしい」

俺が安心してすぐ、悪魔のささやきが二人を誘った。

だめだ。そっちに行くな。そっちに行ったら心が悪に染まる!!

「あんしんしてくださいせんぱい。わたくしはせんぱいのみかたです」

「何を焦るか眷属よ。我は貴様の主ぞ」

と、心強い言葉を俺に送る後輩と妹。

ありがとう、俺にも立派な味方がいるんだね。

そしてなにやら夜空に耳打ちされる二人。ははは、何を言おうがその二人の心は揺るがないさ!!

その後、俺は協力プレイゲームを、夜空はトモポンを選び多数決に入った。

「じゃあ多数決を取ります。トモポンが良い人」

夜空が多数決を始め、そういうと。

結果は、俺以外の連中がみんな手を上げた。

「何があったあああああああああ!?」

なんとということか、このたった一瞬のうちに信頼していた後輩と妹

が悪魔の夜空に寝返りやがった!!

俺は納得いかずに、二人に問いたです。

「てめえらー！俺との約束はどこへいったあああ!？」

「ひいー」

「うつ……」

俺がそう問いたですと、二人はガチでびびった。

あ、やっべ。多分今の俺めちやくちや凶悪面だろうな。大切な妹と後輩のガチな反応を見て思い知らざるを得ないや。

じゃなくて、どうしてこの二人が夜空側に寝返ったかの話だ。

「よ……よぞらせんぱいに、「真の男を目指すなら、勝負と聞いて投げ出すなど豪語同断。これじゃいつまでたっても小鷹のような武人にはなれないぞ。ふはっはっはっは!!」といわれまして」

「う……うちは、「この戦に勝つことができたなら闇の世界すら支配できるエネルギーが手に入るだろう。貴様は私が見込んだ闇の女王、何を迷うことがある？ ゆけい!!」と言われて……」

と、二人ともそれぞれの人間性を突かれて説得されたわけですか。どうしてこうなった。俺の押しが足りなかったのか？

もういつそ凶悪面で脅すくらいのことやんないとあの女には勝てないのか？

「決定だな。では……殺ろうか、皆の衆」

「もういいやしらね」

ということ、ゲーム内容はプレ〇テ2版のトモポンで決定した。俺自身はやったことがないが、噂はかねがね耳にする。

その一番多くお金を手に入れたら勝利するという簡単なルールの裏に隠された。容赦ない妨害行為の数々、容赦ないアイテムとスキルの効果を。

それによつてついたキャッチフレーズが、『友情破壊ゲーム』。

あのさあ。今一度確認すつけど俺らなんていう部活に入つてんだっけ？ 確か隣人部とかいう友達作りの部活だよねえ？

それがどうして友情破壊ゲームなんていうぶつそうなゲームをや

る流れになつてゐるわけ？ 偉い人教えてくれ。

「全員、取説を読んでおけ。まあ悪名高いゲームだが今回は交流会みたいなものだ。本気でやらず気楽に行こうではないか」

そう夜空は笑顔で部長らしいことを口にするのだが、裏ありまくりで説得力のかけらもない。

続けて理科も同意するが、こいつらどうにも仲悪そうだからなあ。

と、俺に取説が周ってきた。きちんとルールを覚えて俺が主導権握らないとこいつら放っておいたら下手したらリアルファイトだからな。

ええと、具体的なルールは。

・0〜6と書かれたルーレットを回し、止まった目だけ進める。普通のコマでモンスターとバトル、アイテムや魔法のコマでそれぞれ対応したアイテムや魔法が手に入る。

・モンスターとのバトルがこのゲームの特徴。倒せばレベルアップして自身を強化できる。負けたら待つのは死あるのみ。

・勝利条件はゲーム終了時に一番お金を持っている物。金さえあればなんでもできる。金が全てだ覚えておけ。

・相手が普通のコマに止まっている時に同じコマに止まるとそのプレイヤー同士でバトルを行う。負けの方はペナルティが課せられる。殺るか殺られるか、覚悟しておけ。

・アイテムと魔法は1ターンにどちらか一つを使用できる。ただキャラによつては一度に二度使用出来たり、アイテムと魔法を両方使用出来たりする。自分に見合ったキャラを選んで相手を蹴落とせ。

・金さえあれば友達が買える。友達を持っておくと負けた時の身代わりが出来たり金をあげて特定の行動を取らせることができる。友達は決して自分を見ていない、金を見ているのだ。

・ライフが0になつたら2ターン行動不能。その間に他のプレイヤーと接触された場合なんでも好きなことをされるので注意しよう。ん？ 今なんでもされるって言ったよね？

・その他細かいルールは自分たちでプレイして覚えろ。――以上――。なんちゅう説明書だ。まともなこと最初くらいしか書かれてねえ

ぞ。

金が全てだとか殺るか殺られるかだとか相手を蹴落とせだとか、人間の欲しか書かれてねえ。

拳句の果てにはこれ。金さえあれば友達が買える。頼むからこの部活でそんな一文見せつけないでくれ、もう掲げる理念もへつたくれもねえし。

そして色々丸投げだし。ああもうツツコミが追いつかない!!

「つてことなので、最初はキャラ選択だな」

夜空はコントローラーを操作しながらそう言った。

乗り気な他の連中は、さっそくゲームを始めている。

ちなみに部員は五人いるが、俺と小鳩が二人で一チーム。計四チームで行われる。

それぞれが特徴溢れるキャラを選ぶ。

夜空は一番最初に表示されていた剣士の男の子キャラを選択。

レベルアップすると攻撃パラメーターが自動で上がっていく攻撃タイプのキャラクターだ。

そして特殊能力は、一ターンにアイテムを二度まで使えること。

弱点は魔法を使う時にたまに失敗するというもの。

理科は魔法使いを選択。

レベルアップすると魔力パラメーターが自動で上がっていく魔法タイプのキャラクター。

特殊能力は、一ターンに魔法を二度まで使えること。

弱点はたまに回避不能になるというもの。

俺は小鳩に言われるがまま小悪魔っぽいのを選択。

レベルアップするとすばやさパラメーターが自動で上がっていく高速タイプのキャラクター。

特殊能力は、たまに相手プレイヤーの友達を奪えるというもの……。

「……小鳩、ちよつとこのキャラはやめよう」

俺はこの特殊能力欄を見て、小鳩にそう提案した。

これさ、相手の友達を奪うつてなんか表現が危ないっていうか。

俺はそういうのじゃないけど、俺の見た目を反映させてるっていうか。

「クックック。悪魔の魔王こそ真の王者よ」

俺の提案を無視して。小鳩はその小悪魔っぽいキャラにボタンを押してしまった。

まあ仕方ないか。もう一度言うけど俺は他人の友達を恐怖で支配したりはしないからね。絶対にしないからね。信じて。

ちなみに弱点は、『たまに友達を手に入れる時、「顔が怖い」「見た目がヤンキーっぽい」と断られ失敗することがある』。

あれ？ おかしいな、なんか涙が……。

最後に幸村は、奴隷というのを選択。

レベルアップしても特にパラメーターが上がらず、なんの特徴もないキャラ。

特殊能力は、”ある条件”を満たすとその効果が更に上がる。というシークレットなもの。

弱点は、他者からのダメージを受けやすい。何ターンかに一度ランダムで誰かに所持しているものをあげなければならない。手に入る友達の能力が半減している。

「幸村。なんかそのキャラ初心者向けじゃないような……大丈夫か？」

「はい。ごしんぱいをかけてもうしわけありません。ですがわたくしはこれでいかせていただきます」

そう、幸村は迷わず奴隷を選択。

こいつに限って裏は無さそうだが、もしかして弄られてネタを徹すのか、負けること前提に俺たちを接待するのか。

なんというか、優しすぎるぜ楠幸村。

こうして、隣人部によるトモポン大会が始まった。

ルーレットで順番を決めた結果。一番手は俺と小鳩、二番に夜空、三番に理科、四番に幸村となった。

順番が決まり終えて、ゲームの画面はオープニングへと移る。

オープニングでは、最初に王様らしき人がなにやら言っていた。

『この世は金が全てじゃ。金さえあれば友達百人夢じゃないわい』
王様、俺たちのような奴らにそんな途方もないこと初っ端から言わないでくれや。

どうすんだよ、俺らには金も名声もないから友達少ないのか？ 違うだろ？ 気持ち一つで友達できるよね？ そう言つてよ王様!!

「この王様。よほど学生時代は辛い目にあつていたと見える」
同情するところじゃねえだろうが夜空、なにちよつとウルつと来てんだよやめてくんない!?

と、隣の夜空にツツコミを入れてみると、物語は進んでいた。
突如悪者がやってきて、国の金を全部奪つたというではないか。
金も全部無くなった。あとは気持ちの問題だぜ王様。

そんな王様の元に、俺たち四人が招集され、国を救つてくれと言われた。

一番最初に応対したのは、俺のキャラだった。

『なに？ 国を救つてくれ？ よしまかせろ！ 俺が全てを救つてやるから謝礼の方たっぷり用意しておけよな!!』

ああ、前半はなんかかつこよかつたのに後半で台無しだよ。結局は損得の関係じゃねえかよ。

『国を救えば、ごほうびいっぱいもらえるかな!』

そう口にしたのは夜空のキャラ。

子供っぽくて元気あふれる感じはいいが、ごほうび目当てなのがバレバレで正義感もくそもありはしない。

『ほうびがガツポリ貰えると聞いて』

次に言ったのは理科のキャラ。ガツポリとか言うなよ、口が悪いぞ。

『どうせ僕は皆に使い古される奴隷。死ぬ前に最後に……英雄になつてみるのも悪くはないかな』

奴隷いい!! 元気出せ! このクソみたいな連中の中で正義感にあふれているのはお前だけだ!!

だから自信を持つんだ! 俺はお前を応援する! って俺は違うキャラだけど。

といった具合になんとか気分が悪くなるようなオープニングが流れた後、ゲームは静かにスタートした。

とりあえず操作は小鳩に任せて、俺は助言に回ることに。

「ククク。まわれ闇のダイスよ!!」

小鳩は初っ端から飛ばしていた。呪文を唱えるようにボタンをぽちつと押した。

ちなみに補足しておくけどダイスじゃなくてルーレットだ。

ルーレットがランダムに止まり、表示されたのは『4』という数字。

小鳩は4つ前に進むと、そこにはアイテムコマがあった。

アイテムルーレットを回すと。まじかるバナナというアイテムが手に入った。

「まじかるバナナ☆ バナナと言ったら……先輩のバ・ナ・ナ♪」

「え? なんだった?」

「いやっはははそんな冗談ですよ羽瀬川先輩。それとも理科が先輩のバナナをあちやこちやしている想像でもしちやいましたあ?」

「してないから、ご心配なく」

理科の咄嗟の下ネタに対して、俺は冷めた口調で返す。

その後夜空が強くせき込み、その会話を強制終了させる。

次は夜空の番だな。夜空はルーレットを回す。

出た目は6だ。なんだか幸先がいいな。そのまま進み普通のコマでモンスターとバトル。

単純に攻撃を選んで、夜空はモンスターを倒してレベルをアップさせる。

「最初は、こんなところか」

そう夜空は納得して、次は理科の番に移る。

理科も4を出してアイテムコマへ。出たアイテムは5スチーム。ルーレットを回す代わりに5個進めるアイテムだ。

次に幸村が操作する。出た数字は……0。

進むことなく、何も起きることなく。一週目が終了。

「ま、まあ幸村。最初だしまだ大丈夫だ」

「せんぱい。おやさしきおことばありがとうございます」

俺は幸村に感謝されて、少し嬉しくなってしまった。

そんなこんなで数ターン。序盤のステージなので特に大きなことは起こらず進んで行く。

だが、ボスのコマに差し掛かる寸前。夜空がバトルでダメージを負って理科の番に移る。

「くそ、ここでダメージは辛いな」

「さてと、ここで理科の番ですねえ」

理科はそう言って、カーソルをアイテムの方に。

ここでアイテムを使うのか。でも、ボスまでは6以上あるし。

マップを見てみると。理科の”5つ先”に夜空がいた。

5つ……先に。そういえば理科のやつ、さつき5つ進むアイテムを手に入れていたような……。

「……まさか」

「その、まさかですよ羽瀬川先輩」

俺の小言を拾って、理科がほくそ笑んでアイテムを使用した。

使用したのは5ススム。それで夜空の普通コマに重なるよう移動した。

「ぎ、貴様!?!」

「さて問題です夜空先輩。先輩のレベルは3で理科は2です。が、先輩のHPは残り12に対して理科のHPは35。もしここで理科が先攻を取ってあなたに攻撃を加えた場合どうなることでしょうか」
「ぐっ……」

理科は意地悪そうに言って、夜空とのバトルに突入する。

先攻と後攻は宝箱を選択して決める。もしここで夜空が先攻を決めれば逆転できる可能性はあるが。

「頼む、神よ私に先攻を……!!」

そう願う夜空の運も尽きたか、先攻は理科に渡った。

全部で三択。攻撃、必殺、魔法。

それらに対して有効なコマンドを選べればダメージは軽減できるが、夜空のHPは風前のもしび。

必殺に対してカウンターを決められれば夜空は勝てるが、そんな無

茶をする必要はなく、理科は普通に魔法で攻撃した。

理科の場合魔法使いのため魔法での攻撃は有効。それをわかっていたかのように夜空は魔法防御を選択するが、ダメージが半減されても夜空のHPは燃え尽きた。

そして、せつかく奥まで進んだ意味を否定するかのようになり、入口にて棺桶に入り二ターン休みとなった夜空。

「あ、こんな中途半端な所で急ぎのルール追加希望なんですがみなさん。友好を深めるために今からキャラ名で呼びあいませんか？」

ずいぶんと咄嗟な提案だった。

ちなみにキャラ名は個人個人の名前でやっている。俺の場合は小鳩を手動にしているためこぼととなっている。

俺と幸村はなんとなく了承したが、いったいその提案にどういう意味があるのだろうか。

そして、勝者は敗者に罰を与えられるということで、コマンドが表示された。そのコマンドの内容はこちら。

相手の金を全て奪い取れる。

アイテムを5個まで選んで奪い取れる。

相手の装備をなんでも一つ奪い取れる。

名前を変えられる。↑

呪いをかける。

という五択。

そして理科が嫌味つたらしく矢印を指している『名前を変えられる』という選択肢。

夜空はどうにもいえないゆがんだ顔で理科を見つめ。

「理科……やめろ……。合理的に考えて行動しろ。金かアイテム奪った方が後のためだろ……」

「あはっ。よぞらにしては（※名前で呼ぶというルールのためそう呼んでいる）理科のことをわかってらっしゃる。どうしようかな、やっぱり金を奪うことに」

「あ、ああそうしろ。そうしてくれ!!」

「そうですね。そうしたほうがいいですよねえ」

「ああ！ そうすべきだ!!」

「……だが断る」

そう冷徹に吐き捨てて、理科は夜空のニックネームを変える選択をした。

そして考えた末に10文字の制限を生かし、『かわいいよぞらちゃん』とぴったり10文字で入力。

それを見た夜空は。かーっと顔を赤くして。

「よかったですねえ。金品もアイテムも奪われないでえ、理科は優しいですからね。感謝してくださいよ『かわいいよぞらちゃん』」

「うぐっ!!」

そうわざとらしく言って理科はヒヒヒと耳に付くような笑いをした。

うくんなるほど。相手の精神にダメージを与えるのもこのゲームの醍醐味か……マジで友情破壊ゲームだなこれ。

「ま、でも痛手にならなくてよかったな。かわいいよぞらちゃん」

「こ、小鷹までっ!!」

「まだしようなきはあります。かわいいよぞらちゃん」

「クツクツク。これも運命よ。か……かわいいよぞらちゃん」

「やくめくてく!! お願いだからやめてくださいー!!」

俺たちにかわいいを連呼され、顔を真っ赤にして恥じる夜空。

「ごめんな夜空。今の瞬間はガチで可愛かった。やっぱり素直だと可愛いんだなお前。」

だが、そんな俺の褒めたことも。一瞬で覆すように。

「……志熊理科……滅ぼす」

殺すの一段階上を使用して、理科に敵意を向ける夜空。

やっぱりね。最初に思っていたけど、どんどん空気悪くなってくるなこの感じ。

どうなるんだろうなあ。なんか復讐に囚われる亡者の集まりになりつつあるような……。

そんな心配をよそに、次々とゲームは進んで行く。

進むにつれて皆のステータスは高くなり、手に入るアイテムや

フィールド魔法も強力になり、当初説明であつた友達もお金で買えるようになつていく。

「ぐっ。ここにも罠が!!」

「ヒヒヒ。あつたまつてきたねえかわいいよぞらちゃんよお。理科を追い詰めようとして足元が見えてねえじゃねえか……ヒヒ、ヒヤッハハハハハハハーハー!!」

「志熊……志熊理科ああ!!」

後半になるにつれて、夜空と理科の一騎打ち状態になり俺と小鳩と幸村は置いて行かれる。

現在なんやかんやで理科が一位、俺と小鳩が二位で夜空が三位、そして幸村は最初から目立つことなく四位。

どうして幸村が表に出てこないかというと、幸村のキャラの弱点が発動したり、どうにも俺に対して無償で負けてくれたりアイテムを分けたりとご奉仕三昧で、まったく前に躍り出ようとしなからだ。

俺は申し訳なきそうに振舞うが、小鳩がどんどん幸村から絞り取っていくものだから、すっかり裸の王様状態の幸村。

「あ、パペット引いた」

俺たちの番。

引いたフィールド魔法はパペット、相手を操って好き放題なんでもできるすごい魔法だ。

「ああくんこだかあ。これで理科をなんでも好き放題操るんですねえ〜?」

「んっんー。やりませんけどお〜?」

「んもう、ノリが悪いですねえ。んで誰に使うんですか?」

「使ったら恨まれそうだからお前にやるわ」

「わあ〜いありがどうこだかあ。したら……かわいいよぞらちゃんいじめるかあ〜? ヒヤハハハハハハ!!」

そう俺から魔法を受け取って次のターンに夜空に対して使い、夜空を蹴落とす理科。

それに対して夜空も負けじと、頭を駆使して理科を攻撃。

金で友達を買い、それを投げ捨てるように進める二人。

最下位になれば幸村を使って理科に食らいつく夜空。なんとか……なんとというか……。

「こいつら……自分の事しか考えられないのか……」

次第に、俺はなんだかつまらなくなっていた。

何が楽しくゲームをしようだ。ゲームしながら喧嘩してんじやねえよ。

「幸村。なんかつまんねえよなあ？」

「……そろそろ、あれがくるやもです」

「ん？」

俺が幸村に声をかけると。

幸村はまるで、何かを待っていたかのようにそう呟いた。

そして次の幸村のターン。ずっと四位だった幸村のターンの始まりに、空が黒く染まった。

その空から、なにやら強大な悪魔が降り注ぐ。

「な、なんだ!？」

俺、そして他の連中も驚いた。

そして強大な悪魔が、幸村に契約を申し出る。

『ずっと皆の下で耐え忍んできた奴隷ゆきむらよ。貴様にこのデビルマンの力を与えよう』

デビルマン？　なんだそりや？

俺は急いで取説を読むと、中間のページにこう書かれていた。

・デビルマンは最下位のプレイヤーがごくまれになれる形態のこと。これになると全ての能力が三倍に、金は全て失われるが、暴虐を駆使して今まで自分を虐げてきた連中に報復できる。ちなみにわざとこの形態になり勝利をもぎ取るテクニクも存在するということ。と書かれていた。

最下位のプレイヤーだけがなれるデビルマン。一発逆転要素もある最強の形態。

それを見て、幸村が珍しく本気な笑みを浮かべた。

『おや、しかもお主は奴隷。だったら更に三倍、能力を上げられる』
そしてその言葉、奴隷ならデビルマンの能力をさらに倍に。

まさか……俺は疑った。

大人しい顔をして、ずつと良い人を演じ続け。

その果てに幸村は、これを狙っていたんじゃない。

『ということで、僕と契約してデビルマンになってよ』

「がってんしうち」

と、そういう口上で契約を申し出られ、幸村は迷わずデビルマンになった。

そして、最強の能力を手にした幸村。そのたくさんある能力を駆使して、夜空と理科を狙う。

そんな狩人の目となった幸村に対して、夜空が追求する。

「ゆ……幸村。きさまこのゲームやり込んでいるなッ！」

「そんなことはありませんぬ」

慈悲もなくそう無下に答え、幸村は夜空に向かっていく。

この状態になれば相手は勝負を放棄できない。勝てなければ死、あるのみ。

そして幸村は夜空を引き割き、金と友達をすべて消滅させる。

「ああああああああああ!! トモちゃん一号! トモちゃん二号ううう!!」

その他たくさんのトモちゃんを奪われ、泣きだした夜空。

金は幸村には入らないが、夜空の金も全て無くなる。

そして大量の経験値で幸村は更に強くなり、次のターンで理科を襲う。

「オーマイゴッド!! 悔っていた……こんなところに……伏兵がっ!!」

理科も悔しそうに涙した。

あつという間に俺と小鳩が一位に。幸村は俺らを狙うことが無かったため放置という形になった。

そして幸村の報復が終了し、またも一触発状態に。

「上等だ……。残りの数ターンで……貴様ら全員皆殺しだ!!」

「やってみせてくださいよ夜空ちゃん! 勝つのは……この理科です!!」

「わたくしも、ここまでできたらはせがわせんぱいを一位にするまで……」

と、それぞれがそれぞれの意思に従い、ゲームという喧嘩を始めた。ああ知ってました。こうなることは知っていた。

だが、俺には止めることができなかつた。友達を作るために集まったこいつらの暴走を、俺は見ることしかできなかつた。

やっぱりか。俺はなんとなく察していた。この隣人部、友達を作る部活の連中は……。

——全員が自分勝手に、敵同士の集まりだつてことを。

「……俺、帰るわ」

「こ、小鷹?」

俺が冷めたような態度でそう言い席を立つと、夜空が俺の名を呼んだ。

「悪いな。ゲームの続きはまた後日。小鳩も遊び終わつたらちゃんと帰って来いよ」

「ふええ!? う、うちも帰る」

ということ、小鳩と俺はいち早く帰ることに。

正直、居続けられなかつた。認めたくなかつたからだ。

こいつらだつて、けして悪い奴らではないと思う。だけど、やっぱりどこかが歪んでいる。

そして、俺も歪んでいる。だから、こいつらに共鳴することを避けてしまった。

最低だ。俺はこの時……逃げるつて選択しかできなかつたから。

「悪い小鳩。先に帰つててくれ」

「え? あんちゃん?」

「心配すんな。ちよつとやり残したことがあつてさ。早々と終わらせて帰るから。今日ハンバーグ作つてやるからな」

「……うんっ!」

学校の広場で。

俺はそう言つて小鳩を早く帰らせた。

そう、ちよつと考えたい事があつた。一人で、たそがれたかつた。

俺は広場のベンチに座り、そして考える。

あいつらとの日常……隣人部のこれからをどうすればいいか。

正直そういうのは夜空が考えることなのだろうが、あいつではだめだ。

俺がなんとかしないといけない。あの暗くてジメジメした部活を……変えないと先に進めない。

だが、やつぱり”何かが足りないんだ”。あの隣人部には何かが必要ない。

あのバラバラの集まりを先導するべき……何か……。

「……どうすつかない」

ベンチでうとうととしていたら、何やら寝てしまったようだ。

俺は夢を見る。何かの夢を。

今よりずっと遡る。遡って、かつて見た景色を写す。

写ったのは……公園。今も遠夜市にある公園。

そこにいるのは……十年前の幼い俺。

——この夢、先日も見た気がする。

俺はこの夢を見たのは最初ではない。

二度目……いや、もっと頻繁に見ている。

俺がこの街に戻ってきてから、いや……つい最近になってよく見るようになった。

その公園に、俺がいる。

そして、もう一人……かつて親友と呼んだ”少年”がいる。

少年の名は……”ソラ”。十年前、この街で俺が出会ったたった一人の親友。

そいつは俺に大切な言葉を教えてくれた。俺に生きる上での大切なことを贈ってくれた。

今でも大切にしているその言葉。

『友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切にできるような本当に大切な友達を作りなさい……』

その言葉は、そいつの母親の言葉だ。

そいつが母からもらった大切な言葉。それを俺にも分け与えてくれた。

とても優しく、勇敢で……勇氣に満ち溢れていて、負けず嫌いで、弱い者いじめが嫌い。

俺は、どこかでそいつに憧れていた。そいつみたいになりたいと思っていた。

そんなそいつが大好きだった。ずっと一緒にいたいって思っていた。

だが、ある日俺は転校することになった。

そのことを、そいつに言えずに俺はその街を離れた。

わだかまりを残して、俺は友情を断ち切ってしまった。

十年の時を得てこの街に帰ってきたわけだが、その影響なのか……ソラの夢を良く見るようになった。

どうして、今なのか？ 転校した当初はあっさり忘れていたはずなのに。

最近だ。隣人部なんていう、友達を作る部活に入ってから、まるでそのことをぶり返すかのようにその夢が俺に映し出す。

その夢の中で、ソラは思い出を映すかのように笑う。俺の名を呼び、俺に輝かしい笑顔を見せる。

だけど、時より悲しい顔をすることもある。俺に、憎しみを抱くかのような目で睨みつけることもある。

一緒に遊んで笑った後、ソラは最後に悲しい顔をするんだ。

そして今、夢の中で俺の身体にまたがり。

泣きそうな顔で、俺の首を絞めようとする。

まるで、街に置いて行った俺に対して怒りを向けるかのように。

泣きながら……俺を絞め殺そうとしてくる。

——この光景……俺は最近実際に見た気がする。

なんだった……？ 確か……あの女が……。

俺と共に、隣人部を作ったあの女が……。

——あの女が……”ソラと同じ目”で……俺……を。

「うつ……うつ……くっ……。やめろ……やめて……くれ……」
ソラ……。

俺はうなされ、苦しい顔をしながらゆっくりと目を開けようとする。

徐々に感覚が戻ってくる。そして感じる。なんか、頭に柔らかい感触が。

ベンチで寝ているはずなのに、木の固さを感じない。

柔らかい枕のような感覚。そして、とてもいい匂いが漂ってくる。

俺は徐々に目を見開いた。見開くと、目に映ったのは薄暗い夜空……。

——ではなく、それは光り輝く星のような。

「……え？」

俺は、それを見て目を見開いた。

今、俺の目に映ったのは少女だった。青い目をした、とても綺麗な美少女。

その金髪は美しく靡き、頭に付いている蝶のアクセサリーが、まるで金色の光を自由に舞っているような。

俺は知らず知らずのうちに、そんな少女に膝枕されて、寝ていたのだ。

そして少女は言う。目覚めた俺に対して……その響くような歌声で。

——あんたが……”羽瀬川小鷹”ね。

俺はこの瞬間、”柏崎星奈”と出会った。

NEXT—ライバル出現編。

星の下で少女は笑みを浮かべる

——そこにいたのは、とても輝かしい少女だった。
つい、寝てしまったようだ。

やべえ、小鳩にすぐ帰るようにいったのに。

今何時だ。もうあたりは暗くなってきてるし……。

と、その前に……。

「う……ううう」

「どうしたの？ ずいぶんとうなされていたわよ？」

俺の目の先に映る少女が言った。

見た目はなんとというか、メチャクチャ美人だった。

透き通るような青い目も、靡くような金髪も。

そして何よりその胸。でかつ！ マスクメロンも真っ青なくらい

にでかつ!!

まるで全部が作り物のようで、そんなすごい美少女に……膝枕されてる俺。

……俺、ひよつとしてこの後死ぬんですかね。

「……ええと、どちらさま？」

「人に名を聞けるなら、元気のようね」

と、俺が体をどけるより先に、膝枕のまま無理やり立ちあがり、俺の頭を地面に放り捨てる少女。

「いってえー！」

無様にも地面にぶつかった俺は、痛みを声に出して言う。

なんとというか、容赦のないことするな。せめて俺が起き上がってからにしてくれ。

いやその、膝枕してもらって文句を言うのもあれだが。

「あぁごめんなさいね。なんだか膝が辛くて」

「あ、あんたが勝手に膝枕したんだろうが……」

「はあ？ この女神すらひざまずくこの崇高なる私に膝枕してもらってなんという言い草。よほど育ちが悪いと見える」

「……」

俺が反論すると、その少女は強気な口調でそう言い返してきた。確かに美人なのは認めざるを得ないが、その性格は綺麗ではなさそうだなあ。

ま、だけど……礼は言っておくか。

「……その、ありがとう」

「素直に礼が言えるのは褒めてあげるわ。最低限の教養は学んでいるよね、まあ所詮は平民なんでしょうけど」

今度はお礼を言ったら平民と罵られたぞ。

なんというか、一言したら五十は帰ってくるなこいつの言葉。

「んで……名前だっけ？ 人に名を名乗る前に自分で名乗ったらどう？」

「あ……それは一理ある。俺の名前は」

「羽瀬川小鷹くんでしょ？」

「……知ってるのかい」

俺が丁寧に名乗ろうとした瞬間に、それを邪魔されてしまった。

なんというかおちよくられているとかバカにされているというか……うか……。

でも、俺みたいな悪い意味での有名人は知られていてもおかしくないか。あ、嬉しくなんてないんだからね！

「それでええと、あんたは？」

「この私に向かって”あんた”？ あんたバカ？ 平民が誰に向かってあんた呼ばわりしてるのよあんた」

「ぐっ……この女あ……」

今度は一言ったら五百は帰ってきたぞ。

ははっ……やべえ。さっきまでは美少女に膝枕されて若干男として有頂天になってたさ。こいつに対して恩義しかなかったさ。

だがよ……。ちよつと今殺意湧いたぞ？ このクソ金髪女ガチで殺してえ……。

「あ……あなたの名前はなんですか？」

「あなた様でしょ？ 口のきき方になってないわね」

「……てめえ……これ以上言ったらガチで泣かすぞ」

俺はついキレ気味にそう少女を威嚇した。

あ、今の俺多分ガチで凶悪面レベル80くらい言ってるかもしれない。ファ○ヤーのにらみつけるよりダメージ高くなってるかもしれない。

だが、少女はそんな俺の多分般若のようになってるであろう凶悪面に対して、一步も後ずさることなく言葉をつづけた。

「……ふくん、まあ少なくとも顔や名誉だけを見て人を選ぶ男ではなさそうね」

「ああん？」

「ま、この私が他人に謝るというのも珍しいことなのだけれど……試すようで悪かったわね。羽瀬川くん」

そう、少女は謝ってるのか上手く流してるのかわからないが、そう言って俺を納得させようとする。

ま……いいか。ここでこんな子と喧嘩したってしゃあないしな。俺は大人なんだ。大人だから下手なことでも怒ったりしないんだ。

「私の名前は、柏崎星奈」。って言えば……何か思い当たることがあるんじゃないかしら？」

「柏崎……かしわ……ぎきって」

少女の名前は柏崎星奈というらしい。

その名前を聞いて、俺は何か引つかかるものを感じた。

星奈の名字だ。柏崎……確かこの学校の理事長の名字。

そして、その人物は、俺の……。

「もしかして……あんだ理事長の……」

「正解」

「……そうだ。俺の父さんとこの学校の理事長が知り合いで」

そう、俺がこの聖クロニカ学園に転校してきた理由。

それは、この学校の理事長と俺の父親が知己で、昔からの付き合いがある。

今回も俺の父親が無理を言ったせいで、俺と小鳩がこんな中途半端な時期に転校してきたということだ。

相手側には大分迷惑をかけただろう。俺は一回、その件で挨拶をし

たいと常々思っていたんだ。

そして今日の前に、その理事長の娘さんがいる。

名前も聞いたことがあった。だがこんな金髪の可愛い子とは思わなかったな。

「ええと、俺の事は理事長さんに聞いたのか？」

「まあ一応。「懇意にしている友人のせがれが学校に転校してきたから、会ったら挨拶の一つはしておけ」ってね」

「そっか。まあなんつうか、最初から喧嘩腰になって悪かったな」

「まったくよ。襲われるかと思っただわ」

「冗談でもやめてくれ」

そう容赦なく返す星奈に対して、俺は上手く返すこともできず。

その後、なんとなく星奈と話をすることに。

「それで、あなたはこうしてこんなところで寝ていたのよ？ 夏が近いとはいえ風邪ひくじゃない」

「あ、ああ……。ちよつと部活で色々あつて」

俺は、星奈に対して部活の話を切り出した。

父さんの知人の娘さんということだからか、それとも俺を見て逃げ出さなかったからだろうか。

よくわからないが、こいつには色々話してもいいかなって思った。

「確か、何週間か前に部活のチラシ配ってなかったっけ？」

「え？ ああ、あの時は三人目の部員を連れて来いって顧問に言われて……。あつ」

その時の話になり、俺は思いだした。

確かあの時、チラシが風邪で飛ばされた時、俺はこいつと会ってるんだ。

その時確か、まったく部活に興味ありませんって顔して、なんも言わずにチラシを拾ってくれたっけか。

「あの時は……。ありがとう」

「ん？ ああ、確かチラシを拾ったっけ？ 気にしなくていいわよ、ただの気まぐれだし」

そう無然とした態度で星奈は言った。

「それって……なんって部活だっけ？」

そう星奈に質問され、俺はつい黙ってしまった。

こんな子に言えるだろうか。友達を作るための部活、隣人部さ！
なんてことおっぴろげに。

だが、そこで言えなきや進めないか。

「……隣人部」

「ああ、確かそんな名前だったわね。」友達募集” って書かれたチラシの……」

それを言われて、俺はちよつとだけ顔が赤くなった。

あのヘンテコなチラシの変な意図を読まれ、その子供じみた活動内容まで口に出され。

ああ死にたいです。高校生にもなつて友達作りにせいを出してるとかこの凶悪面が言えたもんじゃねえよ。恥を知れだよ。

「ふくん。友達ね……」

「ああ、恥ずかしい限りだ。柏崎は友達多そうだから関係ないだろうな。遠目で良く見るけど、いつも男にたくさん囲まれてるのってあんただろ？」

「……まあ……ね」

なんとも力のない返事だった。

どうした？ 別に今ここで笑ってくれてもいいのに。

こいつの性格ならここで俺を罵倒してきてもいいはずなのに、どうして、ここでそんな反応を見せたんだ。

「確かに、私にはまるで関係のない部活ね。友達作りとか……子供じみてるし」

「ぐうの音もでねえ。でも……それでも、そんなことを必死にやろうとしているやつがいる」

「……」

「クソみたいな奴だけだな。口も悪いし性格も最悪。諸悪の根源みたいな女だ。だけど……あいつの目だけは、嘘をついていないから」

「……」

「だからこんな俺でも、そいつの役に立てるかもしれないって思った。

誰かと一緒に、何かを成せるかもしれないと思った」

俺は、つい熱くなつてそんなことを星奈に語った。

確かに俺はあの女が……三日月夜空が嫌いだ。

だが、嫌いではあるが信じていないわけじゃない。あいつは確かに綺麗事ばかり並べて自分勝手だが、それでも目には熱さが宿っている。

心は冷めているかもしれない、けど……それでも熱くさせる何かを感じさせるんだ。

だから、俺はあいつと一緒に居続けているのかもしれないな。

そんな俺の話を聞いて、星奈は冷めたような瞳でぼそりと呟いた。

「……なにが、友達作りよ」

「え？」

「——友情なんて、くだらない」

よくは、聞こえなかった。

いや……聞こえないふりをしていたのかもしれない。

何かを呟いた後星奈は、話を少し戻す。

「……それで、その部活で何があったの？」

「聞いてくれるか？　なんやかんやで俺を含めて五人も部員が集まったのは良いが、友達を作るところか喧嘩してばかりで、正直見てられなくなつちまつたんだよ」

「なるほど。それで抜けだしてきたってわけ？」

「ああ、情けない話なんだけどな」

俺は自らの行動を恥じながら、包み隠さず星奈に全部打ち明けた。

それを聞いて、星奈は鼻で笑ってバカにするように口にした。

「全然だめじゃない。どうするのよこの先」

「うーん。それを考えようと思ったんだけど、知らないうちに寝ちまつて」

「そいつらもそいつらなら、あなたもあなたね」

「……何も、言い返す言葉がございません」

星奈の冷静なその押しに対して、俺は男なのに一瞬で小さくなつてしまった。

情けないぞ羽瀬川小鷹。日本男児として何をやっているんだ貴様は！

びしっとしろびしっ！ 隣人部を引つ張れるのはお前だけなんだぞ!!

「俺としては……本当に信じられる友達を作ろうと思つて頑張つてるんだけどな」

「……」

俺の想いを口にした時、星奈はまたも黙ってしまった。

そして、星奈は咄嗟にこんなことを質問してきた。

「つてことは、あなたなりに何か煮え切らないものがあるつてことよね?」

「……というとう?」

「例えば……ずっと前に友達がいたとか」

そう、射抜くように星奈は俺に言ってきた。

俺は思わず驚いた。先ほど見た夢が、その友達の夢だったからだ。そしてそのことが、俺の原動力になっているのも確かだ。

それらを全て見抜くように、星奈が言つたその言葉は、俺が今一番聞かれたかつたことだったのかもしれない。

「……これ、実はあまり他の人には言つてない話なんだが」

「なによ? 私でいいなら聞いてあげるわ」

そう、星奈は俺の話の話を聞いてくれるという。

なんというか、こいつ……すごい温かい奴だな。

ちよつと性格は悪いかもしれないけど、すごい……頼りになる。

なんでも話せる気がする。父さんの友達である理事長も、こんな感じの人なのだろうか。

「——実は」

と、俺があいつとの過去を星奈に話そうとしたその時だった。

「小鷹!」

突如、夜空の声が向こうから聞こえた。

息を荒くしながらこつちのほうへと走ってくる。

そして、俺と隣にいる星奈を見て、苦々しい顔を浮かべた。

「まったく、部活を放り投げてなんのつもりだ？」

「うっ……悪い。今度からは気をつける」

「ああ……それと……」

そう言つて、夜空は星奈の方を睨んだ。

「……貴様はっ！」

夜空は、憎ましいものを見るような目で星奈を威嚇する。

そんな彼女に対し、星奈は冷徹な瞳を浮かべ、そして夜空を無視して俺に対して言う。

「……もう暗くなつてきたし、そろそろ帰つた方がいいわね。妹さん……家で待つてるんじゃない？」

「え？ あっ!!」

星奈と話していて、すっかり小鳩を忘れていた!!

俺はすぐに鞆を持って、校門へと走つて向かう。

「悪い！ 柏崎、その……後日時間ができたら話を聞いてくれ！」

「わかつたわ。じゃあね羽瀬川くん」

「お……おい!!」

俺は星奈にそう告げて、急いでその場から去つて言った。

去り際、ふと夜空を見ると、夜空はなんともいえなくらい怖い形相を浮かべていた。

いつものことだと言えば解決だが、なんだかいつも以上にその瞳は怖かった。

どうしてだ？ なんか星奈のことが気にいらないうちに見ていたが。

……まあ、あいつの身になつて考えればわからんでもない。

あいつ、リア充は嫌いだからな。

翌日。

朝、いきなり教室に入ったら美人だけど眼つきの悪い女に睨まれた。

その後も授業休みの度に睨まれた。これでもかというくらい睨まれた。

夜空さん？ 確かに昨日は申し訳ないとは思ったが、そこまで睨むことないでしょうに。

そして昼休み、等々夜空は俺の所へやってきて。

「小鷹……」

「……」

その迫りくるようなオーラの夜空に、俺は苦い顔で返した。

いったい何をそんなに気に食わないんだ？

「どうしたよ？ 昨日部活抜けたのは悪かったって」

「そつちに関しては、どうでもいい」

「んじや、なに？」

「あの……肉まん女の事だ」

そう、夜空はある人物のあだ名を口にした。

肉まん女……ああ、恐らく星奈の事か。

肉まんはあの胸の事を言っているのだろうか。自分がそこまで胸が大きい方じゃないからって、お前も結構それなりだと思うけどな。

と、口にしたら俺の命が危ないのでそれは心の中にしまっておこう。

「柏崎の事か？」

「ああそうだ。小鷹、あいつとはどういう仲だ？」

「どういうって……昨日あったばかりだ。俺がベンチで寝落ちしたら、あいつが”膝枕”してくれて」

「ひざまっ……！」

あ、ついいらんこと言っちゃったかな。

まあこいつにとつて俺はタイプでもなんでもないみたいだし、気にしちやいないだろう。

「……あの女は、私たち隣人部にとっては敵のような女だ」

「敵って……その根拠は？」

「私たちは非リア充で、あいつはリア充だ。けして相容れぬ存在だ」

「あのなあ夜空。その理屈じゃ俺たち隣人部にとってはこの学園全部が敵みたいなものだぞ？」

夜空の良く分からない根拠に対して、俺はそうツツコミを入れた。

すると夜空は、更に機嫌を害して俺をにらんだ。

「……とにかく、あの女とは関わるな！ あいつはこの学校の男どもを使い古しては捨てているようなやつだぞ！」

「わかったわかった。お前があんな女の事が嫌いなのはわかったから」

「わかってない！ とにかく……縁を切れ!!」

「……あのよ、それが友達作りの隣人部部长としての言葉か？ お前そろそろマジでいい加減にしろよコラ」

夜空の理不尽な物言いに對して、俺は本気の口調で夜空に迫る。

すると、珍しく夜空が押し黙った。あ、多分顔のせいでしょうね。また顔が凶悪面になってたんでしょうね。

「言わないようにしようと思ってたけど、お前にとっての俺らってなんだよ？ お前以外の連中がリア充と仲良くするたびに部長の権限で縁を切れだの口にするのか？ ふざけるのも大概にしろよ」

「うっ……。だが、あの女だけは……」

「どうせ一方的な決め付けだろ。確かに柏崎の性格は悪い方かもしれないが、お前よりは断然いいやつだよ。俺にはそう見えた」

「こ……小鷹っ!!」

どうにも納得のいつていない夜空。

どんだん言うことも支離滅裂になっている。何をそんなに焦っているんだ？

俺にはお前の気持ちなんてこれっぽっちも理解できない。いや……理解したいとも思わない。

三日月夜空。お前の行動はな……。

——見ていて、イライラするんだよ。

と、そんな時だった。

「羽瀬川くん。いる？」

教室の入り口の方で、鈴のような声が聞こえてきた。目を向けると、そこには星奈がいた。

彼女が現れると、クラスの男子が一斉に彼女を崇拜するような眼差しで見ると、

そして女子たちは圧倒される。生で見るとすげえな。

その多数の眼差しを受けている彼女は、特に何も思うことなく、俺の方へと向かってきた。

「ああいたいた。取り巻きの男子どもの用事も終わらせたし、時間作ってあげたわよ」

そう言つて、唯我独尊のごとく俺の方へと一直線に向かってきた。

そして、近くにいる夜空を相手にもせず、俺に話しかけてくる。

「つてことで、まだ時間あるし。食堂でご飯でも食べながら昨日の話聞かせてくれる？ お茶の一杯くらいなら奢つてあげてもいいわよ。」

「あ、ああ。でも……なんか周りの目が」

「そういうのに気にしたら駄目よ。私とあなたは親絡みの付き合いでしょ？ それともあなた、私に選ばれたとか想像して思いあがつてなんていないわよね？」

「い、いや滅相もない!!」

「ふんっ。ならばよろしい」

そう一方的に、星奈は俺の腕を掴んで無理やり教室の外まで連れ出そうとする。

そんな彼女に対して、またも夜空が牙を剥いた。

「か……柏崎!!」

その襲いかかるような叫びに反応し、星奈がゴミを見るような目で夜空を見る。

「あら？ 塵が私の名前を呼んでいるわね」

「なんだと……？ 小鷹は今私と部活の話をしている。だから邪魔をするな!!」

「……へえ。羽瀬川くん、そうなの？」

夜空のその言葉を聞いて、星奈が俺に冷徹な眼差しを向けて問う。

「なんとというか、女つて……怖いですね。」

「まあ夜空とはそれほど込み合った話もしていないわけだし……。」

「いや、大した話はしてないよ」

「小鷹っ!!」

「すまねえな。話なら部活の時にでも聞いてやるよ」

そう、俺は夜空を見捨てるように星奈と一緒に食堂へと向かった。

食堂にて。

とりあえずお茶くらいは奢ってくれろということ、俺はレモンティーを貰うことに。

ちなみに星奈には取り巻きの男子が何人かいるとのことだが、個人的な話の邪魔にならないためか食堂には来ないよう手配しているとのこと。

なんというか、マジでお嬢様なんだなこいつ。

「しっかし、あなたは女運が無いのね」

「え？ どうした唐突に？」

「あんな鬼のような形相で男を縛ろうとしてる女に睨まれてるんだもの。あれ、あんたの彼女？」

「い、いや……ただの部活の仲間だ」

夜空をあれ呼ばわりして俺に問う星奈。

彼女か……。あいつみたいな美人が彼女なら男として誇れるところだが、それは違うな。

それに褒められるのは見た目だけだ。中身はゴミ屋敷だからな。

「そう。仮にそうだったとしたら、変な誤解を生んでしまうかもしれない。俺はそうじゃないよ。一応聞いただけよ、大丈夫よあんたみたいな凶悪ヤンキー面にあんな美人な彼女なんてできるわけないでしょ？」

「うーん。何が大丈夫なんだろうか……。なんかとてつもない右ストレート食らった気がするんですが柏崎さん？」

「気のせいよ。駄目男は心くらい強く持ちなさい」

「泣いていいかな？」

星奈の悪びれもしないごく普通に行われる罵倒に対して、俺は多大なダメージを負った後。

話の本題は、昨日の続きに映る。

そう、俺の十年前の、大切な親友の話だ。

「小さい頃、俺には親友がいたんだ。ああそこで笑わないように」

「え？ いや笑わないわよ。むしろ笑えないわよ」

「どこか引つかかるような言い草なのは気のせい?」

「うふっ☆」

俺がそう尋ねると、星奈は意地悪そうに笑った。

まあいいや、話を続けよう。俺のHPが0になる前に。

「俺がいじめられていたところに急に介入してきて、正義の味方みたいに「弱い者いじめはやめろ」なんて言うものだから、その時の俺もちよつとむきになってな……」

「へえ、あんたその外見でいじめられてたんだあ。見た目は凶悪、中身は貧弱貧弱う〜」

「……小さい頃の話だ。助けてくれたそいつを殴ってやった」

「うっわああんた恩知らずね」

説明するたびに星奈から飛んでくる罵倒じみた言葉は置いておき。俺はあいつとの……ソラとの出会いのいきさつを話した。

確かこの学校では、夜空くらいにしか話していないな。

というか今でこそ思う、なんであんな奴にこの話したんだろうか。するだけ俺の輝かしい思い出が汚れるだけだったのに。

きつとあの女は、俺とソラの友情を美談だと笑っていたに違いな。あいつはそういうやつだ。

「素敵じゃない、輝かしい友情ってやつね」

と、珍しく星奈から飛び出た褒め言葉。

たまに出るこいつの優しき、その価値はプライスレス。

うん、くだらない話はやめようか。

「ああ、俺にとってそいつは最初にできた大切な親友だ。1000人分大切にできる最高の親友だ。親友”だった”……」

「だった?」

そう言って、俺は少し表情を暗くした。

そうだ。親友だった。今となっては、もう恐らくは……。

その友情を過去形にしたのは、俺が原因だった。

「俺は、その大切な親友に別れの言葉一つ言わずにこの町を去ったんだ」

「……なんでそんなことをしたのよ? 心の中じゃ嫌いだったの?」

「正確には”言えなかつたんだ”。この町を去る前日に俺はそいつにこう言ったんだ。「明日大切な話があるからこの公園に来てくれ」って、だけどあいつは来なかつた。なぜかは知らない、だから結局別れを言えずに俺は町を去った」

「じゃあ……来なかつたそいつも悪いじゃないのよ」

その出来事に対して、星奈は冷静にそう口にした。

そうだ。互いが悪い。あの場で俺がためらわずに言っていれば、俺たちはわだかまりを残さずに別れることができた。

ずつと言えずに、明日に明日にと日を伸ばしたのは俺だ。そいつがその時に来なかつたからじゃない、俺に、すぐにでも別れを言う勇気があれば……。

その勇気さえ……あれば。

「……俺は、未だにそのことが忘れられないんだ」

俺は、自分の胸の内を星奈に語った。

そんな俺に対して、星奈は笑うことなく。

少し厳しめに、俺に言葉を贈る。

「……苦しかったでしょうね。その罪意識で、大切な親友を失って。それで、自分が悪かったと責め続けて」

「……ああ」

「……自分が悪いってことしておけば……あんたにとっては都合がよかつた？」

その言葉の最後に、星奈の毒が滲み出たのを感じた。

自分のせいにしておけば、楽になれる……。

俺は、そのことに関して責任を持てずにいた。だからそこは卑怯だが、触れずに次に進めた。

「……想像すると怖いんだ。もし昨日まで近くにいた大切な人が明日いなくなったら……なんて考えるだけで怖いよ。それを実際に味わったソラは、いったいどんな気持ちになったんだろうな。もしあの言葉が『最後の言葉』だって知っていれば、あれが最後だってわかっていたら、もつとあの瞬間を大切にできたはずなのにな……」

俺は更に深く、自分の苦しみを星奈に訴えた。

そうだ。訴えることが気持ちくてもしょうがない、そうやって正当化しているだけかもしれない。

そうやって、俺はそいつを親友だと思っていたという事実を噛みしめているだけだ。きつと星奈は、その意図に気づいている。

だが、彼女はそれでも俺を見捨てずに、話を聞いてくれる。

「……ねえ、この町ってことは、そいつこの町にいないの？　つうか会ってないの？」

「連絡手段もないからな、それに……どんな顔で会えばいいっていうんだ？　確かに会って一言謝りたいって何度も思った。でも一方的に謝ったって解決はしないだろう。多分殴られる。殺されるかもしれないな。ははは……」

俺は冗談を言うように、笑ってそう口にした。

きつと今、あいつにあつたら俺はただでは済まないかもしれない。

あいつは夢の中で何度も俺を殺そうとした。それはきつと、起これば正夢になることだろう。

きつと……”あの眼”で、俺の首を絞めつけて……。

『……※※※。お前なら……わかってくれるだろう？』

ガシャン！

突如、俺は握っていたティーカップを床に落とした。

そんな俺を見て、星奈が心配そうに声をかける。

「ちよつと……どうしたの？」

その星奈の言葉を、この瞬間の俺ははつきりと受け取ることができなかった。

なんだ？　何が起こった？

夢の中で俺を殺そうとしてきたソラ、そのことを思い浮かんだ時……別の声が聞こえた気がした。

そして、その眼とまったく同じの……俺に向けられるもう一つの眼。

あの、熱さがやどった……”紫色の眼”。

「あつ……ああ……」

激しく頭を押さえた。

そして必死に、自分の脳裏に一瞬浮かんだ”ある仮説”を、俺自身が必死に否定しようと拒否反応を示す。

違う。そんなわけがないと……俺は何度も頭の中で繰り返した。

「だ……大丈夫？」

「あ……ああ。大丈夫だ。ごめん、ティーカップ……」

「いいわよ、こつちでなんとかしておくから」

そう言っつて、星奈は割れたカップのかけらを一つ一つつまんで集めた。

「……ずいぶんと、友達思いなのね」

「そ、そんなことはねえよ」

「友達のために苦しんでいる。私からすれば希少種ね。そのソラって子は……どうかはわからないけど」

「いや、あいつはいいやつだった。俺に大切な言葉をくれた。熱い魂を持った……」男の子”だったよ”

俺が、ソラの事を評価してそれを星奈に言うのと。

突如、星奈の動きが止まった。

そして、眼を見開いて俺の方を見た。

「……男の子？」

「あ、ああ。ソラは勇敢な男の子だったよ。喧嘩も強いし」

「………はっ」

俺はそういうと、突如星奈は、呆けるような笑みを浮かべた。

まるで自然体で笑うように、徐々にその笑い声は伸びるように長くなる。

「……星奈」

「は……ははは。ふふっ……ククク。クククク……くくっ……あははははははははは……」

そう、壊れたように笑う星奈。

俺、なんかおかしいこと言ったかな。ギャグなら自信あるんだけどな……。

「ふふふ……ごめん。ちょっと個人的にツボに入っちゃって」

「どこが？ ギャグ作る際に参考になるから聞かせてくれ？」

「いや……あなたはまだ……」知るべき」ではないから」

星奈がそう、吐き捨てるように言うのと同時に。

昼休みが終わる前のチャイムが鳴る。

この時間、俺にとっては大事な、貴重な時間になった。

誰でも良かった。この俺の思い出を、辛い最後の出来事を、聞いてもらいたかったんだと思う。

そして、それが星奈で良かったんだと思う。

色々と理事長の娘として大変な毎日を送っているみたいだが、俺個人としては……その容姿や能力を抜きにして。

——こいつと、友達になりたいなって……。

「今日は部活に来ないだど？」

「ああ、ちよつと考えたい事があつてな」

放課後、俺は夜空に部活を休むことを伝えた。

それを聞くと、夜空はとんでもなく不機嫌になり。

「……あの女に、変なこと吹き込まれたわけじゃないよな？」

「そんなわけねえだろ。柏崎とは普通に話をしただけだ」

「……なんの話だ」

「てめえには関係ねえよ」

俺は最後にそう冷たく夜空を突き放して、後ろを見ずに教室を出た。

ちよつと、やけになりすぎたか。さすがにもうちよつと言い方があつたと思うが。

でも、たまには俺も……我がまま言わせてもらいたい。ちよつとくらい、俺だって自分勝手にいたい。

「あ、羽瀬川くん」

校門前で、俺は柏崎に出会った。

普段はきちんとバスで来ているとのこと、理事長の娘である以前に、一人の学園の生徒であることを重きに置いているという。

「ああ柏崎。今日はありがとな」

「気にしないでよ。ねえ……これからもよかったら、一緒に話をしな

い？」

そう、柏崎からのお誘いを受けた。

「べ、別にいいけど」

「ふふん。その隣人部とやらで困ったことがあったら、相談に乗ってあげるわ」

「柏崎……」

「だから、私も協力してあげる……」

その柏崎の言葉に、どれだけの信頼を持たただろうか。

俺は心強い味方を手に入れた。親父、よくこんな立派な娘を父に持つ方と友達になったものだ。ガチで尊敬するぜ。

親父はこいつの親父さんと仲良くなれたんだ。だったら……俺とこいつも……仲良くなれる気がする。

これは希望だ。十年前に大切なものを失った俺への……新たなる希望。

「じゃあな、柏崎!!」

「うんっ。またね」

そう、互いに笑顔でさよならをした。

なんつうか、俺だけ隣人部の成果を出してしまいそうで怖いわ。

悪いな夜空。下手したら俺は、”お前を置いて”先に進んじまうかもな。

その時は……恨むなよ。

「……小鷹」

その校門前の光景を、夜空は苦々しく見ていた。

悔しかった。自分にとっての大切な存在を、根こそぎ奪おうとする侵略者の脅威を、見ることにしかできなかったからだ。

このままでは、自身の目的を——大切なものを取り戻せなくなる。だから、取り返しのつかなくなる前に動かなければならない。三日月夜空は、自身の中でそう誓う。

柏崎星奈に……羽瀬川小鷹は渡さないと……。

「羽瀬川小鷹と三日月夜空。……タカと……ソラ」

夜空の映る視線の先で、星奈はぼそつと呟いた。
そして、冷徹な笑みを浮かべて……その二人の友情にこう口添えを
した。

——やっぱり、くだらない友情じゃない。

三日月夜空の周辺

遠夜市の外れにある錆びれた古本屋。

昔からある馴染みのそこは、何十年もそこにあつて未だに潰れていない。

私の家から徒歩数分で付く。子供のころから本を買いに訪れている。

たまつたポイントは三ヶタを超えるだろう。

そんな古本屋で、私は土日バイトに来ている。

別に学生のバイトなら、街中のコンビニや綺麗な本屋の方が若者っぽくていいだろうと誰もが思うだろうが、そこに私の考えがある。

ここは俗にいうリア充がやってこない。この付近の顔なじみや、小さいガキどもしかやってこない。

なので私としては、リア充の客相手に応対しなくて済む。それにこの店主である親父は割とフリーな性格をしている。

小さいころから知っていて、パチンコや競馬で勝つたらおやつをくれる。今でもポテチやチョコレートを私にくれる。

ちなみにその貰ったおやつは、マリアの餌となっているのだが。

七月上旬。

今日も、大した客も来ないこの本屋で、私は無愛想に本を読んで店番をしている。

こんなんで金を貰っているのかとか文句を言われても仕方ないが、店主がそれでいいというのだからいいのだろう。

それに店主いわく私は”看板娘”らしいからな。まあ中身はあれだが容姿にはそれなりに自信があるのでな。

ただ座っているだけでも絵になるとのことだ。正直どうでもいい。その言葉に甘えて、私は一人本を読む。だが……その本を楽しんでいるほど心に余裕はない。

あくまで仕事だからそれに集中すべく考えないようにしているが、私は今非常に焦っている。

そう、私の青春の復活に……とてつもないイレギュラーが割り込ん

できたからだ。

あの女……柏崎星奈の出現だ。

あの肉まん女が、まさか小鷹に近づいてくるとは思わなかった。

正直関わらないようにしていたが、あっちから変に関わってきた。

どうしてあの女が小鷹に親しく接してきたかはわからない。考えすぎかもしれないが……嫌な予感がする。

早く私が動かないと取り返しがつかなくなるような、とにかく胸が痛むんだ。

どうしてかはわからない。けど……痛いんだ……心が。

「……くそっ。思い返すだけで胸がむかつくっ！」

思い出さないようにしているが、やっぱりあの瞬間が頭に勝手に映り込む。

「悪い！ 柏崎、その……後日時間ができたら話を聞いてくれ！」

そう悪びれながら、小鷹はその場を去った。

先々日の放課後、隣人部で私が調子に乗ったあの日。

小鷹は私たちのくだらない争いに嫌気をさして、途中で部活を放棄した。

その瞬間に追えばよかった。だが理科の挑発に対して乗ってしまい、あの後もゲームを続行したのがそもその間違いだった。

なんとかゲームを終わらせた後、後輩二人を置き去りにして外へ出たら。

小鷹を発見したものの、隣にいらんやつが一緒にいた。

「じゃあね、羽瀬川くん……」

小鷹に手を振る柏崎。

なんとも親しげに、小鷹に対して笑顔で見送りをしていた。

どうして貴様が、小鷹と一緒にいる。

私はあいつがいなくなった途端に、感情を抑えきれず柏崎に噛みついた。

「貴様っ！ こんなところでなにやってるのだ!？」

そう私が牙を剥くと。

柏崎は、まるで興味もないというくらいに、ゴミを見るような目で私を睨んだ。

「……あなた……誰？」

冷徹に私にそう問う柏崎。

その質問には意味がないことははっきりとわかる。

一応聞いておこう。念のために聞いておけばいいかという、その眼が私は気にいらなかった。

「私が誰だろうと貴様には関係ないだろう……」

「……そうね。くだらない質問だったわね……三日月夜空さん」

「……貴様」

どうやらこいつは私を知っていたようだ。

だがそんなことは関係ない。光栄でも何でもないからな。

問題は、なぜお前が……あの男と。

「ごめんなさい。私もう帰らないといけないのよ。ああ心配しないでいいわよ？ 私……」あなたには”なんの興味もないから」

「いちいち癪に障るやつだ。……それはよかった。ならば、私の部活の部員であるあいつにも興味はないはずだ。だから近づかないでもらおう」

私がそう反論すると、柏崎はそれを鼻で笑うように言い返してくる。

「あら、ずいぶん勝手な物言いね。羽瀬川くんの彼女さん？」

「うっ……。そ、そんなではない！ 部活の仲間だ！」

「なくんだ。じゃあ別に彼があなたの所有物でもなんでもないじゃないのよ。あなたはバカなの？ それともあなたの作った部活は部長が部員を所有物として扱う不当な条件でもつけてんの？」

「ぐっ！ そんなのではない！ 貴様はリア充だ。リア充は私たちを笑う、だから一切近づかないでもらう!!」

どうにもむきになりすぎている。なぜだ？ そこまで熱くなる必要がどこにある。

確かにこいつは私にとっては気にいらないを通り越して、消したい人間だ。

富や名声で人を動かし、権力を使って人を蔑む。そして多数の人間に囲まれリア充ライフを送っている。

貴様みたいなやつは爆発すればいいんだ!! そんな奴の考えだ。小鷹を騙して捨てるに決まっているのだ!!

小鷹はこんな女には靡かない。だってあいつは……あの男は私の……。

「……なるほど。確かにあなたの……隣人部だっけ? からしてみれば……私は”最大の敵”みたいなものね」

「わかっているではないか……」

「……じゃあもし、あなたの大切な羽瀬川くんがリア充になったら、彼も隣人部の敵になるの?」

「なっ!?」

そう、意地クソ悪く星奈はニタリと笑って私に言った。

その言葉に対し、その顔に対し、私は尚更嫌悪感を抱く。

この女はきつと、私たちを蹴落とすために、力を使って小鷹を……。それだけは……やらせない!!

「貴様……!!」

「そうになったら、あなたはどんな顔をするのかしらねえ? あはっ、ちよつとあなたに興味湧いちゃったかもね」

そう冷徹な瞳と、凍えるようなその笑みを浮かべて。

柏崎は指を自分の口に付けて、魔女のように一言を私に向けて言い放った。

「だったら……私が羽瀬川くんをリア充にしてあげよつかな」

「こっ……この魔女が!!」

「あっはっは冗談冗談。三日月さんって面白いわね。……いや、”あなたと彼が揃うと”……より面白いわね」

そうやって、自分で納得するように何かを呟いた後。

柏崎は最後に、こう言い残してその場を去って言った。

”見定めて” あげるわ。あなたたちの……残念な青春滑稽劇を……」

見定める……。あの女は何を言っているんだ。

私と小鷹を、面白おかしく観賞しようとしている。

まさ……か……。いやそんなはずはない。

あの女が、私と小鷹の友情に入りこむ道理がどこにある。

あいつとの友情は私たちだけの物なのだ。だから……けして他の連中に知られるわけには……。

「呼ばれて飛び出て……ジャジャジャヤーン!!」

私が考え事をしていると、後ろからやかましい大声が聞こえてきた。

誰が来たかはわかってはいるが、一応振り向くことに。

「やあよそにゃん。駄目だよ本ばかり読んでいたら。ここは本屋であつて本を読む所じゃない、買う所だよ?」

「……」

そう楽観的に言つて、裏口から入ってくる人物。

同じ聖クロニカ先輩にして、この本屋でバイトをしている”大友

朱音”だ。

私にとつては……”比較的心を開ける希有な人物”。そして……

”あの女”の側近だ。

かつて私にとつて”大切な家族だった”。その女の大親友。

「……遅刻。店長に言いつけますからね」

「あつはは悪いねえ。でも遅れたのは私のせいじゃない。君の”お姉さま”が仕事を私に押し付けたからだ。ツケはあいつにツケといつてねえ」

「……」

それを言われて、私は無意識に不機嫌になる。

まあもともと私は無愛想で不機嫌なんだがな。

私の……お姉さま。いや……”姉だった”女。

その女は聖クロニカ学園の生徒会長。そして向かいにいる朱音先輩は副会長。

その姉だった女と朱音先輩は幼馴染で大の親友。私も小さいころから何度か遊んでもらっていたことがある。

そして私の家庭に悲劇があつた後、姉だった女と離れ離れになつた後も時より私に会いに来てはあいつの状況を教えてくれた。

だがこの人は情で私に無理やりあいつと会わせようとしたことは一切なかった。

それは、この人なりに私の気持ちを考えてくれたからだろう。

そんなこんなでこの人とも長い付き合い。私がこうして歪みきつた後でも、この人の前では比較的歪む前の自分を保つことができる。

「つて……君が入学してからまだ”ヒナ”とは一言もしやべっていないんだっけ？」

「ああ、正直話すことはなにもありません。話したいとも思いません。というか顔も会わせたくありません」

「そこまで言つてみせるか。まあでも……それは君の家庭の問題だ。そこに奴の親友ごときの私が無理を通すのは野暮というもんだからね」

「まったく……あなたには世話になつてばかりだ……」

そう、私は自然に笑みを浮かべる。

こんな風に、自分を偽ることなくさらけ出せるのはこの人に対してだけだ。

友達……とはまた違う関係だが。正直言つて頼りになる人物だ。

学校ではあの女の傍にいるからあまり近づけないが、こうしてバイトで会つた時には……募る話をさせてもらつている。

「よぞにゃくん。イケメン紹介してよ」

私はバイトを切り上げようとしているのに、それを邪魔するように私に声をかけてくる先輩。

なので私は、皮肉交じりでこう返した。

「この友達もろくにいない私にそんな拾い顔を持ち合わせているとお思いで？」

「うくん。でも最近、男の子と一緒にいる所をちよくちよく見かけるけど？ あれは君の彼氏かい？」

「うっ……」

男と一緒にいる。おそらく小鷹の事だろう。

この人といい柏崎といい、あいつと私はそんな風に周りに思われているのか。

あまり目立たないようにしているつもりなのだが……。

「あいつとは部活仲間で、そんなんじゃないです。それに私はたまに熱さを見せてくれる友情を重んじる男がタイプなんで、あいつはどうも冷めきってるヘタレだし」

「そうなのか。まあなんか学校でも評判悪そうだしねえ。私としては、そういう風には見えないけど。むしろあの金髪くんはカッコいいと思うなあ」

「……そう言ってくれれば、正直うれしいです」

つい、本音が出るように口から出てくる。

そうやって毎日本音を言い合える友達がいたら、こんなにも心地よくなれる物なのだろうか。

そうだな……早くあいつとの無くした日々を、取り戻して……。

その流れに乗るように……. どんどん無くなったものたちを……取り戻し続けて。

「……あいつに……伝えておいてもらえますか？」

「え？　なにを？」

「……もう少し、待ってほしいと。取り戻すものを取り戻したら……必ずあなたのところに話をしに行く」

そう、私はあいつへの伝言を朱音先輩に手渡した。

それを聞くと、彼女は満足そうに眼を細めて、そして笑った。

「そっか。じゃあ伝えておくから」

「……はい」

その言葉に、私はまた、自然に笑みをこぼした。

ピロピロピロ〜♪

「おっ、お客さんだ。ついでだし最後に店番してよお。私あつちで着替えてくるから」

「ちよつと……。これじゃ残業だつて……」

そう店の奥に行く朱音先輩に私は文句を言おうとしたが、私はその来客を見て言葉を止めた。

その客……もう夏に入るといいうのに熱そうなゴスロリ服。おまけに黒だから太陽光浴びまくり。

そして眼は赤と青のオッドアイ。最初は病気なのかと心配していたが、その兄から聞いた限りではカラコンでかっこつけているだけ。そう、その客とは……羽瀬川小鳩だった。

「……うげっ！」

そのうげっ！は何を意味しているのだろうか。

小鳩は私を見て、そう唸った。

ああそうだ。確か部活ではこの少女に対しても私は容赦をしていなかったな。

内心では嫌われてしまったのか、まあ今はお客だ。丁重に扱おう。

「いらっしやいませ〜」

そう私が笑顔を作ると、小鳩は恐ろしい物を見るように怯えて本棚に隠れた。

あの、私は別にあの男のように凶悪な笑みを浮かべたわけじゃないんだけど。

なんとというか……ちよつとだけ小鷹の気持ちがあったような気がした。

ただ笑っただけなのに怖がられる……こういう気分になるのか。

「……ごほんっ！ なんもしないから……買いたい本を探せ」

そうぼそりと小鳩に言うのと、小鳩は小さく首を縦に振った。

そして、本を探すがどうやら見当たらないらしい。

困り果てて、小鳩は恐ろしげに私の所へちよちよこやってきて。

「……く……鉄のネクロマンサーの……オフィシャルガイドブックっておいて……ます？」

どうにも慣れない敬語でそう聞いてきた小鳩。

ああ、そういうえば最近発売したよな。

この古本屋には置いていないが、街中のツ〇ヤとかにはあった気がする。

「……申し訳ありませんお客さん。それは当店では置いておりません」

私はいつもの声のトーンでそう丁寧に説明した。
なんともシユールな光景だっただろうか。

こう、他の店舗を進めるといふのはあまり店員としてやってはいけないことだが。

「……スメラギ、街のツ○ヤとか行ったらあるんじゃないか？」

そう、彼女にこっそり教えてあげると。

「は、恥ずかしくて行けへん……」

そのぼそりと教えてくれたカミングアウト、私はとても共感を覚えてしまった。

そうだよなあ。隣人部なんかにいるやつが街のツ○ヤに一人で行って行けないよなあ。

私はどうして気付いてあげなかったんだろう。仮にも隣人部の部長だろ？ 察しろよ!!

「……お前も、立派な部員だ」

「なんか……ぜんっぜんうれしくないのは気のせいばい？」

そう小鳩は私に尋ねる。

大丈夫、気のせいだ☆

だが、どうしようか。ここは曲がりなりにも本屋だ。だったら……お客のニーズに答えてこそ百点満点だな。

「……はあ。だったら発注をかけておくから。この紙に氏名と住所を書け」

そう言って、私は一枚の白紙を小鳩に手渡した。

無い商品は取り寄せるしかない。この本屋ではそういうこともやっている。

時間はかかるが。街のおしゃれ本屋に行けないのならそうするしかない。

「え、ええの？」

「ああ、届いたら伝えるから。その時になったら金を持って来い。あ、前金で百円はいただいておく。ドタキャンは勘弁だからな」

そう私は比較的やさしく小鳩に説明し、その紙を受け取った。

「あ……ありがと……ごいします」

「ふふっ。百点満点だ」

ビビりながらも感謝を述べる小鳩に、私はそう褒めた。
するとなんとも嬉しそうな顔で、店を出た小鳩。

まったく、中二病に侵されていなければ素直で可愛いんだがな。

「……よそにやん優しい」。店員の鏡みたいだ」

「あ、朱音先輩！」

後ろから今までの光景を全部見られていたらしい。

私は思わず顔を赤らめる。

「そういう一面を素直に出せば……百点満点なんだけどな」

「うっ……私の」口癖を。わ、私は今日はあがらせてもらいますから！ お疲れ様です!!」

そう恥ずかしそうに、私は店を後にした。

翌日。

今日の放課後も、羽瀬川小鷹は部活に来なかった。

今部室にいるのは私と理科だけ。

私は昨日の本屋で見せた一面などまるで表に出さずに、いつもの無愛想夜空に戻る。

「あつれえ？ 羽瀬川先輩今日も休みですかあ。まったく無責任ですねえ」

理科が愚痴るように、小鷹に対して悪評を口にする。

そして、私にだけ見せる凶悪な本性を表にして、私に話しかけてくる。

「んで？ なにがあつたんよ夜空ちゃんよお？ 間違いなくてめえ関連だろお？」

「……」

その問に対して、私は答えることなく本を読んで黙りこむ。

「まったくそのだんまりも飽き飽きなんですよ。ああでも確か僕達がトモポンでくっつたらない喧嘩してたらあの腐れ金髪がいじけて出て行ったんでしたっけ？」

「……」

「んもう。だめだめだめよお。そんなことで出ていったら対戦系のゲームなんて出来やしないですつて。ああ、ああいいうKYな部分が多いって、友達少ないのかもしれないね。ヒヒ……ヒヒヒヒ」

「……少し黙れ、このクソメガネが」
どうにも耳障りになつてきたため、私は重い声色でそう理科に言い放つ。

この女は……リア充じゃないだけあの肉まんよりマシだが、その枠内では自分が一番優秀だと思ひ込んでいる。

世間で評価されている天才だと？ 所詮はそれだけだ。それ以外に貴様に価値なんてないんだよ、志熊理科。

「にしても、ちらつと見えたんですけど。小鷹先輩、あの金髪クソ雌豚と一緒にいましたよねえ」

「……」

「あれ？ 今ひよつとして表情歪みました？ あつははなるほど。夜空先輩も乙女なんですわねえ」

「志熊理科……貴様……」

「やつぱりかわいいじゃないですか。ジエ・ラ・シー……つてやつですかあ!？」

その言葉で私は限界に達し、読んでいた本を理科に投げつける。

理科はそれを間一髪でかわし、そしてバカにするような顔で私を見る。

「いやいや危ないですねえ。そんな本気にならないでくださいよお。僕はこれでも先輩を応援してるんですよ？」

「そんなものはいらん！ あの女に、小鷹を好きにはさせない!! 絶対だ!!」

「あらら……こりゃ、結構マジかもしれませんねえ」

つい私その信念をぶちまけると、理科は私を測るような目で睨んだ。

その後も、しゃべくり倒す理科を無視し続ける私。

「夜空先輩。さつきはおちよくつてすいませんでしたあ」

とか言いながら私の方へ近づいてくる。

ああもう、頼むからマジで死んでくれないからこいつ。

正直うるさくて頭が痛くなつてくるんだが……。

「先輩。これ見てくださいよ〜」

「なんだ……ぶっ!」

そう理科が無理やり私と読んでいる本の隙間に割りこませたのは、なんとも如何わしい本の一ページだった。

それを無理やり見せられた私は、読んでいた本の角で理科の頭を思いつきり叩く。

「いった〜い!! 何するんですかあ?」

「貴様こそ何をするのだ! あんな……破廉恥な……ああもう!!」
怒つたら逆効果なのはわかってる。

だが……ああ腹立つ! 小鷹もこいつもあの女も!!

全部が全部、イライラするイライラするうううううう!!

「あれれ? やっぱり夜空先輩ってこういうの苦手なんですか?」

「ああ、そんな男が女と……ああ。とにかくそういうのは苦手なんだ!!」

「あらあら典型的な型物タイプ。中身はゲスなのに型物、超珍しいですねぇ〜」

「理科〜? これ以上言うなら本気で殺しにかかるぞ〜?」

「エツチなのはいけないと思います! なんてかわいいですよ夜空先輩〜」

「よし今殺すここで殺す絶対殺す!!」

私はそうめちやくちやな形相を浮かべ、部屋にあった椅子を理科に振りかぶる勢いで迫る。

そんな私を見て、撫でるように私を説得する理科。

「ああもうわかりましたって! 理科が悪かったですよ。でも……本心はどうなんですか?」

「な・に・が!」

「なにつて……ナニですよ。家じゃ羽瀬川先輩を想像してオ〇ニーとかしてらしているんですよ?」

「ぶっ!」

私は理科の言ったとてつもない単語を聞いて思いつきり噴き出した。

その私の反応を見て、理科はきやつきやと笑った。

「いやあもう純情で可愛すぎます夜空先輩☆ 理科、襲っちゃってもよかですか〜?」

「私、貴様を本気で殺してもよかですか☆」

「いやいや冗談冗談。でもさ……あれだけ仲良さそうだと疑っても仕方ないですよ。正直もうやり済みなんじゃないですか?」

「や、やってない!! それにこれからも……あいつと……そんな行為なんて……」

「そうですね。だったら……理科が狙っちゃいましょうかね〜」

そう、冗談ながらも小鷹を狙うと口にした理科。

その理科に対して、私は先ほど以上に睨みつける。

すると、今度こそ理科はおちよくるでもなく、本気で怯んで見せる。

「うっ……」

「……私をおちよくつたりするのも正直目障りだがやめてもらいたいが……それ以上に」

「な……なんですか?」

「……小鷹には……余計な事をするな」

そう、凄むように理科に迫る私。

正直、そこまで私が本気になるのは自分でもよくわかっていない。

あいつとの失った友情を取り戻す。それは確かだ。それで、邪魔を

されたくなかったからか。

考えすぎか。こいつには一切関係ないというのに。

「……こりや……遊びでやるにしては……覚悟がいりそうですね」

そう、何かを呟く理科。

その後、またも通常モードに戻ってこんなことを言いだしてきた。

「夜空先輩〜。理科、考えてみたんですよ〜」

「なにをだ?」

「夜空先輩の方も、羽瀬川先輩に嫉妬させてみるのはどうでしょうか?」

そう、なんとも頭の悪そうなことを言う理科。

あいつを嫉妬させて気をこちらに向けさせるって……いやそりや無理だ。

それは要するに、私が男を捕まえて小鷹の前でラブラブ見せろってことだろ？

無理です！ あいつとできえラブラブなんてできないのに、適当な体目的のリア充男子見つけて靡けなんて絶対に嫌だ!!

「そんな……この学校のリア充男子どもと触れ合うのは私の矜持が許さん!!」

「そういうとは思っていましたが。先輩、この部活にもう一人男がいるのをお忘れでは？ それもとっておきのイケメンが」

「……あつ」

理科に言われて、私は思い出すようにそう口を開いた。

そして噂をすると、隣人部の扉が開き、その人物が入ってくる。

女顔の男部員……楠幸村だ。

「ごぶさたしております。おくれてもうしわけございませぬ」

「いえいえ、ちょうど白馬に乗った王子様を待っていた所ですよ幸村くん」

そう幸村に笑顔を見せる理科。

そして、扉の方へと向かっていき。

「幸村くん。夜空先輩が元気なさそうなんで、男の子として励ましてあげてくださいい」

「……わたくしがですか？」

「はい。立派な日本男児たるもの、傷ついたか弱い女の子一人泣かせておくのを見逃すのは厳禁ですよ」

そう都合のいいことを幸村に押し付ける理科。

私は別に傷ついているわけでもか弱くもない！

「おい貴様！ 何を勝手にっ!!」

「それじゃあ、美男美女の会話を邪魔すると悪いので……理科はドロンさせていただきます☆ さよおくなくらあ」

そう気分良く、理科は部室から退席した。

おいおい、この大した面白くもないぼーつとした男を一人私の所に置いて行くな。

こいつと二人とか正直何していいのかわからんのだが？ 話がはずみそうにない。」

「……………」

「……………」

ほら。変な沈黙流れちゃったではないか。

こいつと何を話せばいいのだ。誰か教えてくれ。」

「わたくし…………りっぱなんだんじとして、かよわいおんなのこをばげまします！」

「あー、がんばってくれー」

おそらく私のことを言っているのだろうが、私は何も思うことなく他人事のように幸村を応援する。

そんな幸村は、その気になって私の隣にやってくる。

顔も近い。だが…………うくん、どうして何も思わないのだろうか。恐ろしいくらいこの男を意識することが無い。

確かに顔もイケメンよりだし、性格はナヨナヨしているがそういうのが乙女心をくすぐることだってあるはずなのに。

なんだろうなあ。どうしてもこいつを男だと思いうことができない。い。

「よぞらせんぱい。なにか困ったことでも」

「ああ、じゃあコーヒー淹れて」

私がそう頼むと、幸村は素直にコーヒーを淹れた。

やつぱりこいつ扱いやすいな。その気にさせればなんでも言うこと聞いてくれるし。

「どうぞ」

「ありがとう。ああそうだ。ちよつと部室掃除して」

「かしこまりました」

そう私が指示を出すと、幸村は素直に掃除を開始した。

すつごい、なんでもやってくれ。なんでも言うこと聞いてくれる。」

私は最高の装備品を手に入れたようだ。これからもコキ使い倒してやろう。

「……うまいな」

幸村が淹れてくれたコーヒーを飲み、思わずそう呟いた。

コーヒーを淹れるのもうまいし、隣人部には無くてはならない存在だな。

これからも、私たちのために動きまくってくれよ、楠幸村くん☆

「よいしょ……よいしょ……」

「……」

……なくにやってるんだろ私。

こんなひ弱な後輩一人に威張り倒して、人を道具のように扱って。

そんなことやってていいのか？ 幸村は私をはげまそうと、女の子のために男を見せようとしているのだぞ。

その気持ちを……踏みこじって。そんな優しさを……嘲笑っているのか……？

「……私も、手伝う」

「え？ そんな、そこですわってゆっくりなさっててください」

「……いや、後輩に対して先輩がのんびりしては格好がつかないのではな」

そう、私は箒をもう一本取り出した。

そして、幸村と一緒に部室の掃除を始めた。

「……お前、まさか教室でもそうやってコキ使われているのか？」

「いえ、めっそうもございませぬ。むしろわたくしになにもやらせてくれませぬ」

「……」

「わたくしはひよわで、かわい……くらすめーとはわたくしになにもやらせないように、えがおでふるまっています」

そう、幸村は悲しそうに言った。

丁寧に扱われている。みんなに愛されている。そう思えてもいいくらい、みんながこいつのことを好きなのだろう。

だが、それがみんなの優しさなのかと言われれば……それを肯定す

ることはできない。

なにもやらせない。なにもさせない。それは……幸村にとってはなにより辛いことだったのだろう。

「だから……わたくしはうれいのです。よぞらせんぱいはわたくしになにかをさせてくれる。わたくしをたよつてくださる。このぶかつのひとたちは、わたくしを一人の男としてみている」
やめろ……やめてくれ。

その言葉一つ一つが、私の心に深く深く突き刺さる。

私はどこか心の底で、この男の事を軽く見ていた。

女つぽいと……オカマだと。弱弱しいと、使いやすいと。

そう思っていたんだ。けどどそいつは何も疑うことなく……ただ私が、自分を頼つてくれていると。

そのことが、とてもうれいなって……。

そんな風に……思つてくれていたんだな……。

「うっ……うっ……」

「せんぱい？」

思わず私は泣いてしまった。

幸村の事もあるが、今までの小鷹の事やあの肉まんの事も全部ひつくるめてだ。

どうして、こうなつてしまったんだろう。どうしてこんな風に思う自分ができてしまったのだろうか。

十年前は……こんなんじゃないのに。けして他人を……そんな風に思うことなんてなかったのに。

もつと、色んな人の良い所を見ようとしていたはずなのに……。

どうして……こんなことに……。

「……ごめん幸村……わた……し……」

「……」

私がそう泣きじやくると、幸村が私の傍までやってきた。

そして、こんな小さな私を……強く抱きしめてくれた。

「あっ……」

「泣かないでください、せんぱい……。もしもなにかかないことと

か、こわいこととかありましたら……なんなりとわたくしをたよって
ください」

「……ふっ……男の子（おのこ）だな……幸村」

そう、私は初めて……幸村を男として意識した。

だが……それと同時に……。幸村にとつてきつと残酷な真実にな
るであろう……。

彼の底を暴くような……とてつもない衝撃が私を襲った。

「……えっ？」

「……どうかされましたか？ せんぱい」

「……幸村……お前」

私は……抱きしめてくれた幸村の感触を通じて、その違和感を感じ
取った。

これが……男の身体か……。それにしても肉つきが——とにかく
違和感を感じる。

胸も、かすかに膨らみがあるし。それが体にあたって、自分と……
”自分の過去”に直結させる。

かつて親友に……”男と偽った”自分を思い出すように。

「……そんな……そんなことって」

「よぞらせんぱい……かおいろが……」

幸村の心配を耳にして、私はハツとなる。

そしてすぐさま幸村から離れて、その動揺を彼に見せないように振
舞う。

「あつ……あり……がとな。なんというか、お前はもう立派な男だ」

その言葉を私は口にした時、心がとても痛んだのを覚えている。

とても痛かった。幸村をそうやって褒めるたびに。そういう存在
だって扱ったびに。

私は……とても痛みを感じた。

「さようですか。げんきになられたようでよかったです」

そう、優しく声をかけてくれる幸村。

そんな幸村に対して、私は出来る限り動揺を伏せて。

優しげに、幸村を部室から出て行くように促す。

「ちよ……ちよつと一人にしてくれ」

「よろしいのですか？」

「あ……ああ。お前のおかげで元気になった！ お前のような後輩を
持てて、私はとてもうれしいぞ!! 百点満点だ!!」

そう私が褒めると、幸村はぱあつと明るく笑みを浮かべた。

「あ、ありがとうございますごさいますせんぱい。それでは……またあした」

「ああ……また……明日」

お互いにそう言って幸村は去っていった。

そう、明日から私は……幸村への見方が変わるだろう。

だって……知ってしまったんだ。知るべきではない……あいつの
”秘密”を……。

その触れてはならないであろう真実を、最後に私は口にして、その
場で崩れ落ちた。

「――女……の子……？」

狩られたら狩り返す、倍返しだ！

七月上旬、週初めの放課後。

今日も俺は、部活に行くことはしなかった。いわゆるサボリというやつだ。この外見でサボりだと、本当に不良になった気分だ。

俺個人は真面目くんで通しているつもりはないが、ひよつとしたら無自覚な不良なのかもしれない。

誰かに自分を分かってもらいたいと、もがいて失敗を繰り返す。そういう意味では、俺はやっぱり良い生徒ではないかもしれない。

現在、図書室にいる。

この図書室はそれなりに本の仕入れがいい、リクエストを出すとはほとんど答えてくれるほど。

近くの本屋に行くより種類が多く、人を選ばない。

静寂に包まれた図書室、そこでも周りの視線がどうにも痛く突き刺さる。

さつきから、俺の方を見てはひそひそ何かを言っている。

俺が何かアクションを見せるたびに、怯えるのが伝わる。

そろそろ慣れてきたわけだが、やっぱり傷つく物は傷つく。

ならばいったい何をどうすれば、こいつらは俺を評価し直すのか。

平和な学校でいいように育った奴らは、全部が外見で決めつけ、自身が上でなければ気が済まないのか。

といった風に、結構ネガティブな考えを時々するようになった。

これもあの女の子の影響だろうか。あの女はこんなことよりひどいことを毎日毎日考えているんだらうな。

それでよくまあ友達作りと言えたもんだ。あの女にその理念を背負う価値なんてない気がする。

だからこそ俺は考えている。その部活をサボり、本当に今のままでいいのかを……。

「誰かこう……気軽に相談できるやつがいればなあ」

そう、思わず俺は呟いた。

こうやって自分勝手に悩んだ所で、解決できる場面は限られている。

最近相談相手としては星奈という心強い相手が見つかったが、あいつはほとんど男子どもとどこかへ遊びに行っている。

いざ心境を打ち明ければ、容赦ない物言いが結構俺の気を晴らしてくれるが、あいつは人気者。俺のような日陰者毎日相談できるわけもなし。

だからこそ同じ部活内の人間ならいいが、あの自分勝手集団に何を相談すればいいのか。

「……自分勝手は、俺も同じか」

俺はそう自虐し、席を立つ。

するとまたも周りがざわめく。もう慣れたよ、そうやって俺を見続けて楽しめばいいさ。

そして出口の方へ行こうと目を向けると、そこには見慣れた奴が一人いた。

白衣を着た、眼鏡をかけた女の子が、なにやらあつちこつち首を振って見渡しては、図書室に入ることをためらっている。

そう、志熊理科だ。俺は気になり、あいつの近くへと歩いて行く。

「おい、どうした？」

「あひい！　じ……人類を脅かす凶悪犯!?!」

「失礼なやつだなおい……」

俺が優しく声をかけると、理科は驚きながらそう返してきた。

そのちよつと本音で言ったような感じが、俺の心の傷を抉るんだわ。今日俺家帰って多分泣くわ。

そして、俺であることを確認すると、理科は丁寧な口調で俺に接してくる。

「って羽瀬川先輩でしたか。これは失礼」

「ああ、大分失礼なこと言いやがったよ」

「いやいやそこは気になさらずに。大丈夫ですって本心で言ったわけじゃありませんのでえ」

そうはぐらかす理科。

まあ、そういうことにしておこう。

そんなことより、どうして理科が図書室にいるのだろうか。

「んで、お前部活は？　どうして図書室にいるんだよ」

「それはこちらの台詞でもあるんですがねえ。先輩こそ最近部室にいらしてませんか？」

「……わかった。俺も野暮な質問は控えよう。だから眼をつむってくれ」

「わかりました。概ね夜空先輩と喧嘩でもしたといたところでしょうが、あの人の性格上仕方ありませんよね？」

そう、ニコリと笑って理科は言う。

俺の心情を理解してくれていると、思ってもいいのだろうか。

だが、その笑顔……一見するととても可愛らしい無垢な笑顔。だが、どこか奥には恐怖を感じる。

まるで、奥底では俺の事を責めているような……。

「にしても先輩、ずいぶんとまあ……後ろの方々の視線が痛々しいですわねえ」

「え？　ま……まあいつもの当てつけだよ。きつとあいつらには、俺がお前を襲おうとしているんだと思いつ込んでるんだろうさ」

「なるほど、噂は耳にしていますでしたがかなり怖がられているようで。その顔と威圧感で聖クロニカ学園全ての者を圧倒する。その実力はこの学園の生徒三百人に匹敵する。それによって付いた異名は……一人旅団と」

「呼ばれたことねえし、そんな異名つけられたこともねえし」

そうおちよくる理科に俺はツツコミをいれる。

まあ髪の毛銀髪に染めて白い制服着たらそれらしく見えるんだらうけどな。

「募る話があるのなら、場所を変えましょうか」

「え？　でもお前忙しいんじゃない？」

「あの人や隣人部の事で悩んでいるのでしょうか？　こう部長を抜きにして今後の方針を考えるとというのも、ありじゃないですか？」

そう言って、理科は場所の移動を提案する。

俺はそんな彼女の言葉に甘えることにした。そう、今俺は相談できる相手を欲していた。

その対象が彼女になったことは意外だった。どうにもこいつは、暇つぶしに部活に入った感じがあったから。

でも、ひよつとしたらこいつも……変わることを願っているのかもしれない。

俺はこの時、理科に対する評価を少しだけ改めた。

移動した場所は理科室だった。志熊理科が学園から与えられたVIPルーム。

さすがに機密があるらしく、奥の部屋には入らないという条件付きで特別に入れてもらった。

俺は入ってすぐ、理科が用意したパイプ椅子に座る。

「……あの時は、ちよつと調子に乗ってすいませんでしたね」

開口一番、理科が俺に謝罪をしてきた。

いったいなんのことだろうか。俺はすぐに尋ねた。

「なんのことだ？」

「みんなでゲームをやった時ですよ。あの時、正直にみんなで楽しめるゲームを用意すればよかったのですが、ちよつと勝負魂に火が付いてしまいましたね」

そう、それは先日みんなでトモポンをやった時の事だ。

理科が提案したそのゲームで、みんなで楽しむはずがいつのまにか潰しあいになっていた。

今こうして部活に出ないことの原因もそれが一つなのだが、理科は結構気にしていたのか。

だったら、悪いことをしてしまったな。

「……こつちこそ、ごめん。なんか空気壊すようにゲーム放り投げてさ。大人げねえよな、そんなんじやゲームとかできないよな」

俺も、謝らずにはいられなくなり、理科に謝る。

あの時は俺も大人げなかった。帰った後も情けないと何度か自分を責めた。

俺たちは不安定だ。隣人部は不安定な存在だ。自分勝手の集まり、

だからこそ私利私欲に目がくらみ、それを止められない自分たちがいる。

だから失敗することを想定しなければならぬ。その失敗に向き合うことを考えるべきだった。俺は、それを放棄したんだ。

そんな俺の表情を見て、理科は柔和な表情を浮かべ、俺に言う。

「……だったら、今回はお互いさまということで、手を打ちましようか」

「ああ、そうしてくれ」

理科と俺はそう納得して、話を続ける。

「羽瀬川先輩は……変わりたいですか?」

そう、突如質問をしてくる理科。

どこか儂しげな声色で、問われる俺は少し戸惑った。

彼女も隣人部の一員なのだ、仲間なのだと思わせるようなその問に、俺は真っ直ぐ答える。

「ああ、変わりたいさ。それも……できるならみんなだな」

「みんなです……ですか」

「ああ、”可能であれば”……だけだな。全員同時というのは難しいことだろう、それは覚悟している。もしお前や幸村がある日友達を作って隣人部から離れたとしても、何かが起きてあの女が友達を作って俺たちを突き放すことがあったとしても」

「……」

「俺が……あの女やお前らを置いて行くことになったとしても……」

俺は迷わないことにしている」

俺は、自分の変化に対する心境を理科に打ち明けた。

それは裏切りではない。隣人部とは友達を作る部活。友達を作つて変えることを目的とする部活だ。

だからこそいつまでも友達が少ない部員の状態というわけにはいかない。誰かが友達を作り変革することができたなら、それは仲間として見送るのが当然だ。

俺はその覚悟ができている。それを裏切りと思わない、喜ばしいことだと思える覚悟ができている。

だが、あの女はそれができていない。友達を作った奴はリア充になり、裏切り者になる。

じゃなければ、俺に星奈と縁を切れなんて言わないはずだ。あいつは自分の事ばかりを考え、仲間である俺たちを縛りつけて今の自分の居場所に固定して満足している。

だからこそ、いつかは思い知らさなければならぬ。俺たちは……俺はお前の物じゃない”ってことをな。

さすがに底まで深い心境は暴露しなかったが、理科は俺の言葉に納得してくれた。

「そうですね。ならば……変われるようにもつと頑張るべきです」
「理科……」

「それが……隣人部の部員としての在り方だ」

そう、理科は強く断言した。

その言葉に、俺は強さを感じた。

「そこで話は変わるんですがねえ、小鷹先輩パソコンはお持ちですか？」

「え？ パソコンはお餅じゃないぞ」

「……殴っていいですかねえ？」

「すいません、持ってないです」

俺は半分冗談で返したのだが、理科が怖い笑顔を浮かべたので謝りながらパソコンを持っていないことを伝える。

一応小嶋が親父からもらったノートパソコンを所持しているが、俺はそんなものを与えられていない。

基本的に親父は小嶋に甘いたため、色んな物が小嶋にあたるのだ。

「んで？ どうしてそんなことを聞く」

「いやいや、あの日ゲームの話題でモン狩りの話が出たじゃないですか。だから一緒にやりませんかかって思ったんですよ」

モン狩り、正式名称はモンスター狩人という。

据置機から携帯機まで多くのシリーズを発売している。今若者の間でポ○モンの次くらいに流行っているといってもいいくらいの大作である。

みんなで協力をしてモンスターを倒し、幅広いカスタマイズで自身を強化し、己のテクを磨く。そういうのが受けに受けている。

そしてそれは、一度集まればもう友達と言わんばかりのコミュニケーションツール。友達作りには最適なソフトだ。

「そのオンライン版である”モンスター狩人前線バージョンG”。オンラインならあなたの凶悪面も見えませんが、コミュニケーションを極めるにはぴったしでしょう」

「うーん、凶悪面の部分はちよつと引つかかるが……確かに色んな人と仲良くなれるな」

「時より自己中のDQNもいますが、下手なことさえしなければ会いませんよ。ソフトがインストールされているノートパソコンをお貸ししますので、理科と一緒にレッツハンティングしましょうよ」

そう、俺にゲームを誘ってくる理科。

なんとというか、この瞬間だけ俺は幸せだと感じることが出来る。

こんな可愛い子にゲームに誘われるシチュエーション、すっげえ奇跡としか言いようがない。

「ああ、こんな俺でよければ！」

「そのノリですよ羽瀬川先輩。ついでに理科の事もレッツハンティングします？」

「それは遠慮しまーす」

「Oh……。そのノリはいただけないぜえ〜」

そんなやり取りを終えて、俺はパソコンを持ってすぐさま家へと帰宅した。

夕食を終えた後、午後八時ごろ。

俺は借りてきたパソコンを起動する。

中身は特に変わりなく、理科の私物ではないのか機密書類なども入っていない貸し出し用のパソコンだった。

デスクトップにはモン狩りのアイコンがあり、すでにインストール済みの状態。

とりあえず有線ケーブルを引っ張ってきて、ネットに繋げゲームを

起動する。

「さて、登録も完了したし……ん？」

と、ゲームを始めようとした時、ス○イプのアイコンが点滅した。理科と気軽に連絡が取れるようにスマホから登録しておいたやつだ。なにやら理科からチャットが飛んで来たらしい。

確認して見ると、「すいません先輩、仕事が入ってしまい今日はできそうにありません。後日一緒にやる時のために強くなってくださいね。ああついでに先輩のあそこも強くしておいてくださいね。キヤ☆」とのことらしい。

とりあえず後半は放っておくにして……そうか、楽しみにしていたのに残念だな。

ということに、今日は見知らぬ誰かを見つけて一緒にやるしかないな。

ゲームでは俺の凶悪面は見えていない。ということは言葉だけでコミュニケーションが取れる。ならばきつと誰か彼かは見つかる。

俺は初心者が最初に訪れるサーバーに入る。

このゲームは設定次第で、繋げる地域を最小限まで絞ることができるとのことで、俺はとりあえず済んでいる関東一帯設定することに。慣れたら色んなところのプレイヤーとやることにしよう。

サーバーに接続すると、そこには大広場があつて、大勢のプレイヤーがいた。

百万人以上のユーザーが登録しているというが、にしてもすげえな……。

常日頃この人たちは暇さえあれば、ゲームで友達を大勢作ってるつてののか。俺たちの部活の活動がほぼ毎日どこかで行われてるつてことか……冗談じゃねえ。

「誰かいらないかな……」

と、呟いた所で一つ思ったんだが。

登録し始めのド初心者の俺が助け船を出した所で、手伝ってくれるやつはいるのか？

一応新規登録キャンペーンである程度強い装備はつけているが、こ

のゲームの天井は遠く遠くの上だ。

なら同じ初心者を見つけるにしても、そいつらは友達と一緒にやっているに決まっている。

理科は仕事で忙しいっていうし……。

そう悩んでいると、俺も目の前を初心者らしき人が通り過ぎて行った。

黒い軽鎧をランクは8。俺の8倍はあるがそれでも初心者だ。

駄目もとで、声をかけてみるか。

『あの、すみません〜』

俺がその人に向けよりチャットを打ち込むと、相手は反応を示した。

『私ですか?』

『はい、あの……今日始めたばかりで、できれば手伝ってほしいんですけど』

あまりこういうのは嫌われることが多いというが、洗礼を浴びる勢いで俺は助け船を出した。

話し方を見るに女性プレイヤーだろうか。アバターは黒色の長い髪をした肌の白い女性タイプ。

ネーム欄には『N I G H T』と表示されている。ちなみに俺は『ホーク』にしてある。

『ん〜。丁度友達と解散したところで何をしようか悩んでいたところなんで、構いませんよ』

『そうですか! ありがとうございます!!』

『よろしくお願ひします! でも最初のデビューが私なんかでいいんですか? ちょっと先輩面しちやってもいいですかあ?』

そうノリよく俺を押してくるN I G H Tさん。

ああ、この凶悪面が相手に見えていないってどれだけ幸せなことなんだろう。

俺がイケメンでなくても極々普通の顔でいたら、今ごろこういう出会いが多かっただろうにな。

『もちろんです! その……数少ない仲間が今日来れないっていうん

で、一緒にやる友達とかもいないんで、困っていたんですよ』

『そうなんですか。色々大変なんですね、友達……いつぱいできるといいですね』

そんな風に俺を励ましてくるNIGHTさん。

なんでこんなに優しいんだろうな。現実でもないかなこんな人。ついでだ。少しだけリアルな事を相談してみようかな。

『実は、色々リアルでも友達を作ろうと努力してるんですけど。うまくいかないんですよ』

『わかります。私も最初は苦労しました。過去に色々あって……でも今では多くのクラスメートや後輩にしたわれる毎日になりました。努力は必ず報われる。そう思います』

『そう言ってくれると助かります。最近部活で揉めちゃって、今日部活の後輩に息抜きをして来いってこれを進められて、情けない話です』

『ふふ、いい後輩じゃないですか。私も部活の部長をやっているんですけど、最近後輩の一人が私の事を気に食わないって、でも……いつかはわかってもらえると信じています』

意外と、見知らぬ人に相談してみるのも悪くないかなとこの時思った。

この人は俺と違ってリア充側の人間。だけど、昔はそうじゃなかったかもしれない。

リア充は敵だと、あの女は言うけども。リア充が生まれた時からリア充だったわけじゃなくて、どこかで努力をしたんだと思う。

俺たちは、努力が報われずにおいてかれて妬んでいるだけの悲しい集団だ。だから、変わらなければならぬ。

俺は……あの女とは違う。その敵と違って……わかり合うことができる。

そのための……隣人部だ。

『その、NIGHTさんはどういう部活の部長をやっているんですか？ できればその信念とか、聞かせてもらいたいです』

『え？ ちょっと恥ずかしくて言いにくいな』

『なんだっていいんです。みんなで何かを成し遂げるそのことに意味がある。俺は今の部活を引っ張っていかなきゃって思ってた、だから少しでも……アドバイスを』

そう、少ししつこくアドバイスを求める俺。

ちよつとしつこすぎたか。ネットゲームでこういうことねだるのはまずいか。ましてやリアルの情報、嫌われるかな。

と思ったが、NIGHTさんは割と丁寧に答えてくれた。

『みんなと仲良くなるための部活です。あなたのいった、何かを成し遂げるための……に近いですかね』

『ほう、スポーツ系ですか?』

『どちらかという文化系かな?』とにかく臨機応変に隣人とも善き関係を築くべくからだと心を健全に鍛えたびだちのその日まで、共に想い募らせ励まし合い皆の信望を集める人間になろう”なんて宗教じみてるってバカにされてるんですけどね、大勢の人達と共に何かを成し遂げるって、いつのまにか学園中を巻き込んだ大きな部活になつちやつて』

——あれ?

あれ……その理念どつかで聞いたことあるような。

いや、気のせいだな。うん、気のせい。絶対気のせい。

俺はそんな記憶力ある人間じゃないし。うん、何かの間違いだ。ああ何かの間違い。

『すごいですね。具体的に何をやる部活なんですか?』

『まあなんといいいますか。仲のいい子も悪い子も一致団結しましようつていうか……わかりやすく言えば……』友達作り”かな?』

『う……うん。そうですね。ちなみに……部活の名前とか教えてもらってもよろしいですか?』

『はい、”隣人部”って言います!!』

お前かいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!

なんてこった!! よりにもよって狩人デビューをあのクソ女と一緒にやることになつちまつた!!

しかもこの女好き勝手言わせておけば、何がクラスメートや後輩に慕われてるだ。学園中のみんなと仲良くなりたいたい？ 綺麗ごともないところじゃねえか!!

こいつも姿形が見えないからって聖人演じやがって。何やってんだよ部長！ なにネットの世界に逃げてんだよ俺も人のこと言えないけどな!!

『は、ははは……。す……素敵な部活じゃないですか……』
ちくしょー。騙されたよ。

よりにもよってあんなやつに相談しちゃったよ。しかもあいつ絶対鼻で笑いながら適当に應對してやがったよ。

なんか遊ばれた気分だ。くっそ腹立つ!! 男だったらマジで殴りとばしてるんだって!!

『そろそろ、狩りに行きましようかホークさん☆』
『そうですねいきましよう』

俺は投げやりにチャットを打ち込み、フィールドへと出ることにした。

たのむから”☆”とかつけないでくれるかな。あの無愛想なキャラにあつてないんだから。

確かに……笑ったら可愛いけどさ……。ちよつと胸高鳴っちゃったけどさ……。

フィールドに出向くと、色んなモンスターがいた。
弱いモンスターからちよつと強そうなモンスターまで。

クエストをクリアするには、中堅モンスターを1体以上討伐することが条件となる。

俺もこいつも初心者。これくらいが丁度いい。

『がんばってくださいいホークさん』

『ありがとうございます』

応援してくれるあの女に、俺は投げやりに答えた。

個人的にこの隣にいる人懐っこいやつの正体があの女だとわかってしまったので、愛着など湧くことなく俺はモンスターを狩りまくる。

小型モンスターを狩っては素材をはぎ取り、アイテムを集めていく。

モン狩りはこういう小さな作業が後々生かされるゲームだ。

草原、荒野。拳句の果てには河原まで、色んなところに出向いた。

その河原にて、俺は見覚えのあるモンスターを見かけることになる。

『あれ？ あの魚みみたいなモンスターは……』

『ああ、”ワラスポーン”ですね。初心者装備としては人気のモンスターですよ』

そう説明を受ける俺。

ワラスポーン。河原にいた小型モンスター、その姿は有明海などに生息するハゼ科の魚、ワラスボそのまま。

その見た目のグロさが有名で。あのエヴァ○ゲリオン量産型のモチーフになったとの話もある。

俺や小鳩は前に九州で住んでいたこともあり、実際に生で見たこともある。

その時は小鳩が怖いと泣きついてきたことがあったな、懐かしい思い出だ。

俺としては、そのワラスボに対して怖いという印象を抱くことはなかった。むしろ、こいつに共感していたりもする。

その、見た目が怖いというだけで避けられるという要素。まさに……俺と瓜二つだ。

『ちなみに近くにはその上位種であるワラスボスがいます。せつかくですからワラスボスを討伐しましょうか』

『う……。ほ、他のがいいな』

そう俺はワラスポーンおよびワラスボスを討伐することを嫌がる。

『でも、草原まで戻るのはめんどくさくありません？ ワラスボスは別に強くないですよ』

『まあそうなんですけど（とりあえず敬語使っておこう）、その……』
と、口ごもっている矢先。

突如奥からワラスボスがやってきた。

そしてこちらを睨んでいる（目が無いけど眼のアイコンが表示されている）。

しまった、先にあつちから勝負をしかけられたか。

『ホークさん、こうなったら最後。あのワラスボス……殺るしかないですよ』

『ちよつと待つてください！　ワラスボとは戦いたくないんですよ！！』

『何を悠長なことを、あんな見た目が怖いグロテスクなやつこそ叩きのめしがいがあるんじゃないですか』

そう、NIGHTは張り切ってそう言った。

あの女……内心は俺の事もそう思ってるんじゃないだろうな……。

お前は俺にとつて、俺の外見を選ばずに接してくれた身だ。それは感謝している。

だが……やっぱり内心では俺を悪者扱いしているのか……。だったら俺は……。

そんなことを思っていると、NIGHTはワラスボスに攻撃をし始めた。

ここでただ見ているだけというのも、なんか地雷プレイヤーみたいでそれもいやだ。

ちくしようワラスボ……恨むなら俺を恨まず、その女を恨めよ!!

俺も攻撃に加わる。ワンパターンなモーションではあるが当たればダメージをこっそり持っていかれる。

俺は何度か回避しきれずにやられそうになる。NIGHTがサポートをしてくれるが、それでも持ちそうにない。

もう殺される。でもワラスボに殺されるなら本望か……そう思っていた時。

突如、後ろから大剣でワラスボをぶった切るプレイヤーが現れた。

『なっ!?!』

そしてワラスボが崩れるようにやられた。

一応クエスト成功のアイコンが表示されている。

『ほら、早くそれはぎ取りなさいよ』

そう、助けてくれた人が言う。

白い鎧を着た。輝かしい大剣を所持する女アバター。

ネーム欄には『SHINING☆STAR』と表示されている。ランクは12。俺の12倍ある中々のプレイヤーだ。

俺は言われた通りに、素材をはぎ取った。

『あ、ありがとうございます！』

『あなた達初心者？ 中々に危なかったわよ』

そう俺たちに声をかけてくるSHINING☆STARさん。

そのしゃべり方だと、隣と同じで女プレイヤーか。

なんかどつかで聞いたようなしゃべり方だが、ただの偶然だろうか。

『まだ慣れてなくて、隣のNIGHTさんに助けてもらっていたのですが』

『ふうん。それにしてもなんか頼りなさそうね。サポートの仕方になってないんじゃないの？』

『……』

なんかずいぶんと強気なプレイヤーだな。顔が見えないことをいいことに言いたい放題だ。

これが理科が言っていたDQNプレイヤーなのだろうか。ネットでは日常茶飯事。敬語すらろくに使えない系か。

でも、助けてもらったことには変わりないし。なにしろ俺は初心者だ。

『まあまあ、俺が始めたばかりで助けてもらっているんで』

『あらそう、私も暇してるし、あなたたちを手伝ってあげるわよ。感謝しなさい』

と、俺たちのパーティに入ってくるSHINING☆STARさん。

口は悪いが、頼りにはなりそうだな。

と、先ほどからあの女、やたら黙りこんでいるな。

まああいつの身になって考えてみると、「上級者気取りのDQNが私の役割を奪い取った」といったことを考えているのだろうか。

だがこれはゲームだ。実力がものを言う、いくらあいつでも下手なことはできないだろう。

そうして次は荒野に行き、獣型のモンスターをたくさん狩ることに。

『ちよつと、アイテムを取りに行つてきます。すぐもどるんで〜』

『あ、わかりました〜』

『アイテムくらいちゃんと持ち込んでおきなさいよ』

『……』

そう煽られながら、NIGHTは行つてしまった。

そして数分後に戻つてきて、いざクエストへ。

そのフィールドでは、SHINING☆STARさんがやたら張り切つていた。

12にもなれば様々なテクニックを駆使し、圧倒的な力で敵をせん滅できるのか。

頼りになるのはなるんだが、それでは俺のテクニックの向上につながらない。

影に隠れて鉱石を掘つたりする俺。一方、あの女の方は。

なにやら弓矢を構えて距離を測っているようだ。いったい、なにをするつもりだ。

そして、何かを納得したように、その弓矢をチャージし始めた。

その対象は……SHINING☆STARさんだった。

『えいつ』

『ふぎやー』

その矢が、SHINING☆STARさんに直撃する。

すると、SHINING☆STARさんは眠つてしまった。

『ちよつとー！ いきなりなにをするのよ!?!』

チャット欄で文句を言いまくるSHINING☆STARさん。

その彼女に対して、NIGHTは大きな爆弾やら罫やら大量に置きまくる。

そして、石ころを投げつけ、SHINING☆STARさんを葬り去った。

いくら俺らより上級者とはいえ、アイテムを駆使した威力が上乘せされればSHINING☆STARさんだって死ぬる。

そのまま広場に戻され、パーティから外されるSHINING☆STARさん。

『……さてと、礼儀のなっていないプレイヤーなんて放っておいて、先に行きましようかホークさん☆』

そう、笑顔のアクションを俺に向けるあの女。

俺は、その笑顔に対して……何も言える言葉が無かった。

要は、自分にとって気にいらぬプレイヤーが傍にいたから、そいつを排除して自分に主導権を戻した。ということか。

なんというか……リアルでもネットでもえげつないな。あの女。

その後、俺は煮え切らない面持ちのまま、あの女と狩りをしまくった。

ランクも4まで上がり、あいつは10を突破した。

一緒にゲームをしているのがあの女だというのはわかってはいるが、後半は正直……楽しかった。

その時ばかりは、どうして顔を会わせることができないんだろうって思うこともあった。

しゃべりかたも偽り、態度や素性も偽っているNIGHTだが、きつと……ゲームを楽しんでいるんだと思う。

あいつは俺であることを知らずにやっているんだろうが、きつと日常の寂しさを……こうやって埋めていたんだろうな。

『さて、あと一撃!!』

次第に口調も俺の知っているあの女のものになっていったが、俺は特に違和感を覚えることなく進めた。

もうすぐ初心者クエストの最後がクリアされる。時間もすつかり0時を過ぎていく。

このあたりで止めておくか。それと……明日一応お礼を言うっておこうか。

そんなことを、考えていると。

ザシュツ!!

突如、モンスターにトドメを刺そうとしていたNIGHTを、後ろから誰かが切り捨てた。

その人物は、さきほどNIGHTにやられた、SHINING☆STARさんだった。

『さつきは……よくもやったわね……』

『き……貴様!!』

報復だ。きつとSHINING☆STARさんは、この広いフィールド内をずっと探していたんだ。

そして逆襲されたNIGHTは、やられて広場へと戻った。

その後目の前にいた大型モンスターは、SHINING☆STARさんの手で切り捨てられ。

『それ、あんたにあげるわ』

『え? いいんですか?』

『あたしには必要ないし……なんか胸糞悪いし。また今度会うことがあったら一緒に狩りしましょう』

そう言つて、SHINING☆STARさんは去っていった。

なんとというか……とても残念な閉幕だった。

やられたらやり返す。倍返しだ! ネットでもあるんだね。

そんな怖さを思い知らされたよ。

翌日。

ものすごい眠気の中俺が教室に入ると、あの女もめちやくちや眠そうに机に突っ伏していた。

「おはよう、夜空」

「……ああ、おはよ」

俺よりはるかに眠そうだ。

一応、聞いてみるか。

「なんかすごい眠そうだな」

「ああ、昨日ネトゲで初心者を手助けてやっていた時にな、胸糞悪い奴が現れて、一度は殺してやったんだが、その後やり返されて。あの後も何度かフィールドで出会うたびに殺し合って、気がついたら朝の六時

だった」

そうゆるく口にする夜空。

いややりすぎだろ。朝の六時って……。

この女、本当にやられっぱなしじゃ気が済まないタイプなんだな。

まあそういう強い所は嫌いじゃないが、執念深いって言い方をすればなんだかな。

「そうか、俺もちよつとネットゲやってて疲れてんだわ。お互い様だな」

「む？ ひよつとしてモン狩りか？」

「お、よくわかったな」

「……そうか。も……もしよければ今度、一緒に……狩り……行かないか？」

そう、口ごもりながら俺に言う夜空。

一緒にやるのは構わないが……ふつ……。

「ああ構わないぜ」

「小鷹……」

「みんなで何かを成し遂げるそのことに意味がある……からな」

「……え？」

俺がそう意地悪そうに言うと、夜空の目が丸くなった。

そして俺を見つめ、身体を小刻みに震わせる。

「努力は必ず報われる。そう思うんだろ？」

「なっ！ お前まさか昨日の！」

「……今日から、また部活に参加するから」

そう言つて、顔を赤らめる夜空を背に、俺は自分の席に向かった。

ちなみに、その日の昼休み。

購買のパンを買いに行った時の話。

「あ、柏崎……」

「ん？ 羽瀬川くん」

珍しく、柏崎がそこにいた。

普段から食堂でご飯を食べているのだが……。

そして、なにやらとても眠そうにしていた。

「どうした？ なんか寝むそうだぞ」

「まあね、昨日ネトゲしてたら”NIGHT”とかいう変な奴にストーカーされてね。朝の六時まで殺し合ってたわ」

それを聞いて、俺はやるせない気持ちになった。

そうか……SHINING☆STARさんはお前だったのか……。

俺はこの時、夜空と星奈を会わせてはいけないなど、なんとなく思った。

中二病(っつこ)

この世界が終焉に包まれたのは、何か理由があったからなのか。ごく普通に暮らす人々、そしてそれらを脅かそうとする……闇世界の住人。

俺は、そんな奴らと戦うために力を手に入れた。かつて聖鷹と呼ばれた……光の住人（ミカエル・ライン）のこの俺が。

闇の王、レイシスとの契約の末に手に入れた。右手に宿る闇の瘴気（オルフェウス）。

この力……手に入れたからには滅ぼさなければならぬ。

——魔王と呼ばれし少女……夜空に浮かぶ三月爪（ナイトメア・ザ・スリークロウズ）を……。

「したら小鳩、一緒に部活行くか」

「ククク。ついに我が眷属が復活した。この私があんたの住人どもを支配する時が来たのだ」

放課後。

俺が部活に復帰してから二日〜三日したある日。

俺は用事を終わらせ、妹と一緒に隣人部の部室へ行くことに。

俺が部活をサボっていた間、小鳩も俺に合わせて部活に来ることはなかった。

基本的に俺にべったりなこの妹は、自身で行動することはあまりない。

本当は俺が部活に行かなくても、お前だけでも行ってほしかったんだけどな。

俺は小鳩と一緒に部室のある談話室4へ。

また扉を開ければ、あいつらが自分勝手に何かをやっている変わらない風景が目に見えるのだろう。

そう思いながら、部室の扉を開ける。

「ちいーす。遅れてすまなかつ……」

そう出合いがしらの挨拶。

それからいつも通りの光景に呆れる俺、へと繋がるはずが。扉を開けた瞬間、俺は思わず口を止めた。

なぜなら、それはいつも通りの光景ではなかったからだ。

そこに映ったのは、どうにも奇妙な光景だった。

部長である夜空は、黒くてゴツイドレスに黒い羽を着飾ったものを着ており、うちの妹の真似か左目に金色のカラーコンタクトをつけてポーズを取っていた。

そして部員である理科は、水着に白衣という際どい格好に、中二臭いゴーグルをつけてこちらもポーズ。

同じく部員の幸村は、パーカー姿に眼帯とこれまた中二スタイル。ポツケに手を突っ込んで立っていた。

その三人の集団を見て、隣の妹は眼を輝かせていた。

なんとというか……演劇部？ やばい、部室を間違えたか……。

「……………こだ……………か？」

「……………なにを、やってるんだ？」

「うつ……………うううううううううううう!!」

俺がやってきたのを認識して、かぁーつと顔を真っ赤にして弱弱しく俺の名前を口にした。

そして思いつきり恥ずかしがって、奥の方へと逃げて行った。

イマイチ状況が理解できない、俺は理科に話を聞くことに。

「いったいなにをしてるんだ？」

「いえね。なんでも夜空先輩が突如、友達を作るには演技力が必要な」と最低なことを口にして。そこから色々話を広げていくうちに……………」

理科の説明によると、こういう経緯があったらしい。

友達を作ることに必要なのは演技力、そう夜空が言った後。

理科がその意味を少し捻じ曲げて、友達通しで無茶ぶりが行われた時、ノリよくそれに対応できる演技力を持つておくことは大切という話しになり。

時より友達通しでバカ騒ぎをすると楽しいという話題に発展し、今日はみんなでバカ騒ぎを試してみようということになった。

そして今世間じやコスプレが流行っているという話題に繋がると、みんなの中二病体験という黒歴史を掘り返す羽目になり。

その黒歴史で盛り上がることは友達作りに繋がると理科の言葉を真に受けた夜空が、やけになって中二病キャラを演じた。

それに乗っかり二人もゴージャスやら指抜きグロブやら眼帯やらをつけて遊んでいた。そこに俺がやってきた。ちなみに今ここ。

「活動名をつけるのでしたら、さしずめ”中二病ごっこ”といったところでしょうかねえ」

「なるほど。さつきからうちの妹が目を輝かせているのはそれを感じ取ったからか」

その理科の説明を受け、今日の活動を理解した所で。

奥でふさがっていた夜空がなんか吹っ切れたように、キリつとした顔でこちらへやってくる。

「ふはーっはっはっはっは!! この闇の城に力なき凡人が入ってきたものだなあ〜」

そうキャラを作っている夜空だが、顔が赤いのは気のせいかな？

「あ……ああ。すまなかつたな夜空、たいした力も所持していなくて」

「夜空？ 誰だそれは……。私はこの世界にて魔王の力を継承した継承者（サタンコード）。夜空に浮かぶ三月爪（ナイトメア・ザ・スリークロウズ）だ!!」

そう真名？ を名乗る夜空。何がTHEだかこっつけやがって。と、隣にいたレイシスさんが、中二病の血を抑えきれなくなったのか夜空に近づき。

「クッククック。魔王だと？ この偉大なる闇の王である私の前で名乗る物だなナイトメア!!」

「ほほう？ 貴様のその赤の瞳は、先ほどから我が金色の月眼（ゴールド・エクスプリス・アイズ）がざわめくと思ったら貴様の闇の瘴気が原因か……」

「お前らやたらノリノリだな……」

小鳩のレイシスに会わせるように恥じらいのかけらもない夜空のキャラ。

今日ばかりはこの隣人部は、闇の瘴気に満ち溢れているらしい。あ、俺も移ったかもしれね。

「せっかくですし羽瀬川先輩もどうです？ このマッドサイエンティストであるシグマ・ペリエステイグメノンがあなたを改造して差し上げますが？」

「お前もすっかり中二病に感染してるな。幸村もか？」

「このひだりにやどりしへるふれあのじゃが、いまはがんたいでふういんしているしよぞん。おちからをふるえずからだがうずく」

「とりあえず中二病感染してるのはわかったが、その表記じゃ何言ってるかわからないぞ幸村」

理科と幸村も中二病に感染中の模様。

ということはこの場で魂を変換（アジャスト）していないのは俺だけか。あ、そろそろ俺も末期だな。

しかしこれが活動なら、俺も加わらなければならないな。部員として。

中二病ごっこか。たまには小鳩の趣味に興じてみるのも悪くはなからう。あ、もう口調が……。

こうして理科から借りた闇の鎧みたいな衣装を着て、右手にとげとげした籠手をつけ、黒いマントを羽織り俺も中二病デビュー。

顔には三本線の傷跡をペイントして出来上がると、みんなに爆笑されたのは忘れよう。

その後、今日は全員中二病になってバカ騒ぎしようという提案で、それぞれ完全アドリブで劇をすることに。

なので、ここから先は学園コメディらしからぬ戦闘描写とか入るので、読んでいる小説を間違えないようにしようぜ。

——この世界が終焉に包まれたのは、何か理由があつたからなのか。

ごく普通に暮らす人々、そしてそれらを脅かそうとする……闇世界の住人。

「クツクツク。目覚めよ聖鷹（せいよう）!!」

耳に響く、少女の声だ。

可愛らしい少女の声、心地よく耳に入る、けどどこか邪悪な囁き。俺は眼を覚ました。この世界に墮天するように。

俺はかつて、光の住人——ミカエル・ラインの一人だった。

光に包まれこの世に生を授かり、光に満ちながらこの世界に生きる聖人だ。

力をつけた時から人は俺を、悪を睨み闇を射抜く鷹のようだと俺にいい、ついた異名は聖鷹。

俺はその異名に誇りを持っていた。この名と力で一国の王女を守るのだ。これほど嬉しきことはないと思っていた。

だが、ある日俺たち光の住人は、闇世界の住人に敗れ去った。

絶対的守護であった光の壁（イージス）が崩れ去り、この世界は終焉に包まれた。

俺は憎んだ。人を憎むな悪を憎めと教わったが、その教わりに歯向かい、世界そのものを憎んだ。

その結果、生き残りの光の住人からも追放され……地上へと墮天した。

それから長き眠りにつき、眼を覚ましたそこには……俺たちを死の絶望に陥れた闇の少女が立っていた。

「ククク。起きたか元光の住人よ……」

「ここは……現世（どこ）だ？」

眼を覚ましすぐに俺は当たりを見渡す。

個々が地上か。にしては……かつて栄えていた輝かしき光はどこにもない。

全てが闇に飲まれたか。情けない。地上人は逆らうこともできずに闇に囚われたということか。

「貴様は……誰だ？」

「クククク。私は偉大なる闇の王、レイシス・ヴィ・フェリシテイ・煌なのだ」

俺が尋ねると、少女はレイシスと名乗る。

その片方にある紅の魔眼——スレイブ・レッド。

あの混沌大戦で、その眼にはよく手を焼かされたな。今でも心に呪縛（ステイグマ）として刻まれている。

俺は命乞いもせず。レイシスに己の身体を差し出しこう言い放つ。「……殺せ。闇の住人である貴様に助けられるなど一生の恥だ。処刑でも何でもするがいい」

「ククク。死に急ぐな聖鷹。貴様にはやるべきことがあるのだ」

「やるべき……ここと？」

俺はレイシスに問う。

この墮天した俺に今更やるべきことだと？ ははっ……ばかばかしい。

もう光の住人にも見捨てられた。俺に指名などあるものか。

「じゃじゃくん。眼を覚ましたね聖鷹」

俺が自身に絶望をしていると、奥からなんとも露出度の高い科学者が出てきた。

眼にはゴーグルをかけている。こいつも闇の住人か。

「僕はシグマ・ペリエステイグメノンといってね、墮天した君を闇に回帰させたのさ……」

科学者はシグマと名乗った。

闇の世界の科学者、俺を闇に回帰させた……だと？

「……どういう意味だ？」

「そのままの意味だよ。君はすでにレイシス様の下僕さ。自分勝手は許されないのさ」

そう俺に語るシグマ。

闇の住人の下僕だと？ ふざけるな、何を勝手に……。

俺は逆らおうともがくが、身体が動かない。まるで身体を制御（コカトリス）されているようだ。

くそ、かつては聖鷹と呼ばれた俺の末路が……こんな小娘の下僕とは、死ぬ以上の屈辱だ。

「ククク聖鷹よ。何も私は貴様に世界を壊せと言っているのではない」

「なにを……世界を壊しておいて勝手なことを」

そうのたまうレイシスに、俺は皮肉で返した。

「聖鷹よ……貴様世界を救いたいと思わないか？」

「……何を……言っているんだ？」

「このレイシス、これまで貴様らの敵としての立場だったが、自分なりに世界の在り方について考えてきたつもりだ」

そう、俺の予想外の話をし始めたレイシス。

この話に耳を貸すべきか。くそう、俺たちを滅ぼした闇の住人の話など！

だが……世界を救える？ もし、それが本当だったら。

「だがこうして支配が終わった矢先、私は魔王……夜空に浮かぶ三月爪（ナイトメア・ザ・スリークロウズ）に裏切られ力を失った。奴は最初から世界を我がものにしようと模索していたのだ」

その、レイシスが語ったナイトメアを……俺は良く知っていた。

それは……俺が愛した王女を……殺した張本人だ。

「ナイトメア……奴はどこだ!？」 答えろおおおお!!」

俺は心から叫びをあげた。

自身に残っている全ての力を、叫びに乗せる勢いだ。

そんな俺の信念に、憎しみに反応したか、レイシスは続きを語り始めた。

「やつはあの塔の天辺……夜空城（ナイトメア・キャッスル）にいる。

私は奴を倒し……もう一度世界を再生したいのだ!」

「レイシス、貴様はいつたい……」

「……全てが終わったら、話そう」

「……わかった。力を貸そう」

俺は一時的に、レイシスと共闘することにした。

俺はレイシスの残った力、闇の瘴気——オルフェウスを右手に宿した。

この力と俺の残った光の力を融合させれば、一時的に世界最強の力、混沌（カオス）を体現できるだろう。

だが使えるのは一度だけだ。この力は……ナイトメアを倒すための力だ。

俺はすぐさま夜空城へと向かった。

途中向かってきたナイトメアの使いを、俺は蹴散らしながら進む。

この力……敵の力とはいえ強大だ。

身体の奥から広がる暗黒波動——ダークネス・フィールドが半永続的に俺の能力（フォース）に干渉してくる。

混沌を使うまでもなく、あつという間にナイトメアの元へ行ける。

「ダークネス……ストオオオオオオオオオム!!」

次第に、俺は手に入れた闇の力に溺れつつあった。

手から放たれる闇の嵐が、虫けらどもを蹴散らす。その光景、圧巻。俺は自惚れしていた。他者から与えられた力だと理解していながら、それを自分の力だと過信していた。

そして気がつけば、夜空城まで辿りついていた。

「うっ！ 右腕がうずく……」

力を使いすぎたか、右手から言葉にならない痛みを感じる。

静まれと、俺は右腕に念じながらもがく。

駄目だ。俺は正気を保とうとするが、意識を失って倒れた。

……。

……。

……。

——どれくらい時間が経っただろうか。

こんな敵の真っ只中で寝てしまうとは、自殺願望でもあるってのか、冗談じゃねえ。

俺はゆっくりと目を覚ました。するとそこには……。

「……」

少年……か。

左目に眼帯をつけた、中性的な美貌を持つ美少年。

灰色のパーカーを着た。どこかさびしげな雰囲気を持つ少年だった。

「めざめましたか……」

「あ、ああ……」

夜空城の入口前の外れで、小さく火を焚いて俺の疲れた身体を温め

てくれている。

「どうやら、こいつが俺を介抱してくれていたらしい。疲れは完全に取れてはいないが、精神的には安定している。」

「右手も……痛みはない。」

「お前は……？」

「わたくしは……ユキムラと申します」

少年はユキムラと名乗った。

「見た感じ……人間か。この終焉を迎えた世界でも……生き残りがいるとは。」

「ふっ……まだ世界は破滅（クリア）していないということか……。」

「この少年は希望（ホープ）か、それとも絶望（デイスペア）か……。」

「どうして……こんなところに……？」

「わたくしも……ないとめあをとうばつするにんむをおおせつかつているみで」

「そう、強い口調で……表記がひらがなだからそう言い張るには説得力が欠けるが、強い口調で言うユキムラ。」

「互いに利害が一致している身か、だが……この幼い少年に戦わせるのは、かつて戦士であった俺からすれば、心が痛む（ペイン）。」

「そうか。この先は俺に任せてもらおう。ナイトメアは俺が滅ぼす」

「……わたくしも、どうこうさせてもらえませんか」

「だめだ、危険すぎる。お前にもしものことがあつたら……」

「……ここであつたのものにかのごえん。わたくしは……あなたさまにおつかえします。くちはてるときは……いつしよです」

「そう、俺の闇に染まった右手（オルフェウス）に手を繋ぐユキムラ。」

「この少年。心には熱い魂（ソウル）を宿しているのか。」

「こうなつては……俺に止める術はないな。」

「いやああああああああん!! 羽瀬川先輩と幸村君のツーショット超萌えるぜヒャー……ハハハハハハハハハハハハ!!」

「なんか近くでこの世界観をぶっ潰すようなマッドサイエンティストの叫びが聞こえた気がしたが、この世には関係ない。ので受け流す（シャットアウト）。」

その後も、ユキムラと共闘しながら夜空城の最上階を目指す俺。時にはユキムラと励まし合い、心を通わせながら。その度に隣でシグマの「先輩と幸村君で今日は何冊か書ける気がする。今日、私アソコぐちよ濡れになる気がする！」とか聞こえながら。

等々俺達は、ナイトメアの元へと辿りついた。

「ふはーっはっはっはっはっは!! 数百年ぶりの客かと思えば……貴様か、聖鷹!!」

「ナイトメアああああああああ!!」

この再会まで百年と数ヶ月。等々待ちわびた時は来た。

王女を殺し、俺を憎しみに捕えた。貴様を滅ぼす日をどれだけ待ちわびたことか。

心が疼く……魂が震える。貴様を滅ぼせと……ミカエルの導きが脳内で響き渡るぜ!!

「それで、私に復讐をしに来たわけか?」

「言わずもがなだ。俺はてめえを……マジぶつ殺す!」

俺は怒りを言葉に変え、そしてナイトメアへと向かっていく。

オルフェウスから作り出される闇の剣——ダーインスレイブを全力でナイトメアに振るう。

それをナイトメアはあざ笑うかのように避け、そしてその右足で俺の顔面を蹴りとばす。

俺はそれによってふっ飛ばされ、ナイトメアの微笑にひざまずく。まだ終わらねえ。俺は闇の呪文を唱え、ナイトメアに攻撃する。

「ダークネス……ストオオオオオオオオム!!」

この最大級の闇の嵐だ! 貴様でさえ避けることは叶わない!! 俺が放った嵐は徐々に場を奪い去り、災害となってナイトメアを襲う。

その圧倒的闇を眼にして、ナイトメアは揺らぐことのない笑みを保つ。

「なっ!?!」

そして、小さく何かを呟く。

するとナイトメアの左の金色の瞳が輝き、俺の闇とは比べ物になら

ないほどの闇を周り発した。

「貴様ごとき闇に飲まれた光のコゲカスなど……私の足元にも及ばない!!」

そう凄むナイトメア。

そして、己を包む闇を、俺に向かって発射する。

「全てを飲み込め、そして闇へと変貌しろ!! アシユタロス・ドライブ!!」

その闇が、俺の闇と共に夜空城の最上階全てを飲みこみ滅ぼした。まさに全てを滅ぼす暗黒（ダークネス）。俺はなすすべもない。

そして地上へと投げ出された俺とユキムラ。

ユキムラも今ので致命傷を負ったか、だが……あいつ以上に俺のダメージがはるかに勝る。

口から吐き出される容赦ない血（ブラッド）。そして蝕む痛み（ペイン）。

それをあざ笑うかのように、ナイトメアが目の前に降臨する。

「どうだ聖鷹。絶望（デイスペア）を味わった感想（インプレッション）は……」

「お……俺はまだやれるぞ!!」

死に際、なおも強がる俺。

ここで素直に死ぬるか。俺には……様々な願いが込められている。

闇に堕ちた俺に、もう生きる価値はないかもしれない。だが、世界を救う指名、それが俺の中に残っている。

「粹がるやよし。だが……終わりだ聖鷹。ダークレーザー」

無情にも、ナイトメアは死に際の俺に闇を放つ。

終わり……なのか。ここで死ぬわけには……いかないのに。ブション!!

その闇の光線が、何かを貫く音が俺の耳に入りこんだ。

俺の心臓か、いや……違った。

ユキムラだ。ユキムラが俺を庇い、ナイトメアの闇の前に崩れ去った。

「ユキムラ!!」

俺はすぐさまユキムラにかけよる。

俺は何度もユキムラの名を呼んだ。だが、彼の身体から流れる赤い血（ブラッド）は止まらない。

「待っている。すぐに医者を!!」

「いいの……です。わたくしは……ないためあをたおすために、あなたについてきたのですから」

「ユキムラ……お前は……」

「わたくしのしよじしていた左の金色の月眼（ゴーるど・えくすぷりす・あいず）、あれをないためあからうばいかえすのがわたくしのしめいでした」

そう、ユキムラの眼帯。その内にあつたのは、今はナイトメアの左目になっている金色の月眼（ゴールド・エクスプリス・アイズ）。

あの元々の所有者が、ユキムラだったのだ。冗談じゃねえ……。

あの眼は世界の理さえ支配できる宝だ。なぜ、この少年が。

「わたくしはもともと、ひかりとやみのちようりつをはかるためにうみだされたじんこうたい……」

「そ……そうだったのか」

「わたくしはあるひたくされた……。ひかりのおうじよに」

「お……王女だと!!」

「みずからがあいするせいようのため、かならずやよいくにつくると。やくそく……していた」

「ユキムラ……。お前は……王女の形見だったのかっ……」

俺は絶句した。

俺の愛した王女は、あらゆる人種に自らの愛を伝え、世界を守ろうとしていたのだ。

俺が守ろうとしたものは……揺らぐこと無き正しきものだった。

「あの眼はやがて……あなたにわたるものだった。おうじよからせいようにたくされるべきだった……」

「ユキムラ……しっかりしろ!!」

「わたくしはそれをまもれ……なかった。だからせめて……あなたの……いのち……を……」

そう、力弱く言葉を吐き、そして眠るように……ユキムラは息を引き取った。

世界の良い方向に導くために生みだされ、その末路がこれだと……。

「ふぁーん!! 美少年である幸村君が己の命をかけてまで羽瀬川先輩を……先輩の純潔をつてばかつ! 守った……守ったああああああ!!」

「あんた……ここはすこし黙ってた方がええと思うんじゃが……」

隣でこの切羽詰まった空気をぶち壊す理科、それをなだめる小鳩。ありがとう小鳩。

話を戻そう。小鷹ではなく聖鷹になりきって……。

冗談じゃねえ……。冗談じゃねえぞ!!

お前こそが、平和な世界で生きるべき存在だったんだ!! それを……全部奪いやがって……。

「てめえだけは……てめえだけはマジぶつ殺す!!」

「ひいっ!」

俺はナイトメアを睨みつけた。

それに対して結構マジでびびるナイトメア。え? 今の俺に対して素でびびったとかじゃないよね? ちよつと反応がリアルだったけど……。

そんな俺に対して、ナイトメアはまたも金色の月眼を輝かせて、己を闇で強化した。

「御託はたくさんなんだよ!! とつとと死ね聖鷹!!」

「やられてたまるかああああああ!!」

俺も自らの右手の力を解放する。

ぶつかり合う闇と闇。邪悪な闇と信念の闇。

ナイトメアが右手を振るうと空間が歪む。俺がそれを突き破りナイトメアに一撃加えた。

衝撃が更に世界に痛みを与える。だが、それでも俺たちの戦いが終わることはない。

闇の斬撃、闇の防御壁。圧倒的なナイトメアの闇に対し、俺はそれ

を上回ることはしなかった。

ただ、一点を貫く。己の力を集約させ、一点突破を狙う手段を講じる。

するとその一撃一撃がナイトメアの拡散する闇を打ち砕き、致命的一撃が思いのほか通った。

「バカな……そんなバカなああああああああ!!」

その雄たけびが、俺を高揚させる。

その叫びは俺に勝利を約束させてくれるだけだぜナイトメア!!

俺は、自らの右手であるオルフェウスのリミッターを解除する。

「解放せよ、我が闇の力!! 聖鷹の眼によってお前の闇を認識する。暗黒次元に干渉!! 魔力方陣に接続!!」

俺は呪文を言うと、俺の中にいる闇が囁いてくる。

——我が名を、口にせよ——。

「その名は……オルフェウス!!」

そして、全ての闇を右手に集約させる。

その一撃が、邪悪な闇を打ち砕く!!

「聖鷹————!!」

「必殺……ジ・エンド・オブ・ダークネス!!」

俺の最終奥義が、ナイトメアの肉体を撃ち抜いた。

そこから漏れ出す、俺の内に眠っていた優しき光の束（シャイニング・レイン）。

俺に力を貸してくれた闇の役目は終わった。安らかに眠れ……オルフェウス。

そして……俺も世界の行く末を見届けたら……愛した王女の元へ帰れる。

待たせて悪かった。今行くぜ王女……そしてユキムラ。

ナイトメアがいなくなった後、レイシスと残った光の住人は同盟を結び、世界を再生していった。

光と闇。だがそれは敵味方ではない。正義と悪ではない。どちらもそれぞれの正義を心に宿していた。

俺は天へと回帰し、それを感じることができた。そう……心にな。

俺に与えられた力は……この結果を導くために……あつたのかもな。

——心が……温かいぜ。

「終わり」

俺が余韻に浸っているところに、夜空のなんとも投げやりなその言葉を聞いて俺は我に返った。

今だから思う。俺は……なにをやっていたんだろう。

なんか最初はまだ意識があつたが、なんかもうナイトメア戦になつたところで羽瀬川小鷹であることを忘れていたような気分になんて陥っていた。

自分の妹をバカにするわけじゃないが、危うく小鳩みたいになる所だった。

「あんちゃんも……中々の中二病ばい」

「言わないでくれはずかしいから……」

妹の同類を見つけたような笑顔に対して、俺は半分涙目に返した。「さてと、とつとと着替えるか」

先ほどまでナイトメアを演じていた夜空は、すっかり飽きたと言つた感じで奥の部屋で着替えをし始めた。

「羽瀬川先輩。中々にノリがよかったですよお」

そう、笑顔で俺に接してくる理科。

てか、その露出が多い格好なんとかしてくれ。眼のやり場に困る。

「そう……だな。ちよつと楽しかった」

「うふふ。理科も、正直楽しかったです」

そう、にこつと笑う理科。

その笑顔は前で図書室で見せた怖い物でも、普段から偽るような物でもない。

本当に、本心からの笑顔だった。俺は、そう感じた。

「そっか。なんつうかお前……この部活愛してるんだな」

「そ……そんなことはないです」

「どうだか。夜空の話題を聞いてそれを広げられるだけ……お前意外

とあいつのこと好きだろ?」

「ななな! そんなわけじゃないですよ!! あんな最低女……」

そう、恥ずかしがって答える理科。

どうだかな。内心は夜空の事を尊敬しているようにも見え、俺には。

そして、本気で友達を欲しがっているようにも。

「お前……いいやつだな」

「うぐぐ……。はせ……小鷹先輩こそ」

「おつ。ようやく名前呼びになってくれたか。俺も曖昧だったがこれからは名前で呼ばせてもらうぜ。理科」

「うふふ。そうですか。……なんかちよつと、あなたを狙う理由が……遊びではなくなりそうですね」

最後になにやら小さくつぶやいて、理科は笑顔で向こうへ着替えに行った。

幸村はその格好が気に入ったらしく(まあ全員の中では一番人目につかない格好だからな)そのまま家に帰るらしい。

俺も、こんなゴツイ鎧とマント脱いで、今日帰るか。

……その時、俺に悲劇が起こった。

「……………」

「ん? 小鷹どうした?」

「先輩どうされました?」

俺の様子がおかしいのを気付いたようで、二人が俺の方を見詰めた。

そう、鎧とマントを取った辺りはよかった。
だが……。

「籠手(オルフェウス)が……外れない」

翌日。

「羽瀬川。お前その右手どうした?」

「しくしくしく……」

翌日の朝のホームルーム。

結局昨日の夜も外れなく、俺は籠手（オルフェウス）をつけたまま
登校してきた。

先生にそう尋ねられ、そして暇があれば生徒達から不審な目で見られ、夜空には眼が合う度に笑われ。

その日は、心に痛み（ペイン）を負いながら授業を受けたのさ……。

儂くも永久のカナシ

7月の中旬

気がつけばもうすぐ夏休みか、時の流れは早いものだ。

我々学生にとって夏休みといえば普通に考えればとても楽しみなものだ。

勉強、遊び、思い出づくりと多くの友達と過ごすその時間は人生でとても大切なものになるだろう。

まあ……私には関係のないことだが。ああまったくもって関係のないことだ。

なんだ夏休みって、学校がないだけのただの暇な毎日ではないか。一人で家で勉強とか本とか読むだけのただの無駄な時間ではないか。

夏休みも冬休みもゴールデンウィークも、私にとっては苦痛の時間でしかないのだ。

リア充のみんなも、夏休みという牢獄を一度でも味わってみるといいよ。てか味わえ。

「あれ？ 本日は部員が少なくないかな？」

終業式の数日前。珍しくケイトが部活の様子を見に来てそう口にした。

というにも当たり前だ。今日は私と幸村の二人しかない。

理科は溜まっていた仕事があるため来ておらず。マリアは知らん。小鳩は小鷹が来ないと大体来ない。

そして、肝心の小鷹は……また「あの女」との用事が原因で部活に来ていないのだ。

「ああ。うちの部活はひねくれ者が多くてな」

「そりゃわかっているが。まったく結束力があるんだかないんだか、少しずつマシになってきたかと思いきや今日みたいに集まらず。隣人部の理念はどこいったね？」

「理念とはあくまでもそれを目標と掲げている項目にすぎない。この世の全てが理念にしたがってばかりではない。理念が必ずしも現実

になるなら、みんな不満など抱いてはいないだろう」

「へえへえ。いつもの屁理屈くろうさん」

ケイトの言葉に対して私がそう答えると、なんとも投げやりに返してきた。

というより、なんだかちよつと機嫌が悪そうにも見える。

最初に部活を作り始めた時とは、ケイトの私を見る目が異なっている。

「……ユツキー。今日はちよつと席をはずしてくれるかな？ 人数もろくにいないんでね、部長と顧問の二人で部活の事を話したい」

そう、幸村に席をはずすように言う。というかユツキーっていつのまにあだ名に……。

素直な幸村は、それをあつさりと了承し、今日の所は家に帰っていった。

あいつだけは部活に加入してから一度も休んだことが無かった。その真面目さは認めざるを得ないだろう。

真面目……故に素直すぎる。だからこそ、どうしてあんな嘘を……。

「さてとよーぞらくん」

「わざわざ幸村を追い出してまで、なんの話だ？」

「いや別に。君の青春滑稽劇に終わりが見えそうにないんでね」

そう、つまんなそうに言うケイト。

だからどうしたというのか、わざわざ二人つきりになって言うほどの嫌味でもないだろうに。

それに……貴様に私の青春がどこに行きつこうが関係のないことだというのに。迷惑な心配だな。

「くだらん。てつきりもう少し隣人部らしく部員をまとめろと説教されると思ったが」

「まあその説教の一つもしたいんだが……。私としては君自身は評価するに値する人間だと思っているよ。だからこそ……ねえ」

もったいぶるような言い回しのケイト。

評価するに値するか。その言い方は上からすぎるな。見下されて

いるようで嫌な気分になる。

だが、どうにもこいつの眼は……私の心を覗いてくるような目だ。

「だからこそ……なんだ？」

その目がいやだったから、私はその間に対しての答えを求めた。

「……そろそろ、”隠しごと”とかやめようよ」

そうケイトが言うと、私は一瞬ばかり、硬直してしまった。

隠しごと。そう私に言うこの女の心理とは何なのか。

嫌な予感がする。かといって、この女に対しての誤魔化しや、事をうやむやにしようとするのと更に罰が飛んできそうだ。

「……隠しごと？」

「おかしいんだよねえ。君と小鷹くんの間柄……絶対におかしいんだなあ」

「……ははっ。茶化すようなことを言うな。私があいつに淡い恋心を抱いているとでもいうのか？ 私だって男を見る目くらいはある」

つい、笑顔を”作りすぎた”だろうか。

誤魔化すつもりはない。だが、それ故に完璧に誤魔化し過ぎた気がする。

その反応を見たケイトは。いよいよ私の核心に入りこんでくる。

「そんなんじゃないでしょう？ それは目に見えて分かりすぎるし……そんなわかりやすい感情なら、君は彼に対して”あんな目”を向けるはずがないでしょ？」

「……どういう……意味だ？」

「……”憎しみ”だよ」

そうケイトが断言した瞬間、私はおぞましい物を感じたかのように表情が真っ青になった。

憎しみ……そう、ケイトは言ったのか？

私が……小鷹を憎んでいる？ 私にとつて、誰よりも大切な存在を

……？

「……ふざけたことを言うな。どうして……私があの男を憎まなければならぬ!!」

「あら？ 予想以上の焦りようだねえ？ 顔色悪いよ？」

「ケイト……貴様」

思わず私はケイトを睨みつける。

やめろ。これ以上赤の他人である貴様が、私たちの友情に足を踏み入れるな。

あの男との十年前は私自身で取り戻す。誰の手も借りないし、誰も巻き込みはしない。

それは私の使命だ。私が……回帰するための必然的な……。

だからこそ、なぜあいつを憎む必要があるんだ。

「できれば聞かせてもらえないかな？　この学校で出会う以前に……君たちに何があったのかを」

「……青春小説の読み過ぎだろう。あの男と私はこの学校で初めて会ったのだ。そうやって人を見て楽しんでいるのはいただけないな」

私は焦って歪んだ表情を戻し、平然とそう答えた。

そうだ。”羽瀬川小鷹と三日月夜空”はこの学校で初めて会った。

そして初めて会った二人には欠けているだけだ。十年前の……大切にすべき宝物をだ。

十年前の二人と今の私たち。二つが揃ってこそ……私たちは完璧になる。

「……そっかい」

私のその反応に対して、ケイトはとてつまんなそうに答えた。

そして、諦めた感じで、扉の方へと足を向ける。

そうだ。私に構うな。貴様のそのおせっかいは、私の絶望を嘲笑う物でしかない。

と、扉を開けて直後、ケイトは言い残すように私に向かつて。

「……よーぞらくん。”悲劇のヒロイン”を気取るのは……そろそろ終わりにした方がいいかもよ？」

「……なに？」

「今の君は、誰かに救われる価値もないつまんない女の子だ。間違えないように間違えないようにと無駄にしがき、困ったことがあっても近くにいて誰に頼るでもない。その意地が、自分にとって真に大切な存在を苦しめている事にも理解できず、無自覚に……独りよがりを持

けている」

「……その、目障りな口を閉じろケイト」

「おや？ 伝わらなかつたかな？ 不幸なのが自分だけだと思ってんじゃないやねえよクソ女が」

その瞬間、私は戦慄した。

流し目に私を睨みつけたその時のケイトには、とてつもないほどの感情が宿っているのがはつきりとわかった。

私が誰かに向ける敵意などでは比べ物にならないくらい、それはおぞましく、怖いものだった。

「……そんな君でも、強がれない一言を送ろう」

「……」

「今の君では……」 柏崎星奈 には方に一つの勝ち目もない」

「な!？」

「彼女の歪みは……君以上だからねえ」

終業式の日。

つまらない行事を終え、私たちは放課後部室に集まった。

今日の議題は、夏休み中の部活をどうするかである。

「まあ運動系や文科系も、夏休みはちゃんと学校に来て部活をやるのだらう。なので我々も部活をやることにする」

という、他がやっているから自分たちもやろうという理由で私がそう提案した。

部活の連中はというと、かなり呆れた目で私の方を見た。

だが、部長がそういうなら仕方がないだらうと、後半諦めた目でそれを承諾し。

「まあ理科達にとって楽しい夏休みなんてものは存在しないに等しいですからねえ。そもそも友達いないのにどうやって楽しい夏休み送るといふのか」

「心にグサリとくる言い方だが、そういうことだ」

「あのですね夜空先輩。それを偉そうな顔で肯定するのはやめてもらいます？ 仮にもあなたこの友達作ろう会のリーダーでしょう？」

こんな無様な夏休み送る羽目になったのもあなたがまともに部活を指揮しなかったからでしょうよ」

そう、ほとんどの責任を私に押し付ける理科。

いつものように気にいらぬ私への嫌味口。だが、今日はどこか正攻法な言い方だった。

他の連中がいる時は仮面を脱げないからだろうか。そして理科の言葉に小鷹はうんうんと頷いていた。

小鷹や幸村、マリアはノーコメントだった。くそう、部長は大変だな。

「夜空の不甲斐なさはおいておき、友達が少ないからとかじゃなくて、普通に部活として集まってやるべきことをやろうぜ」

「うぐ……。小鷹め、私を差し置いて仕切るな」

「さっすがは小鷹先輩ですねえ」

そんな小鷹に対して、少しだけ私を皮肉るように褒める理科。

というか、この女……。いつもまにか小鷹とここまで距離を縮めていたのか。

貴様みたいな人を見下す天才が、小鷹に対してなにをたくらんでいるんだ。

思えば、こいつや柏崎以外も……。なにやら小鷹に対して好意が集まりつつある気がする。

妹の小鷹はさておき、マリアも最近小鷹に弁当を作ってもらったとか言っつて、あいつをお兄ちゃんと呼んで慕っている。

幸村も……。表上は男子としての憧れだが……。あいつの秘密を考慮して考えると、どうにもそれ以上の気持ち横切つて仕方がない。

なぜだ。どうしてこうなってしまったんだ。

なにかがおかしい。最初は私とこいつの失ったものを取り戻すために、この部活を作ったはずだ。

それを部活の継続やなんやと広げていくうちに、小鷹と私がどんどん離れていっていないか？

この男にとって最も隣にいるべき私が、一番離れた所に追いやられていないだろうか。

なぜだ。どうして？ どうして私が仲間外れになっていくんだ？ 私の何がいけなかった。救われるべき私がどうして今になっても救われない。

感動の再会から数ヶ月だぞ？ 正体を明かさないとからか？ 正体を明かしていればもうとつくの昔に取り戻していたのか……。

いや、それだけはできない。なぜなら、そうするにはもう私は手を汚し過ぎたからだ。

きつと拒絶される。だから、自分から正体を明かすことはできない。

だがそれでも、あいつの親友であった私が……どうして柏崎や理科に勝てないんだ。

どうして、私だけが遠くへ離れて行ってしまっただ。

小鷹……どうしてお前は……私を見てくれないんだ……。

「……夜空？」

「……はっ！ な、なんだ？」

「いや、なんつうかめっちゃ怖い顔で俺を睨んでるから。俺また何かしたか？」

そう小鷹に言われて、私は我に返る。

怖い顔で睨むか。まるで……私がこの男を憎んでいるかのように。

——憎しみだよ。

「憎しみ……」

「夜空？」

「な……なんでもない！」

心配する小鷹に対して、私は即座に否定した。

そうだ。私がこの男を憎む道理はない。

私が憎しみを抱くことなんて、ありえないんだ。

コンコンツ!!

と、会議中に部室の扉が誰かにノックされた。

この部活に来る人間と言えば、あとはケイトくらいか。

ケイト……か。先日のがまだ頭から離れない。

不幸なのが自分だけだと思うな。そう言った彼女の目が忘れられ

ない。

前からなんとなく察していた。だがケイト……貴様に何があった。貴様は……私の心に何を見たんだ。

「誰だ？」

「……きつとケイトだろう」

小鷹の問いに、私はそう決めつけ扉の方へ向かう。

いや、今だけは忘れよう。あいつの言葉など、気にしていても仕方がない。

そう思つて、私が扉を開けると。

——そこには、いてはならない存在が立っていた。

「隣人部っていうのは……ここね？」

そう、無垢な笑顔を振りまきそう尋ねる女。

作られたかのように美しい金髪。他の女子を寄せ付けない程の美貌。

外国の血が入っているかのような、名前負けした綺麗な蒼の瞳。

そう、私にとつて……絶対に相容れない存在。柏崎星奈だった。

「!？」

私は条件反射で扉を思いつきり閉めようとする。

だが柏崎は、閉まろうとする扉を力づくで押し返してきた。

もうすぐ追い出せる。だが、柏崎は無理やり入つてこようとする。

「貴様……何の用だ!？」

「野暮用。あなたには関係ないんで……」

そうにこつと笑うと、柏崎は無理やり隣人部の部室へと入つてきた。

まるで女神が降臨されたかのように、入口付近で輝かしいほどの脚光を浴びる柏崎。

そんな彼女を見て、私と同じように嫌な顔を向けたのは理科と幸村だった。

「……忙しい中失礼したわね。まあすぐ終わるから」

そう、他の連中などまるでいない者のように扱って。

柏崎は小鷹の方へと向かっていく。

正直私は力づくで追い出すことも考えた。だが、状況が状況だ。この場で変に暴力をはたらいて、小鷹に不信を与えてはまずい。そう、柏崎は私にとって最悪な状況下で、いつもの横暴を行おうとしていたのだ。

「おい柏崎。今部活の会議中で……」

「別にすぐ終わるから安心しなさいよ。それに直接用事を伝えるのにメールアドレスの一つも教えないあなたが悪いんでしょ？」

「うっ……。でもお前のメールアドレス、なんか学生内で高値で売られてたぞ」

「あんなのはくだらない連中のやるくだらないことよ。私にとっては不便なんで、特別に私の電話番号とアドレスを教えておいてあげるわ」

そう、一方的に小鷹の携帯を取って、自分の連絡先を打ち込む柏崎。最近見ないうちに、どうしてお前がそこまで小鷹と仲良くなっているのだ。

最初の連絡先が……。あの女だと。すぐにでも、貴様の携帯を壊してやりたいところだ!!

おかしい、おかしいおかしいおかしいおかしいおかしい!!

だってあいつは隣人部とはなんの関係もないやつだ。それがどうして、どうして私たち以上に……。私以上に小鷹と密接になっているのだ!!

「はい、これで何かあったら気軽に連絡取れるわね。わざわざこんなところまで足を運ぶ必要はないし、便利じゃん」

こんなところまでと、無自覚に吐き捨てる星奈。

貴様ここをどこだと思ってる。敵陣の真ただ中だぞ。

周りを見渡すと、理科が小言でなんかヤバいこと呟きまくっているし、幸村は刀の置物を素振りしているし。

小鷹は怖い物を見るような顔を浮かべているし、マリアは鼻くそほじってるし。

あいつを受け入れているのはぶっちゃけ小鷹だけだ。だが面倒なことには、小鷹はこの中心人物。

「あ、ああありがとう。それで要件って？」

「ああそうそう。前にあなた。私のパパに挨拶しに行くとか言ってたじゃない？」

「ぶっ！」

その柏崎の発言には、私も噴き出さざるを得なかった。

他の連中もだ。理科の眼鏡のレンズにひびが入り、幸村は素振りしていた刀の置物をタンスに叩きつけて壊した。

どういう……ことだ。なぜ、小鷹が柏崎の家に挨拶なんて。

「このあいだパパに話したら、夏休み中なら時間作れるから一度家に来なさいだって。なんかパパも会いたがっているみたいだったわ」

「そうなのか？」

「だから来る時は私に言ってね」

「おう」

待て待て待て待て。

なんだこの流れは、おかしいだろ。

そんな、これではますます小鷹が私と離れて行ってしまっただろ。

「な、なんで小鷹が柏崎の家に行って、ち、父親に挨拶などするのだ!」

この感情を抑えきれなかったのか、私は身を乗り出しつい口に出してしまった。

その私の反応を横目で見ると、柏崎はやっぱり私の存在など最初からいなかったかのように無視して。

「というわけだから羽瀬川くん。ああせっかくだし、あなた夏休みは遊ぶ友達とかいないんでしょう？ 明日私の買い物に付き合ってくれない？」

なにがなんだかわからずこんがらがっている私たちを尻目に、柏崎は自分勝手に話を進めていく。

「で……でも部活が」

「そんなもん用事が優先されるのは当然でしょ？ あなたは家族旅行

の日に野球部の練習を優先するの?」

「うっ……。ま、まあそうだよな」

「でしよ。部活なんて律儀に出なくても、人は勝手にリア充になっ

ているでしょうよ。集団に頼るのは……情けない屑だつて証明している証拠よ」

そう、この物質の真つただ中で、星奈は人目を気にせずべらべらと言いたい事を言いまくる。

私は自然と拳を握りしめていた。ははっ……まずい、気をゆるむとこいつを後ろからぶん殴りそうだと。

と、私は椅子の方へ眼をやると、理科がノートパソコンを持ちあげ。そして、柏崎を後ろからノートパソコンで殴ろうとしていた。私はすぐに理科の傍に駆け寄り止めに入る。

(理科！なにをしている!?)

(この女……殺すっ!!)

(我慢しろ!! 私だつて我慢している!!)

もう他のやつらは限界だった。

この女は、自分と自分の認めた物以外は、自分の世界に存在してないんだ。

自分が世界の中心にいて、他のやつらは自分の礎としか思っていないのだろう。

なるほど、ケイト……貴様が言ったことが少しだけ理解できた。

この女の歪みは私以上……か。ははっ、言えている。

育ちが良すぎて感覚が歪みに歪んでいる。幸運の星の元に生まれたい女神。

こんなやつに、私が万に一つの勝ち目もないだと……。そんなこと、認めてたまるか!!

こんな人の気持ちの一つも理解できない女が、無自覚な悪意で私たちを……小鷹を貶めようとしている。

小鷹の傍にいて、本当に小鷹の傍にいたべき私の価値を……。

憎い……憎い憎い……憎い憎い憎い!!

憎い!!

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉!!

「……悪い、明日はさすがに部活を優先する」

そう、小鷹は少し不機嫌そうに言った。

「なんでよ?」

「部活の一員としての役目がある。それに柏崎、今の発言……一つだけ俺は聞き捨てならない部分があった」

「……」

「集団に頼ることは屑なんかじゃない。どうして……そんなこと言っただんだ? しかも……わざとらしくこんな場で……」

小鷹は、けして柏崎に夢中で私たちの事を見ていないわけではなかった。

ずっと私たちのことを意識していた。その言葉を言った直後、私にアイコンタクトを送ってきたからわかった。

みんながこの女に対して我慢できずにいたのもわかっていたんだ。だからこそ、この場は隣人部の部員として、柏崎に反論した。

私は、ちよつとだけうれしかった。

「ちよつと……言いすぎたわね」

「……わかってくれればいいんだ」

「……ま、”期待してる”から」

そう吐き捨てて、柏崎は部室から去って言った。

なんとか、脅威は去ったか。まさか私たちにとつて、最大の敵となるあいつが敵陣に突っ込んでくるとは思わなかった。

しかも、とてつもないわだかまりを残す始末。あの女はやっぱり……放っておいたらまずい。

そして小鷹。柏崎とのその話……詳しく聞くべきことなのだろうが……。

……さすがに、部活の権限を使って家庭事情を曝くことは……やっではいけないだろう。

自分の家庭の事を知られたくない気持ちは、私が一番良く知っている。だから……。

今思えば、私はこんなにも落ちぶれてしまっていたのか……

つらい現実から目をそむけ続けた十年間、そしてその原因を作った

のがかつての親友の裏切りであることを私は認めたくはなかった。その結果小鷹は私の元へ戻ってきてくれた。完全な状態ではなかったが奴は私の前に姿を現した。

これは私が見捨ててなかった結果だと思っている。信じ続けることで神様は奇跡を二度起こしたのだ。

小鷹がこの学校にやってきたことが隣人部の創部に繋がりに、色々あれどこの数ヶ月はとても濃い時間を過ごしたと思っている。

小鷹以外の連中は隣人部に必要ない……といえれば実は嘘になる。あいつらが離れることはこの日常の崩壊につながる。

そして私の親友はこの日常に満足している。私はそれを壊したくない。

隣人部の崩壊、それだけは何んとしても避けたかった。隣人部は今の私と小鷹を、ソラとタカ繋ぐただ一つの架け橋。

集団で群れているだけ……例えこの部活が……そうだったとしても。

その居心地を、私は失いたくはなかった。

「小鷹」

目の前で座っている小鷹にふと声をかける。

「どうした？」

こちらの目を見据える小鷹。

なんだか恥ずかしかったが、私は勇気を出して言った。

「ありがとう、私にこの日常を作るきっかけを与えてくれて……」

……遠まわしに真実を言ってしまったかもしれない。

だけど小鷹の返事はなかった。恥ずかしいのか頭をボリボリ書いている。

そんな小鷹を見て、私は思わず小さく笑ってしまった。

果して今ので真実が伝わってしまったのか、いや……気づくはずがないな。

あの時の私は、男気のある少年だったのだから。

「……まったく、お前のそのたまに見せるしおらしさっていうの？心にグツとくるから腹立つ」

「なっ……どういう意味だ!？」

「心外だと思ふなら、少しは普段の最低発言を直せ」

そう私に苦言を述べる小鷹。

その瞬間、さきほどまで殺伐としていた隣人部の空気が、暖かい物になった。

理科が思わず笑う。幸村も、小鳩やマリアも笑った。

その瞬間だけは思わず、私も温かさを感じていた。

——待っている小鷹。

柏崎なんかは貴様を惑わせたりはしない。

この私が……貴様に最高の青春を与えてやる。

だから……お前が私を——。

——なぜだろう、あの時もあの時も小鷹のそばには柏崎がいた。

私が小鷹のためになにかをする度に、やつは私の想いを根こそぎ奪い取って行った。

私のやることが全て裏目に出て、どんどん小鷹は私にかまってくれなくなった。

柏崎だけじゃない。理科も。幸村も。小鳩もマリアもケイト先生も。小鷹小鷹とうるさかった。

私はそいつらよりも自分の気持ちを伝えるのが下手だったから、いつもほかのやつらに劣っていた。

あいつらばかり小鷹と話して、あいつらばかり小鷹と楽しく、あいつらばかり……。

私が目にした舞台を乗っ取って、めちやくちやにして……
小鷹はあいつらに奪われてゆく、柏崎に……”肉”に奪われてゆく。

憎いなあ……とてつもなく憎い、憎くて憎くてしょうがない。

憎いよ、憎い……憎い憎い肉い肉い肉い。

小鷹を想う度に、小鷹への愛が膨れ上がるたびに憎しみも大きくなる。

強大な『愛』という感情を抱けば抱くほど、強大な『憎しみ』とい

う感情も生まれ出る。

約束したのに、「百人分大事にしてくれる」って言ってくれたのに。小鷹と私は気付かず通り過ぎていく。

お前がいなくなったら私には何が残るといふのだ？ 何も残らないじゃないか。

小鷹にとつての百人分大切な親友は私だけだといふのに、こんなにも小鷹を想う私の気持ちは空回るばかりだ。

嫌だ。そんなの嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

せつかく再開したのに、この世界に絶望しながらも私は待ち続けたのに……

ようやくお前と、会えたのに……

そんなお前がまた、私の元から去っていく。

そんなお前が、誰かに奪われる。

私という親友に、気づかずまま……。

「全てが」なかったこと」にされてしまう……。」

なんとかしなければ、なんとかしないと。

もうあんな思いはしたくない、だから私は取り戻す。

この”愛”が”憎しみ”に変わる前に……。

第一章 三日月夜空崩壊編 夜空と理科のぶらり遠夜市

——私は……どこで間違ってしまったのだろうか。

どうして、こんなことになってしまったのだろうか。

今起こっているこの現状を、十年前の少年を演じていた少女は……
予期していただろうか。

その少女と唯一の友達だった少年は……どのような気持ちを抱いているのだろうか……。

「ぐっ……や……やめろ……。どうして……こんな……」
「……」

少年は苦しそうな表情を浮かべ、私に言葉を投げかける。

そんな少年を私は……全てが崩壊した私は、何も考えることなく……その首を絞める。

全てが上手くいかなかった。十年前のあの悲劇から……その悲劇を清算するためにお膳立てした事柄の全てが。

全てが一人の女にブチ壊され、そして……私自身すら破壊された。私は崩壊した。今までだけして触れてはならなかった私の心の領域

を、土足で踏みいれられたあげくに好き放題荒らされ。

その女を私は許すことができずに、憎しみのままに戦いを挑んだが……何一つ傷を負わすことができず。

その女の一つ一つの言葉に私を追い詰められ、その結果……。

「ああ……がつ!!」

今まで、私は一人の女の子としてではなく、そいつの友人としてのその少年と相對してきた。

だがその限界を思い知り、考えられなくなり……女である自分を武器にした。

少年を呼び出し、言葉一つ無いままにその少年に縋った。抱きついた。襲いかかり、押し倒した。

あげくにキスマまでしたんだ。そいつが慌てふためいているのをい

いことに、色んな事をさせてやったよ。

そして最後に……自暴自棄になって……親友である大切な少年に
対して……。

——私は。

夏休み初日。

夏休み最初となる部活動。スタートダッシュを切るための大切な
一日だ。

だというのに、午前の九時。部活に来ているのは私と理科だけだ。
羽瀬川兄妹はともかく、あの幸村まで部活に来ていない。

これはいつたい、どういうことなのだろうか。

「なぜだ。気が緩んでいるのではないか……」

「……というか」

私がそう怒りを露わにしていると、理科が何かを言いたそうに表情
をゆがめた。

「というか？」

「……先輩、小鷹先輩や幸村君にスケジュールの方は伝えたんですか
？」

「……あ」

理科にそう質問され、私はハツとなった。

思えば、今日部活をやるとは言ったが、何時に部活をやるとは言っ
ていなかった。

更に言えば、それを伝えるための連絡手段を持ち合わせていなかった。
た。

いつ部活をやるのかわからなければ、皆が同じ時間に集まれるわけ
がないのだ。

「……」

「まったく夜空ちゃんよお。部活の代表者ならそういうことくらい把
握しとけての。男に目をくらんではかりいるからそういうことにな
るんじゃないやねえの？」

「ぐっ……言わせておけば」

「それだから大切な男のメルアドをあの生簀かない女に取られんだった話。あの瞬間だけはぶつちやけ……見てて滑稽でしたねえ」

理科はそう言つてクスクスと笑つた。

それは、私にとつて思い出したくもない屈辱の瞬間だった。

思わず私は怒りに震えた。つい表情もきつくなつてしまう。

理科はそれを悟つたのか、小さく謝つた。

「……あまり、あの女の話は出さない方がいいですかね」

「ふんっ。別に気にしてないが……」

「顔が嘘をついていないんですね。まあ僕もね、あの女のことは大嫌いなんでね。まだ夜空先輩の方が可愛いですよ」

それはどういう意味なのか、私は若干癩に障つたが、気にしないことにした。

でも確かにあの時、理科は柏崎の行動に対して我慢しきれず、ノートパソコンで殴ろうとしたくらいだ。

正直あの時は眼をつむろうとも思ったが、この聖クロニカ学園に通う生徒として、あの女に傷を負わせることだけは避けねばならない。

あいつには権力が後ろにひつついている。この学校の理事長という権力がな。

それは理科自身が私よりはるかに理解しているはずだ。だがああいう行動を取つたとなれば、よほど頭に來たのだろうか。

「……一応、僕たちだけでもメルアド交換しておきましょうよ」

「ちっ……貴様に私のメルアドを教えるのは……」

「……別に親しい仲間と思つてくれなくても結構です。部活の部員……利害関係でも構いません。あなたが満足する形でいいので教えてもらえます」

そう、理科はスマホを私に提示する。

どうにも言い回しがあれだが、まあ交換しておくだけしておこう。

私は理科とメルアドを交換する。小鷹ではなく……こいつが最初になるとは。

というか、なんとというか嬉しそうだな。私がメルアド教えるのを拒否しようとした時はなんか傷ついたような感じだったし。

こいつは私の事が大嫌いのはずだ。いつも私をおちよくって……。
「ありがとうございます」

そう、素直にお礼をする理科。礼されるほどの価値があるのか、私のメルアドは。

「ふんっ……」

「……しばらく来ないようですし、ここにいても暇なんで……二人でボイコットしましょうよ」

そう、突発的にそんなことを言いだした理科。

何を考えているんだ？ 暇なら自分一人で理科室にでも帰ればいいのに。

「なぜ貴様とボイコットしなけりやいかんのだ」

「まあ言い方はあれでしたねえ。揃いそうもないので部活抜けて二人で遊びにでも行きましょうよ」

と、やたら理科は私とどこか出かけたらしい。

遠回しに断るが、変な理由をつけて出かけるよう促す理科。

といっても、この後小鷹が来たら小鷹に、部長が初日に部活来てないとか嫌味言われそうだし。

「明日は朝九時に集合って、あとメルアドを記入と置手紙をしておけば、明日からでも部活はできますし」

「……いったい何を考えているのだ？ 私に何をする気だ」

「……何もしません」

私がそう理科に尋ねると、理科は拗ねたように言った。

なんだ？ どこかでこいつ頭打ったか？

私はつい、理科のおでこに手をあてて熱を測った。

「熱は……無いようだな」

「あひゃー」

すると理科は、変な声を出して驚いた。

「夜空先輩……女子力は皆無なくせに男子力は豊富ですね。あなた同性に惚れられるタイプですよ」

「嬉しくもなんともない。それに私は……」

私は、女が嫌いであることをカミングアウトしそうになったが、

言っても意味が無いのでやめた。

そして話は振り出しに、一緒に買い物に行くという議題に戻ってしまおう。

「夜空先輩」

「……わかったわかった。家に帰って準備してくるから、遠夜駅で待っている」

私がくじかれたように言うと、理科はぱあっと明るい笑顔を私に見せた。

なんだこの女。普段は私に嫌味ばかり言うくせに……。

まあいい、こいつの茶番に乗ってやろう。そしてわからせてやる。私と出かけても何も楽しくないということ。

そして数時間後。

私はすぐさま家で着替えを済ませ、理科と待ち合わせをした遠夜駅へ向かう。

こう、お出かけをするように家を出ようと、家にいる私の母は見向きもしてくれない。

いつものように、捨てた父親や私の姉の悪愚痴ばかりを言って、意気消沈している。

だからいつも私は家に帰りたくないんだ。最も、その道を選んだのは私なんだが……。

遠夜駅に付くと、理科が先に付いていた。

格好はさきほど学校で着ていた制服に白衣。こいつ、直接ここへ向かったのか……？

私でさえそれなりの格好をしてきたというのに、天才は仕事が忙しすぎて身だしなみもろくにできないのだろうか。

見た目はいいだけ、もったいないな。

「遅いですよ夜空先輩」

「お前が早すぎるだけだと思うが……」

私は五分たりとも遅刻をしていない。

まあこれは私にとって暇つぶしだ茶番だ。

学園の天才は研究ばかりで暇をしている。同じ部活の部長としてこいつの機嫌を取っておくのも、責務という奴なのだろう。

理科も暇つぶしでしかないみたいだしな。

「んで？ どこへ行きたいんだ？」

「まあ色々あるんですよねえ。なるべく人が集まる所は避けましょう。僕、人ごみ大嫌いなんですよねえ」

「奇遇だな。私もだ」

どうにも、この女とは稀に気が合うことがある。

私は人が多い所に行くのと吐き気を催す。正直ここ遠夜駅付近でさえも、異物がせり上がりそうで怖い。

「最初はお茶でもしましょうよ。僕、ス〇バって行ってみたかったんですよねえ」

そう言つて理科は、私の腕を掴んで駅近くのス〇バへ。

行ってみたかったと言われても、私でさえこんなリア充スポットには近づかない。とどのつまり行つたことが無い。

私と理科。二人揃つて行つたこともない所にガイドなしで行く羽目になっている。これはどうすればいいんだ？

「僕ねえ。ネットで見たんですよ。ス〇バでスムーズにかっこよく商品を注文できる人はリア充だつて。これは、隣人部部員としてのリア充を貯めるいいチャンスじゃないですかあ？」

「はっはっはそうかそうか。逆を言うところまで躓く奴は永遠にリア充になれないということだな」

理科の言葉に対して逆の言葉を述べる私。なんだか自分で言つておきながら情けなくなつてきたな。

確かス〇バって色んなメニューがあるんだよなあ。

私みたいな一般人は、単にコーヒーを飲めればいいんだが……。

「なんだ？ たかがコーヒーを頼むのにここまで細かく選ばなければいけないのか？」

「コーヒーのタイプから細かなオプション。多種あるサイズによくわからない単語が並んで……ああ、すつげえ。なんかわかんないけどすつげえ！ マキアートのドピオとか通りなみてえだ!!」

「なんか感動するところがおかしい気が……」

「特にフラペチーノってなんか卑猥な単語っぽくってねえ。今日帰ったらコーヒーで同人誌描けそうな勢いだぜぐへへへへ」

「あのすいません、こいつちよつと頭ぶつけて」

ス〇バのコーヒーの種類を見て早くもパニックに陥っている理科のせいで、変な注目を浴びてしまっている。

まずいなあ。非リア充の私たちが来るべきところではなかったのかもしれない。

だが店内に入って何も頼まないのは失礼だ。なので……。

「こうなったら……。理科、私たちがみたいな初心者には、魔法の言葉がある。それはな……」

「ふむふむ……なるほど」

私はこの場を切り抜ける言葉を、理科に耳打ちする。そして……。

「あの、注文は……」

困り果てた店員さんが、私たちに注文を伺う。

私たちは、今出せる最大限のかっこよさで、こう注文した。

「……今、流行りの」

そして数分後。

今流行りのメニューを受け取り、隅っこの席へ移動する。

いやあ、今流行りののを相手に尋ねて、素早く流行りに乗るこの手腕。私超レベル上がったんじゃないかなあ。

「しばらく……ス〇バには来ない」

「次はもうちよつと前情報を集めてから行きましようねえ。というか夜空先輩いつも本ばかり読んでますけども、流行りの雑誌とかは読まないんですか？」

「読まない。そういうのは必要になった時に調べるだけだ」

「へえ。その格好も中々ボーイッシュでいいじゃないですか。自分で選んで買ったんですか？」

「いや、ネットでオススメと書かれていたので通販でそれを一式買っただけだ」

「……それで着こなすんだ。まったく北乃〇い似の美人は羨ましいわ」

そう理科は皮肉を漏らし、コーヒーを口にする。

とはいうが、お前もそれなりに着こなしたらに合うとは思うがな。まあ私には関係ないが。

「……先日は……ありがとうございます」

「なんの話だ？」

「柏崎に向かっていこうとした僕を、止めてくれたことです」

そう感謝を述べる理科。

別に感謝されることではない。私なりの判断で動いただけの事だ。

別にお前の立場を考えて動いたわけじゃないし。

「……やはりというか、お前結構気性が荒いな」

「あはは。これでも我慢し続けてる方なんですけどねえ。こういう立场上、本来感情に身を任せること自体が愚かしいので」

「……そうやって自分を包み隠し続けて、よく平気でいられるな」

「……」

私がそう嫌味を口にする、理科が多少怖い笑みを浮かべた。

この女、私にだけは本性を見せて心を許しているように見えるが、内心まだまだ隠し通している。

何かを隠すか……私も、人の事をは言えない。

私は嘘はつかないが、隠し続けてはいる。

なぜ隠すのか……隠さなければならぬからだ。

十年前の因縁は、私と小鷹の問題だ。だから、私の手で決着をつけなければならぬ。

他の奴に手を貸してもらうことだけは……。

「一応ね、柏崎とも表面上仲良くしておくのが、あの学校の理事長には受けがいいんでしょうけど……」

「……本性を隠すことは、否定しない。だがな」

「え？」

「……友情だけは……偽るな」

珍しく、私は自分の意を唱えた。

「先輩？」

「確かにこの世には嘘が必要になる時もある。強がることで自分を保

てることもあるだろう。社会の秩序、一時的な関係。周りの立場への配慮」

「……」

「だが友情にそれを持ちこんだら最後、人は孤独になってしまう。最初から築いた友情が偽りで……それが後天的な意味になってしまっても。それは崩壊したら最後なんだ。だから……」

らしくない、自分は何を言っているんだ。

それは私に対して、自分自身に説いているのか。

崩壊したら最後。そうならないように私が自分に植え付けているのか。

そうだ。私と小鷹の友情はまだ崩壊していない。だから……再生可能なんだ。

私の母とは違う。あの友情は最終的に偽りになった。友情のためにそいつが大変なことを隠してしまったがために、起こりえた最悪の結果だ。

だからこそ、私は母のようにはなりたくない。その想いをどうしてこいつに対して言ったかはわからん。

こいつに自分と同じ目に合ってほしくないとか、そんなことは考えていないはずなのにな……。

「……行くぞ。こんなところでお茶を飲んでばかりもいられない」

この空気がいやで、私は振り払うように理科にそう言い、ス〇バを後にする。

まだ午後の一時を少し回った所。次はどこへ連れてかれるのか。

「実は行きたい場所がありましたねえ」

「もったいぶらずに言え」

「同人誌を買いたくて、近くのアニメショップにねえ」

今度理科に連れてかれたのは、よくこうというのが好きな連中が集まるアニメショップだった。

私たちが来店すると、男性客に何度かチラ見された。なんというか……視姦されている気分だ。

こんなところにいたら本当に襲われてしまうかもしれない。私は

理科に、目的を早く終わらせるよう催促する。

「目的は地下二階にあります」

理科に言われるがまま、私は階段を下ると。

その壁に書いてあった案内に、私は思わず嘖き出した。

「ぶっー！」

「あらあらどうしました先輩？」

「……貴様、地下二階は……アダルトコーナーだぞ!!」

つい叫んでしまった。やばっ、変な客だと思われていないだろうか。

当然というか、それを言うと理科はニヤリと笑って見せた。

初っから目的だったのは本当のようだが、こいつ……私をここへ連れてきて反応を見るのも狙いだったな。

「私は……店の外で待ってる」

「えく。夜空先輩も一緒に探してくださいよ。目的の同人誌があるんですから」

「いやだ！ だつて見渡す限りに卑猥なものが目に映る……」

「いいから行きましようよお！ 行かないとここで騒ぐぞく!! 夜空先輩がヤンキーっぽい男を想像してオン」

「ああああああああああ!! わかったわかった!! というか何度も言うがしてないからな!!」

私はとんだでっちあげを言われることを避けるために、しぶしぶ地下二階へ。

というか本来こういう所私たち未成年が入っていいのか。店員、正攻法で私たちを追い出してくれ!!

だが店員は見向きもしない。お前ら商売が成り立てばそれでいいのか!?

「高校生の私たちを見つけて店員が注意してくれれば……なんて思っても無駄ですよ先輩」

「なぜだ!？」

「そういうのは商品を買わなければいいのです。ほしい同人誌を抑えてそれを後日取り寄せれば済む話です」

理科は親指を立てて勝ち誇った顔を私に見せる。それなら一人で来てください!!

そういうと今度は、一人じゃ肩身が狭いとか言いだす。誰でもいいなら幸村でもいいんじゃないかな!?

結局私は顔をトマトのように真っ赤にしながら、顔を隠して約三十分、アダルトコーナーに拘束された。

店から出ると、ご機嫌な理科に対して私はへとへとになっていた。だがこの後も理科にカラオケだゲーセンだと連れ回され、時刻は午後四時を回る。

「楽しい!! さてと、次はどこへ行きましようかねえ」

「……そろそろ門限とかあるんじゃないのか?」

さつさと解放されたいがためか、私はそれらしいことを言つて理科を家に帰そうとする。

ちなみに私の場合は門限は存在しない。というか警察に世話になるうが行方不明になるうが。

あの人は迷惑に思うことはすれど、私がどうなったって関係ない顔をする。

「……門限なんて、ないですよ」

「え?」

「……あんなクソ親からすれば、僕は金を稼ぐための道具でしかないのだから」

突如、そんな黒い発言をする理科。

そして、その発言に対して私は……思いがけないシンパシーを感じてしまう。

ひよっとしたらとは思った。このような世界的にも騒がれる天才少女の親だ。自分の娘を誇りに思っている事だろう。

普通の想像ならそう至る。だが、私のように親に見捨てられたような奴なら、少しでも想像してしまう。

こんな能力のある娘を持つ親が、平気な笑顔を浮かべられるわけがない。

生意気だっと思うこともあるだろう。そして子供もそうだ。親を

必要としなくなるだろう。

そのことに対して笑顔で居続けられる親がいるだろうか。そうだと想像はどんどん膨らむ。

まさか……志熊理科。お前は……。

「……とはいっても、先輩の方は怒られるかもしれませんが。すいませんね、他人の事に無頓着で」

「あつ……」

思わず、私もと言いつつになった。

自分の家庭環境など、本当に信じられる奴にしか教えられない。ましてやこのような悲劇の家庭ならば。

だから私は黙った。だが……なぜだ。

ぼそつとではあるが、こいつ……なんで私に対して。

「……もう少しなら大丈夫だ」

「いいんですか?」

「ああ、それに疲れてへとへとだ。ちよつと公園で休みたい」

私と理科は街の外れの公園へと移動する。

公園にはそんなに人はいなかった。

うちの学校は他の学校に比べて夏休みが早く始まる。今日は平日で、他の学校はまだ休みに入っていないのだろう。

こう、仄かな場所に人が少ないというのはいいことだ。こういうところで本が読めれば、心地よいのだろうか。

「……ん?」

公園に付き、ベンチの方へと移動すると。

そこで私は、個人的にあまり見たくない光景が目映った。

そこには、弱った猫が横たわっていたのだ。

私はすぐに駆け付け、呼吸を確認する。

身体の節々に傷があるのも確認し、誰か悪い奴にやられたのかと想像する。

「まだ……呼吸はしている……」

この猫はまだ生きています。私は安堵した。

私はこれでも猫が好きで、猫を見ると可愛がりたくなる。

特にこんな弱った猫を見ると、救ってやりたくて仕方なくなる。

この夏の暑さで、ろくにご飯も食べられずに限界が来てしまったのか。

その上で、傷だらけで……

まだ、何か飲ませてあげられれば助かるだろうか。だが……。

「あらら、可哀そうですね。あまりそういうのに近づかない方がいいですよ。祟られるかもしれませんからねえ」

「……」

理科の心ない発言に私は耳をかさずに、その猫を抱いて、そしてベソに座り撫でる私。

きつと助からないかもしれない。だがせめて、最後までは安らかな笑顔を浮かべてもらいたい。

うちは猫を買えないから、連れて行っても無駄だ。牛乳を買いに行くにしろ、時間はかかる。

だから……せめて……。

「……猫、好きなんですか？」

「ああ、こういう愛玩動物はいい。自由で、奔放で、それでもって可愛いから。見るだけで癒されて、許してしまう」

「そうですか。猫は好きだから助けたいと……嫌いなものには一切目を向けない癖に……」

そう、どこかさびしそうに言う理科。

そんな彼女の言葉に対して、私は何を思ったか、後輩に説教をする先輩のように、私は言った。

「……別にそういうわけじゃない。生き物には必ず死がある。生き物だけじゃない、形ある物には必ず終わりがある。それはちゃんと理解している」

「……」

「だが、大人しくそれを終わらせる必要はないんだよ。終わる寸前でも、そこに今生きている限りは、少しでも幸せに生きるべきだ。私はその手伝いをしたただけだ」

「……」

「足掻いて、もがいて、苦しんで……。強がって強がって、自分でなんとかしたいって時は、それを押し通せばいい。自分にとって譲れないものがあるというなら、それは譲らなくていいんだ。だがそれでも限界だっと思うなら、その時は誰かを頼ればいい。誰かに助けを求めたい時は、求めればいいんだ」

私は何を言っているのか、言っていて恥ずかしくなる。

まさに今の自分を代弁しているかのような台詞。足掻き、もがき、苦しみ……。それで強がっている。

誰かに助けを求めればいいと言っておきながら、私は譲れない物のために己を通す道を選んでいる。

それが私にとって、正しい道だと思っている。

十年前、あいつが何も言わずに街からいなくなったことで、私の歪みが更に増した。

そして今、私の歪みの原因がこの街に帰ってきた。そう、歪んだ私を元に戻すためのチャンスが来た。

そのチャンスをつかみ取るのは、私しかない。他の誰でもなく、誰の力を使うこともない。

「……あなたは……。助けてもらったんですか？」
「……」

「過去に……。あなたが限界を感じた時に、あなたは誰かに助けてもらったんですか？」

そう、真顔で尋ねてくる理科。

そんな彼女に対し、らしくない私は答えてしまう。

「……ああ、助けてもらった。私が全てに対し諦めていた時に、たくさん助けてもらった」

「……」

「だからこそ……。一時的な希望 だったからこそ……。今がこんなに辛いんだ」

そう、自虐的な笑顔を理科に浮かべた。

その時の私は……。また無自覚に泣いていただろうか。

そんな私を見て、理科は何と思ったのだろうか。

また、面白い物が見れたとでも思ったのだろうか。私をおちよくるネタができたとしても、思ったのだろうか。

なんとでも思えばいい、お前なんか……私の気持ちがわかってたまるか。

その後、私は保健所に電話をして、猫が倒れている事を伝えた。

そして、嫌な気持ちを抱えたまま、遠夜駅のバス停へと戻る。

理科とはここで別れる。こいつの家は違う方向のようだ。

「今日はありがとうございました。僕のくだらない買い物に付き合ってくれて」

「……ふんっ。大した買い物もしてないくせに」

感謝をされているのに、腕を組んで不機嫌そうな顔を浮かべる私。

もつと他に言えるべきことがある気もするが、相手が理科だからな。

「いやしかし……なんと言いますかねえ」

「なんだ？」

「まるで今日の僕たち……」友達みたい”でしたねえ”

そう、どこか満更でもない笑顔で言う理科。

その言葉が、どこか私に突き刺さる。

友達みたいに、二人で街へ遊びに行った。たくさん色んな事をした。

私は大半がおもしろくなさそうな顔をしていたのに、こいつは……そんなことを思いながら一人で必死に楽しんでいたのか。

この今の言葉を放った瞬間だけが、私は理科に対する評価を変える。

「……友達みたい……か」

「……はい、でも……もしこの先、僕たちが」

その言葉の続きをいいそうになる理科に対し、私はあざ笑うかのような口ぶりでそれを遮った。

「ははは。貴様にとってはいい”友達ごっこ”だったようだな」

「……え？」

「日常のストレスを発散する相手がないのなら、互いに嫌悪し合っ

ている間柄でも仕方ないからな。私としては学園のお宝に接待でき
て、部長として達成感に満ち溢れているよ」

「……」

そう私が突き放すように言うと、理科は身体をぶるぶる振るわせ
た。そして……。

「……ふふふ。ああそうだよバカじゃねえの!! てめえこそ途中で
ちよつと本気になってたんじゃねえの!? 孤独でも美人な夜空ちや
んからすればこんな冴えない僕でも隣人部のいい練習になったん
じゃないのかなあ? でも残念!! それが本物に結ぶ付くわけねえ
んだよ!!」

「……」

「僕みたいな天才には、あなたみたいな最低クズ女なんて……友達に
なるだけ経歴が汚れるんだよ!! だから……ぐっ……」

そう、口ごもって私に背を向ける理科。

「ああもうてめえのムカつく顔なんて見たくねえわ。夢に出るんです
よねえ、その仏頂面が!!」

そして、バスの時刻になってバスが到着する。

背を向ける理科にお別れの一つも言わず、私は無言でバスに乗っ
た。

「——どうして……どうしてあんたは、小鷹小鷹って……」

友情を偽るな……その言葉は、私の本心だった。

だが、それに拘るが故に、私は身近にある大切なものに気づくこと
ができなかったのかもしれない。

私の希望は未来には無い、あるのは……過去の遺産。

過去から今へと続く道。過去に置いてきた……私の大切な友情。

羽瀬川小鷹……タカ。あいつとの友情無くして、私は先には進めな
い。

だからこそ、あいつのためなら私は……鬼にも悪魔にもなつてや
る。

利用できる物は全て利用する。巻き込む物も巻き込んでやる。

そして私は救われる。止まった青春を動かし、腐った青春に反逆する。

——この夏休みで……全てに決着をつけてやる。

N E X T — 三日月夜空崩壊編。

幸村の忠義

夏休み真つただ中。

今日も私たちは部活を行う。

まあ部活といっても、特に家で何かをやるわけでもない暇な学生が、家にいるくらいなら学校に来ようみたいなそんなノリに近いのだが。

宿題なら学校でもできる。別に嫌な奴がいる我が家で勉強を律儀に行う必要はないのだ。

本日のメンバーは、現在の所私と楠幸村の二人だけだ。

理科はまだ来ていない、羽瀬川兄妹は今日はお休みと、先ほど連絡が来た。

用事があるから行けないとあるが、小鳩の方は兄が行かなければ本来ない、なので小鳩の方はそんな事情だろう。

そして……小鷹の方は、あまり考えたくはない。

友達の少ないあいつの用事となると、家族絡みか……あの女の絡みだろう。

柏崎星奈。最近ますますあの女の気配がざらついて仕方がない。

夏休みには小鷹を家に招待するとか言っていたし、なんか色々遊びに行くのかも言っていた気がする。

小鷹よ。あの女はけして心からお前と友達になりたいか思っていないのだぞ。だから早く気付け、あの女の所にお前の居場所なんてないんだ。

あの女に関わっていたら絶対にひどい目に合う。そうだ。このままでは小鷹が危ないんだ。

もし、柏崎がなんの事情も理解せずに、暇つぶしなどで小鷹を貶めでもしたら。その時きつと私は……。

私は、きつと柏崎を※※してしまうかもしれないな。

「せんぱい。さきほどからおちつきがありませんが……」

「あ……ああ。ちよつと考え事をしていてな」

私を心配して声をかけてきた幸村に対して、私はそう誤魔化した。

こいつのことだ。大丈夫、心配ないと言ってしまえばそれ以上は関わってこない。

理科ならば、私の反応ひとつで状況を察しておちよくってくるのだろうが、そういうのは私としては逆に迷惑だ。

そういった意味では、幸村のように下手に関わってこず、都合良く動いてくれるやつがちょうどいい。

夏休み中ずっと早く来て部室を掃除してくれるし。まあ……たまには悪いと思っっているぞ。私もそこまで鬼じゃない。

だが、こう人の善意という物を、善意で消してはいけないんだと思う。

「この調子では、昼までのんびり宿題ができそうだ」

そう、私が鞆をまさぐり始めたその時だった。

「おう！ お前たち学生は夏休みも学校に来て暇だなあはははは!!」

そう、うるさく私たちに声を向けた幼女。

長い銀髪のシスター服。高山マリアだった。

あの姉を一回り小さくしたような容姿の、あの姉ゆずりのくっそうるさいガキだ。

当然、うるさい子供がいる中で勉強などできはしない。

「何しに来た？ こんなところでサボっていたらまたあの姉に怒られるんじゃないのか？」

「朝礼はもう終わって私は自由時間なのだ。仕事もせずにぐーたらしているお前たち学生と違って、私はちゃんと仕事をして自由を得ているのだあははは!!」

「……相変わらず一言多いクソガキ」

そう私は怒るのもバカバカしくなって呆れる。

こんな熱い日々でこのクソガキ相手に怒っていたら頭が破裂しそうだ。

だがこのガキがやってきたということは、ましてや子守り担当の小鷹がいなくなれば。

この先の時間は、まことに騒がしくなるに違いない。

「なあ夜空く。お菓子くれお菓子く」

「バイトは明後日だ。だから今日はストックが無い」

「えく。この私のはあのババアに頼まれてこもんだいりをしている偉い幼女なんだぞく。私の発言一つでこの部屋から追い出せるんだぞく」

「ならばやってみるがいい。その瞬間貴様を血祭りにあげてやる」

「うつ……うつく」

と、私が本気で睨むとマリアは泣きそうになる。

変に泣かせるとあのババア（マリアが言っているから私もそう言うおう）がうるさいからな。

困ったなあ。午後も家に帰らず街をさまよわなければならないのに……。

困った時は……。

「……幸村。そういえばお前小鷹からこの幼女の世話を仰せつかっているのではなかったのか？」

「ぬあ。そういえばそうでした。せんぱいからの言いつけをわすれてしまうとは、はらをきつてわびるしよぞん」

「腹を切る前に子供の遊びに付き合っただけであげてくれないかなあ」

相も変わらず大げさな幸村を私は制止し。幸村にやってほしいことを伝える。

幸村はクラスでは役割を与えてもらえない。だからこの部活での自分の役割には並々ならぬやりがいを持っている。

ちよつとマイペースだがこんなに素直なガンバリ屋を、”めんどくさい事情”一つで丁重に扱って。

相手に気を使うというのは必要なことだが、その優しさが……時としては棘になる。

気苦労の無い一般人の優しさなんてものは、自分を納得させるための素材ではない。

そんな優しさなんて、誰が欲しいと願うか……。

「それではまりあ殿。わたくしと一つげーむをしましょう。わたくしにかてばおやつをあげます」

「おっ！ それは楽しいのだ！ ユーモアの無い夜空と違って幸村は

本当に優しいのだ」

「むか……」

おっと、怒るな怒るな。

そんな隣から放たれる幼女の力なき罵声などに反応してはいつまでたつても大人になれない。

と、幸村はゲームと称して、部室の物品庫からなにやらを取りだし持ってきた。

持ってきたのはピコピコハンマーとヘルメット。そして座布団を二枚。

なるほど、古典的なゲームだな。じゃんけんをして勝った方が相手を袋叩きにでき、負けた方が無様にヘルメットを被って地に伏せるというやつだ。

「それではさいしよはぐーでおねがいます。ぱーとかだしたらぶつころしますからね」

うん？ なんだろう今幸村がものすごくのつぺりととんでもないことを口走ったような気が……。

そして第一回戦。最初はグーから始まり、幸村はパーを出して、マリアはチョキを出した。

そうするとマリアが攻撃側で、幸村が防御側になる。のつぺりとヘルメットを幸村が取った所で、マリアが素早く幸村をハンマーで叩いた。

勢いよくピコツと音が鳴る。見てる限りでは結構痛そうだ。

幸村とマリアでは速さに二倍近くの違いがある。これでは仮に幸村が攻撃側に回ったとしてもマリアに攻撃を与えることすらできないだろう。

子供相手に手加減をしているのか。素で遅いだけなのか……。

「あらら、まけてしまいました。まりあ殿おつよいですね……」

「ぬはは！ 幸村が弱すぎるだけなのだ!!」

「……」

そう心ない幼女の罵倒に対しても、幸村は顔色一つ変えずに無然としている。

すごいな。器が広いのか、単にのろいだけなのか。私だったら機嫌を損ねてゲームを止める所だ。

子供だからってなんでも許されるというわけではない。そこを許さなければ虐待だなんだとお上が動くから、日本がおかしくなってしまうのだ。

そんなことを考えていると、すぐさま二回戦に突入した。

「最初はグー!!」

「じゃんけん……」

今度は幸村がグーで、マリアがチョキ。

先ほどとは逆の立場になった。

マリアはすぐさまヘルメットを取り、頭にかぶった。

そして幸村は、ハンマーを握って硬直。

やっぱり速さが違いすぎて、幸村に勝ち目がない。

と……思っていたのだが。

「……えいつ」

そう言つて幸村は思いつきり、ハンマーを横に振った。

そしてそのハンマーは、マリアの頬に直撃した。

「ふぎゃー……!!」

幸村のまさかの裏技を喰らい、マリアの小さな身体はちよつとだけ吹っ飛んだ。

頭が駄目なら隙のある顔を狙えと、というか……。

「そんなのありかあああああああ!!?」

そう私は叫んでしまった。

確かに私ならその手を打つても違和感がないが、その卑怯な手を打ったのがあののっぺりとしている幸村だったのだ。

まさか幸村が、年下の幼女相手に容赦なく攻撃を加えるとは。やばいな、ものすごい貴重な瞬間を目撃してしまった。

「ひひひ……卑怯だぞ幸村……!!」

とうぜんマリアは反論する。

確かに今のは大人げなかった。そして反論された幸村はというと。

「ひきょう? なにをいっているのですか?」

そう、悪びれもなく口にした。

「だ、だってあれは頭を叩くゲームなのだ」

「あたまをたたいたらかちとはひとつとももうしてませんか?」

「だ、だったらなんでヘルメットがあるのだ!? 被って防御するためだろう!?!」

「べつによこに持つてきても防御できるでしょう?」

幼女の必死に反論に対し幸村は一步も譲らず幼女を押し返す。

「なんだろう? あれ? 私の知っている幸村とはなんか違うよう
な……。」

「とりあえず続けましょう。マリア殿が勝てばお菓子が食べられるの
ですから」

「む……そうだな! 今度勝てば問題ないのだ!」

「そううやむやにして、最終決戦へ。」

「最初はグー!!」

「じゃんけん……」

最後の一戦。

幸村はグー。そしてマリアはパーだ。

さつきは幸村の知恵が勝ったが、戦略は一度破られれば二度は通用
しない。

ましてや攻撃側はマリアだ。幸村はもう防御するしかない。

おまけに早さは変わっていない。マリアがハンマーを振った時に
は、幸村はヘルメットに手をつけている。

勝負は見えた、と……思っただけだ。

「えいっ」

そこで幸村は、恐るべき行動に出たのだ。

なんと掴んだヘルメットを、マリアの顔面向かって投げた。

「んぎゃー!」

当然ヘルメットが顔面に直撃したマリアは体勢を崩してハンマー
を手放す。

すると、幸村がそのハンマーを手にして。

あろうことか、マリアの頭に向かって思いつきハンマーを振りか

ざした。

「え、ええ……」

観戦していた私は、言葉にできなかった。

あのいつものほほんとしている幸村が、たかが小さいゲーム一つでむきになり、幼女をフルボッコにしたのだった。

この私が。この聖クロニカ一のDSかもしれないこの私がドン引きすらしてしまう光景だった。

そんな大人げない幸村の方に、目を向けてみると。

「……フッフ」

笑っていた。なんというかそれは妖面な笑みを浮かべて。

まさか……幸村お前。

「う……うえええええええん!!」

等々マリアは泣きだしてしまった。

当たり前だ。ヘルメットが顔面にあたれば誰だって痛いさ。

その上卑怯な手で勝負に負けた上お菓子までお預けだ。幼女には辛い結果だ。

そんな結果を作り出したのが、基本何考えているか分からない幸村だから驚きだ。

この私がやったというなら絵にもなろうが、自分で言っていてあれだけ。

「……幸村、やりすぎ」

そう幸村を咎める私。

まさかこの私が幼女一人に味方をするようなセリフを吐くとは、そう言わせる幸村がちよつとだけ怖かった。

「みぐるしいところをおみせしました。ちよつとほんきになりましたがゆえ、まりあ殿を泣かせてしまいました」

「と、とりあえず謝っておけ。あと昼ご飯でも与えておけば機嫌取り戻すから」

そう私はアドバイスをして、読んでいた本に目を戻す。

というかほとんど本読めてなかったけど。

私のアドバイスを受けた幸村が、すぐさまマリアを慰めに行く。

「なかないでください。きをたしかに」

「お前のせいだよ」

その幸村の真顔の言葉に、私はついツツコミを入れてしまった。「もうおひるのじかんですね。こだかせんぱいにあなたのえいようかんりをまかされているゆえ」

そう言つて、幸村は鞆から昼ご飯を取りだそうとする。

マリアの栄養管理ね……。小鷹のやつ、幸村に押されて何気なく言つたのだろうが、それを幸村の実費でやらせるってどうなんだろうか。

せめて部活の連中一人一人から徴収するとか。まあこんなむかつくガキに金出せと言われていい顔しないであろう私が言うのもあれだが。

そういえば夏休み当初、そう言われて幸村がマリアに寿司を御馳走していたが。金銭感覚がぶっ飛んでいるというか、実は金持ち？

色々と考えていると、幸村が本日のメニューを取りだした。

弁当箱……ではない。なにかしらのボトルだ。そこに大量の白い液体が入っている。あああの白い液体で変な想像するのやめてね。

「幸村……それはなんだ？」

私は思わず訪ねてしまった。

マリアに栄養をつけさせるため、なおかつ無理のしない食べ物。その結果がボトルの中の白い液体。正常な物だからね。如何わしい物じゃないはずだからね。

私のその間に、幸村はいつもどおり顔色を変えずにこう言った。

「ほんじつは……”ぷろていん”となっております」

「……プロテ？」

私は聞き逃したのかとも思った。

だが、この幸村に限って冗談なんて言わないだろう。言うことなすこと全部が本気なこの幸村に限って。

ということは間違いないだろう。そのボトルに入った白い液体は……プロテインなのだろう。

「……それ、マリアに飲ませるの？」

「はい」

「……マリア、それ飲むと思うか？」

「わかりません」

「わかりませんって……。そんなもの、まだ成熟しきっていない幼女が飲むわけがないだろう。というか栄養つけるって確かにそうかもしれないが、ちよつと視点がずれてるだろ？　　というかお前は どうして そうなんだ？　　どうして そう極端なんだ？」

そう長々と幸村に物申す私。

この世のどこに幼女にプロテイン飲ませる奴がいるんだよ。どこ
のマニアックビデオだよそれ。

だが、幸村の顔は変わる兆しすらない。

そう、幸村は本気なのだ。本気で、そのプロテインこそがマリアの
栄養をつけるために必要だと持ってきたのだ。

ということは、止めることは簡単ではない。

「……ひよつとしたらおきにめすかもかもしれません」

「お気に召せばいいがな」

そして幸村は、マリアの方へと足を運び。

昼御飯だと、プロテインを提示すると。

「……いらぬ。こんなの食べてもお腹が膨れないのだ。嫌がらせな
のだ。もう幸村の事なんて信じられないのだ」

そう目に光が宿っていないマリアが幸村を敵視する。

先ほどのこともあって、当然のことだろう。

「そうですか。わたくしがごだかせんぱいにいわれてひっしにかんが
えて、あなたにえいようをつけてもらいたいおもいでもってきたのに
……」

「そんなこと知らないのだ」

「さようですか」

そう、幸村が顔色一つ変えずに言う。

「まりあ殿、ちよつと……」

「ふえ？」

そうマリアを振り向かせ。

その一瞬の隙を付き、幸村はなんとプロテインを無理やりマリアの口に突っ込んだ。

「うっー！」

それを見て、私は口を押さえた。

幸村、本気でやりやがった。その笑顔でもなく苦の表情でもなく、何も思わない無心の表情で。

苦しそうにプロテインを飲む、飲まされるマリア。

なんとというか見方によつてはこれ、通報されてもおかしくない絵面だった。

白い液体を無理やり飲まされる幼女。文字に書くだけで卑猥な感じしかししない。

「うええまずい、まずいし固いのだ!!」

「がまんですまりあ殿、これも立派なりんじんぶのこもんになるためです」

「……」

そのやり取りに対して私は言葉を出すことができなかった。

そう暗示をかけながらプロテインをがぼがぼ飲ませる幸村。がぼがぼプロテインを飲まされる幼女。

なんとというか見てられなかった。高校生が小学生をいじめているようにしか見えない。

「……幸村、やめなさい」

「なぜです?」

そう真顔で帰って来たのがその言葉だった。

こいつ、まさか悪気が無いのか? 情が無いのか?

幼女が苦しんでいる事に対して、多少の慈悲も申し訳なきもないのか……?」

ひよつとしたら……ひよつとすれば。

楠幸村。並々ならぬ事情を抱えたこいつも……。

確かに、あんな事情があることを想定すれば……。

「ごんにちは。すいませんねえ仕事の方が忙しくて部活遅れてしまいました」

こんな状況の中で、のんびりと部室に入ってきたのは理科だった。私はすぐさま継りつくように理科に寄っていく。

「理科。あれを止めてやってくれ」

「え？ うっわあゝ美少年が幼女を犯してるわゝ。超ウケるね」
「早く助けてあげなさい!!」

そう悠長なこと言ってる理科に私は痺れを切らして叫んだ。

数分後、なんとか幸村の暴走を止めた後、マリアを部室から逃がしてあげた。

なんというか、ちよつとだけ幸村の危ない面を見てしまったような気がする。

「まりあ殿。おいしくめしあがってくれてさいわいです」

「お前の目は視力いくつだ……」

結局最後までマイペースな幸村は、幼女をいじめていたことに何も謝罪をしなかった。

数分後。当然のごとくケイトが部室に殴りこんできた。

「ちよつとユツキー！ マリアがいじめられたって泣きついてきたんだけど！」

相変わらずバカ親のような女だ。

だが今回の場合私は幸村に味方しようがない。

理科は他人事のように知らんぷりしているし。あとは幸村に任せよう。

「もうしわけありません。たわむれがすぎました。せんぱいからもうしつかったしめいをはたすことにやっきになり」

「だとしてもねえ。君も立派な男子なら女性に優しくとかできないのかい？」

「めんぼくごいけません。この場でわたくしがしやぎいとしてもせいいがつたわりませんでしよう。あちらでふたりつきりになってはなしあいますよう」

「え？ いやあの別にそこまでせんでも……」

そう戸惑うケイトを、幸村は誠意を見せると言って無理やり廊下へと連れて行った。

なんかというか多少演技臭かった気もしたが……。

「ちよ……ユツキーなにを……ああーん!!」

「びくっ!」

廊下から聞こえてくるケイトのなまめかしい声に私はつい反応してしまふ。

そして数秒後。二人が部室へと帰ってきた。

「ユツキー……愛してるよ」

「なにがあつた!?!」

思わず私はツツコミを入れた。

先ほどから十秒も経っていない。

なにご立腹だったケイトが、幸村と廊下に出た瞬間ご機嫌ムードに変わっている。

一瞬だけ聞こえてきたケイトの女としての叫び。そして幸村が相変わらずの無表情だがどこか勝ち誇ったような雰囲気。

「幸村君。まさかケイト先生を懐柔したんですか?」

「たしようおとごぎをみせたら、いちころでした」

「お前はどこの特命係長だ!?! 高橋○典なのか!?!」

理科の質問に意気揚々と答える幸村に、私はまたもツツコミ。

なんというか、小鷹がいないとそういう役目が全部私に回ってくるな。

こういうのを仕切るのはあいつの役目だろう。あいつめ、今頃柏崎に言いくるめられているに違いない。

くそ、小鷹……早く戻って来い。

「何があつたかは詳しくはわかりませんが、幸村君も中々のやり手のようですねえ」

「……今回であいつの底が知れないことがわかった。理科、あいつを一人にしたらだめだ。何をするかわからない」

「そうですね。なんならいっそのこと幸村君に鞍替えしてみては?」

どこで女と何しているかわからない男のケツ追いまわすよりはずっと利口だと思いますよ」

そう、嫌味つたらしく理科が私に言った。

数日前の買い物に行った日以降、またこいつの嫌味癖がひどくなつたような気がする。

それも、今までと違って小鷹がいようがいまいが容赦なくなつていふような気がする。

まあ、気にする必要はないが。こいつと私は……相容れぬ道にいる。

「……余計な御世話だ」

「まったく。そこまで執着しているのを見ると、疑わざるを得ないんですよ。小鷹先輩と何かあつたんですか?」

「……貴様の思ひすごしだ」

そう、私が突っぱねると、理科はさらに機嫌を損ねる。

そして、無言で私の方へと向かつていき。

顔を近づけて、凄むように私の近くでこう言った。

「……夜空先輩、”僕ら”をあまり過小評価しない方がいい」

「は?」

「今回のでわかつたでしょう? あなたを含めて……この部活には”

まともなの”がない」

そう、あえて侮辱するように理科は言う。

「……貴様がそれを決めるのか? 貴様こそ……見下すな、私たちを」

「だからよ、その発言一つが自分勝手なんだよ夜空ちゃんよ。僕だつてまともじゃねえよ、まともじゃねえんだよ。人間的な意味でも、クソ食らえな人生一つにしてもなあ」

「……何が言いたい」

「……変わりたいのは、あんただけじゃねえんだよ」

そう、強気に理科が私の顔を睨んだ。

私自身もせいっぱい威嚇しているはずだ。

だが、それに負けることなく、理科も引くことが無い。

「だからこそ、自分の都合よく動くこうとするんじゃないよ。僕たちは”隣人部の仲間”として……もう”他人同士”ってわけにはいかなんだよ。あんたはいつまで……”他人には関係ない”って言い張るつもりだ?」

「……仲間……か。学校に重宝されている天才様に、そう思われて光栄だ」

「夜空先輩!!」

その私の言葉が引き金になり、理科は感情を抑えきれずに私の名前を叫んだ。

そして、これ以上の私の言葉を遮るように、辛そうに……苦しみなから言葉を続ける。

「……理科は、この部活に入った時から、けして全てを嘲笑ってなんていないんですよ。遊びでなんて……思っていない」

「……」

「……夜空部長。あなたと……小鷹先輩がいてくれたから」

その理科の言葉に、私は耳を傾けずに部室から去ろうとした。

だめだ。そこで、彼女の言葉に耳を貸してはいけない。

今のままでは、またあの時を繰り返すだけだ。繰り返して、待つのは絶望だけだ。

むなしさだけだ。大切な者がけして大切な物として続かない……悲劇だけが生まれる。

だから……例えばその想いを踏みにじったとしても。その結果、鬼にも悪魔にでも成り果てたとしても……。

私の答えは……過去にしか存在していない。

「……よーぞらくん。彼女の言葉を持ってしても、君の目線は違う所にあるんだねえ」

「……」

「まあ、いいさ。やりたいように、やってみればいい」
最後にケイトはそう私に告げた。

その言葉に、こいつらの想いに対して……。

この時の私は、偽りを貫き通せただろうか……。

——もしかしたら……私は……。

溺れゆく黒騎士

——とある一国に、とても美しいお姫様がいた。

黒のドレスがよく似合う。黒で着飾った綺麗な黒の姫。

その姫は大勢の民から愛された。だが、その姫は民を愛そうとはしなかった。

結局は自らの名声や富、そして美しい自分が目的で近づいてくる物ばかりと、拒絶を繰り返す姫。

汚い大人のやり方を見てきた彼女は、幼いころからその性格にゆがみが生じていた。

まだ幼かった姫は、けして目の前にあるであろう一粒の光に目を移そうとはしなかった。

そんなある日の事。

姫はある日家出をした。初めて見る外の景色。

ずっとお城に閉じ込められていたために、その外の景色は新鮮だった。

だが、その全てを映し出す広大な青空の下で行われていたのは、卑劣な行いの数々。

自らの国の民たちは、上が下をけなして威張る者たちばかりだった。

情などそこにはない、あるのは力と利益だけの繋がりがだった。

見兼ねた姫は、自分の立場など考えずに弱気民を助けようとした。

だが加護の無い姫は、初めての外では力なき子供でしかない。

襲われそうになる姫。そんな姫を、突如現れた少年が助けた。

自分と同じくらいの、まだ幼い少年。

当然大人たちには勝てない。だが、傷だらけになりながらも姫を守る。その心はくじけなかった。

姫と少年は隙を見て逃げ出す。そして誰もいない裏の路地へ。

姫は尋ねた。なぜ自分なんかを助けたのかを。

少年は答えた。君こそ誰かを助けようとしていた……と。

だから、自分が動かずその場で黙って見ている事が耐えられなかった。

たと。

——自分は、弱い物じゃないから……と。

初めて、その姫が他者に心を許した瞬間だった。

この少年なら信じられると、友情をはぐくめると思った。

この時友情に飢えていた姫は、自らの素性を隠しその少年と友達になつた。

一国の姫であることも、女であることも隠して……。

初めて出来た大切な親友。だが、それは長くは続かなかつた。

夕方になり、城の配下が姫を見つけ、捕まえ城へと戻す。

少年とろくな別れ方もできずに、たった一日で……その友情は幕を閉じた。

——それから、数年の月日が立つた。

姫は国を変えるため、自らの立場を顧みずに、戦場に立つことを決意した。

女であることを微塵も感じさせない程の剣さばき。漆黒の馬に乗れば無双が如く敵陣を葬り去つた。

いつしか姫は、”黒騎士”と湛えられ。同じ国の戦士たちの間では英雄となつた。

そんなある日。敵の国の一人の騎士と戦場で出会う。

黒とは逆の白い馬に乗つた若き騎士。黒騎士と対を成す”白騎士”との出会い。

剣が交わる。互いに一步も譲らぬ駆け引き。

その中で、互いの剣が顔を覆っていた鎧を砕いた。

その瞬間、互いの目が合った。その時、黒騎士はあまりの衝撃で動けなくなつた。

——その白騎士の正体が……かつて自分の親友だった少年だったからだ。

夏休み、週末のバイトの日。

店長が休みの日に、私はこの古本屋でバイトをしている。

といつても来る客など大体決まっており、子供には適当に、大人に

は率直な対応をしていればいい簡単な仕事だ。

店長いわく、私は座っているだけで仕事になっっているらしいからな。お言葉に甘えて本を読みながらの仕事だ。

社会人をナメるなど言われても、文句は言えそうにないな。

「よぞにやくん。休憩の時間だぞ〜」

そう、後ろから同じ学校の先輩であるバイト仲間の大友先輩が私に休憩を言いに来た。

休憩といえど、この時間が休憩みたいなものだが。

「そしたら、レジお願いします」

「はいよ。ところで今日は何の本読んでたんだい？」

そう、大友先輩は私が読んでいた本に興味を抱いてきた。

普段ならそっけなく返す所だが。この人に対してはそうもできない。

「あく。」黒騎士伝説くザ・ダークナイト・レジエンドく。その最新刊ですよ」

「黒騎士伝説か……」

今読んでいるこの本、実はあまりやる気を起こさない私が、この店に特設コーナーを作る提案をしたほど私が熱中している本だ。

黒騎士伝説。副題はザ・ダークナイト・レジエンド。

古今東西あらゆる本を読んできた私にとって、今最もマイブームになっているシリーズだ。

人気ラノベ作家、黄泉比良坂氏が描いた王道ファンタジーライトノベルだ。

その第一巻発行からあらゆる所で評価され、いつのまにか爆発的な人気を得た大ヒット作。

最初はよくある王道テンプレかとバカにしながら手をつけたが、気がつけば一日中読み返していた。

王道というテンプレではないお約束を順守しながら、綿密に組み立て設定の数々と絶妙な伏線の張り方、そして読者をひきつける展開の作り方。

その中でも特に”友情”というテーマに的を絞った、ファンタジー

でありながらも人間ドラマの深いこと。

とにかく、この私が語ろうものなら一日使っても足りない程、ものすごい面白い作品なのだ。

「主人公である黒騎士メアの心理や生き方が儂いながらも真つ直ぐで、その敵である白騎士ラインハルトとの絶妙な関係が……もう先が気になって仕方ないんですよ。早く五巻発売しないかなあ〜」

「あっはっは。ずいぶんと楽しく語るね。珍しいにや」

「うっ……」

そう大友先輩に言われ、思わず顔が赤くなる私。

こうやって、好きな本に対する率直な感想を誰かに語ることなど、普段の三日月夜空からすれば考えられないことだろう。

今日の前にいるのが小さい時から付き合っている人物で、題材になっているのが私の大好きな本だからという一致が招いた奇跡とも言うべきことか。

まあ、私がこんな楽しそうに本の話をしたって、得する奴などいないだろうが。

「……先輩もぜひ読んでみてはいかがですか？」

「君がそこまで語るのだから面白いとは思うんだけどさ、その一冊一冊が終わりのク○ニクル並みに分厚いんじや読んでる途中に寝ちやうよ」

「二巻はまだ300ページくらいだったんだが、二巻でいきなり倍の600ページ。最新刊の四巻では900ページでしかも上巻だからな……」

そう私は苦笑いをする。

確かに黒騎士伝説（略称：ぎだない）は人気作だが、本の分厚さが読む人を選ぶとも言われている。

だがそれでも多くの人気を博しているのは、その作品の出来があつてのことだろう。

「そういうのはアニメとかになったら見てみるよ」

「ふっ……」。先輩は甘すぎる。そういうもののアニメ化で誰が一番楽しめるかと問われれば原作読者。そういう原作を知らないにわか

限って、この作品は駄作などと口にする。まこと愚かの極みなのだ」
「なるほど。逆に原作読者ほど実写化を叩くと言われているが君はどう見る？」

「考案するまでもない。そういうものの実写化は望んで行われているわけではない。業界の権力者による圧力、原作者は断れない状況下で承諾しているのだ。原作者にとつて守りたい物をその業界の人間が知る由もない。人気の作品が多方面で通用するなんていうのはいつの世の話だ？　そういう世の人間が二次元と三次元の表現の違いを理解できていないから実写化という駄作が生まれる。作品の良さを理解できないからそういう考えを通そうとする。アニメの美少年キャラをジャニーズ使ったら喜ばれるとかアニメの美少女キャラをA○B使ったら再現できるとかそういうのは虚妄だ幻想だ！　二次元が好きで連中と三次元が好きで連中の感性を一緒くたに考えて良い作品ができるものか。だからこそ原作ファンがそういうのを叩く。作品を一番理解しているのは偉い人でも業界のやり手でもない、その作品を支えてきた一人一人のファンだそれを思い知ってから博打を打てえええい!!」

なんとという長台詞、私はここまで熱くしゃべるキャラじゃないはずなのだが。どこぞのK1だ私は。

そんな私の熱の入った長台詞を聞いて、大友先輩はクスクスと笑った。

「……なにがおかしい先輩」

「ふふっ。そういう面が、他の人に惜しまなく出せるといいなと思つてね」

「……」

そう言われて、私はどうにも言えない気持ちになった。

確かに、自分の趣味を誰かに楽しく語ることに抵抗さえ抱かなければ、いくらでも話の種はある。

この私の読書という趣味は、誰かと繋がるための趣味ではない、誰かを拒絶するための趣味だ。

誰とも話さず本を読んでいれば自分の世界に閉じこもれる。誰か

が本の内容を聞いて来ても、けして相手が理解できないような本を読んでいけば下手に話が弾まない。

私にとって読書という趣味はそういう役割を持つ。そんな私が読書の素晴らしさを語ることで自体が、ビブリオマニアには侮辱と捉えられても仕方ないことだろう。

「……休憩入ります」

「はいよ。さてと仕事だ仕事だ」

特に反応を見せずに休憩に入った私を、先輩は何も触れずにいてくれた。

彼女は私とは違う世界にいる。だが、私の気持ちを考えて触りない対応を取ってくれる。

そのことに対して多少の申し訳なさはある。だからこそ、もう少しだけ待っていてほしい。

もう少しで、全てに決着がつきそうなんだ。だから……。

翌日、部室にて。

今日は小鷹は用事があるらしく、部活に来ていない。

あいつが部活に来ないということは妹も来ない。なのでよく顔を合わせる三人での部活となった。

特に決まったことはせず。幸村はぼーっと、私は読書、そして理科はパソコンでゲームをしている。

さきほどからパソコンから漏れる。悲鳴と絶望にも似た叫び声が聞こえてきて若干迷惑千万だが。

いったい理科は、何のゲームをやっているのだろうか。

「……少しゲームの音を下げろ」

「ああ、それはすいませんでしたねえ」

そう私が寄って注意をすると、理科は軽く謝って音量を下げた。その際に画面に見えたのは、浜辺の海で鮫に食われている集団の絵だった。

いったい何のゲームをやっているんだ。予想外の絵に少々興味を抱いた。

「……なんというゲームだそれは」

「おや？ 他人の事には興味を抱かないあなたが珍しい。これはシャークラツシャーという理科も制作に関わったマニアックゲームでしてねえ。海に泳ぎに来た客を鮫で食い殺すゲームなのです」

「……お前というやつは、とことんろくでもないやつだな」

「それをあなたが言いますかあ？」

私がそう感想を漏らすと、理科は皮肉交じりで応戦した。

さすがに気持ち悪い画面を見せられ意地になるほどの気力はなかったもので、特に会話が発展することも無かった。

「時に先輩。その本はさてはぎだないの最新刊では？」

「……知ってるのか？」

理科は私の読んでいた本を見て言った。

本日も私の愛読書は、この黒騎士伝説だった。

さすがに800ページは超える量。一日で読みきれるものではない。

今人気の高い本だけに、理科も知っていたか。

「ああ、そうだが」

「それ面白いですよねえ。理科も最近噂を聞いて購入しまして、まだ二巻に入っただばかりなんですよ」

「そうか……」

そう理科が話題を引っ張ろうとするが、私は半分強引に投げやりな答え方で話題を切った。

昨日みたいに、この作品の良さを語れば、こんなつまらない時間が多少は楽しくなっただろうに。

だが、この女と黒騎士伝説を楽しく語ろうとする気持ちなど、私の中には無い。

「……なんか先輩って、ぎだないの黒騎士メアに似てますよね」

理科は突然、私が黒騎士伝説の主人公である黒騎士メアに似てると言ってきた。

黒騎士メアは、一国の姫様にしてノワール騎士団の騎士長。多くの民や騎士たちに慕われているカリスマ的な存在だ。

自らの国を変えるために自身の命すら惜しまない。と……私とは正反対の人間性だが。

……しかし、私とその作品にハマるのは、そのメアの生い立ちが原因なのかもしれない。

特に彼女の、過去に親友だった人物が敵に周ってしまったという場面だろうか。

そういう部分に、私は深いシンパシーを感じてしまった。だから、私は黒騎士メアを応援したくなってくる。

「……似てるか？」

「はい、まあ確かにあつちは多くの人たちに慕われてて先輩とは真逆ですけど」

「……」

「でも……先輩の本質が、どこかそんな気がして。本当はとても優しく、不器用ながらも他人を引きつけるような……」

そう、理科がさびしそうな目で、私に訴えかけるような声色でそう言った。

そんな彼女の言葉に、私は答え方を迷った。

本当は優しく、人を引き付けるような……。

そう思われている事に、どう答えていいかわからなかった。

「……なんてね。すいませんね、変な理想を押し付けて」

「……ああ、迷惑だ」

そう私が無然とした態度で答えると、理科はほのかに笑って見せた。

そしてまた、それぞれが好き勝手なことをやり始める。

時刻が十時を回ったところで、突如理科が部活動の提案をしてきた。

「……今から、皆さんでプールに行きませんか？」

突拍子もない提案だった。

今から、それも先ほど海でたくさんのお客が鮫に食われていた絵を見せられた後だというのに。

こいつ、どんな感性を持っているんだ。死にたがりなのか？

「……死にたいなら一人で勝手に死ぬ」

「ええ……。プールに行きたいって言ったただけなのに」

私の反応を見て、理科が苦々しい顔で答えた。

「しかも今からって、お前はもうどうしていつも急なんだ？」

「善は急げと偉い人が言うではありませんか。それに確か市営の竜宮ランドの割引が今日までなんですよ、今から帰って支度すれば1時のバスに間に合いますし結構遊べると思いますよ」

「……いや、でも」

理科はさつそく行動に移す気満々だが、私はめんどくさくて仕方がなかった。

この時期で割引だ。プールにはたくさんの方が集まっているだろう。

リア充という集団に小さな魚が紛れ込むかのような滑稽な行動。疲れがたまって明日は寝込むかもしれない。

かといって、めんどくさいで断るのも部長っぽくないしな。

「……めんどくさいなら別にいいですよ」

「ちつ……。わかったわかった。じゃあ一旦解散だな」

私は仕方なく、午後の部活動をプールにすることを承諾した。

理科は割と本気で喜んでいて。幸村はいつも通りだからわからん。

……幸村……幸村？

——あ。

「ん？ どうしました先輩。幸村君を見て」

「……当然、この三人で行くんだよな？」

「え？ 当たり前でしょ？ 幸村君も用事とかありませんよね？」

「ありませぬが」

そう、幸村は淡々と答えた。

だとすると、誰かをハブく理由はない。というかそんなことしたら変な空気になるからあまりしたくない。

だが、そうすると皆でプールに行く上で、幸村の存在がかなりやっかいになる。

だって、幸村は……。

「……何か困ったことでも？」

「まあ、かな〜り困ったことがある」

「え？ 男の人に肌を見せるのが恥ずかしいとか？」

「まあそれもあるが……」

そう、私が答えると理科が首をかしげた。

幸村か。どうするかな……。

幸村は“男”だ。だから普通は着替えをするとき、男子更衣室に入ればいいのだ。

しかし、一人こいつを男子更衣室にいれるわけにはいかない。

それが、個人的に“自覚”が無いなら尚更だ。

「……幸村、ちよっとお前のスマホを貸せ」

「はい、どうぞ？」

私は幸村からスマホを借りた。というか他人にスマホを躊躇なく貸せるってすごいな。

そしてそのまま一人部室の外に出て、幸村のスマホから“ある人”に電話をかけた。

その人物は私自身があったことのない全くの他人だ。だが、幸村をそういう所に連れて行くとするならば、話を通しておかなければならない。

電話をすること数分、相手方は事情を察したようで、スムーズな会話で幕を閉じた。

その後、私は部室に戻ってきて。

「幸村。一度家に帰ったら、お前の“母親”にプールに行くことを伝えて、母親から水着を受け取って来い」

「わかりました」

そう、特に不思議がることも無く、幸村は私の言うことを素直に聞く。

これで安心か。だが、その私の不自然すぎる行動に、理科が容赦なく食いつく。

「……いったい誰に電話をかけたんですか？」

「気にするな。私事だ」

「……幸村くんの家族とは絡みがあるのですか？」

「いや、会ったこともない」

そうそっけなく私が返すと、理科がジト目で私を睨む。

「……何か隠してるな」

「……」

「……ちっ」

私が無言を貫くと、理科が軽く舌打ちをした。

今回ばかりは、幸村を尊重して、下手なことは口外できない。

実際、先ほどの相手方も、意味深な言い方をしていたからな。

触れてはいけない事情があるのだろう。そこにズカズカ入りこむ

ほど、私は探究心が高くはない。

こうして午後一時。

私たちは竜宮ランド行き市営バスがあるバス停へと集まる。

竜宮ランドは施設が整っているこちらのプールの中では大型施設なのだが、なにせバスに乗って四十分という立地条件の悪さが足を引っぱり経営状態はかなり悪い。

普段はあまり人がいないと聞くが、今日は違った。

この夏真っ盛り、まして割引キャンペーンということもあってか、バス停にはたくさんの人々が並んでいた。

この人の多さ。まずい、胃の中のものが見せり上がってくる。家でラーメンなんて食べてくるんじゃないやなかつた!!

「せ……先輩。顔色が……悪いですよ」

「お前も……な」

私も私なら、理科も理科でかなり苦しそうにしていた。

そういえばこいつも人ごみ嫌いだったな。なのによくプール行こうだなんて言い出したな。

「ああ、もう理科の中からありとあらゆるものが飛び出そうです。先輩が男だったら私の全てを受け止めてとか叫びをあげていた所なのに」

「お前など塵の一つも受け止めたくはない。って……気持ち悪いんだからツツコミをさせるな」

そんな気分の悪くなるようなやり取りをさせられ、私は更に気分を悪くする。

だめだ。このままバスに乗ったら絶対にやらかす気がする。

「幸村……。酔い止め持つてるか？」

「ありません」

「理科は？」

「ないです。こういう場面を想定していなかったもので……」

酔い止めはない。ということはい慢しろということか。

だが、今からトイレに行く時間もないだろうし……。

「アノー？ コレデヨケレバツカツテクダサーイ」

突如、私の前にいた誰かが話しかけてきた。

見たところ外人だ。薄い金髪のショートカットの色白の女性。

見た目は大人っぽく、だがまだどこか幼さを残した。少し眼つきが鋭い美人。

その外人が、私と理科に酔い止めを渡す。

「あ、ありがとうございます……ごいます」

私と理科は素直に酔い止めをもらって、それを飲み込む。

これでプールまでは持ちそうか。

それにしても、綺麗な外国人だな。言葉は片言だが、日本に来て日が浅いのか。

「すいません、助かりました……」

私はそうお礼をし、お辞儀をした。

すると外人は、表情を一つ変えず、そのまま前をむいた。

「いやあ助かりました。親切な人っているんですねえ」

「そうだな……」

そんな会話をしていると、バスがバス停に到着。

当然この人数では、バスの中もきつつきつになる。

人ごみに揉まれ、そこで必死に吐きそうになる私。

この人ごみでは本を読んで回避することもできない。逃げ場もな

い。最悪に近い。

「はきそうですかせんぱい？　びにーるぶくろならよういしてきましてが」

「だ、大丈夫だ幸村。こんな民衆の前で吐くほど私は無様ではない」

幸村の心遣いに感謝をしながら、そう手をかざす私。

こんな所で吐いてたまるか。一生の恥だ。

「ちくしょうこんな地獄を見るとは思わなかったぜファック。僕がこんな凡人どもの中心ではがゆい思いをしなければいけないとは侮辱に等しいんだよ」

「素が出ているぞ理科。私も我慢するから貴様も我慢しろ。立派な社会人なのだろう？」

「うっ……。つたりめえだくつそが」

仮面が崩壊しそうになる理科を煽てながら、バスに揺られること数分。

あともう少しという所で、私は口を押さえて苦しそうな表情を浮かべた。

そんな苦しそうな私を見かけて、一人の女性が話しかけてくる。

「ダイジヨウブデスカ？」

「あ、あなたは……？」

それは先ほど私に酔い止めをくれた外人だった。

「ヨロシケレバ、アノセキツカツテクダサイ」

「で、でもあなたが座っていたんじゃ？」

「ニホンノヒトハ、コマツテイルロウジンニセキヲユズルトキキマス」

「私が老人だと言いたいのか……？」

外人からすれば日本の文化を比喩に出したつもりなのだろうが、私はまだ若い。

と、そんなこと言っているほど余裕はないらしい。

席は一つ。だが酔っているのは私と理科の二人だ。

「……ありがとうございます。理科、あの席に座れ」

「え？　でもいいんですか？」

「いいから。空いた席にずうずうしく座るほど私は欲に目がくらむ先

輩ではない」

「……」

あえて私は、理科に空いた席を譲った。

これでいい。変に情けない姿はあいつには見せられない。

……だが、どうしてそんなことを……思うのだろうか。

「エクセレント。トシタニヤサシイニホンジンデース」

「そんなことはないがな。これは優しさではない、矜持だ」

「キョウジ……デスカ？」

「ああ、ただの強がりだ」

そう尋ねてくる外人に、私はそっけなく答える。

たかが一人の歪んだ学生の矜持が、外人に理解できるかといえば微妙な所だが。

「ソウデスカ……。なるほど、”お嬢様”が目をつけるわけだ」

「……え？」

「……オー。キョウジ？ チョットワカリマセーン」

一瞬だけ、この外人の目の色が変わったように思えた。

そしてかすかだが、私たちに見せない一面をのぞかせたかのように感じた。

なんだ？ 考えすぎか。酔いすぎたか、きつとそうに違うない。

そうこうしている間に、私たちは市営の竜宮ランドへ到着。

バスから降りて、幸村の肩を借りながら施設の中へと入っていく。

「ああ苦しかった。来て早々なんだがもう帰りたい」

「それだと来た意味が無いでしょうよ……。次こういう所に来る時は公共機関なんて使わなくてもいいように、転移装置でも開発してやる」

そう新しい目標を作り意気込む理科。

頼んだぞ。二十二世紀の科学は貴様の手にかかっている。

と、建物の中に入っても人がいっぱい。これではバスの中と大した変わらないじゃないか。

大した儲かっていない所が捨て身の半額キャンペーンを行った結果なのだろうか、普段より人がいっぱい来たようだな。

人を選ぶか金を選ぶか、神様は残酷だ。常に二者択一を迫ってくる。

二頭追う物には一頭も与えない。そうやって上から見下ろして嘲笑っているのだ。

「じゃあ……。それぞれ個人個人更衣室で着替えて、着替え終わったらここに戻ってくる」と

「わかりました。理科と先輩は女子更衣室に、幸村くんは男子更衣室ということまで」

「……」

理科が何一つおかしいことなく言ったその言葉に、私は苦い顔をする。

一応、幸村には忠告しておくか。

「幸村。ここで真の漢を目指すお前に、部長からアドバイスをくれてやろう」

「なんででしょうか？」

「真の漢たるもの、同性だろうとむやみに肌を見せてはならない。普通は逆だと思うだろうが、自分の肉体美を見せびらかすような野郎は二流だ」

「なるほど、りようかいしました」

「あと、変な視線を感じても気にしないことだ。それでも居たたまれなくなった時は……。無理に着替えようとするな。その時はただ座って休んでいろ」

「……わかりました」

そう、らしくない忠告と助言をして、私は理科と共に女子更衣室へと向かった。

その最中、またも理科が私に詰め寄ってきた。

「……やけに、幸村くんの事を気にしているようで」

「そんなことはない。私はいよいよにからかっているだけだ」

「……そう……ですか」

何か言いたそうにしていた理科だが、野暮と判断したのかこれ以上何かを言うてくることはなかった。

そして更衣室。隣り合わせのロッカーが開いていたため私と理科はそこで着替えをすることに。

人前で着替えか。あまり他人に素肌を見せることすら抵抗を覚えるというのに……。

小鷹もいないというのに、最近の私は何かがおかしい。

また、諦めたとも言うのか。諦めているとでも……。

どうしてここで引こうとする必要がある？ せっかく、全てを取り戻せる手前まで来ているのに。

なのに、どうして私は……こんなにもむきになつているんだ。

むきに、大した好きでも無い後輩どもと一緒に夏休みを過ごして。まるで仲がいい友達のように……。

——もしや、揺らいでいるのか。

小鷹との過去に決着をつけるために、あいつらを犠牲にしようとしている事を。

今になって……私はためらっているのではないだろうな……。

だとしたら、今の私に何が起こつているというのだ……。

「先輩？ せんぱくい？」

「な、なんだ？」

「いえ、ぼーつとしてたんで。考え事ですか？」

「……ああ」

そう私が呆けて答えると、理科はどうにも言えない表情で私を見る。

その後、私は着替えをしようとするのだが。

今度は隣から、また理科の視線を感じる。

「……今度はなんだ？」

「いえ、なんつうか……プロポーション？ がいいなあ〜と思ってね」

「……くだらん」

「ちつ……。ああ〜いいですねえ、美人でスタイル抜群な人は細かいことに気を配らなくて。僕みたいに大した可愛くもなくて常識も欠けていて出来ることと言ったら開発ぐらいの科学バカには、到底敵いっこないですよ」

何をそんなに怒っているのか、いつもの嫌味とはまた違った、苦し紛れな言い方に私は戸惑った。

まあいいや。こいつが自分にコンプレックスを抱こうが、私に悔しさを抱こうが、関係のないことだ。

そうだ……関係のないことなんだ。

そして互いに着替えが終わり、更衣室から出る。

家にあつたのがこの赤い水着だけだった。去年だか授業の一環で買わされた奴だ。

私としては肌を露出させなくてもいいフルボデイの水着が良かったのだが、カタログにそれがなかったため仕方なくこれにした。

一方理科はビギニかワンピースかで迷った末に、ワンピースにしたというってその水着を着た。

そして、男子更衣室に入った幸村だが……。

私としては特に違和感なく、だが理科にしては若干戸惑ったような反応の、女物の水着を着て現れた。

「似合いますか？ せんぱい、しぐま殿」

「……ああ、すごいな、男なのに女物が似合うなんて。今の時代貴重な人材だ」

そう、私は作ったように幸村を褒める。

後は細かいことに気にさえしなれば、と思った矢先。

「……幸村くんは、女装趣味でもおありで？」

「いえ、母上からこの水着を渡されました」

「ぶっ！ あ……あなたの母親は、む……息子に女物を着せる趣味でもあるんですか？」

そう戸惑いながら幸村に聞く理科。

普通ならそういう反応だろうな。幸村のキャラもそうだが、好き好んで女物の水着を着る男性がどこにいやうか。

これが幸村のような美人ならギリで通用するからいい物を、それじゃなくても人の感性がそういう非常識を嫌うのが当たり前だろう。

だが、幸村は何一つ思わず母上の言葉を信じて、そして女物を着ただのだ。

そんなやつがどうして、今も”騙されていられる”のだろうか……。もしくは……この子自身が望んでいて……。

「とにかく行くぞ。くだらないことを気にしていても仕方がない」「いやいやくだらないことって……」

半場強引にこの話題を終わらせ、私達はプールへと向かった。

だが、人が多すぎて泳ぐどころの騒ぎではない。これでは集団混浴風呂だ。水に浸かっておしまいだ。

まずいな、このままじゃプールの中で吐きかねない。正直今も我慢しているのだ。

「……やっぱり来るんじゃなかった」

「あらら先輩。提案しておいてなんですが、理科も後悔しています」

「わたくしはとくになにもおもっておりませぬゆえ」

すっかりプールに対し拒絶反応を見せている私と理科。そして何も考えていない幸村。

プールに来て泳がず、気持ち悪い思いをして帰るというのも非常に残念なことだな。

民衆はこのような思いをしてまで一時を涼みたいのか。それなら家で扇風機の目の前にいた方がまだましだ。

どうする……。隣人部の部長としてこのまま無様に終わらせるのも……。

周囲を見ても、減ることのない民衆の集まり。と、その中で私の目がある人に止まった。

「ん？」

左斜め前のベンチに、一人の女性がいた。

薄い金髪の美人。そう、さきほどから私たちを何度も助けてくれた外国人の女性だった。

確かにあのバスに乗っていたということは、あの人もプールに用があるということか。

と、その人がなにやら男達三人と何かを話している。

なにやら柄の悪そうな男たちだった。なんとというか見ちゃいけないような光景だった。

「まさか絡まれているのか……」

そうだとしたら危ない、だが……どうやらそうでもなさそうだが。何かをお願いしているようだ。その彼女のお願いに、少し腰が引けている男たち。

そして男たちが反対側の方へと向かった。いったい何が始まるというのか。

私とその男たちを目で追って、反対側を見ると。

そこには、予想外の人物がいた。

「なっ!? あいつは……?」

つい私が驚いてしまう。

そう、そこにいたのは……綺麗な金髪をした無駄に胸が大きい女。

そうだ。柏崎星奈だった。なぜあいつが今日このプールに。

そして、そんな柏崎に近づく男たち。

そんな光景を、反対側から双眼鏡で観察をする外国人の女性。

なんだ? 何が起こっている? まさか柏崎……見ず知らずの外

国人にも恨まれているのか……?

「あれ? どうしました先輩?」

「い、いや……。ちよつと気分が悪い、あっちの方で休んでいる」

「え? だったら理科達も……」

「お前たちは遊んでいる。せつかくプールに来たのだ。時間がもったいないだろう?」

そう優しく言葉をかけ、私は理科達がいる場所から、あの女性のいるベンチがある方へと向かう。

どういうわけがあるかはわからん。だが、男を色眼で操り罪の被らない所で誰かの不幸を観察するような奴など。

私なら……黙って見てはられない。

「あの!!」

「ん? オー、ヨイツブレジヨシコウセイデース」

「誰が酔い潰れ女子高生だ!! じゃなくて……先ほどなんか柄の悪い男たちに何か頼んでいなかったか?」

「ノー。ワタシ、ニホンゴワカリマセーン」

「わかってるだろ!! じゃなかったら酔い潰れなんて言葉知ってるわけないだろ!! その……何があったかはわかりませんが……。ああいうのは……その……」

「……」

なんとという滑稽か。元から他人を注意できる器なんてないくせに、見ず知らずの他人の行動に正義感なんて見せるからこうなる。

一方、あつちのほうで柏崎と男たちが互いに言い合っているのが目に付く。

必死に言葉攻めで抵抗する星奈に、男たちが若干後ずさりしながらも、膝を震わせている柏崎を見て笑っていた。

正直、いつもならあの高飛車が痛い目を見ている姿だ。さすがしくも思える光景だろう。

だが……なぜだ。なぜなんだ!! どうして私はあのようなことをいけないことだと思ってしまうているのだ!!

「……」

「あれ……あなたが仕掛けたことですよね?」

「……」

なにやら私の話も聞かずに、黙ってあの光景を覗き見している外人。

なんとというか、少しだけ腹が立ってきた。

私が双眼鏡を奪ってやろうと、そう手をだそうとした時だった。

その男に襲われかけている柏崎の所に、存在してはならない奴が現れた。

「……え?」

私は目を見開いた。

そう、そこに現れたのは……小鷹だったからだ。

「な……なん……で……?」

「……」

驚愕の眼差しで柏崎と小鷹を見つめる私。

そうか、今日のあいつの用事とは……柏崎とプールに行くことだったのか。

そういえば前には親に挨拶に行くとか言っていたし……まさか、そんな……。

「……ドウシマシタ？」

私の異変に気づいて、声をかけてくる外人。

だが、そんな声も、私には届いていない。

「あ……ああ……」

急に、胸が締め付けられるような気がして、胸を抑える私。

苦しい……痛い。痛い痛い……。

あの光景を見続けていたら、私の大切な物が消えていくような……。

もう、先ほど私が抱いていた正義感などどこかへ行ってしまったように。

今湧きあがるのは……嫉妬で渦巻く柏崎への悔しさだった。

なんで……いつの間にお前は……私のいるべき場所を!!

そんなことを思っていると、顔が怖い小鷹に怯えて、男たちが後ろを向けて立ち去ろうとする。

そう、小鷹が柏崎を守った。無意識にだが……彼は柏崎を守ったんだ。

それを見て、私は更に嫉妬をする。

「く……くそ……くつそおお……」

なんとという無様、見るに堪えないゴミのような姿になり果てているだろう。

こんな思いなんて、抱きたくなかった。

どうして……。いつのまにお前は……そんなにも遠く。

私を置いてけぼりにして……どこまでも先へ行ってしまう。

私を見捨てて……お前という奴は……。

「小鷹……タカ……。ぐつ、殺す……殺す殺す殺す殺す!!」

今、自分でも何を言っているのかわからなくなるくらい、病む私。

居ても立ってもいられない。あのままあれを見続けていたら、私は壊れてしまいそうで怖かった。

私を置いて遠くへ行ってしまう小鷹。私から全てを奪おうとする

柏崎。

そのまま私は俯いて、先ほどいた場所へと戻ってくる。

「……小鷹」

そう、彼の名を口にして、遠くにいる彼を見る。

すると、せつかく手を引こうとしていた男たちを柏崎が挑発したのか、男たちが躍起になって柏崎を襲おうとしていた。

その光景を見て、私は何を思ったのか。

このまま男たちに襲われて、痛い目にもあつてしまえと……そんなことでも思ってしまったのか。

だとしたら……もう私は……おしまいだ。

「……あつ」

そんな男たちの腕を、小鷹が掴んで睨みつけた。

その後、周りを見渡し何かを言った後、あつさりと引く男たち。

周りの客の目を感じて、耐えかねたか。そう小鷹がし向けたか。

そしてなにやら、調子づく柏崎を睨みつけている。

小鷹は……星奈に怒っているようだった。

さしずめ、空気の読めないあの女の言葉の一つが、耳に障ったのだろう。

「……小鷹あ」

私の身体が勝手に動いた。

あの二人の空間に、割り込んでやろうと思ったのか。

小鷹のいる方向へ、歩み寄ろうとした時。

パッと、誰かに腕を掴まれた。

後ろを見ると、そこには理科がいた。

理科は一瞬だけだが……とてつもない形相で私を睨んでいた。そして……。

「……せんぱい。すいません理科、人が多すぎて気持ち悪くなっちゃってえ。やっぱり帰りましょうよ」

そう、一瞬で表情を緩やかにして、私にそう提案をする理科。

だが、私の腕を握るその手は、まるであざが残るかっというくらいに、力強く握りしめていた。

意気消沈している私は、痛みすらろくに感じないまま、力弱く……言葉を吐いた。

「……ああ、帰るか」

その私の言葉で、今日のプールは幕を閉じた。プールに来て、泳ぐことも遊ぶこともせずに残った物は、心に負った傷だけだった。

——小鷹。

ひよつとしたら、お前はもう……私たちの知らない所で、遠く及ばない場所まで進んでしまったのかもしれないな。

私は知らなかったよ。だけどどうせなら、一言くらいほしかったな。

友達を作る。今の私にできない遠い目標を、お前という奴は……。

そうか……もうお前には、私は必要ないのか……。

——もうタカには、ソラは必要ないのか。

翌日。夏休みは丁度半分を迎えたところだった。

今日は六人全員がそろった。かといって、やるべきことも特にはない。

いつもと変わらない日常。話はずむこともない。

そして小鷹がいるというのに、私は……彼と話をしたくなかった。話をするのが、何となく怖かったんだ。

「……夜空、俺なんかしたか？」

空気に耐えかねて、小鷹が私にそう言ってきた。

なんかしたか……か。まあ正直に言うと、何もしていない。

「……別に」

「……そうかよ」

そう、会話が弾まず、また無言が部室を包む。

そんな重い空気をぶち壊すように、部室のドアにノック音が響き渡る。

誰がやってきたのか。この際、誰でも関係はない。

「……出ていいか？」

「ああ」

小鷹がそう尋ねて、ドアの方へと向かう。

そして小鷹がドアを開けると、そこには……。

「あら羽瀬川くん。おはよう」

その、耳障りな軽い声が私の耳に聞こえてきた。

驚いて目をやると、そこにいたのは柏崎だった。

この部活の部員でもなくせに、何度もこの部室へやってきて。

理科も幸村も、マリアも小鳩も、一斉に星奈を睨みつける。

ここで歓迎ムードなのは、小鷹ただ一人だった。

「あ……。あんまりこの部室に来るなって」

「いちいち人の目を気にしろっていうの？ このあたしがそんなちい

さな器で収まると思ってるの？」

とかなんとか言っている柏崎。

人の目も気にせず自分勝手に許されると思っている。さすがはお

嬢様だ。考え方が庶民のそれとはわけが違う。

「……何の用だ？」

「……ちよつと顔を貸してくれないかしら？ あんたとあたしにとつ

て大切な話があるのよ」

そう、小鷹を引きずっていかうとする星奈。

だめだ。その光景を傍観し続けるなんてできない。

私は少し意地になって、柏崎の方へずかずかと向かっていく。

「今は部活中だ。用件なら後にしろ」

「あら？ 別に関係ないじゃない」

「ああそうだな貴様には関係ないな!! 貴様に関係のない隣人部の部

活動だからな!!」

「それを言うなら、あなたこそあたしと羽瀬川くんの話には関係ない

じゃないのよ」

私が言うと、柏崎も言い返してくる。

何が関係ないだ。お前に小鷹の何がわかる。

小鷹を……羽瀬川小鷹を一番理解できるのは……この私なんだよ

!!

「帰れ!!」

「ちよ……離して!!」

私は柏崎の腕を掴んで、強引に部室から追い出そうとする。

この所業、まるであの時の男共と同じだ。

この同じ光景で、小鷹は……どっちの味方をするのだろうか。

「ああもう!!」

そう、むりやり私の手を振りほどいた柏崎。

その反動で、柏崎の胸ポケットから、一枚の写真が落ちた。

「な、なんだ?」

「……」

柏崎より先に、私とその写真を拾う。

そんな私に対し、返せと柏崎が言うと思ったが。

その途端に、柏崎は目の色を変えて私を睨んだ。

なんだ? 見られて恥ずかしい写真でもないということか……。

そう思いながら、私は柏崎の落とした写真を見ると。私は言葉を

失った。

——そこに写っていたのは、幼少期の小鷹と柏崎が遊んでいる光景だった。

「……あくあ。一番見ちゃいけない人が……見ちゃったわね」

三日月夜空の崩壊

私は思い知らされた。

あの時から……全ては始まりから……。

私という存在に、価値など無かったことを。

一人の少年のたった一人の親友。最も傍にいる存在。

その居場所、存在価値、それらが……私の勝手な思い込みだったことを。

彼にとつての私は……ただの代替え品でしかなかったことを……。

——私はあの時から……誰かの大切な存在になんて、なっていないかったんだ。

こんな最低な私にも友達はある。それは『空想の中』だけど……

私の歪みの象徴、エア友達の『トモちゃん』。

それがどういったものでも構わない、自分が作り出したものならば、決して自分を裏切ることはないだろう。

トモちゃんは私を理解してくれている。私以上に……。

「久しぶりに、お話ししようか」

……そうやって、またいないやつに頼るのか。

いるはずもない幻に縋るのか。そうやって満足して一時をしのか。

いつまでそんなことをやれば気がすむ。いつまでこんなわびしい思いをしなければならぬんだ。

「……ああああああ!!」

一人しかいない教室の机を、私は力いっぱい蹴り飛ばした。

空想を愚かと笑ったかと思えば、そこらのものにあたる始末だ。

どうしてだ。どうしてこうなった。私はただ……親友との日々を取り戻したいだけなのに。

失った時間を取り戻し、止まった時間の針を動かしたいだけなのに。

それなのに、知ってはならないことまで思い知らされ、輝かしい過去まで犯され、踏みにじられた。

どうしてだ。私はどうして隣人部なんてものを立ち上げたんだ。痛い目に合うためか。どうして……どうして私だけだ!!

「小鷹と……柏崎が……。私よりもはるか前に……しかも、親絡みの付き合いだったなんて……」

私は頭を抱える。

彼の最も傍にいたのだと思ひ込んでいた自分の愚かさを恥ながら。

「あいつの最も傍にいたのは……私じゃなくてあいつだった。今この時いや……あの十年前からずっと。だったら……私は……わたしはあああああ!!」

頭を抱えていても、何も変わらないのを知っている。

誰かが変えてくれるわけでもない。慰めてくれるわけでもない。

唯一信じていた友人も、もう私の傍にいない。

エア友達に頼るのもバカバカしい。親だって……あんなクソみたいな親なんて。

だったら先輩か……。いや、こんなゴミみたいな私にいつまで優しくしてくれるかなんてわからない。あの人にだけは嘘をつきたくない。

だとしたら残っている物はなんだ。私を、私が助かる道は……。

「誰か……私はどうすればいい!! どうして私だけがこんなにも不幸なんだ。なんて……なんて私は可哀そうなんだ……」

そう、言うだけでも恥ずかしい哀れな言葉を並べて、自問自答を繰り返す。

ここまで落ちぶれてしまった。もう、かつて傍にいた男に見せる顔もない。

もう……私に残っている物は……。

ガラガラガラ……。

「ハッ！」

突如、教室の扉が開いた。

誰かが入ってきた。まずい、こんな哀れな所を見られたりでもしたら。

だがもう逃げ場がない。私は扉の方を見る。

すると、そこにいたのは……。

「あんた、こんなところでなにやってるの？」

そう、きよとんとした顔で私に声をかけてくる人物。

私にとつて最も顔を合わせたくない人物。柏崎星奈だった。

私は悲しきと憎しみが混じったような顔で、強がって見せた。

「ん〜。夏休みも教室で一人で勉強？ 偉いわねえ〜。まあどんだけ頑張ってもこのあたしには勝てないだろうけど、まあ私の次点くらいには頑張れば立てるんじゃない？」

そう、挑発じみた口調で言う星奈。

その高飛車な傲慢さ、私としては頭にくるものがある。

だがそれ以上に、その傲慢さで、強引に小鷹をその手におさめた。

この女が、私の気持ち一つ理解すること無く、強欲のままに小鷹を奪った。

家族絡みの付き合いを理由に、友達の少ない小鷹に付けいったんだ。

「……」

私は無言で睨みつけた。これでもかっくらいに睨みつけた。

だが星奈は引くことはせず、あざ笑うかのように私の傍へとやってくる。

「まあこれも何かの縁ってやつ？ 悩みごとなら一つくらいなら聞いてあげるわよ？」

「……」

「あなた神龍って知ってる？ しかもナ○ツク星の神龍なら願いを三つ叶えてくれるんだってえ〜。呪文は確か……タツカラプト ポツポルンガ プピリット パロ！ イエーイ!! そんな感じだっけ？」

そう、どこぞの願いを叶えてくれる龍の話を、私のテンションを一切気にせずに持ちかけてくる星奈。

まずい……。ぶん殴りたい。いや……殺したい。

「まあこの私が庶民一人の願いを三つなんて叶えるほど暇じゃないから、悩み一つくらいなら聞いてあげるわ。それを叶えるかはあんたの頑張りにかかっているけど」

「……消えろ」

「それが願い？ つまんないわねえ。羽瀬川くんと大切な、まあ私にとってはさほどどうでもいい……そんな話をしてきた後で幾分暇なんだけどなあ」

それを、わざと私に聞こえるように大声で言う星奈。

やめろ……その口そろそろ閉じないと。

私は小さく、拳を握りしめて、怒りを抑えつけた。

こんなところで理事長の娘と喧嘩などしてたまるか。くだらない感情が己を滅ぼすんだ。

「……そういえばあんた、羽瀬川くんのことを名前で呼んでいるわけよね？ それはなんで？ 大した仲がいいわけでも彼女というわけでもないのに、部活の決まりか何か？」

「……貴様には関係ない。それは、私と小鷹の問題だ」

「そう、あなたと羽瀬川くんの問題。あなた達しか知らない問題？」

「ああ。貴様には……何一つ関係ない」

そうだ。

私と小鷹が親友だったことは、私たちだけの過去、私たちだけの思い出であり、私と奴が決着をつけるべき問題だ。

この女の存在などどうでもいい。こうなればもう……思い切ってあいつに打ち明けてしまうか。

……だけど、もし私が、こんな私が……ソラだって知ってしまえば。

「……そっか。そうやっていつまでも自分の箱に閉まっていちやあ、そんな”大切な過去”を美化して眺めて撫でているようじゃ、手遅れもいい所よね」

「……え？」

「今の孤独な自分があるのは、過去の大切な親友が何も言わずに離れてしまったせい。それが心の傷になって何も信じられなくなってしまった。だから自分には過去しかない。自分には過去の親友がいてくれれば、あとは何もいらない」

「……かしわ……ギョキッ」

突如、柏崎は私の心を見透かすような口ぶりで、語りだした。

私の心に、けして踏み入れられたくない部分に、ずかずかと入ってくる。

まさか……。いやなぜだ。いつ、どこで、なんで……。

なんで……。よりにもよってこの女が……。

「……あ」

「今はこんなに可愛そうで不幸な私にも……大切な友達がいた。そう……」タカ”が私を大切にしてくれた。羽瀬川小鷹が……この街に帰ってきてくれたんだ……ってね」

その瞬間だった。

私は、自分で自分をコントロールできなくなった。

暴走するかのように、それは本能のままに……。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああ
ああ!!」

「!?!」

私は何も考えず、柏崎に襲いかかった。

だが、その私をすり抜けて、柏崎は私の服の首元を掴み。

そして私を壁に押し当てて、後ろから冷徹な瞳で私を見る。

そんな彼女を私は、これまでにない形相で負けじと睨みつけた。

「ふざけるな……ふざけるなああああ!! なぜお前が知ってる!?!」

「なぜ知ってる? あなたが教室で一人で話していたのをたまたま聞いてしまったからよ」

「ぐっ……。許さない!! 私は貴様を許さない!!」

と、私は全身全霊の力で柏崎の拘束から逃れようとするが。

思いのほか柏崎の力が強く、形勢は柏崎が圧倒的有利な状況に。

ふざけるな。全てを奪われ、壊され。そのあげくに武力でも敵わないだと……。

こんなこと、あつてたまるか!!

「殺す……殺してやるうううう!!」

「あらら物騒ね。私にはあなたに殺される理由が思いつかないわ」

「黙れ……。あいつは私の親友だ。貴様は私の大切な親友をかどわかし、友達の少ないあいつに付けこんで!!」

「思いこみも甚だしいわね。小説家にでもなつたらどう?」

そう、さきほどまで警戒にしゃべっていた柏崎が、まるで人が変わったかのように、凍りつくような目で私を観測する。

だが、ここでこいつに屈してしまえば。もう私には……正真正銘何も残らない。

だから負けれない。この女には……この女には……!!

私は一生懸命抵抗する。そして手をはねのけたとおもえば、今度は両手を掴まれ、再度壁の押しあてられる。

そして、接触するくらい顔を近づけられ、互いに睨みあう。

「貴様は……これ以上私から何を奪う気だ!!」

「……さつきからうるさいわね。小鷹は私の親友だとか、大切な思い出がどうか、それを私に取られた奪われた……。あくあ、ばつかじゃないの?」

「なに!!」

「じゃあ私から逆に聞いてあげるわよ。あなたこそ……誰かを犠牲にしようとしたり、何かを奪ったりしてるんじゃないの?」

「なっ!!」

そう、潰け込む様な質問をされ、私はつい動揺してしまう。

「あなたはなんのために隣人部を作ったの? もしその理由が……小鷹と自分の仲を取り戻したいという自分勝手な理由なら……あなたの周りにいるあの頭がいいだけの科学者バカ女と、女々しいガキはなんなのよ?」

「うっ……。あいつらは勝手に部活についてきただけだ!!」

「へえ。確かこの学校の部活って部員が三人いないと成立しないわよね? 本当に勝手に付いてきたと、ビックリオンチョコのおまけのシールみたいな言い方で誤魔化せるもんなの?」

「そ……それは……」

「せっかく小鷹のために作った部活が、部員不足で潰れては元も子もないと……ただ部活の継続させるためだけに……友達がいないことをいいことにそこに付け込んだんじゃないの?」

「き、貴様と一緒にするな!!」

「一緒？ それはこっちの台詞よ。友達の大切さを尊重しておきながら、自分の都合のために友達欲しい連中を巻き込んで、あわよくば捨てようとしたのは……あなたなんじゃないの？」

そう断言させられ、私は一瞬だけ、その言葉に動揺させられた。

まさに、今自分が最も聞きたくなかったことを、憎むべき相手に言われてしまった。

「……それは」

「それは？ なんなのよ？」

「うっ……違う。私はただ……十年前のあいつとの過去を!!」

「ふざけんじやないわよこの不幸ぶりが!!」

そう叫び散らして、私を地面に投げ捨てる柏崎。

その迫力に、思わず反撃することができなかった。

そして怯んでいる私に向かって、容赦ない柏崎の言葉責めは降りかかる。

「そんなに小鷹が大事？ そんなに十年前の親友が大切？ そこまでして過去を取り戻したい？」

「うう……。あたりまえだ!! 私は奴に裏切られたせいで……あの後もひどい目に会い続けて……。もう取り返しのつかない所まで来たんだ!!」

「……ああそう。そんなに大切な親友なんだ。じゃあ……そんな大切な親友の現在を奪い続けているのはどこの誰よ？」

「な、何が言いたい？」

「十年ぶりに自分の元にやってきた。お前は私を見捨てていなかった。そんなお前のために最高の青春をセッティングしてやるって……。そんな彼を無理やり部活に巻き込んで、部活というサークルで彼を縛りつけて……。彼の近くによる貴重な人達を、小鷹には似合わないと勝手に決め付け手を切らせようとする。そんなあなたの行動に、大切な親友は喜んでくれているのかしら？」

その一言が、更に私を震撼させた。

次第に、柏崎に対して抱く憎しみが、徐々に恐怖へと変わっていった。

もう最初に感じた柏崎の印象はどこかへ消えた。そこにいるのは……人の心に付け込む魔女だった。

「やめろ……」

「親友だから許される。親友だからこそしてあげられる。そうやって小鷹の傍にいた気になって……。あなた将来は汚い男に騙されるかもしれないわね。気をつけなさいな」

「……もうやめろ」

「それで自分に非があつた時は、自分がこうなつたのは十年前に親友が何もいなくなつたことが原因と、あわよくば全部親友のせいにするのね」

……頼む、もうやめてくれ。

その星奈の言葉一つ一つが、私の身体を震わせる。

心を震わせる。気持ちがぐちゃぐちゃになる。

今までけして認めたくなかつたことが、全て認めさせられるようである……。

もうただ、柏崎が怖かつた。恐ろしかつた。逃げたかつた。

だがこの女は逃がしてくれない。私を完全に破壊するまで、逃がさないつもりだ。

「本当に……。普通にしていれば。あなたが過去に縋りつかないで、自分を可哀そうだなんて思わなければ、今頃こんなに悲惨な思いをしなくてすんだかもしれないのに」

「そんなことを……。貴様のような幸せ者が口にしていい言葉ではない。貴様らのようなりア充は、人の不幸に付け込んで優しくし、救うと題して笑っているんだ!!」

「……独りよがり良く言うわね」

抵抗する私を、柏崎はそう冷たく言つて、床に押さえつけた。

どうしてだ。なぜ勝てない。なぜこいつをはねのけられない。

そして、どうしてこんなにも冷たい目を浮かべているんだこいつは。

いつものように他人を蔑んだり、憎んだりしているような目ではない。

こいつの目は……真の不幸を知っているような、凍りつくような目だ。

私は、こいつのその目に戦慄した。私の怒り一つ、凍りついてしまうようなその眼差しに。

「別に彼が転校してきた時に、久しぶりでも元気していたかでも、不幸ぶらずに話しかければよかったのにつて……。私はそう言ったつもりだったんだけど」

「それが……。それができれば苦労はしない!! 私にはそれが言えなかったんだ!!」

「どうして?」

そう重く尋ねてくる柏崎。

そこで、私は言葉が出てこなかった。

どうして……。そうだ。全部こいつの言う通りだ。

あの時、私がソラだとあいつに言ってしまったえば、こんなことにはならなかったはずだ。

だが私はそれをしなかった。というより……。できなかった。

言った所で信じてくれたか。いや……。まずあだ名を知っていると
いう時点で、信じるも信じないもないだろう。

なら、もしソラだと自身の正体を言えば、あいつが私に怒りを向けただろうか。

自分を騙していたのかと、そう怒っただろうか。

いや……。それも考えられる可能性ではあるだろうが……。それでも、今の自分の所業の数々に比べれば……。

だったら、私が言わなかった理由は一つしかない。それは、私が決して認めたくない一因だった。

「……言えなかったからだ」

「だからどうして?」

「……それは、貴様には関係ない」

「困ったらそれ? 他人には関係ない、自分と小鷹にだけ関係のあること。だったら、今すぐにその理由、彼に言えるの?」

「うつ……」

「今電話で呼んであげるわよ。あなたが私に彼を奪われたあのうだの言うんだったら、誤解のないように私があなた達の友情を取り持つてあげるわよ」

そう、柏崎は自分の電話をいじりだした。

それを、私は咄嗟に抵抗して止めさせようとする。

「貴様にそんなことをしてもらう義理はない!!」

「……めんどくさい奴」

そのため息交じりで言うど、柏崎は電話をポケットに戻した。

そして、再び私に冷徹な瞳を向けた。

「要は……。今あなたは彼に自分がソラだつて言いたくないわけでしょ」

「……」

「言えなかったんじゃない。”言えなくなった”のよ。あなたはこの学校で、かつての親友に自分の汚れきった姿を見せすぎた。故に……。ソラだと名乗れなくなったんでしょ？」

「ち……。ちが……。あ、ああ……」

「だからこそ、羽瀬川小鷹に自責の念を持たせようと画策した。自分がこうなってしまったのはお前のせいだと、そう思わせてじわじわ自分の正体に気づくように手を打った」

「やめ……。これ以上言わないで……」

「そうすれば、罪意識に囚われた羽瀬川小鷹は……。あなたのことしか考えられなくなる。そうすれば、過去の友情が再生される」

「あ……。ああ……」

「そのためなら、自身を想ってくれる後輩も、周りの人たちも関係ない。あわよくば……。今の小鷹の心さえも……」

「やめろおおおおおおお!!」

私は叫んだ。嘆くように崩れ落ちた。

全てを見抜かれた。私の歪みを握られた。

この憎ましい女に、一番吹き込まれたくなかった奴に……。

私はこれ以上は聞きたくないど耳をふさぎこんだ。

だが、柏崎は容赦しなかった。まだとばかりに私に現実を言い渡し

てくる。

「それを、肝心な彼は気付くこともなく。どんどん自分を差し置いて彼の傍に寄ってくる人達。苦しかったわよね、辛かったわよね。自分がこんなにも苦しんでいる横で、他の連中は自分にはできない方法で小鷹と信頼関係を結んでいく」

「やめろやめろやめろ!!」

「そしてこんな自分の気持ち一つ考えることなく、付き離していくかつての親友。こんなにも自分が想っているのに、無下に扱う彼が……憎くて憎くて仕方がなかったのよね」

「やめてください！ お願いしますこれ以上は言わないでください!!」

「何をそんなに否定しているのよ。これは当然の感情でしょ？ うらやましく思う心、妬ましく思う心、あの子さえいなければという疎ましく思う心……。そんな感情に苛まれて、愚かとしか言いようがないわね」

私は必死に耳をふさぐ。

だが、それらの言葉は私に耳にはなく、心に響く。

私が小鷹を憎み。小鷹を奪おうとする柏崎を憎み。近くで私よりも小鷹と親しげにできる理科や幸村を憎み。

過去の私とは到底似ても似つかない、憎しみに支配された哀れな女である自分自身すら憎む。

ここまで変わり果てた自分。もう戻れない所まで来てしまった。

だからこそ失敗しないように業を重ねる。それが愚かであろうとも。

だが、今になってそれを問われた時、追求された時。こんな私に、これらの業を受け止められる精神があるうか。

そう、リターンを考えずにリスクだけを重ねて行った。だからこそ……私は後悔し始めていた。

羽瀬川小鷹の親友。そんな私の存在が、最も羽瀬川小鷹にとって有害な存在と成り果てていた。

柏崎や理科や幸村は、何も悪くはない。ただ傷ついたあいつにとつ

て、励みになっていただけ。

それを奪おうとしていたのは誰だ。最も小鷹を想っていたはずの私だ。そんな慣れの果てを、私は認めたくなかった。

「……どうしてこんなことになっちゃったのか。今どうして自分がこんなにも苦しまなければならぬのか。わかる？」

「う……うう……」

「誰だって間違えたくなんてないわよ。間違いを否定したいわよ。清算したいわよ。けど……間違えは消せない。失った物は完全な形には戻らないのよ」

「……そんなの、貴様に言われるまでもない。私が……一番良く知っている。でもあいつは……タカは私を見てくれないんだ……。あいつが私を……置き去りにしていくんだ」

「ならそうやって、いつまでも自分を特別だって思っていればいい。人は追い詰められるほど、自分を特別だって思いたがるのよ」

そう言って、柏崎はがっかりしたように、私の元から去って言った。無様だ。変な言いがかりをつけて喧嘩を売ったまではよかったが、ひねりつぶされ言いくるめられ。

地に伏せ、床を舐めるように野たれ死ぬ私は、三日月夜空の歪んだなれの果てとでも言うのか。

『悲劇のヒロインを気取るのは……そろそろ終わりにした方がいいかもよ？ 今の君は、誰かに救われる価値もないつまらない女の子だ。間違えないように間違えないようにと無駄にあがき、困ったことがあっても近くにいて誰に頼るでもない。その意地が、自分にとって真に大切な存在を苦しめている事にも理解できず、無自覚に……独りよがり続けている』

自然と、高山ケイトが私に行った言葉を思い出した。

あの言葉が私に放たれたあの瞬間には、もう……私は取り返しのつかないことをしていたということだろう。

だから彼女は答えを明かしたんだ。気付かせようとするのはやめたんだ。

だって……もう私は気付いていたのだから。

全てに気づき、それでも認めようとしなかったのは私だ。
認めれば、私の願いが全て水の泡になってしまおうと……恐れたから
だ。

想い続けていた。けして裏切ることのない大切な親友を見つける
ことを、その願いを。

否定されたそれを元に戻すことを。そのために、どんな犠牲を払う
ことさえ厭わないと。

だのに……私は……。

「……こんな……ことになるなら」

がちや……。

隣人部の部室。

その小奇麗な部屋の扉が、ゆっくりと開いた。

全てに絶望した私の瞳が、その扉を映す。

そこに立っていた一人の男を、私はしっかりと見る。

「よお……。って、他のやつらは？」

そう、何も知らない男は、いつものように軽い口調で言った。

あの後、私は小鷹を呼び出した。

午後から少しだけ部活をやろうと、そういう理由で。

だが、本当の理由は……全てを確かめるためだった。

「あれ？ 部活やるんじゃないのか？」

これは、私のこの数ヶ月の覚悟の全てだった。

今この瞬間に、私と奴の十年間が示される。

小鷹と夜空。タカとソラの……。

私と、お前の……。

「……夜空？」

「……小鷹、お前には……けして失いたくない、手放したくない親友が
いるか？」

「ん？ なんだよいきなり」

「自分にとって大切な、掛け替えのない親友はいるか？」

そう、私は俯いて小鷹に尋ねた。

すると小鷹は、良く分からないような顔をした後に。

私の心情を察したのかどうかは分からないが、突如真剣な表情になり、言った。

「……ああ、いる」

「……」

「俺に大切な言葉を教えてくれた。俺に掛け替えのない時間をくれた。俺に……友情の素晴らしさを教えてくれた」

「……」

「俺にあだ名をくれた。小さい時に苦しい思いをしていた俺を、そいつの存在が救ってくれた。今でも……俺の心に残っている」

私は、それだけ聞ければ充分だった。

ならもう……迷うことはない。

私は……これ以上思い悩む必要はない。

私はゆつくりと、小鷹の近くへと歩み寄る。

「……夜空」

「そうか、そんな親友がいたのか……」

そう、寂しそうに私が言うと……小鷹は神妙な顔つきで私を見た。

その、笑顔で涙を浮かべる私を、小鷹は見てどう思っていたのか。だがもう関係ない。そう、関係ないんだ。

私にとつてもお前にとつても……その親友という存在は……。

「……よかった。そんなに大切な……親友がいたんだ」

そうほほ笑むと、私は前触れもなく……。

「なっ!?」

私は小鷹の顔に近づき、その唇にキスをした。そして……。

「ちよっ……!!」

ドサツ!!

私はそのまま小鷹を押し倒した。

小鷹の頭が床にぶつかり、もがく小鷹。

「いつてえ……!!」

痛みで叫びを上げる小鷹。

その動揺する彼の首を、私はこれでもかというくらいの力で締め付

けた。

「がつ!! よぞ……ら……なに……を……」

「お前が……お前が悪いんだ……。全部お前の……!!」

そう暴走するように、先ほどとは違って鬼のような形相で小鷹を絞め殺そうとする。

そうだ。お前が悪いんだ。あの時何も言わずに街からいなくなり、私を一人この街に残した。

それから私はどのような思いをしたか、お前に理解できるか……。できないよなあ、お前は一人幸せになればそれでいいんだもんなあ!!

私はこんなにもお前の事を想い。お前がこの学校に戻って来た時は、身体の全てがあふれ出そうになるまで嬉しさが止まらなかったのに。

お前は何も思わない。私の想いに気づかないどころか、無下にさえする。

そして私を拒絶し、他のどうでもいいやつの方へ尻尾を振る。

私がどれだけそれを見て苦しかったか理解できるか!! お前に理解できるか!!

してくれよ!! 私の親友なら理解してくれ!! 私の全てを受け止めてくれ!!

お前へのこの友情と、憎しみ全てを……。受け入れろよおとおおおお!!

「ぐっ……や……やめろ……。どうして……こんな……」

お前は私の親友なんだ。私の小鷹だ。私のタカだ。

他の奴には渡さない。お前は私の物なんだ!!

私の物にならないお前なんていらぬ!! ソラの親友じゃないタカなんていらぬ!!

お前が私の枷になるなら、私自らその枷をぶっ壊してやる!!

この憎しみ、晴れるまで貴様にぶつけてやる!!

「ああ……がつ!!」

希望の少年

その日、私は全てを失った。

まだかすかに残されていた希望さえ、私自らがそれを手放した。それはもう不幸なんかじゃない。なるべくしてなった結果などではない。

自身が不幸だという気持ちに溺れ、求めることしかできなかつた私の行いの結果だ。

恨み、憎しみ、嫉妬。一方的な負の感情が、このような事態を引き起こした。

もう、けして戻ることはない。戻すことはできない。

羽瀬川小鷹は私を見限った。私に対し絶望を抱いた。

全ては終わった。この腐った青春を、変えることはできなかった。がちや……。

静かに、隣人部の部室の扉が開く。

小鷹か。いや、もう彼に希望を抱くこと自体が愚かしい。

そこにいたのは小鷹などではない。私にとってどうでもいい、高山ケイトだった。

「なんかすごい音が聞こえたって聞いたもんでねえ。なにがあったかと思えば……つかなんか臭うんだけど。頼むよここ一応私の管理してる教室なんだからさく」

そう文句を垂れて、ケイトは窓を開けて部屋の換気をする。

その間も、私は抵抗一つ見せずに、うつむいて黙っていた。

何を今さら言い返せる。あれだけ大きな口を叩いておいて、今さら……。

「……その様子だと。失敗しちゃったみたいだねよーぞらくん」

「……」

「来る途中に小鷹くんとすれ違つてね。しかも彼……いつも以上に怖い顔になっていたもんだから、何があったか尋ねてみては、知るかと突っぱねられちゃったさ」

「……そうか」

そう、私は元気なく答えた。

小鷹はおそらく、心の底から怒りをむき出しにしていたのだろう。あの瞬間になって私も気づいたのだが。きっと彼は……私に気づいていたのだろう。

いつからかはわからないが……。私がソラだということを……。

「私は言ったはずだよ。悲劇のヒロインを気取るのはそろそろやめた方がいい……と」

「……わかってる。全て……私の独りよがりだ。私の意地が招いた結果だ」

「まったく。らしくないほど素直になっちゃってさ。ほらほら言い返してこいよ、いつものようにでかい口叩いてちょうだいよ、よーぞらくん」

「……」

そう挑発されて、私はだんまりを決め込んだ。

するとケイトは……気に入らないような表情を浮かべ、私に失意の目を向けてきた。

「……その程度かい。君というやつは……その程度だったのかい」
「……」

「君たちの友情ってのは……その程度の安いもんだったのかい。それが……隣人部としての姿形なのかい」

「……」
「なんとか……言ってみなよ……」

けして言い返さない私に対し、ケイトは迫るように静寂な怒りを見せた。

今まで期待していた相手に裏切られたかのように、言葉に力が抜けていった。

そして、最終的にケイトは……私を捨てるように背を向けた。

「……クソがっかりだよ。君は……変わる側じゃなくて、何かを変えらる側の人間だと思っていた」

「……はっ。そんな大層なこと、私にできるわけがない」

「どこぞの誰かと、同じこと言いやがって」

「……」

「もういい。やめろよ、全部投げ出してさ……楽になっちゃえば。君一人の都合で、君を信じていた人たちの思いも、君を希望としていた人の気持ちも……全部裏切ってしまったばいい」

そう投げやりに言つて、ケイトまで部屋を去つて行つた。

信じる……希望。こんな私に、このような落ちぶれた私に対して……抱かれた希望とはなんだ。

教えてくれ。私を信じてくれる人たちのその気持ちとはなんだ。私の……何を信じていたというのだ。

「……うう……。何が……希望だ。何が可能性だ。こんな青春に……私という人間なんか……そんなものなど存在しない」

そう自分を戒め、後悔をしたくない気持ちを抑えながら……。

だが後悔するしかないこの残酷な結果に胸を痛め、私は悲痛に言葉を漏らした。

小鷹……タカ……。理科……幸村……。

貴様らが私を希望としていたのなら……こんな結果にしたことを、私は責任を取るべきなのだろう。

巻き込んでしまった。淡い希望を抱かせてしまった。可能性に飢えていたお前たちに付け込んだのは私の方だった。

「もう……私には何も無い。全部なくなっちゃったんだ……。だから……あ……ああ……」

——希望に飢えたものの末路を、私は知っていた。

一人の男に捨てられた。哀れな女の話だ。

汚れたように縫りつき、泣きわめき救いを求め。

最終的に見限られ、最愛の男と友人を一気に失った女がいた。

そんな女を最も近くで見たのが、この私だ。

それ以降、その女の変わりようといったら、見事なほど愚かで滑稽だった。

だからこそそれを救つてあげたくて、それを変えてあげたくて。ただどけして変わらないで。もう元に戻らない。

その女がかつて私にくれた言葉、今でもけして忘れない。
忘れてはいけないと思った。その言葉を失ったら……もうあの女
は帰ってこないと思ったから。

日に日に変わり果てていく、全てを失った私の母。

それを目に映し続け、しだいに私にも……その負の感情が伝染して
いった。

友情はすぐに崩れおちる。それこそ……女同士の友情は……。

だから私は同姓が嫌いだ。女という生き物が嫌いだ。

故に私自身も嫌いだ。せめて私が男に生まれてきていたなら、何か
が変わったかもしれないと思えてくるほどに。

だが、友情はなくてはならないものだ。

なぜなら、私一人では何もできないから。人は一人では何もできな
いからだ。

母は戻らなければならぬ、変わらなければならぬ。

母が私に託してくれたあの言葉を、あの大切な想いを本物にするた
めには……私一人ではできない。

だから私は友情を求めた。

だがうまくはいかなかった。母の影響で同棲に苦手意識を抱いた
私は、次々と寄ってくる同棲を拒み続けた。

かといって異性かというと、男らしい私をメスゴリラだと馬鹿にし
ては、気味悪がって近づいてこない。

同姓とも異性ともうまくいかなかった私は、最も欲していた友情を
手に入れられずにいた。

そんな時……やつに出会った。羽瀬川小鷹に出会った。

あいつは私が女だろうと男だろうと関係なかったらしい。そう
……私を一人として見てくれた。

そんなあいつに性別を偽り続けたこと、あの時から今にかけて申し
訳ないと思っている。

今思えばきつと、あいつに打ち明けたところで……あいつは気にせ
ず私を友と呼んでくれていたのかもしれない。

そう、あいつに秘密を打ち明けることを恐れた時点で、私はあいつ

を信じ切れていなかったんだ。

そんなあいつが、最も信頼していたあいつが……ある日街を去った。

あいつは何も言わなかった。何も言わずに私を街に置き去りにしていなくなった。

そのことと、秘密を打ち明けられなかった自分の悔しさが混じり、以前よりも私は他人が怖くなった。

この時ばかりは……私は母親に助けを求めようかとも思った。

もしかしたら、この私の出来事を聞いて、母親が優しい母親に戻ってくれるかとも期待を抱いた。だが……。

「おかあさん。きょう、わたしの友達がいなくなっちゃんだ。なにも言わないで……どこかへ行っちゃったんだ」

そう、構ってほしい子供の私は縋りつくように言った。

そしたら……母はなんと言ったか。今でも忘れられない。

「……いい気味だわ」

其の言葉を聞いた瞬間、私は背筋が凍りついた。

その時の感触を、時々思い出すほどだ。

「え？」

「これで少しはお母さんの気持ちがわかった？ 子供心で励ましていたあなたがいかにお母さんの気持ちを理解できていなかったか……思い知った？」

「おかあ……さん」

「なにが……たった一人でも大切な友達を……だか。本当に……虫唾が走る言葉だわ」

その発言が、小さかった私の心を打ち砕いた。

この時真に思い知ったのは、母親の気持ちなんかではない。

もう……私の知っている母は……この世にいないという絶望だった。

この時から……私は母に声をかけることすらなくなった。

必要なことを必要な時しか話さない。親の責任が発生する時しか会話をしなかった。

一度、中学の時に気を引こうと思って、わざと学校で問題を起こした時があった。

その時母親が学校に呼び出されたが、母親はあくまでも親としての顔を振りかざして。

帰り際、私を突き飛ばして言った。

「めんどくさいのよ。なんであんなのためにわざわざ学校まで足を運ばないといけないのよ」

「なっ!?!」

「友達一人ろくにいないんだから、あんたが何をやったって迷惑と思う人なんていないんでしょ？　なのにあのクソ教師……ばかじやないの。親だからって教師の顔で偉そうな口叩いてさ。ああいう人間が、裏で何を考えているかわからないのよ」

「か……かあ……さん？」

「私を捨てたあの男も、友達だなんて甘い言葉で私をだましたあの女も。人間なんて……人間なんて人間なんて……人間なんて……うう……友情とか愛とか他人との共存とか……ああああああああああもう!!　全部あんたのせいよこの障害!!」

そう人が通る街中で、母親は私の頬を思いつきりひっばたいた。

そして私を見捨てるように家に帰っていった。あの瞬間、私の心の傷はさらに抉れた。

ほんのわずかでも、希望を抱くことすらさせてもらえなかった。

小さい頃、母さんが優しく言っていたあの大切な言葉。絶対に否定したくないその言葉を……。

残されたたった一つの……。私の大切な……。

そして……小鷹にとって大切な……。

「……許さない。私は……絶対にあんたみたいにはならない!!」

そう親の背中を私は、これでもかというくらいに睨み殺した。

後日。

この日私が一目散に向かったのは、ケイトのいる職員室だった。別に昨日のことを謝りに来たとかではない。ただ、あるものを渡し

に来ただけだ。

職員室にきた私を、ケイトは歓迎ではなく、めんどくさい奴を見るような眼をしていた。

以前までなら、面白いものを見るような眼で私を見ていたのに。

「……なにさう？ 部活始まつてるんじゃないの？ 部員待たせてどうするのさ」

「……」

追っ払うようなケイトの反応など気にせず、私はあるものを毛糸の机に置いた。

それを見た瞬間、ケイトの目の色が変わった。

「……あなた」

「……最後に、すまなかった」

そう、ケイトに一つ謝る。

するとケイトは……もう諦めたかのような顔をして……。

「……そうかい、ごくろうさん。ちゃんと他の部員にも事情を言うんだよ」

「……本当に……ごめん」

そう、私はしょんぼりともう一度謝ると。

痺れを切らしたケイトは私の服の襟を掴んで、職員室の外まで引っ張っていく。

教師の立場など全く考えず、己の感情だけで動き。

そして離れた廊下の窓で、私の胸倉を掴んで一括した。

「……謝るんじゃないよ。みつともない」

「うっ……」

「あなた自身が選び行動したんだ。これはあなたが……三日月夜空が周囲の注意を聞かずに動いた結果だ。それを……今さら私たちにもなすりつけるな……」

「……うっ……うっ」

「泣くな!! 泣いて……何が変わる。せめて最後くらい……自身のわがままに対する責任を取ってこい!!」

そう私を突き飛ばして、ケイトは職員室へと帰って行った。

昨日から、私は恥じらいを捨て去り、何を他人に縋っている。あれほど自分の問題だと突っぱねておきながら、都合がよすぎるよな。

私はゆっくりと立ち上がり、重い足取りで部室へと向かった。

「あら、先輩遅いですよ〜」

部室に入ると、なにやら理科と幸村がお菓子やジュースを広げて待っていた。

「……これは？」

「いえいえ、これは理科達が調べたんですけどねえ。こう友達というのは何でもない時にとつきにお菓子やらジュースやら持ち寄って、自然とパーテイまがいなことをするようで。要はそういうノリというものを覚えようかと思ひまして」

「……」

「おきにめしませんでしたか、先輩」

二人の後輩は、いつもの調子で私に訪ねてくる。

あの時、柏崎がやってきてはがゆい思いをしたのは、こいつらだつて同じだ。

だが私と違って、苦悶を一切表に出さない。

それどころか、こんな私を今でも……仲間だと思ってくれている。

そうだ……。私の居場所は……ここにだつてあつたんだ。

それを……私のわがまま一つで、拒否をした。

この何も罪のないこいつらを……巻き込んでしまった。

私には……こいつらの笑顔が……もつたないくらいだ。

「……そう……か」

「……先輩？」

そう私は、いつもとは違って、精一杯の笑顔をこいつらにむけた。

だが、自然と流れる涙が……違和感を抱かせるには十分だった。

当然この私の異変にいち早く気がついたのは、理科だった。

「……先輩、なんか様子がおかしいですねえ」

「あはっ。そんなことはないよ」

「あくわかった。あの後また柏崎と小鷹先輩がいちやいちゃしてるの

を見せられて、悔しい思いをしたんですね」

「……まったく、お前には嘘は付けないな。見抜かれてしまったか」

「あ……。まったく無様にもほどがありますよ先輩。男を取られた女の、昼ドラみたいでなんだか見ていて愉快ですねえ」

「……」

今までなら、理科に対して怒りを向けていただろう。

だが今日は違った。ずっと笑顔をむけてやった。

最後くらい、こいつらに迷惑をかけてきたんだ。

だから、せめて理科や幸村の望むような……優しい先輩でいてやろう。

「……なあ、なんか言えよ」

「悪かった。心配かけて」

「……らしくないから、やめろよ」

「本当に……ごめんな」

私がそう謝ると。

先ほどから怒りを抑えていた理科が拳を握った。

だが、拳を握るだけで、ただ震えてその場でとどまるだけ。

「……隣人部として、こんな情けない部長のだが、お前たちに送りたい言葉がある」

「……」

「友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切できる友達を作れ。けして……希望を失うな。諦めなければ……きつと自分にとって、大切な友達ができる」

そう、かつての母親の言葉と私の言葉を後輩に送り、私は背を向けた。

そして部室の扉に手をかけたところで、理科の叫びが私の耳に響いた。

「行かないで!!」

「……」

「僕達を……置いていかないで……」

その悲痛な叫びを聞いて、私は心を強く痛めた。

だが、止まることはせず、部室から姿を消した。私の独りよがりの責任、これでとれたわけではないかもしれない。だがこれでよかった。もうあいつらを縛るものは何もない。

理科、幸村。お前たちならきつと……私のようにはならないだろう。

きつと不幸が自分に振りかかろうとも、その不幸に囚われることはないだろう。

これはあいつらが私を信じてくれたことへの、せめてもの気持ちだ。

私も、お前達を信じてやることにしよう。

その日、私はまっすぐ家に帰った。

家に帰ると、母がテレビを見ていた。

けして変わることのない、力の抜けた私の母親。

今日は仕事が休みらしい。こんな日に、つくづく私の不幸だな。

まあ、不幸ぶつて皆に迷惑をかけていたんだ。これくらいの不運、めめめめも言つてはもらえない。

聖クロニカ学園に入学して二年目。帰ってきた羽瀬川小鷹。

五月から、自然と毎日が楽しかった。少なくとも去年までとは比べものにならないくらいに。

大きく動いた。そして……その決着がついてしまった。

もう、明日からは……またあいつがやってくる前の私に戻る。

そしてあいつは、私の残した隣人部で、私とは違う道を行くのだろう。

小鷹。ならばせめて、理科と幸村を連れて行ってやってくれ。

もう私はいいい。私のことは……かつての親友のことは忘れてくれ。

お前の友情の苦しみは、全て私が引き継いでいくから。

「……なによ、後ろに立って目ざわりなんだけど」

そう、近くにいた母親が私に苦言を漏らした。

もしかしたらあの時みたいに、私は母親に慰めてもらえるかもしれないという、淡い希望を抱いていたのかもしれない。

だが母は変わらない。変わらず、私をいらぬ子扱いしていた。

「…………ごめんなさい」

「最近やけに元気づいてきたかと思えば、また以前のように戻っちゃって。またくだらない友情に振り回されて、痛い目見たんでしょ」

「……………そうです。やっぱり友情って……………くだらないものですよね」

「ああそうよくくだらないくだらない。ああいう中途半端な関係が一番むごいのよ。友達だから理解できるとか言って、結局は理解できていないんだものねえ」

「……………」

「友達だから、友達だから。都合のいいこと言っているても、結局あの女は私からあの男を奪い取った。一方的に親友だって思っていたのは私だけだったのよねえ」

「……………」

「さしずめ、あんたの十年前の友達ってやつも、あんたが一方的に親友だっと思っていただけでしょ？　というか、もう忘れちゃったか」

そう、母は馬鹿にするように背を向けて言った。

その言葉、つい先日までなら怒りを露にして聞いたものだが、今となってはどうでもいい。

もう、どうでもいい。小鷹も、後輩たちも、隣人部も、堕ちた母親も……………。

全部全部、どうでもいいんだ。もうどうでもいいんだよ。

ピンポン……………。

と、突如家のチャイムが鳴った。

ネットで本などは頼んでいない。ということは……………また宗教の勧誘だろうか。

母親は玄関に出ようとはしない。こういうのはいつも私の仕事だ。「……………あのさ、少しでもお母さんを喜ばせたかったらさ、玄関くらい出なさいよ」

「……………」

そう投げやりに言う母を背に、私は玄関に向かった。

別に喜ばせたかったからとかじゃない、いつもと同じように、私は玄関に向かうだけだ。

そして、玄関の鍵を開け、扉を開くと……。

——そこには、予想だにしない人物が立っていた。

眼つきは悪く、髪の色は染めそこなつたかのような茶色の混じった金髪。

走ってきたのか、ぜえくぜえくと苦しそうに胸を押さえて立つ少年。

私にとって、かつては親友と呼び合っていた……その少年。

「……なんで」

私は呆けたようにそう口にした。

そんな私に対し、少年は言った。

この時の少年との対面は、十年ぶりの再開と同義だった。

「……久しぶり……だな。さあ……腹を割って話そうぜ……」 親友
”

第一章 羽瀬川小鷹覚醒編 100%の残酷な真実

——最初から……親友になんてならなければよかったんだ。

俺は後ろを見なかった。

その言葉を口にして、けして彼女を見るようなことをしなかった。あいつの気持ちを知った。十年前のあの別れに対して、あいつがどのような想いを抱いていたかを思い知った。

部室を出て、俺は首元を抑えながら、力なく廊下を歩く。

まだ残っている。あいつに締め付けられた首の痣が。

その苦しさが、ねばりつくように感触として残り。

それが、身体の痛みではなく……胸の痛みへと変わる。

「……」

今になって思う。

どうして……こんなことになってしまったのか……。

俺は十年前、この街を去った。

たった一人の友に、何も告げずにこの街から消えた。

別に俺が、そいつのことが嫌いだったからじゃない。

十年前の俺の、小さな失敗だった。

街から去ることを早めに言っておけばよかった。そして、あいつに言おうとした時に限って、あいつがやってこなかった。

時と場合が悪かった。その歯車がかみ合っていれば、少しはマシな結果が待っていたのかもしれない。

俺がこの学校にやって来た時、あいつはどのような気持ちを抱いたんだろう。

それを想像してみた。あいつは……歓喜に満ち溢れていたんだろうか。

それとも、あの時の恨みを晴らそうと……俺を貶めようと思ったんだろうか。

そして、俺は自分の立場になって考えてみる。

俺があいつのことを、早く気付いてあげていれば……。あいつは今、こんなことをしなくても済んでいたのだろうか……。何がどうなって、とことんまでかみ合わなくて。二人で遠回りし続けて。

最終的に、一番やってはいけない結果に陥った。

「……なにが……友達だ。なにが親友だ。そんなに大切な物なら……どうしてこんなことになる。どうして……ああああああああああ!!」

俺は喉の底から叫び、壁を思いつき蹴った。

怒りを何かにぶつけないければ気が済まない。そんな気分だった。

俺は友情を大切にしていた。十年前にあいつに貰ったあの言葉を、ずっと大切にしていた。

だが、その言葉をくれた親友によって、友情の大切さを否定された。「くそつたれが……くそがくそが!! あいつはずっと俺を恨んでいたんだ……憎んでいたんだ……。裏切った俺をあいつは……十年間ずっと。あんなに……醜く、堕ちた姿になってまで俺を……!!」

俺は絶望に打ちしがれていた。

たった一人の親友は、男ではなく女の子で。俺のせいであそこまで心が病んでいた。

そのことに対する罪悪感もあった。だがそれを俺は、あいつという親友に対する失望で打ち消そうとする。

俺はバカだ。なんという自分勝手だ。だがそうでもしないと自分を抑えられないから、俺は全部あいつのせいにしようとしている。

途中で存在に気づき、それを恐れて見て見ぬふりをしていたくせにな……。あいつもくだらないが……。俺だっただらない人間じゃないか。

「……夜空……俺は」

消せない過去は誰にだってある。

もちろん俺にも——ある。

寂しい別れの過去は俺が小学1年生の時だった。

二週間後に遠くの街に引越すと父さんに告げられたあの時。

その後何度か引越しを繰り返すことになる俺の人生での、初めての引越し。

引越しをするということは、今住んでいる街を離れるということ。住み慣れた場所から新しい場所に移ることだ。

当時の小さな俺には、それがどれだけ寂しいことかだなんて理解しきれなかっただろう。

俺自身、街を離れること自体は特に嫌だと思ふことはなかった。

転校Ⅱ学校が変わるということは本当にどうでもよかった。だけど、友達と離れるのだけは嫌だった。

友達だなんて言葉ではかたづけられない、その少年は俺の”親友”だった。

クラスの連中にいじめられていた俺を助けようとして飛び出してきた、その後なぜか俺と取っ組み合いの喧嘩になって、そして仲良くなった。

授業が終わったらすぐさま学校を出て、そいつと一緒に毎日遊んだ。

俺にとってあいつと過ごすその時間は、何よりもかけがえのないものだった。

だからこそ——俺は言い出せなかった。

この街を離れることを告げられて一日、三日、一週間経ってもあいつに別れを告げることができなかった。

その間にあいつと遊んでいた時間、あいつの笑顔を見るたびに俺の中で罪悪感が湧いた。

その笑顔を、俺は一瞬にしてぶち壊せるんだって。だからこそ俺はギリギリまであいつとの時間を楽しんだ。

そして引越しまであと二日というところで。

「明日大事な話があるんだ。絶対に来てほしい」

あいつは俺の頼みに頷き、そしてあいつも真剣な表情で言った。

「オレも、明日タカにとっても大事な話をする」

お互い、明日”大事な話をする”と約束してその日は家に帰った。

今だからこそ思う。もしあの言葉が”最後の言葉”だつて知っていれば、あれが最後だつてわかつていたら、もつとあの瞬間を大切にできたはずだつたと。

そう、残り二日となるまで別れの話を黙っていたのは俺の優しきだった。だが時として優しきは思わぬ悲劇を生む。

あいつは……結局来なかった。約束の明日は永遠に来ることはなかったんだ。

何分経つても、何時間経つても、あいつは現れなかった。

時間が経つ度に自分が震えていくのがわかった。罪悪感と恐怖で涙がどんどん出てきてそれが止まらないと知った時は遅かった。

どうしよう、どうしよう、なんて自分の中で言い聞かせた時にはすでに夕日は沈んでいた。

家に帰らない俺を心配して父さんが公園に迎えに来てくれた。でも俺はそこから離れたくなかった。

きつとあいつは来てくれるつて——来ないという現実を受け入れるたくなって俺は意地を張った。

「小鷹、もう諦めろ。きつとお前の友達はお前を許してくれるはずだ」つて父さんが俺を慰めてくれた。

その言葉を聞いて、俺は諦めた。

たった一人の親友に別れを告げることが諦めた。親友——ソラは俺がいなくなったと知つてどう思い、どんな思いをしたのかなんて知る由もなかった。

たくさん悲しんだはずだ。たくさん俺を恨んだはずだ。そして……壊れたはずだ。俺はその姿を想像することができなかった。

「時が経てば忘れる」なんて父さんは言った。中学に入るくらいまで俺はその記憶に縛られていた。

中学に入るころには徐々に薄れていったが、時よりあいつの言葉を思い出した。

「百人分大切な友達を作れ、そうすればきつと輝かしい未来が待っている」

ソラ……それはどこにある？

その未来は……どこにある？

何度もそう尋ねたが、その答えは返ってくることはなかった。あいつはもう……いないんだから。

もう会うこともないって、中学三年生くらいのころ俺は踏ん切りをつけた。

日本の人口は数億単位、その中からたった一人見つけるなんて奇跡に近い。

奇跡なんて存在しない、あんなものはまやかしなんだって。俺もい歳になつたからよくわかる。

気がつけば俺はあいつとの過去が、”どうでもいい事”になつていたのかもしれない。

高校二年生の4月、俺はこの街に戻ってきた。

あいつと初めて出会い、あいつと親友になつたこの街に。

この街に戻ってきて、俺はそいつのことを思い出した。

今あいつは何をしているのだろうか、俺以上の親友を作れているだろうか。

だなんて他人事のように思いながら、悲しい別れがあつて俺は親友を裏切つたんだなんて自分に言い聞かせて格好つけて。

そこで俺は、まだあいつのことを親友と呼んでいることに気がついた。

「……もし、奇跡っていうのがあつて会えるんなら」

なんて願つてみたりして、馬鹿だな俺だなんて言いながら俺は聖クロニカ学園に転入した。

この学校にいるかもだなんて淡い期待を抱いてみたりして、”ソラ”が付く苗字か名前を持つ男子生徒を探したが同い年にはいなかった。

それなりに友達作りも頑張つたが近づくだけで他のやつらは逃げていく。まあそんなもんだろ。

そして、あの日……。

俺が何年振りか、あの時の夢を見た時。

目が覚めると、そこにいたのは驚愕の表情を浮かべる夜空だった。

しかも、俺の上にまたがっていた。俺は反射的に……。

「……なにしてんだお前!」

俺がそう驚いて言うのと、あいつは硬直しているのか、そのまま動かず俺を見ている。

まず俺の上にまたがっている時点で変な物だが、それ以上に。

なんでこいつは、俺の首を掴んでいるのだろうか……。

「はっ! な……なんだ?」

「いや、お前がどうしたよ? その手はなんだ? 俺の首を掴んでいるが……」

「え? わ……私は……何を……」

「なんか信じられないものを見たような顔して……もしかして俺って寝顔も怖いのか? あまりの恐さに俺を”絞め殺そうと”したんじゃ……。これじゃおちおち寝てもいられねえな……」

この時俺は、冗談を言うようにそう返した。

あえて抵抗もせず冗談で返したのは、こいつの反応を試したからだ。

その結果夜空は、自身の行動に対して戸惑い、そして目を泳がした。

「ご、ごめん! 部室に入った途端狂暴なライオンが寝ている物とばかり」

「なに?! 俺の寝顔は幻すら相手に写すつてののか!」

夜空の心外な言葉に対し、俺はあえて大げさに反応した。

すると夜空は、てんやわんやになって、あたふたしていた。

何をそんなに動揺しているんだ? この女は……いったい俺に何をしようとしていたんだ。

この女と一緒に部活をやって、気がつけばこんな時期になっていた。

三日月夜空。俺と同じで、友達の少ない少女。

そんな慣れ合いが嫌いなこいつは、どうして俺に声をかけてきたのか。

話を聞く限り、去年の一年間はどんな相手に対しても慣れ合おうとしなかったという話だが……。

「友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切にできるような本当に大切な友達を作りなさい……って」

俺が色々考えていると、夜空が俺の寝言を口にした。

その言葉は、かつての俺の親友が俺にくれた大切な言葉。

この女にはもつたいたくないくらいの意味が込められている。

だが、こいつは部活を作ってまで友達を欲しているやつだ。

ひよつとしたら、少しくらいは人並みの優しさが残っているのかも
しれない。

「ああ、もしかして寝言言ってたのか俺、恥ずかしいな」

「その言葉は……どうしたのだ？」

「ああ、俺の親友が言っていた言葉なんだ」

「親友!？」

俺が至って普通に言うのと、夜空は本気で驚いた。

なんとというかすげえバカにされた気分。俺にくらい心を許せる友
はいるよ。

こいつやっぱり心の中では俺をバカにしていたのか。この言葉も、
俺の綺麗事だと思っているのだろうか。

もしそうなら、俺は心外程度では済まさないだろう。だから、俺は
思い出を語った。

こんなやつに語った所で、こいつは笑ってすますんだらうけど
……。

「す……すすすまない。そうかそうか、そりやあまた……最高の親友
だったんだな」

そう、夜空は動揺しながらも、少し顔の力を抜いて言った。

さつきからいっただいどうしたのか、そんなに俺に親友がいたことが
悔しいのだろうか。

だが、意外な言葉を聞いたな。最高の親友だった……か。

その言葉だけは、本当の言葉だと信じたくなる。

だからこそ、ここからは俺は本心で夜空に語った。

「そうだ。俺の最初にできた最高の親友だ。その言葉もそいつのこと
も片時も忘れたことはねえよ、忘れられるわけがねえ」

俺は真顔で言うと、夜空は身体をぶるぶると振るわせて聞いていた。

「なんか、え？ 哀れんでいるのか？ てめえまさかこの言葉が全部空想とか思ってるんじゃないだろうな。」

でも、それにしてもこいつの反応は本気だった。いつものとかじゃなくて、俺の思い出に対して共感するような、そんな反応だった。

もしかして、こいつにもいたのかな。最高の親友って奴が。

だから、こいつがたまに見せる熱さや本気さって言うのに、惹かれてしまうのかな。

その後も俺は、らしくないほどにこいつに過去を語りつづけた。

別れの挨拶を言えなかったことや、裏切ってしまったことを。

どうして、この女に対して話せたのかはわからない。だが、こいつに対して語ることを、拒まない自分がいる。

不思議な気分だ。ああ、悪くない気分だ。

「ソラっていうやつなんだけど、今はたしてどこでなにやってるんだろうか、今もこの町にいるのだろうか……」

「……………」

「できれば、もし神様ってやつが奇跡を起こしてそいつと再び会うことができればなら、そいつに一言謝りたいんだ。そいつは多分俺のことを許してくれはしないだろうが、それも全部俺のせいだ」

「そんなことは……ないと思うが。きっと……そいつはお前を”許してくれている”はずだ」

俺が自虐的に言うと、夜空からまたしても、意外な言葉が返ってきた。

かつての親友が、俺を許してくれていると、そう言ってきたんだ。

その言葉を聞いて、俺はなぜか……すごい心が楽になった気がした。

「なぜかはわからない。だが……この夜空の言葉には……大きな意味があった気がした。」

「ああ、まるで……」

俺はそこで言葉を止めたが、その先に言おうとしていた言葉があ

る。

でも、なぜか俺はそれを言えなかった。多分……言わなかったんだと思う。

そこで言ってしまったら、大きな変化が起こってしまうと思った。だがそれは見かけだけで、結局は何も変わることがない。

同じことを繰り返してしまう。そんな気がした。だから……。

「ありがとよ、俺の自慢の親友を、”最高の親友”って言ってくれて俺は夜空に感謝を言って、部屋から出た。

「……忘れられないよな、忘れようと思っても……それが怖いのかもな」

『……※※※。お前なら……わかつてくれるだろう?』

「ハッ!」

ある日の夜。

俺はまた、あの夢を見て飛び起きた。

その夢とは、親友——ソラに殺されかける夢だ。

あの夜空との一件以来、何回も見erようになつたいやな夢だ。

額にかいた嫌な汗をぬぐって、俺は冷蔵庫に麦茶を取りに行く。

「……はあ」

コップ一杯の麦茶を飲んで、椅子に座って落ちついた。

その後、数分間部屋に戻らず、椅子に座ってぼーっとしていた。

「……どうして、今頃あいつが」

そんなことを口にして、俺はソラの事を考える。

正義感に満ち溢れていた。猫が好きで、困っている人を見ると助けようとする。

普段は強がっているのに、いざって言う時には小さく怯えて、泣き虫で。

そんなあいつを、俺は裏切った形になった。

でも、この俺があやふやに覚えていたくらいだ。きつとあいつは今頃、俺の事を忘れて友達を作って楽しい日々を送っているはずだ。

俺の影響なんて微々たるものだ。だから……考えるだけ無駄なは

ずだ。だが……。

「……三日月夜空。良く見れば……似てる……よな」
途端に、あの女の名前を呟いた。

そして何を思ったか、俺はソラと夜空が似ているなどと口にした。
いやありえない。あんな人の心の無いような女が、ソラなはずがない。
い。

ましてやあいつは女。ソラは男だ。だからそんなわけがないんだ。

「……あの歪んだあいつの性格。もし……俺のせいだとしたら」
眠気か、俺は本当に何を言っているのか。

そんな……重すぎる結果が俺に課せられるわけがないじゃないか。
たかが一つの別れだ。俺が別れを言い忘れたくらいで、ソラがあと
こまで墮ちるだろうか。

極端すぎる。やめろ考えるな。考えるだけ無駄だ。無価値だ。

夜空は夜空だ。俺なんて関係なく、あいつの歪みはあいつのもの
だ。

「……寝よう。あいつはあいつだ。そして……俺は俺だ」

その後、俺は部屋に戻ってベッドに横たわる。

そして考える。三日月夜空の事を……。

思えば俺、あいつのことを何も知らない。

ただ性格の悪い嫌な女。だが、あいつが元からああだったとは考え
られない。

何かがあつて、ああなってしまった。そんな女と、俺は同じ部活に
いる。

だとしたら、もしあいつを苦しめる何かがあるなら……俺たちは隣
人部として、あいつの力になってやるべきか。

もしそれで上手くいけば、あいつの歪みは取り除かれるのか……。

「……夜空の事……もつと知りたいな」

その後日。

俺は部活に行かず、ケイトの元へと向かった。

「おや小鷹くん。今は部活の時間じゃなかったかな？」

「まあそうなんだけども、ちよつと聞きたい事があって」

俺がそういうと、ケイトはコーラを片手に正面から俺を見た。

「どうした？ 悩みなら聞こう」

「悩みというわけじゃないんだが……。夜空のことなんだけど……」

「ほう、君も青春しているね」

「なんか勘違いされているような。その……去年のあいつって、どんな感じだったんだ？」

俺がそう質問をすると、ケイトは思いだすように語った。

「ん。いつも本ばかり読んで、けして他人と関わろうとしようとする。別に今年と何ら変わらない」

「そうか……。そんなやつがどうして、俺を部活に誘ったんだろうか……」

「それは私も思う所だよ。別に友達の少ないぼつちは君だけじゃない、だが彼女はどうか君に興味を示した。確かに授業の一環で組ませたのは私だが、それでも彼女が一時的なものにせず継続させたのはびつくりしたよ」

それを言われて、俺は可能性について模索してみた。

その可能性とは……。三日月夜空が、ソラだという可能性だ。

現状では、1%しかない。その理由は単純で、あいつが俺に対して興味を抱いたということだけ。

その不明確な理由だけで充分だった。なぜなら、その可能性自体、俺が本当にしたくないことだったからだ。

「ねえ、本当に君たち知り合いじゃないのかい？」

そうケイトが訪ねてきた。

俺は考えていた可能性もあり、多少面白おかしく俺は言葉を返した。

「ん。あいつ俺の知っている奴に似てるんだよな。もしかしたら本人かもしれない」

「……そうなん？」

「ああ、だけどそいつは男だし。あいつがわけあって男を演じていたとかならわかる話だが」

そう、割とどうでもいいように俺は返すと。

俺に対してケイトは、割と本気表情で深く考えていた。

「……」

「まあ忘れてくれよ、そんなロマンチックな話があるわけ？」

「……それ、割と冗談で済まないかもよ」

去り際、後ろから言われたケイトの言葉が俺の背中を射抜いた。

思わず、俺は歩みを止める。

「なにを言ってるんだよ、そんな本気にならなくても」

「……よーぞらくんのことをよく知りたかったら、生徒会室に行ってみるといい」

俺の言葉を遮って、ケイトは俺に生徒会室に行くことを勧めた。

「いったいどういうことだ？ 夜空と生徒会、何の関係が。」

「……なんで？」

「姉がいるんだよねえ。よーぞらくんの。しかも生徒会長」

「……初耳だな。三日月なんて名字の人、他にいたか？」

「そこは……あまり触れてはいけないところなんだろうけども、とにかく話を聞いてみるのも一興だ」

言い終わると、ケイトは仕事に戻った。

生徒会室か。俺みたいな素行の悪い奴（と思われるような奴）が言ってもいいところなのか。

色々に響くことを言われて、嫌な思いをしなければいいが……。

生徒会室に到着すると、俺は思わず唾を呑んだ。

これはなんとというか、罪を犯した者が警察に自首しに行くみたいな、そんな感覚に近かった。

勘違いすんなよ。俺は決して生徒会に学園の文句を言いに来たとか、そんなんじゃないんだからね。

「……やめるかな」

そして後ずさりする俺。

ほらそうやってすぐに心が折れる。これはギャップ萌えとは言わないのは知っているが。

肩を落として、後ろを振り向くと……。

「……え？」

振り向くと、一人の女の子が荷物を持って立っていた。ショートカットのボーイッシュな美人さんだ。雰囲気は若干……夜空に似ていた。

「……この人は、この人が夜空の……？」

「……あの」

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃくん」

「……」

そう、どこかの魔人のような前口上を口にする。

そして俺を見ても、特に怯むこともなく。

軽快な口調で、俺に話しかけてきた。

「どうした少年。生徒会に何か用かじゃ？」

「いや……その……」

「……おや君。今や学園の有名人の羽瀬川鷹人くんじゃないか」

「いや名前違います。小鷹です。って……」

その少女は俺の事を知っていた。

といっても素直に喜べるものではない。有名人とは悪い意味でと

いうことは百も承知だ。

とまあそれは置いておき。俺は前にいるこの人に要件を言うことに。

「あの？ あなたがこの学校の生徒会長さん？」

「……ああそうだよ。実質生徒会長みたいなもんだよ」

「意味がわかりませんが……。ってことは、あの……三日月夜空さんのお姉さん」

「え？ いや違うけど」

違うんかい!! あれ話となんか違う!!

どういふことなのか、この人に聞いてみることに。

「その、この学校の会長がその夜空のお姉さんだってきいたんですけど……」

「ほう、まあその通りだ。この学校の表の生徒会長はその人の姉だよ。だけどその表の生徒会長は小さな仕事を部下に任せる。仕事量では

この副会長の大友朱音が上だ。だから生徒会長みたいなものだと
言ったんだんぎゃ」

「……よくわからん。その、生徒会長に用があつて来たんですけど」
「申し訳ないが今あいつは用事でいない。でも……私でよければ話を
聞いてあげるよ。私は三日月夜空の姉ではないけど、先輩であるから
な」

「え？ そうなんですか？」

「ああ、あの孤狼と呼ばれ誰とも慣れ合おうとしなかったガラス越し
の美少女。その三日月夜空が唯一心を開ける相手とはこの副会長の
大友朱音なのさ」

そう、さつきも名乗ってきた気がするが、大友先輩は自信満々に
言った。

本当かどうかは分からないが。三日月夜空が唯一心を開ける相手
……とは。

「……副会長は、とても偉大な方のようで」

「なにを褒めてるかな君は。まあいいやこの書類を運べば今日の私の
ノルマはおしまいだ。あちらのテラスで話そう」

そう書類を生徒会室に置いてくると、俺は副会長と一緒にテラスへ
向かった。

そして適当にコーヒーを持ってきて、俺の対面に座る副会長。

「んで？ よぞにやんのことで要件とはなに？」

「よぞにやん？」

「ああ、あの子猫が好きでね。存在も猫みたいだからよぞにやんと
……」

俺はその話を聞いて、少しだけ顔を歪ませた。

猫が好き……か。あいつも……猫が好きだったな。

1%が5%になった。そんなことを思いながら俺は話を続けた。

「それで鷹丸くん」

「小鷹です」

「確かにあの子は気が難しく、繊細な所もたくさんある。けども根
はやさしい女の子だ。その……喧嘩することも多いだろうけど支え

「やってほしい」

「いやあの、話がまるで見えないんですが……」

「え？ 君はよそにやんの彼氏だろ？ それで喧嘩しちやって私のところへ来たんじゃない？」

「ぶっ！ か……彼氏じゃないです!! 部活仲間ですよ部活仲間!!」

俺はとんだ勘違いをされている事に気づき、素早く訂正する。

「というか星奈にも間違われたが、周りの奴にはやっぱり……そう見られているのか。」

「誤魔化し方がお上手だなあ。女経験が豊富そうだね鷹太郎君」

「いや俺は彼女なんて作ったことありませんよ!! つか小鷹!!」

「そうだったか。でも……部活の仲間というだけでも……よそにやんにとって居場所が出来たことは私もうれしい」

そう、安堵の表情を浮かべる副会長。

それはまるで、後輩を思う先輩というより……妹を思う姉のようにも感じた。

本当に……この人じゃないのか。

「何度も聞くようで失礼ですけど。本当にあなたがあいつのお姉さんじゃないんですか？」

「いやいや、あの子のお姉さんは別にいるよ」

「にしても、あの夜空が唯一心を開ける時点で、その姉と夜空は仲良くないんですか？」

「……まあ、色々あんのよね」

俺が迫るように言うと、副会長は深いため息をついてそう口にした。

「その、あの子の家庭の事情だから深くは言えないけども、私はあの子の姉から直々に見てあげてくれと頼まれている身なんだにや」

「……どういう……ことですか？」

「だから深くは言えない。君が本当にあの子の彼氏かなんかなら言つてやれる義理もあったんだが……。いや、待てよ」

そう、副会長は一瞬、深く悩むように苦い表情を浮かべた。

そして、ぶつぶつと何かを呟いている。

「……少しおかしい髪の色。眼つきが悪くて……名前が」

「え？　なんですか？」

「……鷹ノ助くん。君は……よぞにやんのことをどう見ているの？」

「……もうなんでもいいや。あいつのこと……ですか？　その、同じ部活の部長つてくらしいしか」

「……」

「あいつ、いつも空気の読まない最悪なことばかり口にして、たまに本気で人を怒らせる事を平気で言うし。でも……そんなあいつにも、何かがあつてああなつたんじやないかつて考えて」

「……」

「それで、何も知らないであいつのことを批判するのもどうかなって思つて。俺たちつて友達を作るための部活なんです。だから、他人を否定し続けてたらだめだつて思つて、せめて俺だけでも、一生懸命やってみようつて」

そう、俺は副会長に熱弁をする。

その言葉は本当だ。俺はけして隣人部を甘く見ていない。

あの場所は俺にとつて何かを成せるかもしれない場所なんだ。だからこそ、あいつがどんな思いで作つたかはわからないけど。

俺は、少しでもあの場所を良くするために、まずは知ろうと思った。

三日月夜空の事を……。

そして……俺の疑念を晴らすためにも……。

「……今から、十年前の話だ」

「え？」

「あの子がまだ小さかつた時に、あの子の家庭に異変が起きた」

「……」

「あの子の姉……」日向」と私は幼馴染で、日向は私に対してのみその時の悩みを打ち明けてくれた」

「……」

「お母さんとお父さんが毎晩喧嘩をしてるつて。見たくないから何日か家に泊めてくれないかと、苦しむように言い続けてきた日向を、今でも覚えている」

急に、あいつの家庭の出来事を語りだした副会長。

あいつの家庭の事情。深くは聞いていない。いや、あまり触れてはいけないことだろう。

だがこれでなんとなくだが、察してしまった。あいつの家庭の事情が、けして上手く言っていないことを。

「そんな時期に、よぞにゃんには友達が出来たらしい」

「……友達？」

「ああ、辛い時期に心を許せる友達が出来た。あの子にとっては必要な……逃げ道だったのかもしれない」

「……その友達とは……どうなったんです？」

俺は咄嗟に、そう質問をした。

俺は知りたかった。知って、楽になりたいと思った。

この時、俺はもしやと思って、心から恐れていた。

俺と同じ十年前、あいつにできた友達。

そして俺の疑念、あまりにもかみ合わせが良すぎたからだ。

だからこそ、俺は結末に知り急いだ。

「……突然、その友達がいなくなったらしい」

「……あつ」

「何も言わずに、街から引越したらしいんだよねえ」

「……」

「別れる何日か前に、私はよぞにゃんに相談を受けたんだ。友達に嘘を付いていて、そろそろ本当の事を明かしたいって」

「……」

「何を思ったか、自分を男の子だって偽っていたらしい」

……それらを聞いて、俺は、現実を直視するしかなくなった。

俺は驚愕したまま、その話を聞き続けた。

そうだ。俺には……その話を聞かなければならない義務があった。

「そんなこんなで友達が何も言わずにいなくなった途端に、あの子の家庭で色々あったらしく……そこから心を閉ざしたあの子を元気づけるのは大変だったよ」

「……そんな……ことが」

「街の人も良く知るほど仲が良かった姉妹だったが、その出来事を機にあの子は日向と話すことは無くなった。中学校では何度もめ事を起こしたらしいし、彼女の家の近くの住民からは、虐待じゃないかってくらいの叫びが聞こえてくるという話を聞いたよ」

それらを聞いて、もう充分だった。

5%が、わずか数分で100%になった。

そうか……そうだったのか。

あの女が……三日月夜空が……俺の……。

「とにかく色々あつたらしくて……鷹男くん？」

「……ふっ……ふふふ……あはははは……あ……」

「ははははは!! ひやはははははははははは!!」

「……」

「お……俺は……無自覚に親友を地獄に送っていたのかよ。ならあの歪みは全部……俺一人の……ふはは、やっべえ笑うしかねえ……あはは……あはははははははは!!」

「……小鷹くん……君は」

その後俺は逃げ出すように、テラスを後にした。

そして凶悪な笑みを浮かべ、びびりながら通り過ぎる生徒なんていつさい気にせず。

「……俺にしか救えない存在……か。ははははは……重すぎるぜちくしよう」

俺は目から涙を流して、自分を責めるように呟いた。

夜空のいない隣人部

あの女が……三日月夜空が、俺のかつての親友だった少年だった。まずどうして性別を偽っていたのだとか、なんでそのことを言っただけでよかったとか、尋ねたい事が多すぎるが。

それ以上に、俺はわからなくなっていた。俺にとっての……あの女がどういう存在であるかを……。

あいつがソラだということを知って、別に喜ぶわけでもなかった。かといって、十年前の事を謝ろうと思うわけでもなかった。

そう、あつさりしすぎていた。自分でも驚くくらい、冷めた気持ちを纏っていたのだ。

タカにとつてのソラ、羽瀬川小鷹にとつての三日月夜空。

それはとても似ているようで、だけどまったく異なる関係になっていったんだと思う。

だから俺は感動もしないし、かといってあいつとの思い出に対して深く思いこむこともなかった。

だが、俺はいいとしても……夜空は今でも引きずっている。そのことに関して……俺はどう思うべきなんだろうか。

すぐさまあいつに、久しぶりだなと言ってやるべきか。あの時はすまなかったと、謝るべきか。

そうすれば、あいつは満足してくれるだろうか。納得してくれるだろうか。

だがその果てに、あいつの歪みは元に戻るだろうか。俺の良く知るソラに、正義感の強い優しい少年に戻ってくれるだろうか……。

そうだな、多分元には戻るかもしれない。だが……”変わる”ことはない。

また何かあれば、再び歪んで今の夜空になるだけだ。そうだ……今ここで俺があいつに謝ろうが再会を祝おうが、変わる物は何一つない。

それどころか、あいつが自分勝手に巻き込んだ者達を除け者にしてしまう可能性だって考えられる。

理科や幸村は、夜空の自分勝手に付き合わされている。隣人部という仮初の箱の中に、連れ込まれたにすぎない。

そんなあいつらに責任を取れる器を、夜空は持ち合わせてはいない。だから……今ここで俺が動くべきではない。

そうだ。この学校に俺の良く知る親友はいない。だから三日月夜空は……ソラじゃない。

「ありがとう、私にこの日常を作るきっかけを与えてくれて……」

……なのに、なんでこいつが稀に言うそういう言葉に……心が揺れるんだろう。

俺は、あいつに感謝なんかされるようなことをしただろうか……。

本当は俺だって言いたかった。「お前のおかげでこの数か月、わりと楽しかった。ありがとうな」って。

だけと言えなかったんだ。強情を張ったんだ。お前の近くに行くことを……恐れてしまう俺がいた。

お前を信じることを……拒んだ俺がいた。

俺はお前の親友失格だよ。なにせ……俺はお前という存在を、ソラであった三日月夜空を……拒絶しているんだからな。

「夜空。お前は……ソラなんかじゃない」

夏休みの初日。

午前九時ごろ、俺は家にいた。

夏休みも部活がある。しかし……部活があるというだけで、いつ何時に部活をやるのかを聞き忘れていた。

それをいいことにしたのか、俺は部活に行く気分ではなかったからなのか、部屋で勉強をしていた。

部活に行く。それはすなわち……あの女と顔を合わせるといふことになる。

あいつがソラだと知って以降、俺は前ほど部活に行きたいと思わなくなっていた。

三日月夜空は三日月夜空だ。だが……あいつがソラだったと意識するだけで、胃がムカムカする。

自然とイラつきがこみ上げてくる。そうなるので俺は、極力あいつに近づこうとしなかったのだ。

だがそれでサボった所で、結局は何も変わらない。いつまでもそうやって……互いに変化を求めないまま、都合のいい空間に停滞し続けることになる。

そうすれば、他のやつらにも迷惑がかかる。俺の親友のせいで、余計なことに巻き込まれた理科や幸村に……。

「クツクツク。わが眷属よ、今日は部活に行かないのか？」

「……ああ、なんか行く気無くしてな」

そう、突如部屋にやってきた妹の小鳩に言われ、俺は投げ捨てるように答えた。

「……わ、我は別に行ってもよいぞ」

と、なんとも珍しいのか、返ってきたのは意外な一言だった。

小鳩は基本俺が部活に行こうとしない限り付いてこない。

俺が行くから自分も付いていく。そんな程度しか部活の事を思っていない。

小鳩もまた、夜空の口車に乗って部活に入らされた身だ。打ち込みよりも軽いのは当たり前だ。

「珍しいな。どういう風の吹きまわしだ？」

「そういうのではない。ただ……なんとなく行きたくなくなっただけじゃ」

そう、小さく答える小鳩。

なんとなく……か。だが、小鳩が積極的に行動に移すのは珍しいことだ。

小鳩は昔から俺の陰に隠れ、あまり前向きに動くことをしなかった。

そんなこいつが、自分の意思で何かをしたいと言っている。なら、それに答えるのが兄の定めか。

「……そうか。したら午後から部活に行くか」

「……うん！」

俺がそういうと、小鳩は元気よく答えた。

そうだ。せっかくだしお昼ご飯を作っていこう。遅れたお詫びにはお詫え向きだろう。

俺たちは学校に行く準備をし、十一時のバスに乗って学校へと向かう。

午後からでも大丈夫だろうか。まだみんないればいいんだけどな……。

……みんないればいい……か。一人の女がいるのが嫌で部活をサボろうとしたくせに。

まあ、気にしなればいいだけだ。そうだ、気にするな。気にしなければ……。

そして十二時、お昼時に到着し、すぐさま部室へ向かうと……。

「おつかれさまですはせがわせんぱい」

と、部室にいたのは幸村一人だった。

ん？　なんでこいつ一人しかいないんだ……？

誰もいないというなら、午前中で解散したということだ。理解できるんだが……。

と、俺は机の上に置いてある置手紙を見つけた。

そこには夜空と理科のメールアドレスが書かれていた。下には部員は全員登録しておくようにと書かれている。

なるほど、連絡手段を忘れていたことに気がついたということか。これで全員に連絡ができるようになる。

何気にちゃっかりしているな。まあ……多分理科に言われて気がついたんだろうけど……。

「おつかれ。他のやつらは……帰っちゃったようだな」

「わたくしが来た時にはすでにおりませんでした。あったのはこのおきてがみだけです」

「なるほど……。これは悪いことをしちまったかな」

俺はそう悪びれながら、副部長としてこの場合をどうするかを考える。

せっかかく昼ご飯をたくさん作ってきたわけだし、とりあえず……。

「幸村。昼ご飯は食べたのか？」

「いえ、まだたべておりませぬゆえ」

「それはよかった。腹が減っては戦は出来ぬってやつだな。みんなで昼ご飯にしようぜ」

「せんぱいのおてせいのごはんをたべられるとは。この幸村、今日かぎりでのちくちははてもこうかいはありませぬ」

「物騒だからやめてくれないかな?」

俺は幸村の大きなリアクションに冷や汗を流しながら、テーブルに弁当を広げる。

と、部活の人数の事を考えて作った結果、今ここにいる三人で食べるには若干多い気がするな。

「クツクツク。あんちゃんの弁当あんちゃんの弁当」

「まあ、この場合食べすぎるなどは言えないよな……。幸村もたくさん食べてくれ」

「はい、ただかせていただきます」

こうして、三人でお昼ごはんを食べることに。

その時、ナイスなタイミングで部室の扉が開く。

「なははー! 遊びに来たぞー!」

と、元気よく部室に入ってきたのはマリアだった。

マリアはケイトの妹だ。そしてケイトから直接たまに面倒を見てやってくれと言われている。

天真爛漫な子どもだが、友達が少ないのは俺たちと同じで、顔には出さないが寂しい日々を送っていたらしい。

「つてうおー!! なんかおいしそうなもの食べてるのだ!!」

目を光らせて俺の作った弁当を見るマリア。

「久しぶりだなマリア。せっかくだし一緒にご飯食べないか?」

「おー! いいのか鷹次郎!」

「誰だよ鷹次郎って……。俺の名前は羽瀬川小鷹だ!!」

俺は間違えられた名前を訂正する。というか最近やたら名前間違えられている気がするんだが……。

俺が誘うと、マリアは俺の横に来て割り箸を取った。

これで少しは昼ご飯の量も減るだろう。

そう思っていると、向かいにいた小鳩がなにやら気にいらなそうな目でマリアを見た。

「……なんやこいつは」

そう、むくれながら言う小鳩。

そういえば小鳩はあまり部活に来ないから、この子とまともに顔を合わせたことはないのか。

見た目はほとんど同じ年にしか見えない二人だが。これでもうちの妹の方が四歳年上なんだよな。

「ああ小鳩。この子はマリアといつてな、隣人部の……お客さんみたいなもんだ」

「違うぞ！ 私は隣人部の顧問だぞ鷹次郎!!」

「ああはいはいそうだったな。悪かったぞマリア。あと俺は小鷹だぞ」

そう俺はマリアの頭を撫で撫でする。

すると、向かいにいた小鳩は、更に機嫌を悪くして……。

「なつ！ あんちゃんに……頭をなでられて……」

俺はただマリアの頭を撫でただけ、なのに小鳩はすごく悔しそうな顔をした。

そんなあいつに対し、マリアは純粋な目で見つめ、俺に尋ねてきた。

「なあ鷹次郎。あのなんか変な格好している左右の目の色が違う気持ち悪い奴は誰なのだ？」

「だ、誰が変な格好じゃ！ しかも気持ち悪いとは……このスレイブレッドのかつこよさを理解できへんのか!!」

と、子供の悪愚痴に素直に反応してしまう小鳩。

子供の素直な感想というのは悪気はない。が、時より大人の悪愚痴以上に心に突き刺さる物。

なんか夜空と理科がないから喧嘩もないと思っただが、どこかしこかこの部活では喧嘩が起こる物だな。

ここは、皆の先輩として一人の妹の兄として、そして隣人部の副部長として被害を大きくしないよう対処しなくては……。

「マリア。あいつは俺の妹の小鳩だ。似てないけど、妹なんだぞ」

「ちやうわあんちゃん！ 我は偉大なる夜の王レイシス・ヴィ・フェリシテイ・煌であるぞ……」

「へえ。小鳩はお寿司屋さんなのか」

「誰がお寿司屋さんじゃ!!」

「マリアが小鳩をお寿司屋さんだということ（おそらくレイシスのシスを寿司だと思ったのだろう）、小鳩はさらに機嫌を悪くしたように怒り出した。

小鳩のそのレイシスなんたらは、小鳩がハマっている中二病キャラだ。本名で言うのと訂正するし、所構わずレイシスを演じる。

そのせいなのか友達と遊びに行ったりかそういう情報を聞かない。我ながら可愛い妹であるが、やっぱり中身に問題がある。

「まあ小鳩。何を怒っているかはわからないけど、今はご飯中だ静かにしなさい」

「う。そいつだつてうるさくしとろうに……」

俺がちよつと叱ると、小鳩は拗ねたように小さく呟いて席に座った。

これでくだらない喧嘩にはならずに済む。と、思った矢先……。

「このから揚げおいしそうなのだ!」

「あ! それうちが食べようとしていたもんじゃ!」

「そういうのは早い物勝ちだぞ寿司。文句言つてはいけないのだ」

「なんやと! てか誰が寿司じゃ!! レイシスだつて言ってるじゃろ耳遠いんかこら!!」

さつき落ちついてすぐに、また喧嘩になってしまった二人。

う。ん。さつきから小鳩は何が気にいらないんだろうか……。

「こら小鳩。相手は年下だぞ、そんなむきになることないだろう」

「みゆ」

「なはは怒られたのだ! 私はお前と違っていい子だからな、なあ鷹次郎」

「そ、そうだな。さつきのから揚げだつて別に小鳩から取った物じゃないし、マリアは何も悪くないぞ」

「あ……う。う。う!!」

俺がマリアを褒めて頭をなでると、小鳩はさらに唸りを上げた。そしてそのまま完全に拗ねたようで、俯いてしまった。

「まったく……。悪いな幸村、騒がしくて」

「かまいません。それに……。しよくじはおおせいでたのしくとるものです。たしようにうるさくとも、かんだいによくいれるが真の漢です」
「ふっ……。だが悪いことをしたやつにちやんと叱ってあげられるのも、真の漢の役目だ」

「なるほど、それは気にしていませんでした。きびしさはやさしさのうらがえし……。さすがははせがわせんぱいです」

そう幸村は俺を讚えるような眼差しで見つめる。

よくわからないが俺は幸村に褒められたらしい。

だが、その何気ない言葉一つが、その人にとって大きな物になる場合もある。

そう、何気ない言葉一つで……。何気ない行動一つで……。

『……タカ』

……。ちっ。お前は……。出てくるんじやねえよ。

俺の何気ない行動一つで、お前が変わり果てたって言いたいのか……。

だったら……。そう勝手に思ってるよ。俺には……。

「せんぱい。どうかされました?」

「あ……。だ、大丈夫だ」

俺は幸村に心配され、平気な顔を見せる。

俺も……。気にしすぎだ。何をそこまで……。夜空の事について考えている。

そんな……。好きでもない女の事なんか……。

だが、やっぱり何か足りない。

今この場の隣人部には……。大きく何か欠けている。
簡単には埋まらない大切なもんだ。そう……。夜空がない隣人部は……。なにかが大きく欠けている。

このご飯が終わったらどうする。あいつみたいに奇天烈なことをやりだそうとする積極性を俺は持ち合わせていない。

「……幸村。午後からの部活……なにかしたいことあるか？」

「いえ、せんぱいにおまかせします」

そう、難しい反応が返ってきて俺は苦い顔をした。

といつても、何をするにしても盛り上がり欠けるな。

この部活は比較的暗い奴が多いからな。

コンコン……。

そんなことを考えていると、ノック音が聞こえてきた。

誰だろうか。俺は立ちあがって扉まで向かう。

そして開けると、そこにいたのは……星奈だった。

「お前……」

「やっぱり部活やってたのね。なんか暇だから遊びに来ちゃった」

そう呑気に言つて、ズカズカと部室に入ってくる星奈。

すると、入ってくる星奈を見て、さきほどまで無表情だった幸村の顔が歪んだ。

俺以外の部活のやつらは、この柏崎星奈の事を毛嫌いしている。先日も終業式の日にも空気も読まずに部室に来た時は、夜空と喧嘩をしていた。

俺としては別に部室に来ることは構わないが……。まあ、他の奴らの気持ちも考えれば……。

「あれ？ 今日はどうさ二人はいないのね」

「うるさい二人……ああ夜空と理科か。午前中で帰っちゃったらしい。まあちゃんと部活時間を決めていなかったのが悪いんだけどよ」

「そう……。でもきつとあの二人がいたら、あたしが来た瞬間に襲いかかってきてたでしょうね」

そうやって星奈は、面白おかしく言った。

星奈はこの学校の理事長で、常に男子生徒に囲まれている超絶リア充。隣人部の俺達からすれば遠い存在だろう。

そんな彼女と俺は、親同士の付き合いの関係だ。だが別に意識するわけでもなく、彼女も俺に向ける感情と言えば、父親の面子しかないのだろう。

だが終業式の日もそうだが、俺以外にも星奈はこの隣人部に対して

……挑発的な物言いをしていた。

前も、友情なんてくだらないと言っていたけど……。

「……せんぱい。この方はぶいんではありませんが」

「あんちゃん。そいつ……なんか怖い」

案の定、星奈に敵意を露わにする幸村と小鳩。

そんな二人に対して、星奈は冷徹な瞳を向ける。

一触即発。夜空や理科のように行動には出さないが、目と目の間に火花が散っている。

「ま、まあお前ら……。せつかくだし星奈、昼ご飯がまだ減って無くてな、お腹がすいてるならなんか食べて行けよ」

「あらそう？ だったらいたたくわ」

星奈はそういうと、座って割り箸を手に取った。

そして、二個ほど残っていたタコさんウインナーを掴んで。

ウインナーを眺めて、ひそかに笑みを浮かべて一言。

「……こういうタコの足が美少女の口の中に入っていくようなやつ、何度かゲームでやったわねえ」

急に何を言い出すのか、反応に困るようなことを言いだした星奈。

つかそんなマニアックなゲーム。するのこのお嬢様は。

「例えばこう、その可愛い金髪のお嬢さん」

「わ……我か？ く、クツクツク……貴様のようなむ……胸の大きい

……まことに羨ましい。……な、やつにお嬢さんなど呼ばれとうないわ」

「……変わったしやべり方をするのね。なんかちよつと可愛いわね。私の今やつてるちよつとアレなゲームで悪党に犯されているヒロインに非常によく似ているわ」

「ぐ……ぐぐぐ……」

なんとという目でこいつは小鳩を見るのか。アレなゲームって言わずもがな、アレなゲームだよな……。

実の妹をそんな如何わしい目で見られたことに、相手が男なら迷わず殴っている所だが……相手はまぐうことなき美少女だし……。どうすればいいのか。

なんか、今まで俺が抱いていたお嬢様な星奈が若干崩れて来たよう
な……。

「……せんぱい。このおなごはいもうとさんをぶじよくしています
よ」

「侮辱っていうか……。なんか幸村さつきからちよつと口調が厳しく
ないか」

「さきほど星奈せんぱいが例えに出したのは。アルケミアスという
かいしやがだしたブラッドワルキリアという成人向けのげーむの
きやらです」

「なんでおまえそんなこと知ってんだよ!!」

意外なことに、幸村は小鳩の外見と星奈の発言だけでゲーム名まで
答えやがった。しかも成人向けってマニアックだろそれ。

って、良く考えたら幸村の性別は男だったな。そうだよな、年頃の
男の子だったら成人向けのゲームにくらい手を付ける物か……。

「良く知っているわねあなた。楠幸村くん……だっけ?」

「う……」

「小鷹もそうだけど、私を見て足を舐めようとしないう男子は非常に珍
しい存在よ。他の男子は私を一目見ただけで虜になってあつという
間に私の下僕になるというのに」

「お前……。いったいこの学校で何してんだよ……」

噂には聞いていたが、この学校では星奈のファンクラブまで存在す
るほど、数えられる男子はほぼ星奈に下僕という扱いをされている。

確かに綺麗で可愛いけど、俺はそんな下僕になりたいだなんて思っ
たことはないが。

幸村はこいつの事を見て、どう思っているかは知らないけども。

「……そんなことはしりません。わたくし……あなたのことはきらい
です」

と、はつきり言ってしまった。

嫌いな物は嫌いと言える。男気はあるが、別に今ここで言わなくて
もいいことだと思うぞ幸村。

「……そう。特に何も思わないわ。」自分を偽って満足しているよう

な弱い奴”を、気にかける心を私は持ち合わせていないし」
「……」

星奈も相変わらず、挑発的な物言いをして幸村の反感を買う。
だが幸村はこれ以上牙を向けることはなかった。そのまま黙って、椅子に座る。

「なあ鷹次郎。このおばさんは誰なのだ？」

「お……おば……」

そう、無垢な顔で尋ねてきたのはマリアだった。

星奈に向かっておばさん。子供って怖いな……。純粹無垢って怖いよ。

これには先ほどまで冷静を装っていた星奈も、何か気に障ったよう
で。

「……ま、まあ。あの捻くれた姉にこの妹か。き……気にしない気に
しない」

何かを言いたそうにしながらも、自分を抑え込む星奈。

なんというか……やっぱりの空気……耐えられない。

なんでこんなに殺伐としなきゃいけないんだよ。仮にも友達作り
の部活だろ。

ここはこう……場を和ませるために一つ、俺が一肌脱ぐ必要が
……。

「お、お前ら！ そんな喧嘩ばかりすんな!!」

「別に喧嘩はしてないけど……」

「おなじくです」

「そんな、部員であろうとなかろうと、俺たちは友達作りの隣人部だ。
幸村も、真の漢なら少しくらい性格がねじ曲がっている空気の読めな
い女の言動一つ、寛大に聞き入れるくらいの度量を持つべきだ」

「……小鷹。あんたさりげなくあたしをバカにしてないかしら？」

俺が思ったことを言っただけで幸村を説得すると。横から見るのも恐ろ
しいほどに睨みつけてくる星奈の視線を感じた。

だがこれくらいで怯んでは男がすたる。ここは全員が満足で
きるくらい、場を柔らかくするんだ。

「そこでだな。笑顔の少ないお前らのために、俺がとっておきのギャグを披露してやる!!」

「どうしてそんな流れになるのよ……」

「とくと聞け！ 笑いすぎて顎が外れても文句言うんじゃねえぞいくぞー!!」

星奈のツツコミを軽く受け流し。

ギャグに非常に自身のある俺は、瞬時に頭の中のギャグリストを整理し。

その中で、一番爆発力のあるギャグをテイスティングして、恥などかなぐり捨てて披露する。

「チャンチャカチャンチャンチャカチャン、チャンチャカチャンチャンチャカチャン♪」

「……………」

「転校してきて注目浴びると思ったら。顔を見て逃げて行きました
♪ チツクス (ry)」

俺が全身全霊のギャグを披露すると。

やり遂げたように綺麗な顔をする俺に対し、幸村と星奈と小鳩は、メチャクチャ苦々しい顔を浮かべていた。

その奥で一人、大笑していたのはマリアだけ。

「あひやひやひやひや!! 鷹次郎面白いのだあははははは!!」

「だろう!! このネタの鉄板さを幼女でさえわかるってのに、お前ら三人はなんでわからないんだ!？」

「……………つか古いし!!」

俺が自信満々に言うと、幸村と星奈は声をそろえて俺に言葉を投げかけた。

ちなみに小鳩は、兄の醜態を目にさらしたかのように顔を赤らめ手で押さえていた。

あつれく？ なんでだろう？ やる前にはこいつらが笑いをこらえて醜態なんて忘れ去っているビジョンが見えたのに。

「つたく、ギャグが伝わらない奴らだな」

「……………これほどの侮辱、初めて受けたわ」

「……なんでしょう。せんぱいとはいえひじょうにはらがたつてきました」

「ちよつと！　なんでそこまで言う必要がある。つかさつきまでの悪感全部俺に向けられてねえか!？」

本気で心外だと言わんばかりの表情を浮かべる星奈と幸村。

たかがギャグを一つ披露しただけなのに、なんという言われようか。

うん。そうなんだな。こいつらにギャグは伝わらない。割り切つてしまえば簡単なことはない。

「……今日は帰るわ」

「お、おい。今度のは爆笑間違い無しだぞ!!」

「なんとというか、今日の隣人部には……物足りなさを感じたわ」

去り際、星奈はぼそりとそう口にした。

それを聞いて俺は、内心ハツとなった。

星奈から見てもわかる。この隣人部に対する違和感を。

「一つの集団の中にいなければならぬ大切な存在。そういうのつてやっぱり……どんなことがあっても必要な物なのね」

「……星奈?」

「……小鷹。女の子って……複雑なのよ。男が女に対して抱く以上に……女の子が男の子に抱く感情って……どんなものでも……」

「……」

「気持ちって……想いってのは伝えるのは難しいものよ。だって……言葉通り……”重い”から」

そう、俺に告げるように、星奈は部室から出て言った。

その言葉は俺の耳に、嫌でも響いてくる言葉だった。

複雑……か。それが……あの夜空であっても……か。

そして想いは……伝えるのが難しい……。複雑な関係であるほど……遠回りしてしまうほど、難しい。

「……せんぱい。きにするひつようはありませんぬ」

「そ、そうじゃ。あんちゃんはあるんじや!」

隣で、幸村と小鳩の励ましが聞こえてくる。

気にしているように見えただろうか。いや、そう見えても仕方ないか。

俺は今、この時期の俺は……とても複雑だ。複雑な気分だ。

だがそれは、女の子のそれとはまた違った……複雑さだ。

「……幸村。お前は……誰かに伝えたい大切な想いつてあるか？」

そう幸村に質問をすると、幸村は物静かに答えた。

「……わかりませぬ。ただ……あるかもしれないし、ないかもしれない」

「今は、それでいいさ。そう、想いを伝えるのは難しい。だけどな……それを受け取るのもまた……難しいんだと俺は思う」

俺は言った。単純な俺の意見だ。

人間は時として個人の意見を言う。そしてそれは必ずしも全員を思いやつてのことではないだろう。

それを人は受け取る時、どう受け取れば平和に収まるのかを考える。

人から人へと告げられる気持ちや思いが、人を傷つけることもある。だから人は大きく変化することもある。

だから人は変化を求めると同時に恐れる。だから人は一番楽しいと思った現在を手放さないようもがく。

今思えば、あの時の俺は幼かったからあんなにも大切な時を軽々と手放してしまったんだと思う。

だからこそ今の俺は、その経験が……最も楽しいと思う現在を求め続けている。

気づいていたことすら気づかぬふりをし、起こるかもしれない奇跡を目の前にして投げ出す。

変化は必ずしもプラスになるのか、マイナスになるのか……それは起こしてみないとわからない。

けど俺が起こしたかつての変化は、大きなマイナスを生んでしまった。だから俺は……変化から逃げることにした。

こいつらという現在の関係が、俺にとって心地いいから。だから……。

「……でも、やがてはわたくしたちはたがいに想いを告げ、そしてそれをうけとるひがくるやもしれません」

「……」

「ごだかせんぱいはそのとき……漢としてそれを受け止めますか。それとも……逃げ出しますか？」

その質問に対し、俺は歯と歯を噛みしめた。

いざその時が来た時、俺はどうするべきなのか……。

大きな変化を求めるか。それとも……平和のための停滞を求めるか。

「……わからねえよ。そんなこと俺に聞かないでくれよ。だって……夜空は!!」

「えっ？」

俺はつい、大きな声を出してしまった。

そして幸村の驚いた顔で気付いた。この時、自然とあいつの名前を出していたことを。

拒絶しておきながら、まだ貼りついて離れないあいつのこと、そしてあいつとの過去。

優柔不断に。かといってどっちを選ぶことでも無く。

幸村に対して、男気を見せることもできず……。俺は天井を見た。と、突如俺の手に、柔らかい感触が襲う。

見ると、幸村だった。俺の右手を優しく握って、顔を近づけてくる幸村。

つい見惚れてしまった。こいつは男のはずなのに……。だが、ちよくちよく感じる。この違和感はなんだ？

「……急がば回れとは言ったものです。ごだかせんぱい」

「幸村……」

「回るべくなら回るべきです。時間をかけても……そこに……しあわせな終わりがあるなら」

その言葉を受けて、俺は少しだけ……やる気を取り戻した。

ふつと鼻で笑って、幸村に言葉をかける。

「……ありがとな幸村。お前のそういうところ、すごくいい部分だと

思う」

「そ、そうです……か？」

「ああ、惚れちまうよ」

そういうと、幸村は割と本気で顔を赤くした。あれ？ 幸村さん男ですよねえ？

時間をかけても……そこに幸せな終わりがあるなら……か。

ハッピーエンドってやつか。誰も傷つかない、丸く収まる終わりがあるといふなら。

だったらもう少しだけ、回ってみるのもありだろう。

「もう午後二時か。そろそろ解散しようぜ幸村」

「はいっ」

「……ああそうだ。そこにいるマリアなんだけだよ、俺が来れない時になんか栄養のあるもの食わせてやってくれ」

「わかりました。受けたかります」

こうして、今日の部活は幕を閉じた。

あとで夜空にメールしておかないとな。明日こそはちゃんと時間を決めて部活をやらないと。

なにせ、あいつがいないと隣人部の時間は動かない。

「……あんちゃん。あの幼女の事をやたら気にいったようじゃ」

「そ、そんなことはねえよ。なんだ嫉妬してるのか？」

「っーん」

帰り道、拗ねる小鳩の顔を見て、俺は少しだけ癒された。

逃げ出した先の報い

それは、至って普通に見えて、至って不思議でもないことだ。俺は部活に入った。部活に入って、たくさん仲間を得た。

その仲間と一緒に話したり、部活の方針を決めたり、ともに何かをやったり。

周りからすれば、ごくごく普通の事だ。だが、今俺に置かれているこの瞬間は、普通とは言い切れない程に歪だ。

その部活は、嘘にまみれている。

誰もが嘘をついている。誰もが、己の傷を隠し生きている。

互いに話すことも、内容を決めて行うことも、全てが格好だけで、その実態は偽りだ。

そう……嘘の塊だ。可愛い女の子に囲まれた、人から見れば羨ましいこの環境は……傷だらけの理想郷とは程遠いディストピア。

だが……俺は手に入れた。

その嘘を壊すことができる可能性を。

一人の堕ちた少女を……救うことができる可能性を。

その少女が作った嘘の塊を……誰よりも嘘が嫌いな少女が作らざるを得なかった虚実を……。

かつての俺の親友。優しさという裏切りによって傷つき、墮落を続けるその親友を。

だが、その親友を救うということには、大きな責任が問われる。

その親友を救うということは……大きく先に進むことを強制されるということ。

歪な存在が無理やり先に進むということは、必ずどこかにリスクが発生する。それは明確なことだ。

だが進まなければ。この嘘の空間に未来はない。いつ明日が来なくなるかわかりやしない。

このまま停滞を続ければ、やがては大きな爆発が訪れる。それを俺は……わかつていながら動こうとしなかった。

他の誰かがやってくれる。俺じゃなくても大丈夫。手に入れた可

能性から目を反らし、考えていたのは逃げることだけ。

俺は……逃げたかった。小さな裏切りが大きくなった罪の対象から。

もがき、あがき……。それでも俺は……。

夏休み中盤。

「星奈…… どういうつもりだ!？」

俺は学校の外のベンチの近くで、彼女に怒りを向ける。

そんな俺の問いに対し、星奈は表情一つ変えず、いつもの冷淡な振る舞いで答えた。

「べつに。ただ家で面白い写真をパパに見せてもらったから、あんたにも見せてあげようかなと思つて……」

「……だからって、わざわざあんなわざとらしく隣人部の部室で」

星奈の悪気ある行動に対し、俺は困惑しながら言葉を返した。

この夏休みに入って、ますますこいつが隣人部と絡むことが多くなつた。

だが関われば毎度のように星奈は部員と喧嘩し、ただでさえ陣形を取れていない俺たちの輪をかき乱して帰っていく。

俺としてはこいつを信じてやりたい。こいつがリア充なのはいいとして、その立場を使つて弱い立場の人間を嘲笑つていないことを。

なにより俺のお父さんの親友の娘さんだ。俺も星奈とはお父さんと理事長——天馬さんのような仲になりたいと思つている。

だが、こいつやつぱり……。

「まあ座つてよ。立ってるのはつらいのよ。座つてから耳にタコができるくらい聞いてあげるから」

「……」

俺は収まらない怒りと動揺を一旦捨てて、星奈の隣に座つた。

そして、再度真剣な眼差しを星奈に向けた。

「……星奈。あいつらを遊び半分でからかう目的なら、もうやめてくれ」

「……」

「隣人部は、確かにお前が思っているような普通の集団じゃない。言っちゃあれだが、全員が何かしらの負を抱えている。幸せや平穩、充実なんて言葉から弾かれた奴らの集まりだ。お前のような高みにいる人間からすれば、落ちこぼれの集団かもしれない」

俺は思っけていてもけして口にするべきではない例えを、容赦なく口に出していく。

そうだ。今俺が口にした通りが、隣人部の実態だ。

だが口に出している俺自身が、傍観者としてしているわけじゃない。この俺自身だつて……その枠には当てはまる。

大小はあるかもしれない。あいつらの歪みは俺以上かもしれない。俺はまだ幸せ者なのかもしれない。

だがそうだったとしても、あの部活でやろうとしていることに大小の差はない。皆がそれぞれ、大きな野望を胸に宿している。

だからこそ、いつもあの殺伐とした空気の中で、皆の目には火が宿っている。

変わることを望んでいる。無論、俺だつて……。

「頑張ってるんだ。変わることを望んで、例えそれが他人からすれば小さいことだつて、大きなことになるかもしれない。だから……」

「……そう」

「お前だつてどんな奴にだつて嫌われたくないだろ？ お前はあんなにもたくさんの生徒から熱い眼差しを向けられているじゃないか。理事長の娘として歪みない完璧な存在。俺だつてお前の事を尊敬している。まあその……他の男子のやつらは若干いきすぎた崇拜をしているかもしれないが……俺はそういうのじゃなく、普通にお前の事を憧れとして見たいわけだし」

長々しく何を言っているのか、だが俺は今思える柏崎星奈に対しての個人としての思いを口にした。

心の中で引かれているかもしれない。学園で顔が怖いというだけで怖がられている一人ぼっちの俺を。

疑われているのかもしれない。俺のこの言葉が虚言ではないかと、親同士の付き合いを武器にして近づいているのではないかと。

それならそれでいい。星奈ほどの容姿を持つなら、男の下心を疑ったって罰にはならないだろう。女として当然の判断なのかもしれない。

「……その言葉、親同士の付き合いに免じて信じてあげるわよ」

「……理由はどうあれ、ありがとうと言わせてもらおうよ」

「少なくとも、他の連中よりは信用に値する。ただそれだけよ」

そう、星奈は遠くを見るように言った。

それは褒められているのか、まあ褒められていることとしよう。

とすると、今度は星奈の話題に合わせるとしよう。

その写真の話だ。ちらっと見えたが、小さいころの俺と星奈が写っていた。

俺には覚えがない。とすれば、小学校より小さい頃の話だろうか。

この女とは、初対面ではなかったというわけか……。

俺と星奈にも、何かしらの因果が絡んでいたというわけなのか……。

「……にしても、親同士がそうなら子供の俺らもってことか」

「反応が薄いのね」

「いや、ちよつとは驚いてるよ。俺の幼馴染がこんな美人な女の子だったなんてな」

そう、さりげなく星奈を褒めて言う俺。

深い仲ではないが、友達が少ない俺にも遠い過去に小さな友達がい たということに、少しだけ嬉しく思っている。

柏崎星奈。そして……あの女か。

……あの女、この写真を目にした時驚愕して固まっていたな。なにしろ、予想以上のショックを受けていた。

まるで、自分の中の理想が全て打ち砕かれたかのような、そんな顔を浮かべていた。

もちろん、それが俺との十年前の思い出が関わっているのは間違いないが、いくらなんでも執着しすぎだ。

そんな、たかが小学生同士の友情一つに……。

『あの子がまだ小さかった時に、あの子の家庭に異変が起きた』

……。

『そんな時期に、よぞにゃんには友達が出来たらしい』

……………。

『ああ、辛い時期に心を許せる友達が出来た。あの子にとっては必要な……逃げ道だったのかもしれない』

……………。

もし、その立場が俺だったとしたら。

俺には母さんがいない。小さいころに亡くしてしまっただからだ。

その、例えば……母さんが死んだのがあいつと出会う寸前の話だったとしたら。

自らが大切にしているものを失った直後に、それを埋めてくれる何かを得たとしたら……。

その存在に対する価値つてのは……他人が思っている以上に、心の溝に大きく当てはまるくらいに、深く重いものになるんじゃないだろうか。

俺にとつては初めてできた親友。そう、長い人生にとつての小さな要素でしかない。

だがあいつにとつては、幼い自分に降りかかった果てしなく大きな不幸、それに取って代わるとても大きな要素だったんじゃないだろうか。

その大きな要素、自分の不幸を埋めてくれる私にとつての最初の存在。

最初の親友。最初の少年。最初の英雄……。

あいつにとつての最初というのは……不幸からやり直すための新たな始まりという十年前の俺との思い出というのは……。

けして……何にも汚されたくない。あいつにとつてなによりも大切なものだったんじゃないだろうか。

だとしたら……。それから逃げ出している俺はいつたい……。

それを……重いと避けている俺は……。

「小鷹？ どうしたのよ顔色が悪いわよ？」

「……星奈。やっぱりの写真、あの女には見せていいものじゃない

かった」

「……」

俺はぼそりとそういうと、星奈は黙ってしまふ。

そのまま、神妙な空気が俺たち二人に流れる。

そして俺は考える。夜空の限界についてを。

最近になってますますあいつの気力が減っていつている。あいつが俺に送る視線には気付いていたが、見ないふりをしてきた。

恐らく、夜空はあと一つでも……何かしらの刺激を与えれば壊れる。俺はそう考えていた。

それだけ俺が、気付いていないころに送ったあいつへの心ない言葉の数々と、そしてソラだと気づいてから露骨に避けてきた報いなのだろう。

それらが、遅かれ早かれもうすぐ形となって俺に襲いかかってくるだろう。と、心の中で俺は想像していた。

その時俺は……きつと。

「……なるほど、やっぱり気付いていたのね」

「え？」

「気付いていて見ないふりをしてきた。あの三日月もそうなら、あなたもあなただったってことね。あくバカらしい」

「……まさか」

俺は、星奈の口ぶりを聞いてハツとなった。

まさかとは思うが、こいつ。

「……知ってたのか？」

「成り行きでね」

「……知ってて、あいつの心の傷に付け込んだのか？」

「まあ、そういうことになるわね」

俺の問いに対し、星奈が気持ちのこもらない発言で返した。

それに対し、俺の中で純粋な怒りが湧きあがる。

だが、その怒りを星奈にぶつける資格が、俺にあらうか。

例えそれが八当たりだったとしても、あいつを拒絶した俺には。

「小鷹、よく聞きなさい。あなたにとって、とても大切なことになるか

ら」

「……なんだよ?」

「……汚れ役なら、私が全部負ってあげる。だからあなたに、臆病者のあなたにたった一つの奇跡をあげる」

そう言つて、星奈はベンチから勢いよく立った。

たった一つの奇跡を、俺に……。

どうして、これ以上関係のないお前が……何をしでかすっていうんだ。

それに対し俺は、止めるべきなのか。余計な事をするなど、釘を刺すべきか。

だが、そうしたところでこの女は止まるだろうか。止まった所で、壊れる寸前の夜空と俺の關係に、何かしらの進展が生まれるのか。

考えても答えが出なかった。俺は……何もできなかった。

たった一つ、俺は星奈に尋ねた。

「どうして、そこまで俺に……?」

その俺の問いに、星奈は軽く笑つて、こう返した。

「……」嘘だらけの”私に、あなたは本当の言葉をくれた。そのささやかなお返しよ」

——俺にとってその少年は、親友つてだけじゃなかった。

少年としての純粋なその正義感に、俺は思い焦がれた。

初めて会った時、ソラはいじめられていた俺を助けてくれた。

そのことに対して恥ずかしさが相まって、むきになつてソラを殴つてしまったけど。

弱い物じゃないと、意地を張つてしまったけど。

俺は、その時ばかりは……正真正銘、弱い奴だった。

髪の毛の事をバカにされ、やり返さないのが偉いことだと思つた。自分の心に従うことなく、変に大人ぶっていた俺がいた。

母さんを失った父さんや、小さい妹に心配かけないように、子供という自分を封印していた俺がいた。

それを強いことだと思つていた。変に他のやつらを、いじめていた

やつらを子供のやることだと見下していた。

だが、実際は一人でさびしかっただけ。その一人ぼっちが嫌だっただけだ。

変にやり返せば下手に敵を増やす。暴力を振るえば人が離れていく。

それが嫌だった。それが嫌で、強がりという弱さを見せ続けた。

そんな俺の弱さに、純粹無垢な気持ちで救ってくれたのが……お前だったんだ。

その後、俺はようやく自分の中の枷を外し、やり返した。味方がいることが、なにより心強かった。

そして喧嘩し終わって、お前は俺の親友になってくれた。

親友になった後、俺はずっとお前のやることなすことを見てきた。喧嘩すれば強いし、困っている老人がいれば小さい体で助けたがるし。

弱っている動物がいれば見て見ぬふりする他の大人と違って必死に介抱する。

かみなり親父に怒られそうになった時は、正直に謝って怒られる。

そう、何を成すにも勇敢で、男気があつて……。俺は、そんなお前を傍で見続けていた。

そんなお前に……ソラという少年に俺は……憧れていたんだ。

ずっと、友でありたかった。俺の憧れの親友、ずっと見ていたいと思っていた。

そんなお前を……見続けたいと心から……。

ピロリ♪

ベンチで一人たそがれていると、メールの着信音が鳴った。

着信画面を見ると、そこには夜空からのメールが表示されていた。

『部活をやるから、部室に来てほしい』

もう午後の二時、こんな時間から部活をやるのか……？

この時、俺はどこかしら察していた。

このメールはフェイクだ。部活なんかやらない、俺を呼び出すためのメールだ。

正直放って帰ってしまったもよかった。

どうしてか。嫌な予感がするからだ。

予感……。とにかくやばそうな、ビリビリと空気に伝わる悪寒を感じた。

「……行くしかない……か」

結局、俺は逃げない選択をした。

あいつがどんな状態でいるかはわからない。

だが、ここで逃げてでも変わらない。

それに対し、俺の勇敢な決断に対し、天がどのような結果を出すのかはわからない。

わからないことだらけ。だが……行くしかなかった。

がちや……。

俺は隣人部の扉を開いた。

開くと、そこにいたのは夜空だった。

その夜空を見た瞬間、予感が現実になると悟った。

この女から伝わる。目には見えないながらもこの身を串刺しにしような何かはつきりとわかった。

だが、俺は逃げ出さなかった。というより……動けなかったんだと思う。

「よお……。って、他のやつらは？」

俺はわざとらしく、軽い口調で言った。

それに対し、夜空は無言で圧力を与えた。

部活をやるのは嘘だろう。何か別の目的がある。

「あれ？ 部活やるんじゃないのか？」

口を開くのをやめようか、俺の言葉なんて茶番でしかない。

そんな能天気演技していても、表情が嘘を付けない俺がいた。

そして等々、夜空は口を開いた。

「……夜空？」

「……小鷹、お前には……けして失いたくない、手放したくない親友が

いるか？」

「ん？ なんだよいきなり」

「自分にとって大切な、掛け替えのない親友はいるか？」

その問いに、夜空の重くのしかかる問いに、俺は唾をぐくりと飲んだ。

お前のその問いに対しては、虚実など無縁。適当に答えるだけ、意味のないものと判断した。

俺は覚悟した。もう、知らないふりができなくなることに……。

「……ああ、いる」

「……」

「俺に大切な言葉を教えてくれた。俺に掛け替えのない時間をくれた。俺に……友情の素晴らしさを教えてくれた」

「……」

「俺にあだ名をくれた。小さい時に苦しい思いをしていた俺を、そいつの存在が救ってくれた。今でも……俺の心に残っている」

本心だった。俺が今語ったこと全て、嘘偽りのない俺の言葉だ。

この言葉で満足してくれるだろうか。こいつの方から、俺をタカと呼ぶのだろうか。

この際だ。もう受け止めよう。もう羽瀬川小鷹個人として、三日月夜空個人を見ることはできなくなる。

過去が付きまとう。それによって他のやつらを巻き込むことになる。それを、思い知ればいいのだろう。

「……夜空」

「そうか、そんな親友がいたのか……」

困惑する俺に対し、夜空は凍えるように、小さく呟いた。

そして、俺を見て夜空は……儂げに笑ってもう一度。

「……よかった。そんなに大切な……親友がいたんだ」

泣いていた。俺は申し訳ない気持ちになった。

そして夜空が近づいてくる。十年前の少年と似ているようで、全く違う表情で。

その瞬間、俺は反射的に後ずさった。一歩ずつ、夜空から逃げるよ

うに後ろへ歩を戻した。

やばい……。やばい、やばいやばいやばいっ！

そう、俺はどこかで……。この夜空がとてつもなく危険な状態だと察したのだ。

だが後ろの扉は閉まっている。それに気づいた時には遅く、夜空は目の前にいた。

そして、彼女は俺に対して……。

「なっ!?!」

俺に対し、唇を重ねた。

そしてそのまま勢いで、俺を床に押し倒した。

思いつきり頭を打った俺は、キスされた衝撃を忘れるくらい痛みを感じ、もがき苦しむ。

「いつてえー……!?! よ、夜空なにを!?!」

夜空の顔が目に映った時、首元に強烈な痛みを感じ、俺の全身を苦しみが襲った。

その、俺の目に映る夜空の顔は、全ての憎しみを一つにまとめたような、凶悪な形相をしていたのだ。

まるで、俺を本気で殺そうというくらい……。迫力を感じた。

俺は苦しみも勝ることながら、絞りだるように夜空に対し言葉を発する。

「がっ!! よぞ……。ら……。なに……。を……」

「お前が……。お前が悪いんだ……。全部お前の……!!」

「ぐっ……。や……。やめろ……。どうして……。こんな……」

「……」

俺がいくらもがこうが、夜空はけして首を絞める力を緩めない。

ものすごい力で俺を締め殺そうとする夜空。

それに対し俺は必死にもがく、だが同時に諦めを抱いていた。

そう……。これは俺に対しての罰だ。

俺が、夜空をソラだと知っていながら……。拒絶し続けていたことに対しての報い。

だから、受けなくてはならないと思った。それが大惨事になろう

と、俺はもう逃げられなかった。

「ああ……がつ!!」

意識すら朦朧としてきた時、俺は怒り狂う夜空を見て、十年前を思い出す。

十年前、互いに信頼しながら、けして裏切ることはないと信用しながら、一緒に遊んだソラとの思い出を。

あの時のソラの、忘れられない笑顔。あいつと共に過ごした、掛け替えのない日々。

その笑顔と、日々を殺したのが……俺だっていうなら……。

だったら俺は……この女に殺されても……おかしくはないのだろうか。

——ああ。

なんかもう……どうでもいい。

ソラ、それがお前の望んだことだっていうなら。

俺は、甘んじて受けてやるさ。

殺せばいい。それが裏切った俺に与えられる罰だっていうなら。

俺は……三日月夜空に殺されてやるよ。

『——タカ!』

……えっ?!

突如聞こえた、ソラの叫びが……。

『行っちゃいやだ!! タカ!!』

……そうだ。

何を……俺は考えている。

もし、こいつが我に返って、自らの手で親友を殺したことを自覚したら、こいつはどう思うだろう。

あのソラが、タカを殺したって思い知ったら。きっとソラは……。

「た……たすけ……」

だめだ……。だめだ!!

それだけは……させてたまるか!!

今俺は……三日月夜空に殺されてはいけない。この女の手に……かかったら。

そんなになつてまで、俺に責任を押しつけたのかよ。自らの嘘さえ、俺のせいにするつもりだったのかよ。

「夜空……お前……」

「がほっ!! がっ……私……ああ……ど、どうして……あ、あああああああああああああつあああつあああつあああつあああ!!」

そして、この無様な女の悲鳴を聞いて、俺は等々……ソラという親友に対してすら失望した。

なんとという愚かだ。なんとという醜さだ。汚くて、見るに堪えないクソだ。

それがかつての俺の所業なのか? 違う……違うよ。これが、ソラという少年の正体なんだ。

そうだ……そうに違いない。俺のソラが……こんなクソみたいな女なわけがないって、そう思っていたのにな。

そうやって可愛い姿で俺に助けを求めて。やめろよふざけるなよ……もうお前なんて……。

「……まさか、お前に殺されかける日が来るとはな」

「ち……ちが……違うんだ」

「……何が、違うんだよ?」

「違う……私はただ……」

俺は収まらない怒りを、冷徹な言葉に乗せてかつて親友だったものにぶつける。

もう、自分で制御できない。慈悲一つ与えられない程。

俺が抱き続けた罪の意識が、歪んだ形となって俺を包み込み制圧する。

その結果、俺の中で一つの答えが生まれた。

「……こんなことに」

「……なるくらいなら」

そして、一人の少年と少女は同時に口を開く。

かつて親友同士だった。二人に溝が大きく空いた。

それはもう、埋まることはないだろうと、後悔すらさせてくれないように。

「最初から……親友になんてならなければよかったんだ」
その言葉を最後に、俺は一人部屋から去った。
そして部屋近くの廊下で、俺は身震いを抑えられなくなり。
かつての親友に対して抱いてしまった歪んだ感情に対し、もう後悔
を抱けなくなり。

「……なんで俺、なんで俺こんな。こんなの……俺は望んでなんか
あふれ出る涙。

それが止まらなくなって、一人男泣きをする。
自分が親友に対してやってしまったことが、償うこと一つ出来ない
ほど進んでしまった現実には。

それに対し、先ほどの自分の情けなさに、涙を流すことしかできず。
「ごめん……ソラ。ごめん……ごめん……ごめん……ああ……あああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ!!」

一人ぼっち、廊下で哀れな叫びをぶちまけた。

父親との電話

静寂に包まれた廊下。

壁を伝い、よろよろになりながら廊下を歩く。

この空気は、正直嫌なものだった。

黙っていては何も変わらないと、変化に対する思いを無情にも現実で思い知らせようとするこの空気が。

変化か……。

確かに変化は起きたと思うよ、最悪な形となってな。

人生は上手くいかない、上手いようには転がらない。

そう、変化を良い物にするためには、人は勇気を持たなければならぬ。

俺には、その勇気が無かった。故に……変化は最悪な方へ転がった。

どこかで俺は、急激な変化が起こることを恐れていたのか。

あの女は過去を求めた。そして俺は現在を……。

だが、隣人部に必要だったのは……明日だった。

俺とあいつ、二人が作り出した隣人部という空間。明日を求めて集った仲間達。

俺たち二人が巻き込んだ。巻き込んでいて……巻き込まれたあいつらが知らない所で、中心となる俺たちが同士打ちをした。

一方的な都合ばかりを、押し通して。

「ふふ……。つたく馬鹿げてるんだよ。俺も……あの女も、結局は何一つ変えられない。明日どころか、過去だろうと現在だろうと……」

俺はそう皮肉交じりに、笑うしかない現状に甘んじる。

恐らくあの女は、隣人部を終わりにするだろう。

巻き込んだ理科や幸村の気持ちなど知ったことなく、一方的に託して放り投げることだろう。

俺としてはそのことに対して償わなければならない。だがそれを、全部あの女のせいにもできる。

『汚れ役なら、私が全部負ってあげる。だからあなたに、臆病者のあな

たにたった一つの奇跡をあげる』

急に、星奈に言われた言葉を思い出した。

たった一つの奇跡か……。未だに、その意味が理解できねえよ。

仮にその奇跡、与えられたとして……。それを俺が生かせたのだろうか。

いや、きつと不意にしたらだろう。こんな無様な結果なんだからな。

「あつれー？ 小鷹くんこんなところでなにをしてるんだい？」

と、正面から聞き覚えのある愉快な声が聞こえてくる。

それはケイトだった。隣人部の顧問であるこの学校のシスター。

あの嘘の空間で、あの茶番のためにわざわざ顧問になってくれた人だ。

この人にも、悪いことをしてしまったんだな。

「別に……」

「んだよ愛想が無い。顔は怖くても君の明るいその性格、私は嫌いじゃないんだがね。そんな暗いと、顔に似合って怖く見えるよ」

「はっ。そうやって、いつもいつも元気でいられるわけじゃないんで」
俺は今の自分の気分も相まって、ケイトと戯れるほど余裕が無かったのか、ケイトの言葉を軽く受け流す。

そんな俺に対し、ケイトは何かしら察したようで、今ほど聞きたくない名前を出し、俺に尋ねてきた。

「あつはっは。さては……よーぞらくんと何かあつたね？」

「……」

「あらら凶星だよ。めっちゃ顔に出てしまっているよ〜」

「……知るか」

俺は少しばかりのしかかるような思い声色で、ケイトに返した。

頼むケイト。今だけは放っておいてくれ。いつもなら軽い気持ちで談笑できるんだが。

今だけは……マジでキレてっから……。

「もう知るか。三日月夜空も……隣人部も……過去の思い出も親友の事も。もう……全部知ったことか」

「荒れてるね小鷹くん。だが、全部放り出して投げ出して、それで解決

できるなら構わないが……。本当にそれでいいのかな？」

「……」

「前から何かあるとは思っていたが……。因縁というのは簡単には切り離せないんだ。放り出しても、逃げてさえしても、最終的にはくっついてくる。罪の意識なんてのは怒りに身を任せても結果が残る限り、それが現実に存在する限りは見て見ぬふりなんてできないんだよ」

そう、人の気も知らないで長々と口にするケイト。
うるさいな。ごちゃごちゃと、あんたに何がわかるっていうんだ。

因縁だと。罪の意識だと……。そんなもん。

「ケイト……。これ以上はマジ殺すぞ……」

俺は背を向けてケイトに発した。

きっと今の俺はめっちゃくちゃばい顔をしているはずだ。ただでさえ強面、多分この教師を泣かせる自身すらある。

だから目は会わせなかった。本来教師に向かって口にする言葉ではないと知っていたが、今は自分の怒りを抑えられない。

説教なら、後々聞きに行く。だから今だけは……。

「……あく怖い怖い。君もよーぞらくんと似たような文句を口にする」

「ケイトっ……。!!」

「わかったわかった。」今日は「見逃してあげるよ。家に帰ってゆっくり考えなさいな。ただ……」

去り際、威圧する俺に対し背中から、ケイトは言葉で俺を射抜いた。
「……その罪からは、けして逃がしはしないからね」

家に到着し、俺は重くのしかかったものを背負いながら、玄関で靴を脱ぐ。

すると、俺が帰って来たのに気付き、妹の小鳩が玄関まで迎えに来た。

「あ、あんちゃん。いつもより遅いばい……」

結構遅くに返ってきたからか、いつものレイシスではなく素の小鳩

の出迎えだった。

いつも通りおかえりだけでも言えばいいものを、気分が悪かったのか無視して通り過ぎてしまった。

「……なっ、何かあったと？」

当然というべきか、いつもと雰囲気が違うことを察した小鳩が俺を氣遣う。

余計な心配をかけたくはないが、どうも平常心を保てるほどの余裕もないらしい。

「……ちよつとな」

誤魔化すには意味を成さないと判断し、俺は少しばかり濁して言う
と、小鳩は黙りふけてしまった。

……思い返してみれば、俺が機嫌を悪くして家に帰ってきたことなんて、初めてな気がする。

だからこそなのか、新鮮なのか、小鳩は何をしていいかわからなくなったのだろうか。リビングであたふたしていた。

我が妹に心配させるとは。お兄ちゃん……駄目な奴だな。

「く……ククク。何があったかはわからぬが、眷属の無礼な態度一つ見過ごすのが主としての寛大な……」

「小鳩……。ちよつと黙っていてくれ」

「ひっ！ ふ……ふいえ？」

何をやっているのか、冷たく小鳩にそう言い放つ俺。

だが、今は静かに考えていたい。ゆつくり、足りなすぎる時間でも少しは。

自分とって人生の中で最も大切だった友情を破壊した。

十年間纏っていた物との決別。それに対して軽々対処できるほど、俺はできた人間ではなかった。

その後、俺は一時間ほど部屋でたそがれ、午後六時半を過ぎたあたりになって。

夜ご飯を作らないわけにはいかなかったので、台所へ向かう。

その際リビングで小鳩と目が合い、怯える小鳩を見て多少申し訳なく思う。

どれもこれも……全部あいつの……。

三日月夜空の……せいだ!!
がしゅん!!

「ひいー」

台所へ付くと、俺は前触れなく椅子を蹴り飛ばした。

駄目だ……。怒りが収まりつかねえ。

くっそ。駄目だ腹が立つ。むかつくむかつく。

あの女……。あの女さえいなければ俺は……。

「あ……あん……ちゃん？」

すると、涙目な小鳩の震えた声に気が付き、俺は我に返った。

やばい、完全にびびってしまっていた。

ここは……謝った方がいいか。

「……ごめん。き、気にするな。夜ご飯の支度をするから」

俺はおぼつかない口調で小鳩に言って、なんとか安心させる。

いや、多分余計に不安にさせただろうか。

考えるな。そうだ……考えなければ。

「……」

ただ無言で、黙々とご飯の支度をする俺。

普段は後ろからアニメの音声が響き渡るのだが、小鳩はテレビすら見ないで黙っている。

そのことに対しても俺は何とも思わず、考えるのは今日の出来事の事ばかり。

あいつとの友情、俺がもう少し早めに動けば変わっていたのか。

俺が気付いてあげれば……よかつたっていうのか。

だがそうすれば、隣人部はどうなる。理科や幸村は、夜空の都合で置いて行かれるかもしれないなかった。

それを見ても俺が下手に対処すれば、俺があいつを街においていた事に対しての罪が付いてくる。

俺があいつを歪ませた。その事実だけがただ付きつけられ、それがあいつらを巻き込んだことに繋がる。

そうならないよう俺はあえて見ないふりをした。時間さえ動かな

ければ、あの歪な空間でも壊れることはない。

だが、俺のこの勝手な考えが、今の事態を引き起こした。夜空が壊れてしまった。壊れたあいつを俺は、無情に突き放した。

失敗した。失敗した失敗した失敗した。

だ、だったら他に選択肢はあったか。例えば隣人部を立ち上げる前に気づいて。

いや、俺が気付いたのは大友先輩の証言があつてこそだ。それまでは疑うまでが限界だった。

隣人部が無ければ俺があいつをソラだと気付くことはなかった。だから、隣人部の創部は脱がれない。

失敗した。失敗した失敗した失敗した。

だ、だったら。俺がこの聖クロニカに転校してこなければ。

「痛っ!!」

と、あらゆることを考えている最中、激痛が襲い我に帰ると。

左の親指から、血がだらだらと流れていた。

やっべやっちまった。野菜の皮むきに失敗するなんて、きつと余計なことを考えていたからだ。

ちよつとばかし肉がえぐれてるな。ジンジンして結構痛い。

「あんちゃん！ だいじよぶか!!」

と、俺を心配して台所へかけてきた。

「ば、絆創膏持ってくる!!」

と、慌てふためきながら絆創膏を取りに行く小鳩。

その間も、俺は上の空で、痛みだけを感じて遠くを見ていた。

痛みか……。こういう傷つてのは、消毒して絆創膏を貼れば治る。

だが……。心の痛みは治らない。

心の痛みには絆創膏も、消毒薬もない。

だから治らない。だが……。それでも癒すことはできる。

その痛みに対し、向き合ってくれる人の心さえあれば。

「……………」

まただ……。

俺はまた、人知れず涙を流す。

「あ、あんちゃん！ そんな痛かったと!？」

「……うん。痛いよ……すげえ痛いよ。我慢できないくらい……痛
い」

なんとという情けないことか。

俺は痛みを小鳩に訴え、我慢できずにぐずぐずと泣く。

無論、それは傷の痛みじゃない。胸の痛みだった。

心の傷で、胸が苦しい。

結局小鳩には、インスタントラーメンで我慢してもらった。

その後小鳩はいつもより早めに部屋に戻った。

俺は一人、リビングでテレビを見てぼーっとしていた。

その間も、俺はこの事態にどうすればならないかなんて、無駄なこ
とを考えていた。

考える。そして答えにたどり着かない。それを繰り返して午後
の十時半を回ったところだった。

突如、家の電話が鳴った。

『おう小鷹、元気にしてたか?』

「と、父さん?」

俺は電話を取って、少しばかり驚いた。

相手は俺の父親である”羽瀬川隼人”。

小さい頃母親を亡くして以来、男手一つで俺と小鳩をここまで育て
てくれた。俺の最も尊敬している人の一人だ。

考古学者をしており、昔から仕事の都合で転勤が多かった。ソラと
別れたのもその転勤があったからだ。

そんな父さんは今アメリカにいる。俺たちも本来はアメリカに行
く予定だったが俺達がそれを嫌がったため俺達は実家のマイホーム
に残ることになった。

そして父さんが親友であり星奈の父親でもある聖クロニカ学園の
理事長の柏崎天馬さんに便宜を図って、聖クロニカ学園に転入するこ
とになった。

仕事で忙しい中俺たちにそれほどの苦勞もさせない、子供達のこと

をきちんと考えておりその上人当たりもいい。

父さんは俺や小鳩と違って友達が多い、『僕は友達が多い』という作品があったらきつと主人公だろうな。

そんな父さんだが、いつも前触れなく突然電話をくれる。

俺としては慣れたことだが、今日に限って電話が来るとは……。

『学校では上手くやってるか？　なんかザキんとくに挨拶しに行つたとか聞いたが、あいつのキャラは結構濃かつただろう。真面目そうでキャラが濃いやつだからなあ』

「あ、ああ。最初は威圧されたけど、話してみるとすごい話しやすかつたよ」

『はっはっはそうかそうか。あいつは見た目だけなんだよ。そこは前とそっくりかもなあ』

と、相変わらずのテンションで話しかけてくる父さん。

俺としては、今めっちゃ絶不調なんだけどな……。

そんな俺の不調を、隠せるはずもなく、重いトーンで話していると。

『……小鷹、なんかあつたのか？』

「え……？」

『明らかに、いつもと話し方が違う。なんか重苦しいぞ？　まさか

……夏風邪か？　夏休みに夏風邪引くとはもったいないことこの上ないな』

「……いや、風邪は引いてないよ。ただ……その……」

やつべえ。また涙出てきた。

なんなんだよさつきから、俺はあの泣き虫とは違うんだって。

もう十七にもなるつてのに、ガキつぽく泣くんじゃねえよ。

『……言いたい事があるなら、言え。なんでも聞いてやる』

「父さん……ごめん。俺……」

『ただ、国際電話つて料金高いらしいからな、そこらへんは考えて話をまとめてほしいな』

「……台無しだぜ親父」

父さんの冗談（というか結構本気）を聞いて、俺の涙は吹っ飛んだ。俺は遠慮なく、自分が今抱えている問題を父さんに打ち明けること

に。

「俺さ、今日……喧嘩しちやっただよ」

『喧嘩あ？　また珍しいこともあるもんだな。つかお前喧嘩する相手いたのか？』

「ああ、この学校に転校してきてから部活に入って、ずっと前から仲の悪かった部長と……溜まりにたまったものが破裂するかのような大喧嘩を繰り広げて……」

『そ、そうか……。なんつうかその……。お前からのそういう相談……初めてだな』

父さんは電話越しで、少しばかり困ったようにそう言った。

確かに初めての事だ。中学の時は学校の様子を話すほど話題なんてなかったし、つか友達いかなかったし。

『それはその……お前が悪かったのか？　それとも相手方が悪かったから喧嘩になったのか？』

「……正直、お互い様だ」

『お互い様なら、互いに悪かったと握手でも交わせば？』

「いや、もう……そんなんじや仲直りできない。なにせ……十年間つもりに積もった因縁なんだから」

『……まさか、十年前お前が別れを告げられなかったって子と』

やたら察しがいいのか、親父は俺とその相手の状況をなんとか掴んでくれた。

その後、そいつが少年ではなく少女だったという事実や、俺との十年前を意識するあまりにやらかした数々のこと。

そして俺がそれに対し、どういう気持ちを抱いてきたか。対処できず今になって悩みまくっている事などを話した。

『……そりやなんというか、めっちゃ大変だったな。つかお前、部活に入ったこともそうだが、色々激動しすぎちゃいないか？』

「ああ、もう何が何だかわからない。隣人部もそうだが、この数ヶ月、俺にしては大きなことが起こりすぎだ。そしてこれから先も付きまとう。父さん、俺はどうすればいいんだ？　どうすれば……」

『どうすればと言われても、逆に聞くが……お前はどうしたいんだ？』

「だから……それがわからないんだ」

俺は自棄になつてか、答えを投げ出すように父さんに今の心境明かす。

父さんが答えを持っているわけじゃない。だがわかっていても、答えを求めずにはいられない俺がいた。

『そうさな、じゃあ質問を変えてみるか。お前……その子の事どう思ってる?』

「え?」

『その……お前との過去のために間違いを犯したその女の子の事だよ』

「……俺は……許せない」

俺は正直に、そう答えた。

「許せないんだ。確かにあいつが歪んだのには俺の一因もある。だが……それなら素直に俺に打ち明けてくれればよかった」

『……』

「それをあいつは、自分と同じ立場の人達を巻き込んで。自分の都合ばかり押し通して……助け一つ求めず。自分勝手に暴走して自滅して……俺はそれが……許せない」

『……そっか』

俺がそう自分の思いを伝えると、父さんは優しい声でこう返した。

『それな小鷹。大きな勘違いをしている』

「か、勘違い?」

『ああ、それは”許せない”んじゃない。”許さない”、”許したくない”だけだ。お前が意地を張っているだけだ』

「……許さない、許したくない……?」

『確かにその子は大きな間違いをしたかもしれない。自分勝手に突き進み、戻れない所まで来て、意地張って失敗した。だがその行動の真意を、けてして無下にしていい物じゃない』

「だ、だがあいつは……。他の人たちの気持ちさえ犠牲にして!!」

俺が強く否定をすると、父さんは夜空を庇うように返す。

『別に、その夜空つて子の味方をするわけじゃないんだが。きつと

「……その子迷っていたんじゃないか？」

「え？」

『人の本質なんてのは、簡単には変わらないもんだ。それがどれだけ歪もうが、人が本来持つ性格や矜持は、簡単にはねじ曲がらない。優しさや情なんてのを簡単に捨てれる奴つてのは、そいつは……もう人間じゃねえよ。それこそ……記憶や自分を失わない限りはな』

「……だ、だとしても!!」

俺が強情を張ると、父さんは俺をなだめるように、まずは落ち着くようにと言った。

そして、今度は父さんの考えを俺に話してきた。

『気になる点がいくつかある。まずどうしてその子、お前に自分のことを話さなかったんだろうか』

「そ、そりや……。十年前と今の自分を比べてほしくなかったからじゃ」

『まあ……それもある。故に……”それしかない”とは言い切れない』

「父さん……？」

『真実はいつもひとつ。だが真相は一つとは限らない。もしその子がお前との過去だけが原因で自身が歪んだのだとするなら、それを戻してしまえば解決する。そこに……歪んだ自分と比べられたくないからってだけでそれをやめてしまうのは、ちと気が弱過ぎではないか？』

「た、確かに……」

父さんはまるで名探偵のように、次々と己の持論を並べて行く。

『次に、その子はどうして部活って手を思いついたんだろうな』

「……それは、俺を拘束できる場所が欲しくて」

『……お前、結構自意識過剰だな』

「う、うるせえ！」

『まあいいや、自分のことを話すのが苦手な子だ。時と場所を確保したいと考えてもおおかしくはない。だが……それは一要素であって、お前と話すのなら部活なんて使わなくてもできる』

「……そう、だな」

……そうだ。なぜ気付かなかったんだ。

あの女は……なんで部活なんて手を使おうと思ったんだらう。

あの時話した話題がたまたま部活についてだったからか、いや……それだけにしては思い切りが良すぎる。

俺を拘束する目的にしても、父さんの言う通り、転校してきて人が寄ってこない俺と話す機会なんていくらだってある。

だとしたら……考えられるのは一つ。周りの目がある場所で、俺と話すことができなかつたから。

しなかつたんじゃないんだ……。”できなかつたんだ”。

『そして最後に、お前目的ならどうして他の部員を集めたんだらうな』

「そ、それについては明確だ。うちの部活は三人以上いなければ……」

『じゃあ……”誰だっついていい”よな?』

「!？」

『なんでその部長……。自分と似た立場の特殊な生徒に絞って入部させたんだらうな。お前の存在もある、学校に迷惑をかけない程度に脅して仮入部でもさせて幽霊部員とすることで、人数を確保するという手だつてある。なのになんで、わざわざ本格的に入部させて部活動まで行う必要があつたんだ?』

俺は、圧倒されていた。

俺は考えもしなかつた。夜空の行動の真相を。

ただ明確にわかる程度のことだけに目を向けていた。だが、父さんは俺が話したことを聞いただけで、軽く想定して見せた。

これは、多くの友人を持ち他者の気持ちを理解し続けてきたからこそその技術だつた。

『以上の事をまとめるとだな。その子の悩みにはお前との過去だけじゃない何かがあり、なるべく学校全体に知れ渡らないように配慮する必要があり、そして……自分の境遇に対して引け目を感じており、お前の過去を取り戻すことではない、大きなことを成してもつと”別の大きな何か”を払拭しようとしていた……』

「ま、まや……か……」

『その子……。何か”家庭に事情”を抱えていないか？』
「!？」

俺はこの時ほど、父さんという人間がすごいと思ったことはなかった。

数多くの問題に関わってきた、そして自分自身が大きな不幸を知っている者。

そして、その不幸を退けた者だけができる強さだった。

俺はそれを、電話越しに体感した。そして戦慄した。

『十年前にお前に裏切られたことにだって、十年間癒えない傷になって残りつづけるのはおかしいだろ？ だって十年だぞ、お前が忘れてその子が忘れられないわけがないんだ。それを引きずるほどの何かがある……。あつたとしたら考えられない』

「……そうだ。どうして俺、知っていながらそれを踏まえて考えられなかったんだ？」

『親に知られたくないから教室で大きなことはできない。問題がある家庭には教師の目が行き届く。お前の容姿を考慮するなら、不良みたいなやつと娘がつるんでいるだなんて情報、親に密告されたくはなかったんじゃないかな』

俺は、それらを聞いて確信した。

夜空の歪みは……俺との過去だけではない。

改めて、その歪みの原初、そのことに目を向ける。

それは……三日月夜空の家庭の事情。

だから、俺との過去を取り戻すだけでは、けして変わることはない。そうだ。俺とあいつの過去、それに決着をつける前に。

あいつと対話をする前に、まずはあいつの……閉ざされた心を。

そして、それを救えるのは……。

『——それは、彼女を救える人間が君しかいないかもしれないってことだよ。君にしか救えない人間がいる。その事実を目の前にした時、君はそうやって好き勝手御託並べて、自分じゃなくてもいいだなんて言ってしまったっていいのかな？』

途端に、ずっと前にケイトが言っていた言葉が俺の中で再生され

た。

あいつの歪みは、あいつのものだ。

そしてあいつの償うべき罪も、あいつのものだ。

だが……それらは自己修復できたとしても。その原因となつてい
る決定的な何か。

それを修復するためには……他の誰かの力が必要だ。

そう、ソラとタカの過去以上にあいつの障害となるべき問題……。

ようやく……全ての真実が見えてきた。

『なあ小鷹、お前は自分が”救われたい”と思うことをどう思っ
てい
るんだ？』

父さんは突如真剣な口調で俺にそう聞いてきた。

「それは……傲慢だから悪いこと……かな」

『自分勝手と言えば悪く聞こえるな、けどな……もし他人がお前に
『救われてほしい』と思っていれば、お前が救われることは正義に繋が
るだろう』

「俺が救われることを、望んでいるやつら……」

『それと同じで、彼女が救われたいと思っ
ている事は、けして都合のい
いことじゃない。きつとお前の他に……夜空ちゃんが救われること
を望んでいる人達が……いるんじゃないかな？』

父さんにそう言われ、俺は心の中で同意していた。

あいつは確かに間違つた。だからといって、救われるに値しない人
間じゃない。

むしろ、あいつの間違いを修復するには、あいつが救われるしか
ない。

いや、あいつだけじゃない。あいつとの因果がある、俺自身もだ。

そして救われるためには、勇気が必要だ。一つでも先を進もうとす
る、勇気が……。

過去でもない、現実でもない。見えない明日を見ようとする……覚
悟が。

『そんなお前と夜空ちゃんが今、部活の奴らのためにできることはな
んだ？』

「……俺達が和解すること。俺達が救われることだ」

『それが、隣人部……だっけ？ 友達を作る部活としての最初の成果になる。それがやがて部活の未来にも繋がる気がする。って……父さんは思うんだけどな』

「ということは、俺と夜空の関係は……」

『もうお前ら二人だけの問題じゃねえ、お前ら二人の問題は部活全体の問題だ。だからそれを正しいことと信じて進め』

父さんは力強く、俺を後押ししてくれた。

もう俺は、怖いと思う必要はないのかもしれない。俺はただ、あいつに全てをふっつけるだけだ。

今日得た怒りも、痛みも、苦しみも……。

抱え込んでいた俺の全てをぶっつけ、俺自身もあいつの全てを受け取ればいい。

それがどういう結果になろうと、もう俺は怖くない。

最悪の結果が待っているかもしれない。だけど俺は、俺のためあいつらのため……。そして夜空のために最高の結末を描いてみせる。

それが俺の……みんなが信じてくれるであろう正義だと思うから。

「……父さん」

『なんだ？』

「父さんにとって、友達ってなに？」

俺はこの会話を通して思ったことを純粹に聞いた。

その答えを、聞いてみたいと思ったから。

『——そうだな、簡単にいえば心から信じてくれる人、心から信じられる者かな』

『——人間、何か行動を起こそうとする時にそれを正しいことだと信じようとする。自分のことだから正しいと思うことは当たり前だろう』

『——だけどそれは自己満足でしかない。その時友達は、自分が行おうとしていることを正しいと信じてくれる。反対に間違っているであろうことは間違っていると指摘してくれるだろう』

『——友達が正しいと信じてくれるから俺達はそれを信じて正義を行える。間違っていると指摘をしてくれるから間違いを起こさないよ』

うにできる』

『——そして間違つたとしても、本気で対話して解決することだってできるだろう。だって友達なんだからな。遠慮をするな迷惑をかける。自分の全てを伝えそいつの全てを受け入れてやれ。そしてそいつを……友達である”そいつら”を1000人分大切にしてくれ。そしてあなたはお前は、そいつらに1000人分大切にされるはずだ』
父さんは俺の質問に対する、最高の答えを用意してくれたと思う。ありがとう父さん。大げさかもしれないが俺にとってこの問題は大きなことだ。

友達も少ない俺が、最初に経験した大きな出会いと別れ。そのことに対する全ての因縁。

夜空……ソラ。俺はお前との出会いも別れも全て大切に。お前の悩みも思いも見て見ぬふりをして逃げ出したかもしれない、だが俺は今改めて、それらに向き合おうとしている。

傲慢だと笑うがいい、都合がいいと馬鹿にするがいい。だけど俺は覚悟を決めた。その覚悟は誰にも否定させやしない。

過去があるから現在があり、それが未来へとつながる。俺はそう信じている。

俺はあの時、お前との楽しかった日々がほしかったんじゃない。

きつと、タカという少年は……。ソラとの今ではなく……明日を……。

『おっと、長く話し過ぎたな。じゃあな小鷹』

「……本当に、ありがとう父さん」

『なに気にするな。親つてのはな……どんなことがあつても子供の味方をするもんだ。そして……子供を信じつつけるものなんだよ』

「……俺、父さんの子供で本当によかったよ」

『バーロー、泣かせんじゃねえよ。あ、そうだ小鷹。最後に一ついいか？』

そう、最後に言い残したように、父さんはこんな質問を俺にぶつけてきた。

「なに？」

『お前さ、その夜空って女の子に……ホレたの?』

「ぶっ! ベ、別にそんなんじゃねえよ! ちっげえよ!!」

『はっはっは。グツナーイ☆』

そう軽快に電話を切って、しばしの沈黙が流れた。

そして俺は、改めて覚悟を決める。

夜空と、腹を割って話す覚悟。

そして……あいつの持っている事情と、向き合う覚悟を……。

「……待ってるよ……泣き虫」

先ほどまでの重さが嘘のように軽くなり、俺は自室に戻って思いきり寝た。

羽瀬川小鷹の覚醒

翌日。

朝の十時、少々遅くなったかと思いつながら、起床する。そして三十分後にやってくる学校行きのバスへ乗り、学校に着くまでに色々考える。

昨日の今日だ。あいつがいつも通り部活をやっていたとして、どういう顔をして会えばいいのか。

というか、そもそも部活にきているのか？ あいつのここぞという時のメンタルの弱さは折り紙つきだ。

もう少し早めに起きればよかったかな。一応……電話の一つでもかけてみるか。

『お客様の電話番号は、着信拒否設定されております……』

……あの女。

思いの他応えているみたいだな。こりや……部活が無いことを想定しておいた方がいい。

だが、他の連中が来ているかもしれない。この際だ、あいつらに全ての事情を話して協力してもらおうのも手か。

そんなことを考えていると、バスは学校に到着し、俺は走って部室へ向かった。

たのむ、素直に部室にいてくれ……。

そんな面持ちで部室の扉を開けると、そこには……誰もいなかった。

夜空はおろか、理科や幸村までもが来ていない。

「……んなことだろうとは思ったが」

一応隠れているかも……なんてバカなことを思いつながら、部室へ入り椅子に座る。

考えるんだ。まだ手遅れじゃない……。そう……信じたい。

俺とあいつの過去の過去。その決着をつける資格が俺にはある。だがその前に、あいつの持つ事情とやらを解決する力を貸してやりたい。

となると、家に帰ったか。だったら、直接家に尋ねるのが手っ取り

早いか。

……夜空の両親か。離婚して母親しかいないとは聞いているが、その母親……相当まいつているみたいだからな。

護身用にカッターでも持っていくか。いやいや何を考えているんだ俺は……。

がちや……。

突如、部室の扉が開いた。

夜空か、他の誰かか……。そう思い目を移すと。

そこにいたのは、高山ケイトだった。

「おっそーい。遅いよ……小鷹くん」

そう軽快な口調で俺に言うケイト。

遅いということは、少し前までは部活をやっていたということか。

「ケイト、あいつらはどうした？」

「人数が揃わないから、みんな帰っちゃったよ。駄目じゃないか、君みたいな真面目くんが早く来なければ、部活はまとまらないよ」

そう、軽い口調のケイト。

帰ってしまった……か。やっぱり早起きは三文の徳って言葉、本当らしい。

「そっか。したら俺も帰るわ……」

そう、俺が部室の出口へ行こうとした時。

ケイトは静かに、その扉を閉じた。

まるで、俺が帰ろうとするのを邪魔するように。

「……なんのつもりだ？」

「小鷹くん。せつかくだし……私といいことしようよ」
「……」

いつものようにお遊び半分なケイト。

いつものように……。だが、そう見えて、全く違う感覚を覚えた。今日のケイト……。なんか、マジでやばい。

扉を閉じて、俺を再度見たこの女の目は……とてつもなく凍えるような眼差し。

睨まれるだけで戦慄する。内側から出るのは……とてつもない怒

り。

俺は、ごくりと唾を呑んだ。

「……その、俺やらなきやいけないことがあるんだ。とても……大切な用事があった」

「小鷹くんさ……。君は都合がいいねえ。怒りに任せれば嫌なことから逃げられると思い、考えなおしてみればなんでも思い通りに動くと思っっている」

「……」

「あのさ。薄々感じてるとは思うんだけどさ。今日の私……昨日の君以上に……頭、イカれてるからね」

そう、いつもの軽快な口調はどこへ失せたか。

徐々に変化する。それは冷徹で、相手突き刺すような棘のある言葉に。

明らかに怒っている。そりやまあ……。怒る理由はわからなくもない。

散々部活だなんだと迷惑をかけておきながら、相談一つもせず大ゲンカして、部活をめちやくちやにした。

昨日は昨日で怒りのままに突っぱね、今日になってわがままを通そうとする。

そりや……。怒るのは当たり前だ。俺は日本人の謝罪の骨頂、DOG EZAをケイトに決め込んだ。

「ケイト……済まなかった。お前の説教なら後々何時間だって聞く、だから今だけは……」

「……あ、そう？ いやいいよ別に、私を丸めこんで好きなことしにいけばいいさ」

「うっ……。なんか言い方があれだが、そしたら俺は」

「ただ、これを見ても……君は私を放って行けるのかな」

そう言っつて、ケイトはとあるものを取り出し、俺に見せびらかした。それを見て、俺は目を見開いた。

「……退部……届？」

「そうそう、今日の朝よーぞらくんがさ、そりやみすばらしい顔でさ私

にこれを私に来てさ。いやあ教師としては申し訳ないと思いつつながら、心から笑いがこみあげてきたよなはっはっはっは」

「……」

「自分勝手に男一人追いかけてさ、部活まで立ちあげて同類集めて仲良しごっこまでして、飽きたら全部投げつけてさあ。いやあマジ笑えるよね。笑えるっしょ？　つか笑えよ。この場でそれを一番に笑えるのは、まごうことなき君のはずだよ。ヒヒヒ……ふへへへへへへえ!!」

「っ!!」

俺は内から湧き出る感情に身を委ね、一目散でケイトの方へ駆け寄った。

そして力づくで退部届を奪おうとする。が、ケイトは簡単に渡さず俺を弄ぶように逃げ回る。

「てめえ……。それを俺に渡しやがれ!!」

「はあ？　なぜ？　どうして？　私は仮にも隣人部の顧問なんだよ？　部活をやめたいと思う部員の気持ちに配慮する役目があるのだよ？」

「ケイトおおお!!　あいつが……あいつがどんな気持ちでこの部活を立ち上げたか、あんたに理解できるのか!!　上から見下して嘲笑うのもいいかげんにしろ!!」

俺はあいつを侮辱するケイトに対し、真っ向からあいつを庇うようにケイトに激怒した。

その俺に対して、ケイトは途端に口を閉ざし……。

そして、更に凍りつくような瞳を俺に向けて……。

「じゃあ……てめえはなんなんだよ!!」

「なっ!」

「あいつの気持ちを理解できるのか……だど？　嘲笑うのもいいかげんにしろ……？　その彼女の頑張りや、自分の都合を優先して見ようとしなかった。そんな奴が良く言えたなそんな台詞をよお!!」

「うっ……それは」

「——さびしがり屋のくせに、他人に率直な行為を向けられるのは怖

い、気づかないフリをする。聞こえないフリをする。逃げる。茶化す。誤魔化す。拒絶する。自分は好かれてなどいないのだと、自分にさえ嘘をつく……。そのためえの弱さが全部、この事態を引き起こしたんだろうがあ!!」

俺に対し、ケイトは怒りを形として現わし俺に言葉を投げかけてくる。

そうだ。その事柄は全て俺に当てはまることだ。

誰よりも友達が欲しいと思いつながら、都合の悪いことに対しては気付かないし聞こえない。都合が悪くなるとすぐに逃げる。

そして自分に嘘をつけて正当化しようとする。俺の悪い所だ。

今回の事件だってそうだ。俺はあいつがソラだと気付き嬉しく思いつながら、三日月夜空という存在そのものに対し都合が悪いと感じた結果、あいつをソラと認めようとせず強情を張った。

そんな俺に、あいつを庇う資格なんてないかもしれない。だが……。それでも俺はあいつを助けたいと思う。

都合がいいと笑われようが、偽善者だと蔑まされようが……。今俺は、自らの正義を貫かなきゃいけないんだ!!

「……ああそうだ。俺が悪い。だから……。それらの罪滅ぼしをこれから行う」

「いひひひひ!! 罪滅ぼしして……。それこそ都合のいい奴の台詞だ。償う覚悟があるから許しを講う資格もあるって? 結局は自分勝手だ。独りよがりだよ小鷹くん」

「……だとしても俺は、あいつの元へ行かなきゃいけない! その退部届も、あいつの手で破かせる!!」

「させないよ小鷹くん。こりやもう受け取ってしまったものだ。君をあの子の元へ行かせもしないし、彼女を隣人部に戻すこともしない。あの子は失敗した。多くの罪を残したままねえ。だから……。彼女にはこれから先も、地獄を見てもらう」

「そんなことはさせない!! あいつは救われなきゃいけないんだ!! 罰を負うことが罪滅ぼしになる……。? 痛みを痛みで清算しようだなんて考えは……。あいつには似合わねえ!! 俺が責任を持ってあ

つの起こした過ちに対し向き合わせる!!」

俺とケイト、一步も引かない状態。

だがケイトは意地でもここを通さないつもりだ。

どうする……。相手は教師で少女で年下だ。武力で制圧すると絶対に問題になる。

そうなったら、俺をこの学校に入れてくれた父さんや、父さんの友人である天馬さんにも迷惑がかかる。

だが、それ以外にどうやってこのわからず屋を説得できる……？

「……俺と勝負しろ……ケイト」

「勝負？」

「ああ、ルールはあんたが決めていい。それであんたが勝てば俺は全てを諦める」

「ほお？」

「だが……俺が勝てば、あんたは俺に従ってもらう。それでいいよな……？」

「いひひひひひ!! クツソ面白いこと言うじやないか小鷹くん、ルールは私が決めていい……かあ。その言葉、クソ後悔しないでよねえ!!」

そう高らかに笑い、ケイトは部室の道具入れからある物を取り出した。

それは……リバーシ。またの名をオセロ。

オセロといえば、最初の夜空との話し合いで出てきたことがある。

ケイト自身が、オセロが得意でオセロ研究会を立ち上げようなんて話をしていた。

ということは当然、オセロはケイトにとって断然有利な勝負だ。

といっても、ルールを決めていいと言ったのは俺だ。男に二言はない、そういうことだ。

「二応言っておくけど、私オセロの段位持ちだからね。あとネットオセロのぶら☆ほわってゲームあるけど、上位ランカーだったりするのよん」

「御託はいい。そんなん聞いた所で、怖気づくかよ」

「まったく可愛げがない。それじゃ……白黒つけようじゃないか……。小鷹くん!!」

そして、俺とケイトのオセロによる勝負が始まった。

先行後攻は俺が決めていいと言うので、俺が黒——すなわち先行を貫う。

最初は互いに相手の石をひっくり返す。最初の内は特に展開が動かない。

だが、オセロは中盤が大切だ。いかに角を取るか、そこにかかっている。

オセロは四つ角を取れば断然有利、それ常識。

「……いやしかし小鷹くん、オセロってのは人の心理に基づいて作られてると思わないかい?」

勝負が中盤に差し掛かる辺りで、ケイトはそんなことを言い出した。

「言葉で惑わすつもりか?」

俺がそう受け流すと、ケイトはにやりと笑って答える。

「いやいや。こうやって安全な位置を取ろうとする。誰にも邪魔されない空間を取ろうとする。そして一つの駒は、二人かかりで無理やり手駒にする。人の欲望ってのがそのままゲームになっている。笑えるよねえ」

と、ケイトはペラペラとそんなこと言い続けているうちに、勝負は動きを見せる。

最初に四つ角を取ったのは俺だ。よし、これで攻め方が有利に……。

なるはずだったのだが、俺が四つ角を取ることに集中していたのがあだになったのか、反対側の陣地が手薄に。

そして取った右上の角の対面になる右下の角を取ったのだが、その間が全部ケイトの白で埋まる。

これでは、四つ角を取った意味が全くといっていいほどない。

「なんでだ! 四つ角は上手く取ってるのに!!」

「ああお上手ですねえ小鷹くん。最も、君が四つ角を取ることに集中

するように上手く誘導したんだけどね」

そう、ケイトはあざ笑うかのように、俺が端を埋めることばかりに頭が行っているのは対照的に、中央の方を白で埋めていく。

「あのね小鷹くん、オセロはあくまで角を取れば優勢になるだけであって、角を取らなくても勝つ方法はあるのだよ」

「な、なんだと?」

「オセロってのはほしい場所を取るゲームじゃない。相手にその場所を取らせるゲームだ。自分の手を制御するんじゃなく相手の手を制御する。そうやって角を取られても、元から相手に辺を作らせる動作を取らせれば、”角以外”の場所を全部私が取れてしまう。要は相手の角の取り方次第で優勢になるものもなくなるってことさね、ああちなみにこれ舐めプだから」

「ぐ……ぐがが……」

俺が二つ角を取った所で、ケイトの白が場の全体を支配しているような状態だった。

段位持ちは伊達ではないということか、残っている石は約三割。

しかも残り二つの四つ角の傍がまだ空いており、そこに石を打った方が角を取られて負ける状況が明白になっている。

順番的に、俺が四つ角の傍を取らざるを得ない状況になるか。いやケイトなら、俺が四つ角を取った所で、その反対側の四つ角と共に他の端を埋めてくるだろうか。

なんとというか……気合だけで勝てる相手ではなかった。

「さて小鷹くん、最後に言い残すことはあるかい? 君の親友との……一生のお別れだよ?」

「……あんたも知ってたのか」

「私がどうしてよーぞらくんの姉の事を知っていたと思う? そういうことだよ、よかったねえ、重荷になっていた物が外れて」

「……よくねえよ」

俺は負けるとわかっていながら、往生際は悪く夜空のことを語り始める。

「確かに……俺の親友の本性は、あの夜空のままなのかもしれない。

十年前から、ああだったのかもしれない」

「……」

「だが、それとは別に……十年前のあいつの正義感こそが、本当のあいつなんじゃないかって思うこともある。矛盾しているかもしれない、俺の押しつけかもしれない」

「そりゃあ押しつけた。彼女のゲスな心は……正義感なんてもので釣り合うことはない。君は……騙されていたのさ」

「……それでも構わない。だからこそ俺は……信じようと思う。信じたいと思う。今更勝手な都合だが」

俺は静かに、自分の今夜空に抱く思いを口に乗せた。

「俺は……あいつに変わってほしいわけじゃない。ただ……戻ってほしいだけだ」

「……」

「あいつ……本当はすごい優しい奴なんだ。甘ったるくて、本当は他人を叱るってことも歯痒くてできないやつなんだ。あいつの遠回りの行動は、その裏返しなんだ」

「……」

「それが……俺のせいかそれ以外の何かのせいか、それが突っかかって表に出せなくなっているんだとしたら、せめてそれを取り除いてやりたい。あいつの信念……たった一人でも百人分大事にできる友達を作る。それを……本物にしてやりたい」

「……」

「最悪、あいつが戻ってさえくれれば、俺は……あいつの前から消えたってかまわない」

俺が自分の本心を明かすと。

ケイトは、オセロの石を強く盤上に打ち込み……。

その重い口を開いて、俺にあることを話し始めた。

「……私個人が、さらりと聞いた話なんだけどさ」

「え？」

「よーぞらくん……小さいころ実の母親に殺されかけたことがあるんだってさ」

「なっ!?!」

「包丁で刺されそうになったんだってさ。あり得ないよね……人の親が……そんなこととしていいわけがない」

そう、震える声でケイトが語った。

それを聞いて俺の中で、静かな怒りがこみ上げる。

「どうやら、俺が思っている以上に、あいつの家庭の事情はやばいらしいな。」

「なら……尚更俺が行ってやらないと。手遅れになって……何も、変わりはしないだろう。」

「……小鷹くん、いじわるなこととしてすまなかったね。だが一つ言わせてくれ……。よーぞらくんの家には行くな、最悪……殺されるかもしれないよ」

「……」

「正直、それが怖くてね。よーぞらくんの母親、精神病院に送られる一歩手前までいったこともあるらしいんだ。そんな危険な人物に、君の覚悟だけで送り出すわけにはいかない」

「……だから、わざとらしく芝居までうって、俺を止めたのか?」

「そうだ。その……どうやら私……君の事が。いや……やめよう」

と、何かを言いたそうにしたが、ケイトは途端にやめた。

そして、それと変わるように、寂しそうな声で。

「私としては、身近な人が傷つくってのは見たくないのさ。妹のマリアもそうだが……同じ施設で育った今はシスターをやっている家族同然の人たちもそうだ」

「……そういや、あんた孤児だっけ」

「そうだよ。私のお母さんとお父さんはね……」

「……」

「——私の目の前で、強盗に殺されたんだよ」

それを耳にして、俺は握っていた石を落とした。

啞然とした。驚愕した。言葉も出なかった。

「そんな、人に語るのにも覚悟がいるような過去、語られた俺は正直困惑した。」

しばし、固まって動けなくなった。

「……」

「……あ、やつべ」

と、ケイトは止まった時間を動かすかのように。

わざとらしく焦った声を出した。俺がその目線の先を見ると。

僅かに取れる場所、よく見ると……そこに俺の黒をおいたら一気に白をひっくり返せる場所だった。

なんとというか、うかつすぎるほど、まるで描かかれたように、演出されたかのような盤上の配置。

これを俺が取れば、逆転できるかもしれない。

「……ケイト」

「なんだい？」

「ここ……取ってもいいよな？」

「……ふふっ。いいよ」

そう、ケイトが小さく笑って、うなずいた。

俺は、迷わずその位置を取った。その結果、若干黒の石の方が多くなったように見えた。

次のターンケイトはおける場所が無くなり、結果俺が有利に進めた。

そして互いに石を置き終わり、数えようとした時だった。

「こりや数えるまでもねえわ。私の負けだ……」

「……ケイト」

「素人に負けてしまったよ。ああ情けない情けない。ああそうだ負けたら君に従うというルールだったっけか。私はどうすればいいんだい？」

「……」

俺は、その問には答えなかった。

行動で示すことにした。俺は、部室の扉に手をかけた。

後ろは見なかった。心配するケイトの顔を、見たくなかった。

多分……ケイトのやつ。最初からわざと負けるつもりで……。

申し訳なかった。全てが、今まで余計な心配ばかりかけ続けて。

嫌な思いまでさせて……俺は。

……ならばこそ、俺は再度覚悟を胸にする。

夜空を……俺の手で助け出し、全てをゼロにする。

この隣人部に……新たな始まりをくれてやる。その代償が、俺自身であつたとしても。

「……最後に、一ついいかな？」

「……なんだ？」

「もし……よーぞらくんを少年としてではなく……少女として出会っていたなら……。君は……彼女をどう見ていたのかな？」

その儚げな声から放たれた問いに、俺は……心に従い答えた。

「……多分、俺はその少女を……好きになつていたと思う」

「——行ってこいよ、情けない騎士様よ」

俺は走つた。全力で夜空の家に向かつた。

これは始まりに過ぎない、終わりの後に来る……予想だにしない事の数々への挑戦。

この腐つた青春滑稽劇への反逆、そして付きまとう因縁という過去への脱却。

十年経つて、色々なことがあつた。それは急激に訪れた。

その激動に対し流されまくつた。振りまわされ、理不尽に自分の都合を押し通した。

それらの代償が今振りかかろうというなら……それに対し俺は、真つ向から戦つてやる。

一人の親友のため、そして……俺自身のために。

「……なんで」

呆けたように口を開け、そう口にする目の前の少女。

そいつを見て、俺は疲れながらも、苦手な笑顔で返した。

「……久しぶり……だな。さあ……腹を割って話そうぜ……」親友
”

さあ……行こうぜ親友。

俺とお前の決着、そして……。

——この青春滑稽劇への、反逆の始まりだ。

第一章 十年前の決着編 決着の代償

あいつの家に向かう最中も、俺は考えていた。

あいつを助ける、救いだすということにが、どうということかを。

俺の決意が示したその行為が、どのような結果に繋がるかを。そして、それにどんな代償が発生するかを。

まず、夜空を救うと言っても、ただの友達まがいの俺が、他人様の家庭の事情を解決しようとするのはおこがましい行為だ。

下手に介入しようものなら、夜空のお母さんに警察やら呼ばれて終わりだ。なにせ相手は、よっぽどにまいている人らしいからな。

そもそも十数年解決しなかった問題を、俺のような一般庶民の覚悟ごときが解決しようと考えること自体が、哀れで仕方がない。

それくらい、俺にだって理解はできる。

だからといって、ただ俺が謝ってもう一度友達になろうだなんて言い出すのは、過程を吹っ飛ばして結果に満足するだけの行為だ。

結果だけでは意味がない。今の羽瀬川小鷹と三日月夜空にたいして、結果なんてのは時間稼ぎでしかない。

だとすると、俺とあいつの十年つもりにもった因縁に決着をつけるとするなら……。そこには、何かの代償が発生する可能性は大いにありうる。

俺が覚悟すべきはそこにある。そしてその代償は……。確実に夜空に払わせるわけにはいかない。

あいつの傷や重みは、俺がすべて引き受ける。俺に求められる覚悟や決意は……。

「……………ここか。夜空のアパート……懐かしいな」

夜空の住むアパートの前に立ち、時が来たことを改めて実感する。

懐かしいなどあえて口にしたのは、過去が付きまとうことを受け入れた証拠を、口に出して感じるためだ。

十年前に一度、あいつの住むアパートの近くまで来たことがある。

家で遊ぼうと声をかけたが、あいつは絶対に俺を家に入れることはなかった。

今思えば、あいつの母親に……俺を会わせたくなかったんだろう。そしてそれは今だって同じだろう。あいつは何が何でも、己の母親に俺を会わせるつもりはなかったはずだ。

その理由は想像できる。全ては、俺たちの核を担うあの言葉に……答えはある。

ピンポン……。

チャイムを鳴らせる俺。このチャイムは、決着への狼煙だ。俺にはそう感じる。

もし引き返すという選択肢を取るのなら、もうあいつが玄関を開けるまでのこの間だけだ。

最も、誰が引き返すか。そんな無様な真似はしない。

俺は決めた。全てを変える。過去の因縁を引きずったくそみたいな青春はもううんざりだ。

俺たちは新しいステージに立たなければならぬ。これは、そのための過去への……青春への叛逆だ。

ガチャ……。

玄関が開いた。そして、少女が一人顔を出す。

その少女は俺を見るなり、目を見開いて驚愕した。

そんな少女に対し、俺は笑って言ってやった。

「……久しぶり……だな。さあ……腹を割って話そうぜ……」親友

”

「……なんで」

俺の言葉に、夜空はぼそりとそう呟いて、玄関で固まった。

刹那の沈黙が流れる。一瞬だが、俺たち二人にはとても長く感じた。

そして、先に動いたのは夜空だった。

「……はっ！ ちよっ……。い、今はちよっと母親と立てこんでてだな」

「知ってるよ。もう全部……」

「なっ！ なら尚更だ！ 帰ってくれ!!」

「……それで俺が素直に尻尾振って帰ると……思ってるのか？」

俺がそう威圧すると、夜空はびくりと体を震わせた。

いつもなら逆の立場だ。あいつに振りまわされるのが俺だった。

だが今日は違う。今日だけは、俺に振りまわされてもらうぞ……三

日月夜空。

「……誤解の無いように言っておく。別に俺はお前の母さんを説得しに来たとかそんなんじゃない、お前に話があって来ただけだ」

「なら、別に私の家じゃなくても……」

「……そうやっていつまでも、お母さんから逃げるのか？」

「は……はあ!？」

「お前がお母さんに何をされたか、まあ概ね事情は理解しているつもりだ。理解しているつもり……って時点で俺を信じろつても無理な話だが。お前の気持ち、募らせている思いを……。せめて自分の母親にくらい、わかってもらえよ」

そう、俺が一方的な都合で物を言うとは。

夜空がキツと俺を睨みつけ、そして怒りを露わにして言い返す。

「ふ……ふざけたことをぬかすな。この裏切り者が!!」

「なんとも言えよ。だが俺の存在が、お前の気持ちの証拠なんだよ。

どんだけ偽りを重ねても、事実の一つだけだ」

「な、なにが事実だ。そんなもの……」

「だから俺と証明するんだ。お前自身にとって最も大切な存在に覆された。お前の信じた想いつてやつをな」

これで夜空を完全に論破できた……わけではないが。

こんな大それた言葉を、すらすらとよくもまあ言えた物だ。

夜空はいつも見栄を切った大ごとを口にする。だから俺もそれのつとり、大げさに言ってみせたが。

どうしろこうにしろ、ここで夜空に拒絶され引きさがったら、もう何も変わらないんだよ。まあ警察呼ばれたら引き下がるをえないが。

「夜空。これが最後のチャンスだと思え。偉そうに口にするようで悪いが、お前にだって覚悟を決めてもらう」

「……最後の……チャンス」

「……お前には、これから先やってもらうべきことがたくさんあるんだ。俺はもう目を背けない、逃げないと決めた」

「……」

そう、俺が真剣な眼差しで真意を送ると。

夜空は観念して、俺を家の中に入れることを決めた。

夜空の家か。ってよく考えれば、女の子の家に入ることになるのか。

女子の家はこれで二度目だが、別にやましい思いなんて抱いていない。

玄関を通り、居間に差し掛かると、夜空の体がぶるぶる震えるのが見て取れた。

よほど、身近の誰かに母親を見られたくないようだ。

そして俺は、居間に足を踏み入ると。

そこには、椅子に座ってテレビを見ている夜空の母がいた。

自分の娘が誰かを連れて来たというのに、見向きもしない。興味も示さない。

これだけで得られる情報と言うのは少ないものだが、俺にはなんとなく感じ取れた。

自分の子を温かく見守る親というものは、俺は溢れるほどに感じてきた。

だからこそわかった。この人は、自分の子をもう自分の子として見ていないんだと。

「……誰が勝手に他人を家に入れていいって言ったのよ。この障害」

そう、俺たちを見ることなく口にする夜空の母親。

自分の娘にむかって……障害だと？

くそつ。関わるつもりはもうとうないが、その言葉……聞き流せるもんじゃねえぞ。

「……ごめんなさい。でも私……この人と話があるので、許してくださいお母さん」

その夜空の口ぶり、俺の知っている女の子の様子とまるで異なってい

た。

十年前の少年、そして現在の少女とも全く違う。全てに怯えきつた子狐のような。

あの夜空をこんなにするまで。いったい何がどうなってやがる。すると、夜空の母親は夜空の方へ振り向いた。

夜空の母親……ってだけでも大体想像つくが、年にしては肌つやもいい美人な母親だった。

だがどこか疲れてやせこけている。夜空と同じで笑ってくれれば、愛想も良くて理想的な母親という一面を充分に感じ取れるのだが。

そんな母親は、俺を見るなり苦い表情を浮かべこう苦言を漏らした。

「……あんたも堕ちたか。そんなヤバそうな男に身体を売ったか。友達も信じられる人もいないで、最終的には女を売ったか」

と、突拍子もないことを口にした夜空の母。

おいおい、なにを自分の娘に言ってるのかわかってんのか。この人、自分の娘を何一つ信じていない。

それどころか、夜空がどうなってもいいみたいな口ぶりじゃねえか。

「そ、そんなんじゃないです。は、羽瀬川くんは見た目は人を殺してそうですが、根はいい人です」

「人を殺してそうでは言いすぎじゃね!？」

夜空の例えが少々あれだったので、緊迫した間でつついツイツコミをいれる俺。

「お、お邪魔します。夜空……さんの部活の副部長やっています。は、羽瀬川小鷹です」

正直挨拶自体したくなかったが、ここは礼儀というものだ。

俺の挨拶に対し、夜空の母親は母親らしい姿一つ見せずに、ずんぐりかえってこう一言。

「……あつそ。あなたも災難ね。うちのドブネズミに目をつけられて。目触りできるように、別に無理して付き合わなくてもいいのよ」

と、またも夜空をドブネズミと比喻して母親らしくない言葉を投げ

つける。

……このクソ女。自分の娘にドブネズミだと？ 目障りだと……？

ははっ……やっべえ。知らねえうちに拳握ってらあ。もう、警察呼ばれてもいいくらいのことしそうだわ。

「ちよっ、あんた！」

「小鷹！！」

俺が身を乗り出そうとすると、夜空は俺の手をこれでもかというくらい強く掴み。

そして、涙目になりながら俺を引きとめる。

その顔を見て、俺は心が揺さぶられた。

「夜空……？」

「……お願い。こらえてくれ、そしてもう……これ以上は」

そう、壊れそうになりながら夜空は懇願する。

俺はそれを見て、ぐっところえる。

だが、そんな俺たちのことなど知らず。夜空の母は、俺たちの過去へと足を踏み入れる。

「てか、その染めそこなった金髪……。ひよっとしてあんたが、夜空の言ってたタカってやつ？」

「あ、は……はい、そうですけど」

そう俺が素直に答える。

一応俺の事は、夜空から聞いていたのか。

すると、夜空の母親は、俺がタカだと知ると、追撃が如く心ない言葉を投げかけた。

「ああそう。それはまあ……大層 余計な事” をしてくれたわねえ」

「……は？」

聞き間違いかと思った。

俺はつい、呆けるように返した。

そして夜空の母親の言葉は、止まらぬことを知らず。

「うっざかったのよね。私があのかつ男と色々喧嘩して傷ついてる時に、急に笑って家に帰って来たんだもの。それで一人呑気に、親友が

できたなんて口にするもんだからさあ。もう蹴り飛ばしたくなつたわよ」

「……なんだと?」

「この私があの時どれだけ辛かったか。その障害は理解一つせず、幸せな家庭が当たり前のように、私とあのクソ男も仲直りできなくて、どの口が言ってるのかつてもうイライラしてたのよ」

そう、マシンガンのように最悪なことを口にしまくる夜空の母親。やめろよ。やめろって、てめえ近くに、夜空がいるんだぞ……?」

「お……お母さん?」

「そもそも何が親友よ。私その親友に大切だった男取られたんですけど、その立場利用されたのよ。そんな哀れな母様の近くでまあ親友の素晴らしさを語ってくれたことで、本当に……目障りな小娘」

「そ、そんな。私はただ……あなたがくれた言葉が大切で。ただ、親友がとても大切な物だつてことを、証明したくつて……」

「んなもんあんたの一人都合じゃないのよ。てか私があなたに贈った大切な言葉……? ああ、たった一人でもいいから大切な親友を作れてやつ? あんなくだらぬのまだ大切にしてたんだ。なんとこの親孝行な娘、だけどそれが目ざわり」

「うつ……うつうつ……」

「そうやってあんたは私を笑つてただけでしょ。あんた私が憎いはずよ、きつとそうよ。私の哀れな姿食つて笑つて、自分はまだまじだつて言い聞かしているだけでしょ? そうにきまってる」

「違う!! 違う違う違う!! 私はお母さんに笑つてもらいたかつただけで!!」

「その気遣いがまた目ざわり!! 所詮は子供の言うことよ、大人の世界なんて一つもわからないくせに、大それたこと口にしてんじゃないわよ。このクソガキ!!」

……もう、限界だった。

それらを聞いて、俺は冷静さを失った。

すまねえ夜空。俺はもう、自分を抑えられる気がない。

俺は無言で、前へと歩いて行く。

「……」

「こ、小鷹！ もう帰ってくれ、私は」

「……え？ なんだって？」

俺は、あえてその言葉を口にした。

それだけは、聞き流しなかった。

ここで本来なら、引くべきなのだろう。他人である俺は、黙って帰るべきなのだろう。

だが、それで、変革がなされるわけがない。

このまま夜空が傷ついて……親友が傷ついて。それを黙って見過ごせる親友がこの世にいるだろうか。

それこそ、その女の言う通りになる。親友って間柄は、そんな都合のよい関係じゃないんだ。

時には笑い、時には励まし。そして時には喧嘩して、否定しあいながらも最終的には認めあう。

確かにそれこそ絵空事かもしれねえ。理想論かもしれねえ。けど、それに向かつて共に進んでいこうとすることは大切だろう。

子供だからなんだ。大人だから正しいのか。そんなの……関係ないだろう。

それを、あんたが夜空に教えてあげるべきだったんだ。なのに……なのに!!

——あんたは自分の娘を、俺の親友を全否定したんだ!!

「う、おるうああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

腹の底から、自分の出しうる限り低く怖い声で雄たけびをあげる。それを聞いて、夜空と夜空の母親がギョツとした顔で驚いた。

「なっ、なによ!?!」

「なによじゃねえだろうが!! てめえが……てめえが夜空を笑うんじゃないねえ……!!」

俺はそう全力で怒号をあげて。

そんな俺に、夜空の母親が言い返す。

「あ、あんたには関係ないでしょうが!!」

「黙れ！ 少なくとも俺の方が……こいつのことを理解できる!!」

「ぐっ……。あんたは夜空のなんなのよ!？」

「俺は、夜空の……」

そう問われ、俺はそこで詰まってしまった。

だが、そこで答えを出せないようでは、俺はこいつに勝てない。

だから俺は、今この場で誰もが納得できる答えを叫んだ。

「俺は夜空の……。たった一人の親友だ!!」

「小鷹……」

俺の言葉で、少しばかりは傷ついた夜空が救われたのかはわからない。

だが言葉だけでは変わらない。俺は夜空を救うというのはおこがましい。救われるのは夜空自身が行動で成さなくてはならない。

だからこそ、今この場で否定された夜空の全てを、俺が肯定する。

そこにいる最低な母親の言葉の数々、全て俺が覆す。その先は、夜空次第だ。

だから、俺は……!!

「あ、あっそう。親友って言葉は便利なことで、結局は身体目的でしように」

「いつだれがそんなこと口にした!? あんたに夜空の全てを決める権利があんのか!? こいつの尊厳、こいつの決意、全部あんたの腐った考えでまかり通らないとならない決まりでもあるというのか!？」

「……あんた生意気よ。赤の他人がどの口で、人様の母親に口出してるの!? これ以上喚いたら警察呼ぶわよ!! たかがガキが粋がつてんじゃないわよ!!」

「……そう言えば、俺が黙ると思ってるのか?」

「はい?」

「俺は、親友のためならどんな汚名だってかぶれるんだ。どんな代償だって負えるんだ。俺には親友のためになんだってできる覚悟があるんだ!」

俺は真っ向から自身の覚悟を叫びに乗せた。

「それに、警察に呼ばれて困るのはあんただろ。あんたがこの数年で

夜空にやって来た事を良く知る住民だって多いはずだ。なんで今まで大ごとになってこなかったか、わかるか？」

「そ、それがどうしたのよ」

「夜空が、あんたを庇ってたからだ!!」

「そ、そんなの言いがかりよ!!」

「まだわかんねえのか!？」

夜空の母親の物分かりの無さに、夜空を理解してなさに、俺は怒りのままにそう問う。

「な、なにが……?」

「夜空は、あんたを憎んでなんていない。嫌いにはなったかもしれないが、失望したかもしれないが……。夜空は、それでもあんたを信じつづけていたんだ!!」

「な、なにを根拠に!」

「さつき言っただろ! 私はお母さんに笑ってもらいたかっただけで。夜空はあんたが過去を引きづって傷つき続けるのを見てられなかったんだ! 自分も似た立場にいるからなおの事、あんただけは……救われてほしかったんだよ!!」

次第に、俺は涙を滂沱と流していた。

夜空の悲しみが俺に流れてくるようだった。だからこそ、胸が痛くて。

夜空が否定されたことは、俺が否定されたことと同義だ。

俺たちの友情を否定された。だから痛くて、だからこそわかってもらいたくて。

「それをあんたは子供が言うことだと、友情ごっこがどうだの御託並べやがって。ふざけるな!! 事実は一つだ!! 夜空はあんたが贈ってくれた言葉に従い、不器用ながらもあんたの言葉を思ってきたんだ!! あんたは、そんな夜空を笑ったんだ。あんたは夜空を裏切ったんだよ!!」

俺は夜空の母親の全てを否定する。怒りに任せて、叫びに否定の数々を乗せる。

それに対し、夜空の母親は逆上する。そしてテーブルの上にあった

ガラスの灰皿を俺に投げつけた。

それが俺の頭にあたり、俺は頭から流血する。

「小鷹!!」

隣から夜空の叫びが聞こえてきた。

だが俺は引かない、恐れない。

そうだ、今こそ……俺は代償を払う時なんだ。

「黙りなさい……。黙りなさい黙りなさい!! あんたみたいなクソガキが、大人の私を否定するな!!」

そう、夜空の母親は台所へと向かってくる。

立っている俺たちを押しつけ、そして包丁を握りしめ俺を睨みつけた。

「お、お母さん!!」

「うるっさいのよあんたらは!! あんたらに、私の気持ちかわかるわけがないのよ!!」

「……」

「あの男は……私は愛していたのに。あの女は、ずっと友達だつて言ってくれたのに。それを、それを……私を笑って私から全部奪っていった。私を捨てたのよ!!」

そう自身の苦しみを訴える夜空の母親。

それに対し、俺は目をそらさずに、言い返した。

「……全部奪われた? 一つだけ……残ってるだろ」
「な、なにを……」

「だから夜空はあなたを見捨てなかった。自分だけでも母親が信じた物になろうつて……願う。だか……ら、それを、わかってもらい……たくてずつと。なのにどうして、どうしてあんたは、ずっと過去を引きずるだけで、身近にある物を信じようとしなかった!?!」

それは、俺が泣きじやくりながら口にした言葉は、夜空の母親だけに向けた物じゃなかった。

それは、夜空にも言いたかった言葉だ。

夜空もこの人も、美しい過去にある物だけにこだわった。身近に信じてくれるものに、目もくれずに。

夜空も俺も似ている。ただ信じるだけじゃない、信じてほしかった。小さく、目立たなくても、見てもらいたかった。

これは、夜空の気持ちの代弁でもある。

「……もし、その包丁で俺を刺したければ、刺せばいい。これが、夜空の気持ちの証明になるなら」

「く、口だけよ。どうせ逃げだす」

「……逃げねえよ」

夜空の母親の威圧に、俺は冷徹に、頑として引くことなく返した。それに威圧される夜空の母。本当にこのまま刺すってなら、やればいい。

別に脅して終わるとは思っていないからな。最も、俺がここで刺されたら夜空が一番迷惑を被るから。

そこが問題か。だから致命傷を避けないと。

「や、やめろ。やめろおおおおお!!」

と、緊迫した状況で、夜空が叫んだ。

俺と夜空の母は、二人で夜空を見る。

夜空は泣いていた。苦しげに、ぽたぽたと床に涙を落して。

「なぜだ!! なぜだ!! どうしてお前達がそんな言い合いをしなきゃいけないんだ!!」

「夜空……」

「……私がいるから、私が邪魔なのだ。わ……私はああああ!!」

「夜空!!」

泣き叫び、夜空はその場から立ち去った。

しまった! 今の状況じゃあいつ、何をしでかすかわからない。

すぐに追いかけないと、大変な目に会う!!

「……なによ、わけわかんないわよ」

そう、立ちすくむ夜空の母。

俺は去り際、最後にこう言い残した。

「……急がなくてもいい、過去の事を引きずったって別にいい。けど

……やっぱりあなたが、夜空を信じてあげなきゃだ」

「……私に、そんな資格はないわ」

「資格？ そんなもの、あなたがあの子を腹を痛めて生んだ大切な娘。それだけで充分だろ」

そうとだけ言い残し、俺は夜空の後を負った。今ならまだ間に合う。あいつが変な気を起こす前に。

と、アパートから降りて少し進んだ道の奥で、夜空の姿が見えた。

「夜空！」

「ひっ！」

交差点を渡る前に声をかけ、夜空をせき止める。

「はあ……はあ……。ほんとごめん、俺も熱くなって、あそこまでやるつもりはなかったんだ!!」

俺はとりあえずそう謝罪をすると。

夜空は起こることなく、切なげに笑って俺に言葉を返した。

「……ふふつ。やっぱりタカはタカだ。大事なものが困っていたら、干渉せずにはいられない」

「まったく。いつまでも大人にはなれない。俺だってお前と同じだ。過去に囚われて、前に進み切れない人間だ」

俺がそう自虐すると、夜空は申し訳なさそうな顔で。

「……やっぱり、お前もお母さんも、私がいたからおかしくなったんだな」

「夜空。バカなことを言うな、俺にもお前の母さんにも、お前と言う存在は必要だ！」

「私さえいなければ、お前たちは……」

「ふざけたことを言うな!!」

夜空の無責任な発言に、俺は夜空の肩を掴み怒りを露わにして反論した。

「小鷹……?」

「……お前がソラだとわかった時、確かに俺は恐怖した。俺はお前を否定しようとした。それは事実だ変わらない」

「……」

「だけど、それでも俺はお前を否定しきれなくて。そんな自分も否定しきれなかった。結果的にお前と喧嘩してしまったが、それでも……」

心の奥底にはお前がいたんだ!!」

「……」

「全てを投げ出すな。言っただろ、お前にはまだやるべきことがたくさんあるんだ。隣人部はどうなる？ お前を信じたものを見捨てるな。あの場所がお前の嘘で塗り固めて生まれた空間だというなら、お前が全て本物にすればいい」

「……できるわけが、ない」

「何度失敗したって構わない。俺はお前の親友だ。何があろうと、俺はお前を忘れない、お前を見捨てない。俺が、お前を助けてやる!!」

「そ、そんな言葉なんか!!」

そう、夜空が俺を突っぱねて横断歩道へ走って行く。

と、俺はそこであることに気づく。

横断歩道は赤信号。ということは車が……。

するとつかの間、青信号の車がこちらへやってくる。

「はっ！ 夜空ああああ!!」

「なっ！」

俺は車に轢かれそうになる夜空を、全力で庇いに行く。

俺は夜空を突きとばした。すると当然、代わりに事故に合うのは。

……そうか。これが、代償か。

ついさつきも頭を怪我したばかりなのに。ははっ、俺ってそんな熱血漢あふれるキャラだったかな。

まだ、夜空と語り合うことが……たくさんあったのにな。

「——ソラ、ごめん」

「た……タカああああああああ!!」

ドガン!!

……うん？

ここは……病院か。

白い天井、そして顔をあげると、包帯が巻かれて大きくなった足。

確か、夜空を庇って俺が事故に合っ……。

「……小鷹」

そう、聞き心地の良い声が俺の耳に入ってくる。
隣を見ると、そこには夜空がいた。

その顔は、とても申し訳なさそうにしている。

「……よかった」

夜空が安堵した。

俺は実感がなのまま、とりあえず話しかける。

「……あんまり覚えてないけど、確か車に轢かれて。なんか頭も痛いし」

「ああ、本当に……すまない」

そう、俺の知っている三日月とは打って違って、しよぼんと素直に謝る彼女がいた。

それを見て俺は、違和感を感じてどうにもいえない表情になる。

「んだよ。いつもなら余計なことをしてくれたとか言う所を、素直か」

「……今回ばかりは、私だって申し訳なさでいっばいだ」

と、本当に俺に感謝しつくせないといった表情を浮かべる夜空。

「そつか。てか夏休み最後に事故って、お前も危険なことすんなよ。本当にむかつく女だな」

「……？ あ、ああ……ごめん」

「んだよ、似合わねえ。つか、なんでお前を庇ったんだっけか。でも、女の子が近くで怪我しそうになるってのは、動かざるを得なかったのかな」

「まったく。タカは本当に、私にとっては正義の味方みたいだ」

「——タカ？ 誰それ？」

「——え？」

俺は聞き覚えの無い名前に、思わず問う。

「……お前の、十年前私がつけたあだ名だが」

「十年前……お前が？ よくわかんねえんだけど」

「なっ。どういう……ことだ？」

「だから、俺がお前と出会ったのは……」聖クロニカ学園に転校してきて”からだろ」

「……え？」

俺が極々当たり前のことを言うと、夜空は驚愕の眼差しで俺を見つめた。

「てか十年前って……あれ？」

確かに俺はずーっと友達なんていなかったし、十年前ついたらおぼろげにしか記憶がない。

ただ、髪の色でいじめられていた。そんな”記憶しかない”しなあ。

「……私とお前は、十年前に親友だったん……だぞ？」

「いやだから。知らないって、俺とおまえが親友？ それどこの世界線？ 俺とお前なんて相性最悪じゃねえか、どこをどうやったら親友になるんだよ」

俺がそう茶化すように返すと。

しばしの沈黙の後、夜空は涙を流した。

俺には、その涙の意味が理解できなかった。

「小鷹……。お前まさか……事故のショックで”記憶”が……」

「なに泣いてんだよ。お前が俺のために涙を流すことなんてあったっけか？ ああでも前に雨の日で……」

「……そっか。ごめんな小鷹、ごめん……ごめんね。わた……し」

そう、俺の手を強く握りしめて、嗚咽を漏らすように声を出さずに夜空は泣く。

俺には、なんでこいつが泣いてるのがわからなかった。

だが、なんだろう……。このもやもやした感覚。

俺の心に棘のように突き刺さっている。この……違和感。

「……んだよ、なに泣いてんだよ。てか、俺も……なんか泣けてきた」
「う……うう」

「くそっ……。わけ……わからねえ」

これが、なんの涙なのか分からない。

だが、どこかからお告げのように聞こえてくる。代償という言葉
葉。

俺は、何かを失ったのか。大切な何かを……。

それが、三日月夜空と関係しているのか。

それを失ったことで、何かが……変わる？

托された浴衣

——もう彼は、そこにはいない。
あれから二日が経った。

私の愚かな行いが、一つの悲劇を招いた。
そして私自身には、何一つの罰を負っていない。

全ての代償が、あの男に降りかかった。言ってしまうなら、そのことが私が負うべき代償というべきか。

何もかもを取り戻そうとして、この結末は……なんだろうか。

足掻いて足掻いて、その結果が……さらなる物を失うというのは。

もう二日間、私は自室にこもっていた。

小鷹と討論を繰り返した私の母親も、何の変化一つ見せずにそのまま。

全てがマイナスに傾いただけの、ただのくだらない茶番劇。

充てが無くなった私は、滑稽にもあの教師に相談を持ちかけてみる。

——記憶喪失……ねえ。

『なるほど。またどうして彼は、やることなすことが極端なんだか』

つい昨日、私の連絡を受けて全てを知った高山ケイトは、呆れた口調で私の電話を受け取っていた。

小鷹がいつのまにか私の正体に気づいていたこと、そして遠回しに受けた圧力によって焦りを抱いたこと。

それによって私を救うことに駆られたこと。その結果、私を庇って事故にあったこと。

——ソラとタカの記憶を、失ったことを。

「……」

『つておいおい元気がないな。元気があればなんでもできるって、偉い人が言ってるんだから元気を出そうよ』

「……出るわけがないだろう。大切な物を失ったんだから」

『まあそうだよ。しかしそれも、一体全体誰のせいで、人の忠告一つ

聞かなかったどなたさんのせいで、こんなことになってしまったんだろうねえ』

そう、意地の悪そうに言うケイト。

まるで、今まで言いたくて我慢してきた。私に対して言い放ってやりたくて仕方なかったといったようなセリフだった。

人の不幸を笑うような悪逆な台詞のようにも聞こえるが、それは私の被害妄想がそう導くだけで。

実際は、愚かしい私に対して躡けるような、注意を暴言に乗せた言葉だった。

「……全て、私の責任だ」

『おいおいしおらしくなったねえ。今更そんな素直になられても、わたくしやあ困るわけだよ。よーぞらくん』

「……」

『もう私には、救いきれない』。助けてもあげられないし、力を貸すこともできやしない。他人を救おうなんて考えはな、んなもん正義でも正道でもない、おこがましい聖者ごっこだ。気付かせるだけが精いっぱいだったが、もういやだよ。私まで被害をこうむりたくはないんでねえ』

ずいぶんな言いようだった。言いたい放題だった。

本来なら私はキレてもいいのだ。だが、言い返す元気も、そんな資格もない。

それでも通話を切るときみしくなりそうで、一人にはなりたくない哀れな子猫みたいな私は。

ただ、ケイトの暴言を聞き続けた。そうしないと、誰かに何かを言ってもらわないと、潰れてしまいそうで怖かった。

『……もしもって、やつか』

「？」

『“IF”、今の小鷹くんの状態を現わすならそれだ。”もしも三日月夜空と友達になっていなかったら”……。そんな可能性の彼が、今の羽瀬川小鷹だな』

「……IF、もしもの羽瀬川小鷹」

『君と親友になったことで得た物も大きかった。彼の不器用ながらもどこか真つ直ぐなところは、君に出会ったことで生まれたものなのかもしれない』

そんな可能性の話を、ケイトは私に聞かせる。

『最も。そんな小さな要素よりかは、君に出会わなかった方が幸せだったって可能性の方が、大きいのは事実だろうね』

「……」

『……なんで私が、そんな意地クソ悪いこと言うか……わかる?』

「……」

『きつと、ピンポイントで君との思い出を忘れたのは……。彼にとつて”無くしてしまいたい記憶”だったからじゃないのかな』

その言葉は、私にトドメを刺すのには重すぎる一言だった。

それを聞いて、悔しさと悲しさのあまり、こらえていた涙を流す。

完全に言い負かされたかのように、けして見せたくない一面をケイトに見せてしまう私。

「うっ……ううう」

『……泣いてどうなる? 今更弱くなりやがって。クソム力つくな、腹が立ってしかたがないよ。三日月夜空』

「ぐっ。もう私には、何もできないんだ!!」

『……そっか。だがこのままじゃ困った子羊一匹を相手にする教師としてはあまりにもひどすぎる絵面なので、これが最後だ。私が君に贈れる最後の助言だ』

そういうと、ケイトはいつも私に見せるような態度に切り替える。

今まで私が散々聞き流してきた。彼女の助言の数々。

もう何一つ覚えていない。そんな私だからこそ、聞かなければならないと思った。

「……なんだ?」

『——無くしてしまいたいものってのは、人にとって絶対に無くしちゃいけないもの』

「……?」

『きつと羽瀬川小鷹には、君との出会いと思い出の数々が、欠けてはな

らないものはずだ。無くしてしまいたいほど付きまとう何かでもあり、それほどに思えるほど、自分にとってずっと忘れられなかった何かでもある』

「……私との、思い出が」

『君の取り戻すべきものを、取り戻すべきは今何だと思うよ。全てを失ったから何もできないんじゃないやなく、あえて全てが無となったからこそ、復元の可能性が生まれたのさ』

そんな哲学めいたことを言って、ケイトは一呼吸置き。

本当に最後に一瞬だけ、優しい声で私にこう言った。

『……もう、諦めることはやめることさ。それじゃあわたくしは朝早いので、失礼するわさ』

そう言って、一方的に電話を切るケイト。

しばしの沈黙が、空間に流れた。

この沈黙が、今ほど怖いと思ったことはなかった。

だから今この時は、私は部屋に逃げた。

そして、闇に籠る。それが今の私が選べる選択肢だった。

夏休みももうすぐ終わる。

あと一週間でもしないうちに、学校が始まってしまう。

学校が始まれば、あいつらと顔を合わせなくてはならない。

もう合わせる顔なんてない。合わせるのが怖い。

小鷹は私の知っている小鷹じゃない、隣人部の連中は私が一方的に捨ててしまった。

ケイトはもう私に何も言ってはくれない。結論的に、私は一人という孤独に逆戻りだ。

ひそかだが嬉しかった。あんな偽りの空間でも、一人じゃないという結果だけは、実の所笑みすらこぼれそうだったんだ。

だが、もうその嘘さえ存在しない。小鷹は言った、事実の一つだけだ。

そこにあるのは、私が全てを破壊したという事実だ。そしてそれが、現実なんだ。

……。

……。

……。

……かすかだが、外から何かが聞こえる。

何かに導かれるように、私は窓の外を見た。

外をのぞくと、祭りのみこしが道を歩いていた。

そうか、もうそんな時期なのか。

ここ遠夜市の祭りは、この時期になると三日間開催する。

今はお祭りの季節。お祭りといえば、友達同士やカップルと一緒に

楽しむ場所。

こんな落ちぶれた私には、無縁の場所だ。

「……お祭り、無縁の場所か」

……そう呟いて、思った。

あながち、無縁ではないかもしれない。

憎きお祭りを、私は一度だけだが楽しんだことがあるのを思い出した。

それは、失われた十年前。大好きだった親友と、一度だけ行った。

小鷹と、タカと一緒に。

「……お祭り」

そう一言つぶやくと、私は部屋から出た。

部屋から出て何をするというのか、どうせ母親とも一切口を聞かないのだ。

母親は何も変わらない。小鷹はあれほどまで変貌したというのに、その原因の一つとなった母親は、心一つ動くことはない。

……そう、思われていたのだが。

私は気付いてしまった。テーブルの上に、何かが置いてあることに。

それは、見慣れない浴衣だった。

私はゆっくりと、その浴衣に近づいた。そしてそれに手を取ると。

「……ようやく引きこもりやめたか」

「!？」

後ろの声に驚き、振り返る。

そこには母がいた。相変わらず私を見る目は、ゴミを見るようなそれだった。

だが、何か様子がおかしかった。

「こ、この浴衣は……」

「……夜空、あなた十年前。あの小鷹って子がいなくなる先日、らしくなく女の子っぽい格好をしたことがあったわよね」

何を言い出すのか、私のあの失態を口にし始めた母。

そう、あれは私がタカにした約束だった。

私も大切なことを打ち明けると。だが恥ずかしくて自身が女であることを打ち明けられなかった。あの出来事は忘れられない。

あの時私に勇気がなかったから、結果今ここまで彼とすれ違いを起こしてしまったのだ。

そんな出来事を、ほじくり返すように口にする母親。

「……それがどうしたんですか？」

「はあ。もう無駄かもしれないけど、時効かもしれないけど。せめて、やり遂げなかったこと一つやりとげてみなさい」

「……は？」

「それ着て、小鷹って子と祭りに行つて来なさい」

またまた何を言い出すのか、母親が風邪でも引いてしまったのかとも思った。

どうしてあの母が、私にこんなことをするのだろうか。

私は怖くて仕方がなかった。やめてほしいと思った。

もつと私に嫌われるようなことをしてほしいとさえ思った。じゃないと、私は平常心を保てないとも思った。

「……今更、何を」

「……仕方ないわよね。気持ち悪いでしょうね、薄気味悪いでしょうね。何か裏があるのだと、そんなことを思っでもしかたないね」

「……母さん？」

「でもね、母さんにも意地つてのがあるのよ。車の免許も取れない年頃の子どもに、あんなこと言われて、無関心じゃいられなくなったの

よ」

そんな、らしくないことを言い出す母親。私は呆気に取られていた。

「夜空。あんたはやっぱり似てる。諦めやすいくせに、捨てきれない。強くないのに、強がつてみせる。本当に、どうしてそこまでそっくりに育っちゃったんだか」

「……ふっ。あなたの育て方が悪かったからだ。もう少し女らしく、おしとやかにでも育ってもらいたかったか？」

「……」

「今更優しくなんてされても、私はどれだけあなたの言葉が欲しかったかわかるか。小鷹との拗れにしても、あなたの言葉一つあればもしかすれば多少は曲がらなくてすんだかも知れなかったんだ」

そう、私は母親に対し、隠し続けていた物を吐き出すかのように、口からどんだん言葉を出した。

今じゃないと、言えない気がした。

「中学の時、喧嘩騒ぎを起こした時も、私を見捨てるのではなく叱ってほしかった。風邪を引いた時くらい、仕事を休んで看病してほしかった。授業参観なんて一度も来てくれないし、進路相談もただ横で座って相槌打っているだけで!!」

「……」

「父さんと喧嘩した時だってそうだ。あなたは私に頼ってくれない、一方的な都合ばかり押し付けて!! 私も姉さんも、本当なら今こうしてあなたと父さんと一緒に一緒にのテーブルでご飯を食べられているはずなのに!! 一人で食べるご飯がどれだけ不味く感じるか、あなたに理解できるのか!!」

「……」

「料理が大好きだった。幼少期、あなたと台所で晩御飯を一緒に作るのが好きだった。いつかおいしいご飯を作って、あなたに召しあがってほしかった。大切な人達に食べてほしかった! 包丁は猫の手で持って優しく食材を切るんだって、あの優しい声で教えてくれたことを今でも忘れたことはない!! その包丁一つ、もう私は持てなく

なった。あなたが私を包丁で刺そうとしたことを、いつだって忘れずにいた!! こんな思いをするなら、あのままひと思いに刺してくればよかったのに!!」

私は抱え込んでいた思いを、寂しさを、弱さを、これでもかというくらい叫びに乗せた。

いつもなら、こんな思いなんて受け止めてくれはしないだろう。正直今でさえ、思いが空回りしていそうで怖い。

そんな私の泣き叫ぶ声にも、母は顔色一つ変えずに傍観している。もう無理なのか、母さんの心を動かすことは……敵わないのか。

「……たった一人でも、大切な人がいさえすれば。たった一人……でも」

「……いつまで、その言葉を引きずっているのよ」

「引きずりもするさ。だってその言葉が……私の存在の証なんだから。あなたの、”娘”だということの……」

そう顔を下に向いて、うなだれ口にする。

もう届くはずもない、諦めるしかない事実の一つ。

そんな落ち込む私に、母親は浴衣を押しつける。

「……いったい、なんのあてつけなんだ……これは」

そう崩れるように私が言うと。

冷徹な母親が、遠回りな親ごころでこう言った。

「だからこそ、お母さんを見返してみなさい。あなたにとって最も大切と決めた一人を、取り戻しに行行って来なさいよ」

「……今更無茶だ」

「ならやらなくていい。無茶だと諦めるならそれでもいい。そう、私はそうやって”取り戻せなかった”」

「……あ」

「……もう母さんの背中を追うのはやめなさい。あの言葉、夜空にあげるわ」

あの言葉、それは母さんが私に与えてくれた一番大切な言葉。

「だから、その言葉を本物にするのも、その言葉に価値をつけるのも、今日からあなたなのよ。その一歩だと思って、行ってらっしゃいな」

そう浴衣を投げつけ、母親は背を見せてソファアールに座る。そしていつものように、テレビをつけてワイドショーを見始めた。その背中はどこか、恥ずかしさを隠すようにも見えた。

未だに認められない。母親の優しさを受け入れることはできないけれど。

だが、私は授かった。与えられたのではない、押し付けられたわけでもない。

あの言葉を、母親より授けられたのだ。もう、全てが私にかかっている。

『全てを投げ出すな。言っただろ、お前にはまだやるべきことがたくさんあるんだ。隣人部はどうなる？ お前を信じたものを見捨てるな。あの場所がお前の嘘で塗り固めて生まれた空間だというなら、お前が全て本物にすればいい』

急に、小鷹に言われた言葉を思い出した。

そして感じた。あの言葉は、今はもういないであろう親友としての彼が、私に残した言葉であると。

『……もう、諦めることはやめることさ』

そしてケイトに贈られたこの言葉

母親から言葉を授かり、親友から言葉を残され、教師から言葉を贈られ。

私の背中には、重たい思いがたくさん乗っかっている。

そしてそれを、捨てるも投げ出すが私にかかっている。

これはもう、強がりじゃない。それを守るために、強がるだけではないけない。

私は気付かなければならない。諦めたことに対して、取り戻さなければならぬ。

仮に取り戻せない程に、壊れてしまったのならば。

「――新たに、作ればいい」

数分後。

三回ほど、電話をかけた。

そしてようやく、あいつが電話に出る。

『……どうした？』

その重たい声色が、私に乗っかる。

相手は小鷹だ。だが私の知っている男の態度ではない。

私を完全に敵視している男の声だった。

「ああ、こんな時で悪いんだが。隣人部の活動をしようと思ってな」

『……はっ。ケイトに聞いたぜ、お前結局部活を投げ出したそうだな』

私がそう言うと、小鷹は鼻で笑ってそう返した。

その口調も、どこか小鷹であって小鷹ではない。

私や他のやつも感じていた、彼の中に眠る不器用ながらも熱い思い。

それがもう、微塵も感じない。それが、”私に出会わなかったかもしれない”、羽瀬川小鷹の言葉だった。

『それが今更何だ。都合が悪くなったらそれか、部活という名の”友達ごっこ”。隣人部はお前の都合のいいように動く人形かよ。エア友達じゃ飽き足らず、人の孤独に付け込んで仮友達ってわけか？』

「……」

『まあ、友達一人作ったことの無い俺が偉そうに言える立場じゃないけどよ。俺も隣人部に毒された側の人間だしな、だが……てめえに従うってのは気に入らねえな』

もうそれは、私の知っている男の言葉ではない。

今話している羽瀬川小鷹を、私は”知らない”。

そして、小鷹も私を知らない。覚えていない。

だから、私と出会ったことで知るはずだった、友情の大切さを知らない羽瀬川小鷹。

もはやこれは、かつての私の亜種とでも言うべき存在だった。

『まあ、こんな顔つきも凶悪な俺と違って、あなた様はさぞ美人のようだから。いつでも友達なんてできるんだろうけどな』

「……」

『この、リア充がよっ！』

なんというか、この時の私は、変わり果てた小鷹に対して失望なん

てものは抱いていない。

むしろ、笑いすらこみ上げてきた。なぜか、私が……私を相手にしているような気分だったからだ。

「…………ふっ」

『…………なにがおかしい?』

「今日は、ずいぶんしゃべるんだな」

『…………なんだと?』

そう、私に苛立ちをぶつける小鷹。

そんな彼に、私は”いつもの”——”いつも通り”の強気な口調で返した。

「そんな友達一人も作ったことの無い可哀そうな小鷹くんのために、部長である私が一肌脱ごうかと思っただがな」

『…………ふっ。あはははははは!! お前どうした? 頭でも打ったのか!? 他人なんて興味ありません的な、友達いません的ないつものお前は どうしたんだよ?』

「何を、私だって他人に優しくすることもある」

『なんだ気持ち悪い! 散々付き合わせたから礼の一つでもしてやろうってか。上から目線が好きなの女だなお前は』

小鷹も小鷹なら、私も私で全力で言い合う。

そう……。例えるならこれは、口喧嘩だな。

嫌いな者同士が行うように見えて、実は違うもの。

これは、互いを認めているからこそ言い合える茶番だ。

「…………今日、一緒に遠夜市の祭りにでも行こう。これからの隣人部の方向性について話し合う」

『アホか。俺はお前のせいで怪我してんだぞ。だるいしなんでお前なんかと祭りに行かなきゃいけないんだよ』

そう全力で嫌がる小鷹に、私は一步も引くことはしなかった。

……本当は、深い傷を抉られるかのように、心に響く言葉の数々だった。

また泣き崩れてもいいくらいの小鷹の心ない言葉の数々。だが、こだけはくじけたくなかった。

だから私は、そんな言葉に……十年前のあの約束を、口にしようと決めた。

「――祭りに来てほしい、小鷹」

『……なんでだ。なんでお前は俺ばかりを』

「――今日私は、お前との大切な約束を果たす」

そう私が言い放つと、小鷹は押し黙った。

『つつ！』

「やり残したことがある。だから……否が応でも付き合ってもらおう」

『な、なんで……なんでだ』

『……？』

『俺はお前なんて知らない。お前みたいな性悪女なんかと関わるなんてごめんだ！　だが、なんか不気味だ。お前と話をするとイラついて仕方ないのに、どこかで安らぎを感じてる。意味わかんねえ、なんなんだよお前は!!』

『……』

『お前はなんだ！　何様のつもりだ!!　俺になんか恨みでもあんのか!!　俺はいつまで、お前に付き合わされなきゃいけないんだよ!!　もううっぜえんだよ！　隣人部とかわけわかんないんだよ!!　お前のことを考えるだけでも胸糞悪くてしかたねえんだよ!!　俺は！　お前なんてな!!』

『俺は……お前なんて大嫌いなんだよ!!』

そう、真っ向から言い放つ小鷹。

だが、私は絶対に引きさがろうとはしなかった。

迎え撃つ。背を向けない、諦めることになるから。

お前から大切なことを奪ったことを、押し付けてしまった代償を、捨てることになるから。

だから、私はお前から逃げるわけにはいかない。いかないんだ!!
「……安心しろ、お前の損にはならないさ」

『何を、都合のいいことばかり』

「祭りに来い。私と二人きりだ。そうすれば、私が貴様をリア充にしてやる」

『……意味が……わからないんだけど』
「……だから小鷹——タカ。お前は」
——お前は、私をリア充にしてくれ。

漆黒

……これで満足か？ 守った気になって、救った気になって。親友だから助けたい。自分が傷つけたからこそ、その傷を癒したい。

その行いは良心によるものか……。それとも、ただの欲望か？ そんな問いばかりが、夢の中で繰り返された。

少年はなにをしていたのだろうか。ついさつきまで、何者になった気になっていたのだろうか。

一つの物語の主人公として、悲劇のヒロインを救いだした。そんな王道を歩いていたのだろうか。

歩けると思っていたのか？ そのような王道を。中途半端な気持ちで、お前みたいな弱虫が。

その青春の中心人物として、華やかなしい青春の裏に隠された絶望の数々を……。

その激動を、お前が全て受け入れられると思っていたのか？

そのような蔑みが、頭の中で流れた気がした。

それを言われることによって、正義の騎士を語っていた少年は、現実へと引き戻されたような気がした。

未だ少年は夢の中。目を覚ました先には、非力を受け入れなければならぬ現実が待っている。

理想は全てに立ち向かえる勇気を持った、青春ラブコメの中心人物だったのだろうか。

少年はそのような存在に、なれるはずだった。

しかし目を覚ませば、友達一人としていない、非力な少年。少年という存在は、それに値する。

もう一度やり直すか？ もう一度挑んでみるか？

ならやってみればいい。行きつく先は、また繰り返しだ。

羽瀬川小鷹は何度でも失敗する。お前が、”羽瀬川小鷹である限り”……。

その問いを投げかけられた時、羽瀬川小鷹という存在だったものは

苦しんだ。

自分が羽瀬川小鷹である限り、”とある一人の少女にとって”の羽瀬川小鷹である限り。

その存在に降りかかるのは、主人公として受け止めなければならぬ、ありとあらゆる試練だ。

「……ああ、そうだな。俺は何もできなかった。きつと次も、ただ何もできないだけだ」

……なら、”あの女”はどうする？

その問いに対して、羽瀬川小鷹は……答えを選ぶ。

「……わかったよ、俺は過去を……捨てる」

それは、少年が決断した。記憶の改ざんだった。

夏休みもあとわずか。

この日、一人の少女は、一人でお祭りの会場に来ていた。

浴衣を着こなし、その姿は他人の目を引きつける麗しき大和撫子であつた。

しかし、どれだけ綺麗な格好をしても。彼女には一緒にお祭りに行く人は一人もいなかった。

誰と行くわけでもないのに、気合を入れて浴衣で来るうら若き少女などいるだろうか。普通に考えれば、いるわけがない。

周りを見渡せば、友達や恋人と並んで歩く人達。

その周りという存在から言わせれば、それが当たり前前の光景なのだろう。

だが少女、三日月夜空という存在に、それを言わせるには少々酷な話だった。

少女はこの日、一人の少年をお祭りに誘っている。

最も誘っただけで、来る可能性としては極めて低い相手である。

なぜならその少年は、三日月夜空という少女を……世界で最も敵視している者だからだ。

といえば少女には酷な話だろう。故にこう言えはいいだろうか、少女にとっては最も味方であつた存在だったが、わけあつて敵になつて

しまったと。

これがRPGのようなゲームの世界なら、よくある光景なのだろう。洗脳や悪落ちなど、設定は作り放題だ。

だが、少女が生きているのはごく普通の学生生活。少女一人が生きる世界としては当たり前すぎて狭すぎる。

だのにどうしてか、親しかった少年は今……彼女の敵へと変貌を遂げた。

まるで世界が、彼女を試しているかのように。

この祭り会場は、街からすれば極々小さな行事にすぎない。

子供から大人、一人から多数。飲んだり食べたり遊んだり、そんな楽しい場所。

そんな場所でも、少女からしたらとても大きな世界に見える。

学生生活を送る日々の大多数が、空に籠る日々の少女からすれば。

ごく普通の人たちが普通に送る日々が、少女からすれば尊い。

事情知らぬ他人からすれば簡単な話だ。ただおかしくもない話、気の合う相手を見つけて話をして、気がついたら仲良くなつて、毎日を楽しめばいい。

だが少女にはそんな簡単なことが、日常において普通であることの事柄が、とてつもなく難しいのだ。

学校の難しいテストが簡単でも、ひねくれる相手を論破することが簡単でも。そんな他人からすれば難しいと思えることが少女にとつてはとても簡単だったとしても。

そんなことを簡単と思えるよりも、ただ他の人が普通に過ごしている世界を手に入れることを望んだのだ。

それが、簡単だと思えるのなら。

ここまで苦労はしなかつただろう。ここまで捻じれることはなかつただろう。

ここまで歪むことはなかつただろう。ここまで拗れることはなかつただろう。

たった一つ大切な友情を、そう簡単に失うことなど……なかつただろう。

待ち望んでも現れない。そいつはけして現れない。

待ち望む少女の願いを、何知らぬ他人は気付くこともない世界。少女の表情に見せない涙を、けして世界は知ることはない。

今の少女を現わす言葉は孤独。ゼロの地点に、一步すら踏み出せずにいる状態。

踏み出しようが無い、どう踏み出せばいいかわからない。それだけ世界とは彼女にとって、手ごわく、恐ろしく、強大な相手だということだ。

そんな世界を作り出してしまった元凶というのもまた、少女自身であるというのが、残酷なる真実なのだ。

——私はこれからどうすればいい。大切な約束を果たすなどと、口出任せにいったが、今の私の先にあるものは……いったいなんなのだ。

そうだ。これが結果だ。残念な結果がこれだ。

あの緊迫したやり取りの先に、激動など訪れるものか。

今の私には、話し合うべき相手を自分の前から引きずりだすことすら、できないということだ。

1時間、2時間と時間だけが過ぎていく。

時間が流れるたびに悲しくなる。どうして来てくれないのだと、来ない理由などわかっていても、そうあいつの責任にしたいくなる。

そして3時間が過ぎたあたりで、私は諦めた。

祭り会場を離れる。一人途方に暮れる。

その最中、仲良く祭りを楽しむ小さい子供たちが目に映る。

そしてまた悲しくなる。私という存在は、あの子供たちにも劣ると。

あんな小さな子供にさえできる簡単なことを、私はできない。隣人はできないのだ。

「……小鷹、もう……無理なのか」

そう、目から雫が流れそうになりながら呟いた時だった。

電話がかかって来た。相手は……。

「!? もしもし!!」

相手は小鷹だ。私はすぐに電話を取ると。

約束一つ守らない少年の第一声は、けして罪悪感など感じさせないかのように。

『ようお姫様、お祭りは楽しんでるか?』

まただ。また私には覚えのない男の口調だった。

私が歪めてしまったその男の第一声は、私を嘲笑うものだった。

「楽しんでるか……だと? 私は、お前が一向に現れなくて最悪な気分だ!!」

むきになつたか、そう言い返してしまった。

違うだろ、私にはその少年にそう言い返す資格などないくせに。

と、私の怒りを聞いてか、少年はなんともうれしそうなトーンで。

『おおそうかそうか。お姫様は人ごみが苦手だもんなあ。そんな場所であつた一人さびしく楽しめるわけねえか』

私の耳にうづく、そんな声で少年は私を馬鹿にする。

この男はかつての親友のタカじゃない。そして、私の知る羽瀬川小鷹という少年でもない。

お前は誰だ? 私はあの熱い目を持った少年を、なんていう姿に変えてしまったんだ。

哀れな少女の独りよがり、一人の少年を、どうしてこんなにも残酷に変えてしまったんだ。

『まったく別に一人でも色々できるだろ。お祭りで食べるタコ焼きはおいしいぞ? わたあめは甘いぞ? 射的は当たれば爽快だぜ? つ

てなんだ? なぜ俺が知ってるかって? 家族で何回か行ったことあるからだよ言わせんなよバカが』

「……私は、家族でさえもまともにお祭りに来たことはない」

『ああ? ああそうか思い出した。お前親にも見捨てられてたもんなあ。確か俺はそんなお前の家に行って……。あれ? なんで俺お前のために怒ってお前の親御さんと喧嘩なんてしたんだっけ? 今思えばバカバカしい行動だよなあ。俺はお前のなんなんだって話だよ。行動が理になつてねえぞ』

小鷹はそういつて自分に言い聞かせるようなしやべりかたで、長く

独り言を言っている。

そう、小鷹には私と親友だったころの記憶が無くなっている。私を庇って、車にひかれたショックでだ。

故に今の小鷹の心境と、私を救おうと動いていた小鷹の行動につじつまがあわなくなっているのだ。だから小鷹は頭を抱えているのだろう。

結局は自分のせいだ。そうわかってはいるが、小鷹の発言に心傷つく自分がいた。

「……お前は、私のためにあの女に怒りを向けたんだ」

『だから……。なんでそんな無駄なこと。俺はお前が傷つこうと関係ねえってのに！ むしろ傷だらけになって再起不能になってくれればせいせいするってのに!!』

「……」

『ああもうなんだこれ！ てめえに何か言うたびに頭の中でうつせえんだよああ!!』

「小鷹っ！ もう……。やめ……」

『はあ……。はあ……。ククク、にしてもお前……。せつかくのお祭りだったのに、ぶらぶら散歩とはよ。よく悪い男に絡まれなかったなあ』

そんな小鷹の発言に、私は違和感を覚えた。

まるで、さつきまでの私の行動を、小鷹は知っているかのような物言いだっただ。

私は、まさかと思った。

「お前……。近くににいるのか？」

『……はは、まったく相変わらず鋭いなお姫様よお。いったい何探してたんだよ、時間が立つ度に中央広場の時計気にして。そんなに誰を……。待ってたんだあ？』

その小鷹の悪意ある発言を聞いて、等々私の怒りも爆発した。

そう、この男は私の気持ちを知ってか知らずか、ただ遠くで姑息に、私の困り果てる姿を見て笑っていたのだ。

「ふざつけるな!! 私!! 待ってるって言っただろ!! 祭りに来てほ

しいって、私が……どんな気持ちで!!」

『あはははははは!! 俺も言っただろうがよおお姫様!!お前みたいな性悪女なんかと関わるなんてごめんだってなあ!!』

「ぐっ! 姿を見せろ!! 一発ぶん殴ってやる!!」

私は何を言うのか。むしろ殴られるのは私の方だろうに。

こんなにも小鷹を好き勝手巻き込んで、自分の都合で部活動まで作って。

どうしてこんなにも、私は自分勝手なのだ。

だが、火がついた感情は抑えられない。

『……仕方ねえな。どうやらあんたはまだ俺にこだわっているようだしな』

「ああ、お前とは決着をつけなきゃいけないんだ!!」

『決着……か。よくわからないが、お前はまだ全てを捨て去る覚悟がないみたいだな。まったく強がってる割には弱点丸出しなお姫様だな』
「捨て去る……だと? そんな簡単に、捨てるなんてできるわけないだろ!!」

『どうだか? あんたにはできなくても、俺にはできるね』

「なに!?!」

『お前の戯言も、お前が俺に押し付けてる十年前の友情とやらも。俺にとつては足枷となっている。大切な母親との絆。』つてやつでさえもな』

そう電話越しに言い放って、小鷹は向こう側から姿を現した。

そしてその小鷹の姿を私が観測した時、新たな物語が幕を開けたような気がした。

たったひとつの、かすかに残った繋がりさえ、千切れたような気がした。

——そう、この瞬間。

ソラとタカの親友という関係は——三日月夜空と羽瀬川小鷹という対をなす関係へと、完全に変わった。

夏祭りの夜から一週間。

この一週間、隣人部の部室には、誰一人として顔を出す物はいなかった。

色々あった夏休み、少女と少年が過ごした、短いようで長過ぎた、激動の夏休み。

この夏休みで、少女達は何かを変えることができただろうか。

いやできなかった。変えたのではない、変わり果ててしまった世界を、受け入れることしかできなかった。

物語は決して最後はハッピーエンドで終わるとは限らないと、正義は必ず勝つのが物語ではないと教えられた。

そんな残念な結果に終わってしまった。少女のこの先の未来には、いったい何が待っているのだろうか。

9月1日、朝。

聖クロニカ学園は二学期制なので、新学期というわけではない。

夏休みが終わった最初の日となるこの日。

物語の主人公である少女——三日月夜空。

そしてもう一人の主人公である少年——羽瀬川小鷹。

その二人が2年5組の教室では、担任の先生が生徒の名前を呼びあげて出欠を取っていた。

それをぼーっと無気力で聞いていた。腰まで伸びた長い綺麗な黒髪をしたのが、夜空という少女だ。

次々と名前が呼びあげられる。そんな次に呼ばれたのが、少女にとって因縁となる相手。

「羽瀬川——」

「はっ」

夜空の後ろに座っているその少年は、”ハッキリと返事をした”。

そう、自分が羽瀬川小鷹であると……ハッキリそう言ったのだ。

その返事を聞いて、教室が小さくざわついた。

周りから聞こえてくる。やっぱりそうだ……だとか、一体何があったのか……だとか、今になって心を入れ替えたのか……だとか。

そんな噂される少年の方へ、夜空も悲しそうな表情を浮かべ視線を向けた。

この2年5組において、羽瀬川小鷹という少年の印象は——くすんだ金髪の眼つきが悪いヤンキー。というのが当たり前だった。

夜空でさえ、ヤンキーとは思ってないにせよ、くすんだ金髪であることこそが、羽瀬川小鷹が羽瀬川小鷹であることの最重要な要素であったことだろう。

そして彼は、そのくすんだ金髪に対してかつて、こう言ったこともあった。

——これは、死んでしまった母親との思い出。残った唯一の絆の証であるのだと。

だが、今の羽瀬川小鷹の髪の毛の色は……。

——全てと捨てる覚悟を示した。過去と完全に決別した……”漆黒”に染まっていたのである。

「……小鷹」

夜空は小さくそう呟いて、小鷹から視線を背け、正面へと向いた。そんな彼女を見て小鷹は、特に何を思うこともなく、ただのくだらないものを見るような目を見た。

もう小鷹にとって三日月夜空は、かつての親友ではなかった。小鷹にとつて夜空は、全力で潰すべき敵でしかない。

くすんだ金髪をコンプレックスとしながらも、アイデンティティーとしていた少年は、そこには存在していなかった。

そこにいるのは、親友と家族との絆を犠牲にしても、大切な物を捨ててでも、変わることを強要された少年だった。

「……さよならだ、タカ」

そう夜空は呟いて、止めることのできない涙を流した。声に出したくなくても、嗚咽が止まらず口から出てしまう。

そんな彼女を、クラスメイトや教師はなにがあつたのだろうか、困惑の表情で見た。

「み、三日月。いったいどうした？」

教師が心配そうに声をかけると、夜空は首を横に振る。

そんな中でも、小鷹は何も思わなかった。

何も思わず、ただそれがうっとおしいものであるかのように見る。

もう、彼には夜空という存在は……必要ないのだ。
小鷹は全てを捨てた。

夜空も全てを捨てようかと思った。

——だが、夜空には結局の所、それはできなかった。
そう……彼女は捨てる選択肢を選ぶことはなかった。
そしてそれは、この先に彼女に待ち構えている。

——さらなる激動の青春を意味していた。

「——潰してやるよ、三日月夜空」

その少年が発した敵意こそが、夜空の運命の物語の、再始動である
ことを意味していた。

オワリノハジマリ

——少女の儂い願いさえも、その少年は遠くから嘲笑った。
自分一人、一方的に全てを捨て去って。

その憎き少女一人の悲しむ顔を見たいがために、少年は捨ててはならない物まで捨ててしまった。

激動の二学期の始まり、ホームルームが終わり昼休み。

小鷹と夜空の教室での関係性は、小鷹が転校してきた初日のごとく戻ってしまった。

けして二人が混じり合うことのない。それどころか、そんな可能性すら消えてしまった現在の状況。

当然、夜空も小鷹に話しかけようとしないうし、小鷹も夜空に話しかけようとしないうし。

そして当たり前か、クラスメートも二人とはまったく話をしたことがないためか、二人の関係性の変化に気づくことなどまずありえないだろう。

他の生徒が夏休みのことを楽しく話す中、小鷹と夜空の二人の世界だけは、凍りついたかのように動いていなかった。そんな中。

「あ、あの……羽瀬川くん？」

一人の女子生徒が、小鷹の席に行き話しかけた。

その瞬間、教室の空気が痺れるのを、そこにいた皆が感じ取った。そして小さな声で聞こえてくる。「おいやめとけよ」だの「髪のこととか聞いたらきつとキれるぞ」だの「中身はどうせ変わってねえんだろ？」 髪の色元に戻しただけで不良やめたわけじゃねえって」だの、小言で話す生徒達。

それらを聞いていた夜空は、表に出せない苛立ちを覚えていた。彼女の正義感、人を見かけで判断したあげく、悪者と決めつけ聞こえないように悪口を言っているそいつらのモラルが許せなかったのだ。

が、そこで夜空が噂話をやめると、口出すをするのには彼女という存在が、その教室ではあまりにもちっぽけすぎた。

目立つし、怪しまれる。それ以前に、彼が髪の色を黒く染めてしまった原因は自分にあるので、小鷹を庇うのはお門違いだ。

どう庇ったって、どう味方をしたって。小鷹にはそれが、夜空の贖罪としか捕えられないだろう。

「……」

一方で話しかけられた小鷹はというと。

夜空から見ても、彼に起きた変化の振り幅が、大きすぎるのは一発で分かった。

小鷹はというと、その女子生徒に話しかけられたことに対し、”まるで動じていない”のである。

今までなら、動揺してひきつった笑顔を浮かべ、怖がられるのが関の山だろう。

だが、今の髪を黒く染めた小鷹は、そんな失敗などは犯すことなく、まるでその生徒に、話慣れていますといった感じにこう返した。

「……どうしました？」

声に震えがない。

声色も緊張して低くなることもない。

今の小鷹には、かつてまで抱いていた他人への恐怖という感情が、まったく消え失せてしまったのである。

それは夜空から見ても、もう彼女が今まで知っていた羽瀬川小鷹ではない。

——そこにいるのが、羽瀬川小鷹ではないことを思い知るには充分の光景だった。

「な……なんか雰囲気変わったね。か、髪の色染めてたの……元に戻したからかな？」

女子生徒も、恐る恐る話を続けるが。

小鷹は女子生徒に対し、まったく興味を抱かず、そこにある”オブジェクト”に対して敵した対応をするかのように、話返した。

「そうかな？ 確かに髪の色を染めて、ちよつとすがすがしい気分ではあるけど？」

「そ、そうなんだ。って……染めた？ 染めていたのを元に戻したん

「じゃなくって？」

生徒がその質問をした瞬間、小鷹を纏っていた空気が一瞬、どす黒くなるのを夜空だけが感じ取った。

そう、小鷹の髪は染めていたんじゃないやなくて、元々ああいう髪の色をしていただけ。

それが彼のマイナスイメージを決定付けていただけ。彼は何も悪くない。

どんなに彼を苦しめただろうか。しかしそのくすんだ金髪の地毛は、彼の死んだ母親が息子に残した大切な物。

他の生徒は、そんな環境を知ろうともせず、今まで彼を妨げ、空気から省いていた。

それが、髪の色を黒くしただけで、話しかけてくるものだから、小鷹にとっては複雑な気分だっただろう。

だが、そんな気分を害していようとも、小鷹はそれを表情には出さない。

「……ああ、あの髪の毛は地毛なんだよ」

「え？ あんな変な色の髪なのに……はっ！」

つい生徒が口を滑らせた。

他の生徒達も、夜空でさえも、そこから思わず目を反らしてしまうくらい、空気が更に邪悪な物になるのがわかった。

この発言にはさすがの小鷹も、ほんの一瞬だけ、目の色が変わった。それは、今まで彼が見せた拙い表情とはまた違った、恐ろしさを感じ取るには充分なものだったという。

(ぐっ……。この教室には馬鹿しかいないのか!!)

夜空は反射的か、この教室の連中のモラルの低さに呆れそう頭の中で思ってしまう。

一方で、散々なことを言われた小鷹はというと、それでも動揺を見せない。

少し前の小鷹なら、事故にあい変貌する前の小鷹なら、ここで失態を犯していてもおかしくはないはずなのに。

「……はは、ははは」

「は、羽瀬川くん」

「いやあ参ったなあ。そんな風に思われてたなんて。この学校に転校してきてから皆に怖がられるとは思ってたけど」
演技じみたように返す小鷹。

それに対して、女子生徒はびくびく怯え始めた。

目から、涙が滲み出て来ている。

「そ……その。ごめん……なさい」

「はっ。なんで謝るんですか？ 謝るくらいなら余計なこと言わなきゃいいじゃん」

「ひっ……ひっく」

小鷹はただ冷徹に言葉を返しているだけだ。それだけで生徒は泣いてしまい、まるで小鷹が悪者のようになっていく。

結局はこれである。小鷹が生徒達に植え付けた嫌悪感は、髪の色だけでは直るものではないのである。

次第に周りの生徒も、小鷹に対し不穏な表情を向けるようになっていく。

「ちよ、ちよつとこのヤンキー!! そんな言い方ってないじゃん!!」

「おい馬鹿やめろって! そんなこといったら噂通り殺されるかもしんねえぞ!!」

「ああもうおしまいだあ!! 今まで怒らせないように変に関わらないでいたのによお!!」

と、周りの生徒は小鷹を悪役を着せ、好き放題小鷹の傷つく発言を容赦なく小鷹に浴びせる。

この罵倒の嵐を、夜空一人だけが、腸煮えくりかえりそうな気持ちで聞いていた。

最初に小鷹に心無い言葉を浴びせたのは誰だ。なのになぜ小鷹ばかりが責められているのだろうか。

「別に、なんにもしませんよ。人を殺したら警察に捕まっちゃうじゃないですか？ 私、暴力とか嫌いなんですよ」

それに対しての小鷹の返しはこれである。

この他人への対応の仕方、厄介事のあしらい方を、夜空本人が一番

知っていた。

このやり方は、つい昨日までの彼女自身のやり方だ。

隣人部を創部し、大切な物を失う前の、人を作っていた三日月夜空のやり方そのものだった。

なぜ小鷹が夜空みたいになっているのか。

恐らく彼にとっては、最も否定した相手の人格が、記憶を失ったことでリセットされ、その少女と似たような屈辱を経験したことによって、まるごと憑依したのだろう。

憑きものが落ちて腑抜けになってしまった今の夜空とは、全く対照的である。

「うるせえよ！ お前の悪い噂全部耳にしてんだぞ!!」

「出てってよいい加減！ あんたが転校してきて教室の空気悪くなる一方なんだよ!!」

「この不良！ 社会のゴミ!!」

もはや一線を超えた発言。

等々夜空はブチ切れた。

バンツと机を叩いてたちあがり、皆を敵視してこう言い放った。

「貴様ら!! そうやって人を患者扱いして言いたい放題……恥ずかしくないのか!!」

そう夜空が叫ぶと、生徒達が一斉に凍りついた。

「何が助け合いの精神だ！ 学校のパンフレットにも書いてあっただろう!! 貴様らがやっているのはただの慣れ合いか！ 結局は気になった連中とつるんで自分を強く見せてるだけじゃないか！ 貴様らは高校生ではない、小学生にも劣るまぬけd」

そんな夜空の必死の演説の最中。

それを小鷹が横切る。

「……黙れよ人格破綻者が。聖人の振りしてまともなことしやべってんじやねえよ」

「なっ!!」

そのやり取りを聞いて、教室中がまたも震えだした。

「こだっ……羽瀬川？」

「いるんだよなあ、人の不幸を前にして自分は味方ですいい子ですつて正論振るやつ。そう言う奴が一番不幸をおかずにしてる癖によ」
「そつ！ そんな人の道を外したこと!!」
「あれ？ じゃあ俺が今こんなになっちゃった大本の原因つて……なんでしたっけ？」
「うつ!!」

小鷹に完全論破される夜空。

以前までの全く逆の展開である。これも互いの人格の変化が織りなす現象なのだろうか。

動揺する夜空の元に、小鷹が歩み寄り。

そして、冷徹な声で夜空に耳打ちをする。

「……余計なことしてる場合かお姫様。その正義感、つまらないところで使ってんじゃねえよ」

「……小鷹」

「あんたはこれから、”俺との契約”を果たさなきゃいけないんだろ？ お前の心と体が……ボロボロになるその時までよお」

それは、あの祭り会場でのことである。

電話越しに話していた小鷹が電話を切り、夜空の方へと歩いてくる。

そして姿を露わしたそれは、夜空の知らない少年の姿をしていた。くすんだ金髪ではなく、黒い髪をした変わり果てた少年の姿である。

「こだ……か。その髪の色は……？」

「染めたよ。あの髪の毛のままだと頭が痛くて仕方がねえんだよ。夢の中でくだらないガキ二人が遊んでてよお、毎日が眠れねえんだよお」

小鷹は自分で選択をした。今までの自分のコンプレックスを、アイデンティティーを捨てることを。

それでもしないと、いつまでも羽瀬川小鷹は、自分の周りの人たちが求めている物でしかいられないことを知ってしまったから。

羽瀬川小鷹が他者の物ではない、自由な人の姿になるには、もうこれしかないかったのだ。

それが……母親との絆を断ち切る形になったとしても。

「そ……そこまでお前は……苦しんで」

「あ？ 哀れんでくれてるんですかお姫様。まったくお優しいことですねえ、胸糞が悪くなってくる」

もう、こうなってはかつての友情の復活なんて騒ぎではない。

小鷹を小鷹たるものでなくしてしまった。もうソラとタカの友情の話などしている暇もない。

この男には妹だっている。父親だっている。慕っている後輩だっている。

それを、たつたひとつの友情のこじれが全ての崩壊を生んだのだとしたら、もう夜空には友情の復縁ではなく、彼個人を取り戻すことを優先するしかない。

それはなんとしてでもしなくてはならない。夜空は必死に小鷹の心呼び掛ける。

「小鷹。わ、私なんでもするから……。だから、戻って来い!! お前はそんな……かつての私のようなそんな……そんな目をしてはいけないんだ!!」

「ははっ。戻って来い……。か。戻るも何も、これが俺だよ」

「小鷹！ 羽瀬川小鷹!!」

「すがすがしい気分だ。今までの俺は、色んな物に存在価値を押し付けられていた。くすんだ金髪の不良、優しいお兄様、自慢の息子、変わった髪先輩。そして……お姫様の大切な者のダミー」

そう自分を自虐する小鷹。

恍惚な笑顔を浮かべ、今の自分の自由を噛みしめ、喜びにうち震える。

「わ、私は……なんてことを」

「あーーーーーっははははははは!! さいつこうの気分だぜ!! 大切なもんだってこだわって、出来のいい妹の良い兄だったり、学校の不良扱いに甘んじたり、友達が欲しいと頑張ったりなんてしちゃった

りしてさ、そんなもってお前なんかのために頑張って……」

「あ……ああ」

「もう全部しなくていいんだよ!! クソみたいな物語の主人公である必要もねえんだよ!! 俺は……自由なんだよ……!!」
そう全てを勝ち得たように叫ぶ小鷹を、夜空はただ……見ていることしかできなかった。

残された夜空には、いったいどのような運命が待っているのだろうか。

運命の主人公という肩書の少年は、物語からはじき出された。

ならば、その片割れが成さなくてはならないことは。

「……お前も捨ててみるよ。隣人部も、楠幸村も、志熊理科も。そしてお前が良く口にする、そのタカつていうクソみたいな親友の事も」
「……」

「捨てろよ。気持ちがいいぜ? そうすりゃあもう、何にも縛られなくて済む」

その小鷹の囁きは、悪魔のささやき。

悪魔の誘い。忘れることで、捨てることで人は前に進めるといふ、難しい用で一番簡単な選択肢。

人が全てを投げ出し諦めることを選択する時に、行きつく残念な結果の一つが、捨てることである。

取り残された夜空は、こう答えを返した。

「……いやだ」

「なに?」

「嫌だ” って……言ったんだこのヘタレ!!」

そう言つて夜空は小鷹を突きとばした。

これには小鷹も啞然とする。

「私は……私は捨てないから!! お前みたいに、愚策に陥つてなどたまるか!!」

「……そうか。じゃあ全部背負うつてののか?」

「そうだ!! お前も必ず元に戻す!! その腐った根性、私のこれからの行動を焼きつけさせて、もう一度あの熱い眼差しを取り戻させてや

るのだ!!」

「……………これからの……………行動?」

そう小鷹が問いかけると、夜空は小鷹の顔を真っ直ぐ見やり言い放つ。

小鷹の黒く染まった心に訴えかけるように。

「羽瀬川小鳩、楠幸村、志熊理科。あいつらは隣人部の大切な部員、私の大切な後輩だ!!」

「なーにが大切な部員だ。道具だろ? 装備品だろ?」

「違う!! だからあいつらが心に抱える歪みも理解できる。だからあいつらは隣人部を求めてきた。なら、求めて入部してきたのなら、それは絶対に結果にするんだ!!」

「結果に? 友達作りごっここの何があいつらの役に立つ。あいつらの歪み、心の底にうごめく怒り、悲しみ、痛み。それらがお前の考える簡単なことで晴らせる物じゃないと思うがな」

そう小鷹は冷徹に言い捨てる。

今の小鷹だからこそわかる。

呑気に傍観しているだけのヘタレな少年ではないからこそ、あの連中のどす黒いものまで感じ取ることができている。

「あれらは……………今の俺と同じ目をしてる。ちよつと前のあんたと同じ……………つていえば伝わりやすいか。というか今の俺からすればあんたの歪みなど、自分よがりの小さなものにすぎないがな」

「……………そうだな。今のお前やあいつら、そして……………柏崎星奈に比べれば、私の苦しみなど、簡単なものだっただろう」

「そうだ。自分の苦しみにすら押しつぶされて失敗した今のお前が、あいつらに結果を与えるって言うってんだぞ? お前、自分の言っていることの重大さを理解できてるのか?」

「……………」

「耐えられないぞ、押しつぶされるぞ、強大な歪みを目の前にして、自分の非力さに呪い殺されるぞ。仮に全部を受け止めきったとしても、その時お前……………今の心を保っていられるのか?」

「……………ああ、私がどうなろうと。私は……………私が助けたいと思った者の

ために全てを捧げる。今決めた、ここで決めた。やりとげる、やり遂げて見せる」

夜空は、相当な覚悟だった。

例え自分の心が汚れ消えかけても、これから自らが観測する数多くの歪みに対しても向き合おうと小鷹に言い放つ。

その表情は迷いなし。今までの彼女は迷ってばかりだったが、今度こそは迷わないと、諦めずにやり通すことを決めた。

その目には熱い焔が宿っていた。今の小鷹を圧倒するほどの視線を浴びて、小鷹は押されつつも、意地になり言い返す。

「うっ……。その目、お前……。自分がどうなってもいいと?」

「ああ。もう私には何もいらぬ。青春もいらぬ、友達もいらぬ、私には……。あいつらが友達に囲まれて、映画のような恋愛をして、アニメや漫画のような学園生活を送って、まだ見せていない笑顔でいつか笑ってくれたら。それだけで、私にはもう何も……。いらぬ」

「言ったな? やるんだな? 全部助けるんだな? 全部に味方するんだな? 助けたいと願った者のためなら、世界すら敵に回すんだな?」

「——大切なものをすべて捨てない代わりに、自分が得るべきだった全てのを……。破棄するんだな?」

それは、小鷹の最終質問だった。

その間に、首を縦に頷けば、もう少女は逃げることにすら許されなくなる。

——三日月夜空は破滅し。

——三日月夜空が望んだ者達は全てを得る。

そんな過酷な運命の物語の始まりの合図となる。

それを知って尚、夜空は躊躇なく、首を縦に振った。

「わかった。三日月夜空、俺と契約しろ」

「……ああ」

「お前が作った隣人部、お前の命を持ってして……。全てを……。救う契約だ」

その悪魔の契約に、夜空は迷わず契約する。

「この羽瀬川小鷹、お前の破滅を責任を持って見届ける。お前の苦しみ、悲しみ、痛み。全ての負は俺が観測する」

「ああ、よろしく頼む」

「俺はお前を逃がさない。もし逃れようものなら……そうだな、お前の目の前で自分の首を切り落とすとしようか。お前の中途半端な志が、大切な者を殺す結果をお前に与えてやる」

「……」

「なにせ俺（はせがわこだか）は、お前にとって……特別な存在らしいからなあ」

その時の小鷹の笑顔は、今までの慣れないが故の怖い笑顔ではなく。

心の底から出た、本物の恐怖の笑顔だった。

礼拝堂の『談話室4』

そこが、彼女らが所属する『隣人部』の部室である。

隣人部とは、友達作りの部活である。

自分にとって掛け替えのない友達を作るための術を、学ぶ部活である。

当然、目的は友達を作り、人並みの青春を送ること。

それが、隣人部の部員皆の目標……だった。

その目標、到達すべき結果を、一人の少女だけは……強制的に破棄させられた。

その少女の行きつく先は、自ら以外が全てを得るために、自らが孤独になる結果。

だが少女に迷わない、少女は迷わない。

それが、かつての親友だった少年との……約束という契約なのだから。

がちやり、夜空が扉を開けた。

誰もいないかと思っただが、そこには小鷹とその妹小鳩を除く、二人の生徒が来ていた。

楠幸村と、志熊理科である。

「あ〜ら〜。誰かと思えば可愛い後輩を置いて逃げ出そうとした情けない部長じゃないですかあ〜」

扉を開けて早々、理科はいつものように夜空に悪態を突く。

いつもなら夜空は怒りをあらわにするのだが、もう……そんな必要はない。

怒りなどいららない、夜空がこの二人に向ける感情は……無償の愛。

「ああ、勝手なこととしてすまなかったな」

理科にそう言われ、ぐうの音も出ないといった具合に夜空は一つわびを入れる。

すると理科は続けざまに悪態を続ける……のだが。

「まったくいつも一人で勝手に。本ばかり読んで友達作りが大切などとまるで責任感も感じ取れないようなことばかり言って、心配なんてしてるわけじゃありませんが、一応理科達にとっては大切な部長な……んです……から」

「……そうだな、これからは隣人部らしく、きちんとした友達を作り楽しい学園生活を送れる未来を作るように、部長として精一杯努力するよ」

「……」

その夜空の誠意のこもった発言を聞いて、理科と幸村は、言葉に現わせられないような変化を感じ取った。

夜空はいたって以前と同じように振舞っているはずだった。多少丸くなったかのようには見えているだろうが、理科や幸村から見れば何も変わっていないはずである。

少なくとも夜空はそう見せてはいた。だが、この二人がその変化に無頓着で終わるはずがなかった。

「……なにがありました？ 先輩」

理科はわざとらしく、笑顔で夜空に問う。

「別に、夏休みもつと色々できたなあと思っただけだ」

「……そうですか。じゃあこう尋ねればいいですかねえ」

しらばっくれる夜空に、理科は多少の苛立ちを表に出して、夜空に問う。

「…………お前…………誰だ？」

その理科の問いに対して、夜空は笑顔を浮かべて言葉を返す。その笑顔には、なにもなかった。ただ空虚に、頬笑みを浮かべているだけ。

「私は…………三日月夜空だよ」

これから始まる。

私の物語が、これより始まる。

私は全ての味方になってやる。大切な者たちの、全てになってやる。

もう失わないために、大切な人達を、失いたくないから。

失うなら、失うことが決めつけられているとしたら。それは私の幸福でいい。

私のあり得たであろう青春を犠牲に、理科や、幸村や、小鳩や、柏崎や…………。

小鷹が、笑ってくれるなら。

——私は、自分の存在そのものでさえ…………捨ててやるよ。

第一章……………完結。

「三日月夜空…………。つまらなくなったものね」

第一章 EXTRA

猛禽が黒く染まった日

それは、あの事故が起こる少し前の話である。

羽瀬川小鷹が変貌する前、夏休みがあと少しで終わる日。

そして、彼らの日常に一つの終わりを告げる少し前の日。

夜11時ごろ、小鷹は我が家での食卓にアニメを見ていた小鳩を呼ぶ。

「ククク、どうした我が眷属よ」

といったように小鳩はいつもの調子でかつこつけて食卓までやってくる。

小鳩は小鷹にとっては自慢の可愛い妹だが、中学生らしからぬ子供っぽさと度が過ぎた中二病に侵されていたことがなによりの残念な部分であった。

そんな妹ではあるが、小鷹にとってはいちばん身近にいる家族である。故に、相談事をするにはこんな妹でも頼るしかないのである。

「はいはい。今この場合は偉大なる吸血鬼レイシス様ではなく、我が自慢の妹羽瀬川小鳩様に、困り果てた情けない兄からの言葉を聞いていただきたいんだがなあ」

「ククク。レイシスも小鳩も一心同体よ」

「お前、いつも小鳩という小鳩じゃないレイシスだと否定する癖に。設定がめちやくちやだ」

そう言つて小鷹は呆れ顔。

だがそんなくだらない兄妹のやり取りをしている場合じゃない。

そろそろ小鳩もおねむの時間なので、寝てしまう前に話は済ませてしまおうしかないのである。

「いいから、頼む小鳩」

そう小鷹は、今まで小さな妹には見せたことのない表情を見せる。

さすがの小鳩も、それを見せられては中二病を続けるわけにはいかなかったのか。

一応つけたしておく、小鷹が怖い顔をしてビビらせたわけではないのであしからず。

普通に、妹小鳩として小鷹と向き合う。

「……なしたとよ、なんかいつものあんちゃんの様子が違うばい」
いつもの小鳩は、しゃべり慣れてる九州の方言でしゃべるので、こういうしゃべり方をする時は中二病ではない時である。

ようやく話しになると、小鷹は一服置いた。

「まあ、今までのお前のお兄ちゃんは、周りに流されて呑気に毎日を過ごしていた節があるからな」

「……そんなことはなかよ、いつもおいしい料理を作ってくれとるし。感謝しとーよ」

「はは、改めてそう感謝されるとむず痒いな」

……何かがおかしい。

これは流石の小鳩でさえ、感じ取れた。

いや、小鳩だからこそ、感じ取れたといったところだろうか。

「小鳩、お前……。俺がまだ小さかった時の事なんて覚えてるわけないよな」

「うん、そんな時のことなんか覚えてなかよ。この街にいた時のことなんて、正直かあちゃんの事しか覚えてない」

「だよなあ。俺に大切な友達がいたことなんて知る由もないか」

そんな話は初耳だ。

小鳩はそんな顔を兄、小鷹に見せた。

小鷹も、自分の周りの話など、こうして妹に聞かせるのは、正直言うところ初めてなのである。

というより、話すような内容がまるでなかったのも事実なのだが。

「友達……か。それって、うちより大事なん？」

「え？　なんだお前、嫉妬してるのか？」

「い、いやそんなわけじゃ」

「そんなの、家族以上に大切なもんなんてねえよ。それに、そいつ別にいい奴ってわけでもないし。……今の所はな」

何か引つかかるような言い方をする小鷹。

小鳩はよく理解していないようである。少なくとも小鷹にはそう見えた。

いつもなら、小鳩はそういう人間関係なんてものには無頓着なので、話に割り込んでくることすらあり得ないはずなのだ。

だが、この時小鷹は、初めて妹の知らない一面が垣間見えたという。

「……もしかして、いるの？ 近くに」

その小鳩の問いを聞いて、小鷹は内心驚いていた。

そして、やっぱりか……。と、一つの核心を得たという。

「ふふっ」

「な、なにがおかしいね!」

「……お前、いったいどこまでが小鳩で、どこまでが小鳩じゃないんだ？」

その質問を聞いて、小鳩にはわけがわからなかった。

だが小鷹は内心感じ取っていた。その、他人に対する観察眼の高さを……。

それは当然周りの他人だけではなく、兄自身に対しても発揮されている事を。

「お前は本当に、警戒心が強いというか……」

「……」

「まあいいや。いつまでも兄貴に甘えたい気持ちはわかる。母さんは死んでしまって、父さんは家を開けてばかりだからな」

小鷹は妹の気持ちを本当によく理解していた。

母のぬくもりを少ししか味わえず、父親に甘やかされ続け、そんな父親が毎日はいない日常。

そして近くには、唯一毎日近くにいる兄。そんな環境にいれば、兄に依存するのは仕方ないことである。

だが、それがいつまで続くのかわからない。そのうち兄以外にも頼れる人間が現れるだろうかという期待と、そうはならないことへの警戒心も兼ねていた。

つまるところ、14歳中二病真っ盛りの中学生の内面事情は、意外と複雑であるということである。

小鷹はそれに気付きつつも、やっぱり大切な妹なので、その妹に対しありのままの兄で居続けるよう努力していたという。

だが、それももうすぐ、できなくなるかもしれない。だからこそ今、小鷹は小鳩と話をすることにしたのだという。

「……二日月夜空。あいつが俺のかつての親友だった奴の名だ」

「あつ……」

小鳩はなんとなくだが、小鷹の言葉に対し何かを察した。

そして小鳩にとっても、夜空という人間がどういう人なのか大雑把であるが理解しているつもりだった。

限りなく遠い所にいる人、それでもものすごく近くにいそうな人。そんな印象を抱いていた。

「どうした？ 意外だったか？ そりやまあ、俺とあいつは常に喧嘩しているような印象しかないわな」

「……」

「とまあそういうわけで、あいつが今相当苦しんでいるそうなので、俺は親友だった因縁に従い動かなくてはならなくなったというわけだ」

「……」

「偉大なるレイシスの兄、この猛禽羽瀬川小鷹は、大切な親友を取り戻すため、強大な敵と戦ってくるというわけだ。この熱き心が震えて仕方ないぜ」

そう、何かを無理している兄の言葉の数々。

それを黙って聞いている小鳩、徐々に身体の震えが止まらなくなっていた。

この兄が動くのはもう止まらない。そして、兄は必ず全てを成功させられると信じて疑っていない。

だがそれは、成功ではなく失敗してしまった時のリスクが、兄を必ず崩壊させるといつても間違いはなかった。

妹としては小鷹には祝福を送りたい。だが方に一つでも、彼に失敗が降りかかれば、絶望が降りかかれば。

——その時、小鳩の良く知る兄は、そこに存在しているのか。

「……大切なあんちゃんに、うちから言えることがあるとすれば」

「ん？」

「……危険なことは、やめたほうがよかと……というかやめてくれと。そう言うしかなかとよ」

「……まあ、そうだろうな」

小鷹は小鳩の気持ちをくみ取ってそう答えた。

「あの部長のために何か頑張るのは悪いことではなかとよ。でもそれで、あんちゃんになにかあつたら……」

「……小鳩、それ以上は……いわなくてもいい。というか、言うな」

「——私は、あの女を……許せなくなるしかないのよ」

その小鳩の真意を聞いて、小鷹は思わず唾を飲み込んだ。

初めて思い知っただろう。小鳩が見せた威圧感を。

やっぱり自分にもあるであろう歪みを、この妹でさえ持ち合わせていたことだろうと。

だが、その妹の歪みが爆発してしまった時に、兄としては保険をかけておかなければならない。

「小鳩。それを言うということはお前、あいつのこと……内心嫌いではないんだろうな」

「……うん」

「きつと好きになれば、なりたいたいと思っっているんだろうな。俺は嬉しいぜ、かつての親友を、妹は気にいってくれたみたいだからな」

小鷹はとても満足そうに言った。

さて、いよいよ本題である。小鷹はその保険を、小鳩にかけるため言葉をかけた。

「小鳩。この先俺に何があつても、夜空だけは信じ続ける。俺があいつを信じられなくなった時、俺の代わりにあいつを……あいつの味方であつてやってくれ」

「……できないよ、そんなこと」

次第に泣きじやくり始める小鳩に、小鷹はゆっくりとほほ笑みながらかけより。

小鳩を思いつきり抱きしめて、耳元で呟いた。

「たのむ、俺の自慢で大切な、たった一人の妹」

「…………お兄ちゃん」

——俺の代わりに、あいつを、助けてやってくれ。

後日。

事故に合い、未だ足に包帯を巻いたまま。

小鷹はこの日、近くの美容室へと足を運んだ。

彼が美容室を訪れた理由、それは。

自分が自分たるために必要不可欠である、コンプレックスであるくすんだ髪の毛を黒く染めるためである。

からんころん♪

「あ、いらっしやいま…………」

小鷹が美容室の扉を開けた直後、美容室内の店員やお客の空気が一斉に凍りついたのはもはや説明のしようもないだろう。

この時の小鷹の髪の色はまだあの色。それでもって小鷹の内面事情は最悪に満ちていた。

大切な親友との記憶は改ざんされたため全てリセットされ、そのせいで彼が人生で得るべきだった他人との絆は全て無に帰しており。

そのせいで他人に髪の毛や外見の事で蔑まされてきたことが強調され、妹と比較されてきたことまでが負の感情を引き出し。と、ソラと過ごした毎日は彼にとってなくてはならないことになっていたのを示すには充分すぎる結果だった。

そんな小鷹が今している表情は、他の人が見ただけで逆らう気が失せるのは悲しいかな、仕方のないことだっただろう。

「あ、あのく。ご用件は」

「…………髪を染めてほしいんですけど。黒に」

「え？ 髪の色を落とすんじゃないかって」

「これは地毛だ!!」

小鷹は毎度の如くくすんだ金髪を染めそこなつたと勘違いされて本気でブチ切れる。

よほど今の小鷹にとって、この髪の色は癪に障る物になっていたのだろう。

「す、すいませんでした!! 椅子に座りお待ちください」
「ちっ」

なんとも柄の悪い、これではまるで本物のヤンキーではないか。
おそらく記憶の改ざんではなく本当にソラと会っていないかったら、
とつくの昔に小鷹は不良の道に堕ちていたIFも、なきにしもあらず
といった状態だろう。

そんなこんなで30分、まわりの子供に泣かれたり親御さんに睨ま
れたりと不穏な空気の中を店にあったゴル○13を読んでごまかす
小鷹。

いよいよ小鷹は呼ばれ、母との絆との決別の時がやってくる。

ちなみに小鷹の髪を担当するのは、先ほど対応した店員とは違う、
奥からやってきたこの店では噂されるカリスマ店員の女性だった。

「あらお客さくん、素敵な髪の毛。本当に黒に染めてもいいのかい？」
「思ってもいないことを。ああもう普通の人間に戻してくれ、はやく
人間になりたいんだよ」

どこぞの妖怪人間のようなセリフを皮肉りながらも言う小鷹。

それを聞いて女性の店員も思わず苦笑い。

「にしてもハーフで地毛か。こんな髪の毛になっちゃうこともあるん
ですねぇ」

「みたいですね。おかげで僕はこの人生散々な目に合いましたよあつ
はっは」

「そっか。でもなんで今更髪の毛の色を黒に？」

そう店員に、ちなみに名字は柏木というらしい(ネームプレートに
そう書いてあった)。

店員にそう聞かれ、小鷹は言う必要もなかったが、美容院とは店員
と利用者の会話で成り立つものがあるため(別にそう言うわけではな
いが)話題を途切れないよう話す小鷹。

ちなみに普段の小鷹なら緊張して見知らぬ他人と話すことは苦手
としていたが、なぜかこのNEW小鷹は他人への恐怖心が消失してい
たため、問題なくコミュニケーションが可能。

「最近人間関係のトラブルで事故に合いましたね、今後こんなことが

なくならずようにと願掛けみたいなもんですよ。髪の毛の色変えたら人生が変わりましたって。そう自慢げに周りの連中に言っているためですよ」

「あら〜そうですか。ずいぶんと会話がおじょうずですね、とても人間関係が難しそうとは思えませんけど」

「まあ僕がこうやって人との交流を深めたくてもね、眼つきも悪くしかも柄の悪い阪神〇イガースみたいな髪の毛じゃね。人なんて寄ってこないですよ」

「あら〜。なんでや阪神関係ないやろ〜」

といったように、小鷹はこの美容室でここ二年分の会話をしたような気がした。

と、誤魔化すのもそろそろ限界になって来たのか。それとも美容室のお姉さんが気のいい人で話しやすかったのか。

思いきって、母との繋がりの話を小鷹はし始めた。

「……本当は、染めなくていいなら染めたくはなかった」「えっ？」

「この髪の毛の金髪の部分は、俺の母さんがイギリス人だったこと、俺の母さんが俺を生んでくれたってことの証なんです。そんな母さんは物心ついた時には死んでしまって、だから髪の毛を見るたびに母さんを思い出したくなる。だから残したかった」

「……」

「でも、この髪の毛のままだといつまでも変わらない。捨てられずにいたから、中途半端な気持ちでいたから嫌な目にあった。何かを得るためには、何かを捨てなくちゃいけないんだって知ってしまったから。俺はまずはじめに、母さんとの思い出を捨ててみようと思った」

そんな話を聞かされて、思わず店員の手が止まった。

今店員がやろうとしている事は、何気ない少年から母親との絆を引きはがす行為に等しい。

それを、金と仕事だけで行うにしては、何か申し訳ないような気がした。

「……本当に、染めちゃっていいのかい？」

「ああ、もう決めたことなんで。一回捨ててみて、新しいことをやってみようかななんて。自分を思いつきり変えてみてしまいたい、今までのくだらない自分をぶっ壊してみたいって、そう……思っちゃったんです」

「……どうして、そこまで?」

その店員の問いに、小鷹はどこか、悲しそうな顔で答えた。

「この髪の毛を唯一否定しなかった奴がいたんです。信じていたけど、結局上手くはいかなかった。だから吹っ切れて、そいつを見返してやりたい。そいつに何かでいいから傷を負わせたい。あの女が絶望する顔を、一回でいいから見てやりたい。そのためならなんでもしてやるって……そう思ったんだ」

「……学生さん、それは……いけないことだと思うよ?」

「……かもしれませんがね。けど……俺はやる」

小鷹の信念を感じ取り、店員は仕方なく、少年の願いを受け入れることにした。

「……学生さん。その女の人のって、学生さんの彼女さんだった人?」

「彼女……か。あり得ないですね、どう転がっても……あり得ない」

「でも、学生さんにとっては……大切な人だったんでしよう?」

「……」

その店員の言葉には、小鷹も言葉を詰まらせた。

そうだ。大切なはずだったから、小鷹はそいつのために全てをなげうって、そしてやらかしてはならない失敗を犯した。

結果小鷹は壊れてしまった。壊れた自分を再構成するために、色々なピースを無くすしかなかった。

こうして今いるツギハギの羽瀬川小鷹は、小鷹の表には出してはならない負の権化として再構成されてしまった。誤った形の集合体であった。

「……お姉さん、一つ学生さんのために予言してあげるよ」

「予言?」

「君は……。そんないけないことはできない人。だから今回君が考えている事も、失敗する」

「……今度は、失敗しない」

「いや失敗する。何度も何度も失敗して、きつと最後には強くなれる人。君は、複雑怪奇な物語の主人公にだってなれる人」

そんな店員にエールが贈られた所で、いよいよ小鷹の髪の色が黒く染まっっていく。

そこにいたのは、かつての勇敢な猛禽ではない。邪悪に飲み込まれてしまった、漆黒の猛禽。

今は間違えるしかない。今は拗れるしかない。けど、店員には未来が見えた。

この物語、きつともう一度だけ、形を大きく変えることになるだろうと。

「終わりました。お会計はこちらでお願いします」

そう言われ、小鷹はレジまで向かう。

そして会計を終わらせ、最後に店員は小鷹にこう言葉をかけた。

「……いつでも髪の毛に戻したくなったら、気軽に来てね」

その言葉をかけられた小鷹の心境は、複雑なものだったという。

その日、小鷹が家につくと。

小鷹は兄を迎えに玄関までやってくる。

そして、兄に起きた変化を目にして、小鷹は絶句した。

恐れていたことが起きたと、心に傷を負うこととなった。

「……あんちゃん。あっ……ああ」

口が開いてふさがらない妹を見て、小鷹は今まで妹に見せたことのない目で見やる。

そして、何も変わらない兄の如く、小鷹に笑みを浮かべ……。

「……ただいま、小鷹」